

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集

古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
本文目次 Ⅳ 5)	人骨鑑定結果	人骨鑑定書
図版目次 図版 4	遺跡周辺分類図	遺跡周辺地形分類図
〃 図版 96	D16-1 住居跡出土遺物(3)	D16-2 …… (1)
〃 図版 97	D16-2 〃 (1)	(2)
〃 図版 98	〃 〃 (2)	(3)
〃 図版 99	〃 〃 (3)	(4)
〃 図版109	E09住居跡	F09-1住居跡
〃 図版129	柱穴跡出土遺物	柱穴跡・井戸跡出土遺物
P 20 図版 7	A21回住居跡	A21住居跡
P 22 注記 2	径1～2の線	径1～2cmの線
P 68 上から24行目	炭化物が大きく	炭化物が多く
P 77 上から2行目	東西 2.1m	東西 2.9m
P113 上から3行目	下位あるが	下位にあるが
P127 上から8行目	屈身座位葬	屈身仰位葬
P142 下から11行目	遺跡が2条	溝跡が2条
〃 下から10行目	東側調査を区域外	東側調査区域外
P150 上から2行目	径 0.5m	半径 0.5m
P232 下から2行目	より旧カマド	より古いカマド
P233 下から10行目	出されている	検出されている
P292 下から8行目	低温素鋼	低温素鋼
P337 下から11行目	下腿骨	大腿骨

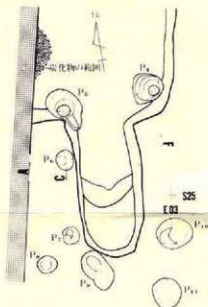
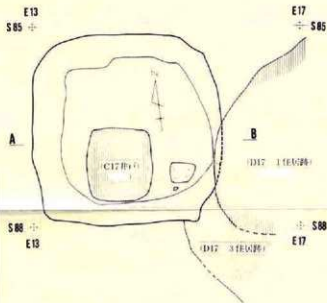
P 33 図版14

P 97 図版48

新旧関係を改める

ビット№.7~11入れる

P 51 図版22



P138 図版74

柱穴群 C15-1 ~ C15 (L=92.70m)

柱穴群 C15-1 ~ 11 (L=92.70m)

柱穴群 D15-1 ~ D15-17 (L=92.60m)

柱穴群 D15-1 ~ D15-17 (L=92.60m)

D15-16 (L=92.40m)

D15-16 (L=92.40m)

P141 図版77

柱穴群 (E20-1 ~ 7) (L=92.10m).....

柱穴群 E20-1 ~ 7 (L=92.10m).....

古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行ない、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、花巻南インターチェンジ建設関連の道路建設に伴って、昭和60年に発掘調査した古館Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査地は現在畑地などに利用されているところですが、奈良・平安時代、中世の集落であったところと判明致しました。この地域には古墳や中世城館があり、大昔から人々の生活が連続して行れた所と思われます。奈良時代の住居跡からは赤彩の土師器が多数出土し、中世の住居跡は城館の関連が考えられるなど貴重な資料を提示できたものと思います。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県土木部・農政部、花巻市、花巻市教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和60年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

例 言

- 1 本報告書は岩手県花巻市中根子字古館1-1、上根子字米倉231ほかに所在する古館Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連道路建設に伴う緊急調査である。調査は岩手県土木部・農政部、花巻市と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 古館Ⅱ遺跡の台帳番号と調査時の遺跡略号は次のとおりである。

登録台帳番号 ME25-2281、2282

遺跡略号 FDⅡ-85

- 4 発掘調査は昭和60年4月11日～8月13日及び同年11月15日～10月31日に実施した。室内整理は昭和60年11月1日～翌年3月25日で行なった。
- 5 発掘調査と報告書の作成は当埋蔵文化財センター文化財専門調査員菊池利和・同光井文行・同中川重紀・同高橋義介が担当した。
- 6 検出された遺構の種類と遺構数は次のとおりである。

古代竪穴住居跡 29 中世竪穴住居跡 14 竪穴住居跡状遺構 2
掘立柱建物跡 2 墓塚 4 土坑 3 井戸跡 1 溝跡 2
焼土遺構 8 柱穴群 7

- 7 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

- | | |
|--------------|-------------------------------------|
| I 調査に至る経過 | 近藤宗光 |
| II 調査方法と室内整理 | 菊池利和・光井文行 |
| III 遺跡の位置と環境 | 菊池利和 |
| IV 検出遺構と遺物 | 遺構分 菊池利和・光井文行・中川重紀・高橋義介
遺物分 光井文行 |
| V 遺構外出土遺物 | 光井文行 |
| VI まとめ | 菊池利和・光井文行・高橋義介 |

- 8 分析や鑑定は次の方々へ依頼した。(敬称略)

人骨	野坂洋一郎(岩手医科大学教授)
火山灰	三辻 利一(奈良教育大学教授)
炭化穀類	佐藤 敏也(国分寺市文化財専門委員)
炭化物(樹種の同定)	早坂松次郎(岩手県木炭協会)

石質 佐藤 二郎（佐藤地質工学研究所）

鉄製品・赤色顔料 赤沼 英男（岩手県立博物館）

- 9 調査区配置のための基準点設定は、万丁目遺跡の成果値（日本道路公団作成、基準点測量成果表）をもとに調査員が設定した。基準点—1、2及びグリット原点の平面直角座標の第10系の（X、Y）座標値は次のとおりである。

基準点—1（杭G05、E30・S25） X -68,862.43m、 Y 22,199.01m

基準点—2（杭G08、E30・S40） X -68,877.43m、 Y 22,199.19m

グリット原点（E00・S00） X -68,837.80m、 Y 22,168.71m

- 10 発掘調査や室内整理では次の機関や方々の御協力、御教示を賜った。（敬称略）

花巻市教育委員会 花巻土木事務所 花巻土地改良事業所

高橋信雄（岩手県立博物館） 井上喜久男（愛知県陶磁資料館） 北林八洲晴、白鳥文雄

畠山昇（以上青森県埋蔵文化財調査センター） 宇部則保（八戸市立博物館）

玉川一郎（福島県原町高校）

- 11 現地調査では、平賀敏三氏、藤原清一氏はじめ地元の方々のご協力をいただいた。

- 12 調査によって得られた資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	V 遺構外出土遺物	151
例言	V まとめ	229
I 調査に至る経過	1 遺構	229
II 調査方法と室内整理	1) 古代竪穴住居跡	229
1 野外調査の方法	2) 中世竪穴住居跡	235
2 室内整理の方法	3) 竪穴住居跡状遺構	238
III 遺跡の位置と環境	4) 墓塚	238
1 遺跡の位置と現況	5) 土坑	239
2 地形と地質	6) 掘立柱建物跡及び柱穴群	239
3 周辺の遺跡	7) 溝跡	240
IV 検出された遺構と遺物	8) 焼土遺構	240
古代竪穴住居跡	9) 井戸跡	240
中世竪穴住居跡	2 遺物	241
竪穴住居跡状遺構	VII 分析、鑑定結果	291
墓塚	1) 出土火山灰の蛍光X線分析	291
土坑	2) 出土鉄器の自然的調査結果	292
掘立柱建物跡及び柱穴群	3) 出土赤色顔料及び銅製品の蛍光 X線分析	299
井戸跡	4) 出土炭化穀類	301
溝跡	5) 人骨鑑定結果	337
焼土遺構		

図版目次

図版1 岩手県全図	1	図版9 B13住居跡(1)	24
図版2 遺跡位置図・周辺の遺跡	2	図版10 B13住居跡(2)	25
図版3 遺跡周辺地形図	8	図版11 B15住居跡	27
図版4 遺跡周辺分類図	9	図版12 C05住居跡(1)	28
図版5 遺構配置図	15	図版13 C05住居跡(2)	29
図版6 A07住居跡	18	図版14 C17住居跡	33
図版7 A21住居跡	20	図版15 C21住居跡	35
図版8 B03住居跡	22	図版16 D07住居跡(1)	38

圖版17	D07住居跡(2)·····	39	圖版51	A08住居跡·····	101
圖版18	D16—1住居跡·····	41	圖版52	A14住居跡·····	103
圖版19	D16—2住居跡(1)·····	44	圖版53	A15住居跡(1)·····	104
圖版20	D16—2住居跡(2)·····	45	圖版54	A15住居跡(2)·····	105
圖版21	D16—3住居跡·····	49	圖版55	Z14住居跡·····	107
圖版22	D17—1住居跡·····	51	圖版56	B08住居跡·····	109
圖版23	D17—3住居跡·····	53	圖版57	C09住居跡·····	111
圖版24	D17—4住居跡·····	55	圖版58	D13住居跡(1)·····	112
圖版25	D22住居跡·····	57	圖版59	D13住居跡(2)·····	113
圖版26	E07住居跡(1)·····	59	圖版60	D17—2住居跡·····	115
圖版27	E07住居跡(2)·····	60	圖版61	D21住居跡·····	117
圖版28	E07住居跡(3)·····	61	圖版62	E25住居跡·····	119
圖版29	E14住居跡·····	65	圖版63	F13—1住居跡(1)·····	120
圖版30	E16—1住居跡(1)·····	66	圖版64	F13—1住居跡(2)·····	121
圖版31	E16—1住居跡(2)·····	67	圖版65	F21住居跡·····	122
圖版32	E16—2住居跡(1)·····	70	圖版66	C22住居跡狀遺構·····	124
圖版33	E16—2住居跡(2)·····	71	圖版67	D14住居跡狀遺構·····	126
圖版34	E18住居跡(1)·····	72	圖版68	E18—1·2·3墓壇·····	128
圖版35	E18住居跡(2)·····	73	圖版69	E18—4墓壇·····	129
圖版36	E21住居跡(1)·····	76	圖版70	土坑·····	131
圖版37	E21住居跡(2)·····	77	圖版71	柱穴群(1)·····	135
圖版38	F09—1住居跡·····	79	圖版72	B09建物跡·柱穴群(2)·····	136
圖版39	F09—2住居跡·····	81	圖版73	柱穴群(3)·····	137
圖版40	F13—2住居跡·····	83	圖版74	柱穴群(4)·····	138
圖版41	F15—1住居跡·····	84	圖版75	柱穴群(5)·····	139
圖版42	F15—2住居跡(1)·····	86	圖版76	D20建物跡·····	140
圖版43	F15—2住居跡(2)·····	87	圖版77	柱穴群(6)·····	141
圖版44	F16住居跡(1)·····	89	圖版78	C17井戸跡·····	143
圖版45	F16住居跡(2)·····	90	圖版79	E06溝跡·····	144
圖版46	F16住居跡(3)·····	91	圖版80	B12溝跡·····	145
圖版47	F17住居跡·····	95	圖版81	埴土遺構(1)·····	147
圖版48	A04住居跡(1)·····	97	圖版82	埴土遺構(2)·····	148
圖版49	A04住居跡(2)·····	98	圖版83	A07住居跡出土遺物·····	163
圖版50	A06住居跡·····	99	圖版84	A21·B13住居跡出土遺物(1)·····	164

図版85	B13住(2)・B15住居跡出土遺物	165	図版115	E18住居跡出土遺物(2)	195
図版86	C05住居跡出土遺物(1)	166	図版116	E18住居跡出土遺物(3)	196
図版87	C05住居跡出土遺物(2)	167	図版117	E21・F13-2住居跡出土遺物	197
図版88	C05住居跡出土遺物(3)	168	図版118	F15-1・2住居跡出土遺物	198
図版89	C17住居跡出土遺物	169	図版119	F16住居跡出土遺物(1)	199
図版90	C21住居跡出土遺物(1)	170	図版120	F16住居跡出土遺物(2)	200
図版91	C21住居跡出土遺物(2)	171	図版121	F16住居跡出土遺物(3)	201
図版92	C21住居跡出土遺物(3)	172	図版122	F16住居跡出土遺物(4)	202
図版93	D07住居跡出土遺物	173	図版123	F16住居跡出土遺物(5)	203
図版94	D16-1住居跡出土遺物(1)	174	図版124	F16住居跡出土遺物(6)	204
図版95	D16-1住居跡出土遺物(2)	175	図版125	F16住居跡出土遺物(7)	205
図版96	D16-1住居跡出土遺物(3)	176	図版126	F17住居跡・C22住居跡状遺構 出土遺物	206
図版97	D16-2住居跡出土遺物(1)	177	図版127	D13・D21・F13-1・A14住 居跡出土遺物	207
図版98	D16-2住居跡出土遺物(2)	178	図版128	A15・B08住居跡・柱穴跡出土 遺物	208
図版99	D16-2住居跡(3)・D16-3 住居跡出土遺物	179	図版129	遺構外出土遺物(1) 土師器(杯形土器Ⅰ類・内黒 の杯)	209
図版100	D17-1住居跡出土遺物(1)	180	図版130	遺構外出土遺物(2) 土師器(杯形土器Ⅰ類・黒色 の杯・丹塗の杯、杯形土器Ⅱ 類・内黒の杯)	210
図版101	D17-1住居跡出土遺物(2)	181	図版131	遺構外出土遺物(3) 土師器(杯形土器Ⅱ類・内黒 の杯)	211
図版102	D17-2住居跡出土遺物(1)	182	図版132	遺構外出土遺物(4) 土師器(杯形土器Ⅰ類、高杯 形土器、變形土器Ⅰ類(1)) 酸化焙焼成の須恵器(杯形土 器)	212
図版103	D17-2住居跡(2)・D17-3 住居跡(1)出土遺物	183	図版133	遺構外出土遺物(5) 土師器(變形土器Ⅰ類(2))	213
図版104	D17-3住居跡(2)・D17-4 住居跡出土遺物	184	図版134	遺構外出土遺物(6) 土師器(變形土器Ⅰ類(3))	214
図版105	D22住居跡出土遺物	185	図版135	遺構外出土遺物(7) 土師器(變形土器Ⅰ類(4))	215
図版106	E07住居跡出土遺物(1)	186			
図版107	E07住居跡出土遺物(2)	187			
図版108	E07住居跡出土遺物(3)	188			
図版109	E07住居跡(4)・E09住居跡出 土遺物	189			
図版110	E16-1住居跡出土遺物(1)	190			
図版111	E16-1住居跡出土遺物(2)	191			
図版112	E16-1住居跡(3)・E16-2 住居跡(1)出土遺物	192			
図版113	E16-2住居跡出土遺物(2)	193			
図版114	E18住居跡出土遺物(1)	194			

図版136 遺構外出土遺物(8) 土師器(変形土器Ⅰ類(5)) … 216	図版149 土師器(Ⅰ類) 杯形土器(1)分類図…………… 274
図版137 遺構外出土遺物(9) 土師器(変形土器Ⅱ類、壺形 土器Ⅰ類・壺・丹塗の壺) … 217	図版150 土師器(Ⅰ類) 杯形土器(2)分類図…………… 275
図版138 遺構外出土遺物(10) 土師器(盤、鉢、片口形土器、 その他の土器) 須恵器(杯形土器(1)) …… 218	図版151 土師器(Ⅰ類) 杯形土器(3)分類図…………… 276
図版139 遺構外出土遺物(11) 須恵器(杯形土器(2)、壺形、 変形土器(1)) …… 219	図版152 土師器(Ⅰ類) 高杯、壺形土器(1)分類図… 277
図版140 遺構外出土遺物(12) 須恵器(変形土器(2))、陶磁 器…………… 220	図版153 土師器(Ⅰ類) 壺形土器(2)分類図…………… 278
図版141 遺構外出土遺物(13) 土製品(羽口)、鉄製品… 221	図版154 土師器(Ⅰ類) 壺形土器(3)分類図…………… 279
図版142 遺構外出土遺物(14) 古銭、石器(1)、砥石(1)… 222	図版155 土師器(Ⅰ類) 変形土器(1)分類図…………… 280
図版143 遺構外出土遺物(15) 砥石(2)、石器(2)… 223	図版156 土師器(Ⅰ類) 変形土器(2)分類図…………… 281
図版144 C17井戸跡出土木製品(1)… 224	図版157 土師器(Ⅰ類) 変形土器(3)分類図…………… 282
図版145 C17井戸跡出土木製品(2)… 225	図版158 土師器(Ⅰ類) 変形土器(4)分類図…………… 283
図版146 C17井戸跡出土木製品(3)… 226	図版159 土師器(Ⅰ類) 変形土器(5)分類図…………… 284
図版147 C17井戸跡出土木製品(4)… 227	図版160 土師器(Ⅰ類) 変形土器(6)分類図…………… 285
図版148 C17井戸跡出土木製品(5)… 228	図版161～164 土師器出土時期分類図… 286

挿 図 目 次

挿図1 基準点及び調査区画割り…………… 4	挿図3 土師器の器面調整・計測値 出土地点の表わし方…………… 6
挿図2 スクリーン・トーンの 表わし方…………… 5	挿図4 基本土層…………… 12

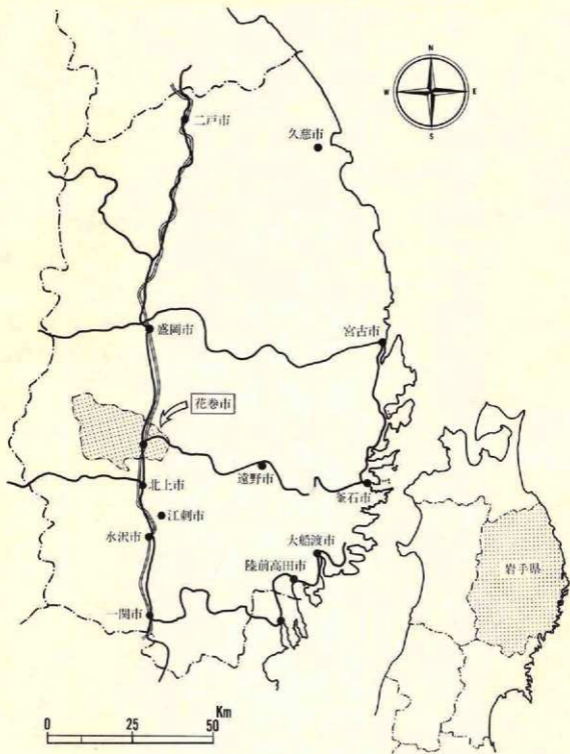
表 目 次

表1～2 検出遺構一覧表…………… 356	表25 木製品計測表…………… 403
表3～23 出土遺物一覧表(1)～(24)… 360	表26 石器計測表(1)… 404
表24 土製品・鉄製品計測表…………… 402	表27 石器計測表(2) 古銭計測表… 406

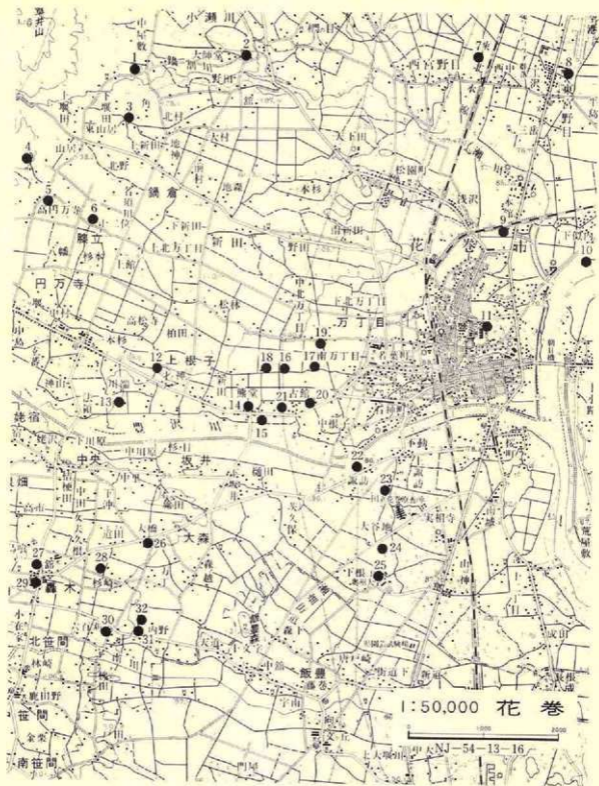
写 真 图 版 目 次

写真图版 1	空中写真……………	411	写真图版31	F 17住居跡・B 18区遺物出土状況……………	441
写真图版 2	遺跡近景……………	412	写真图版32	A04住居跡……………	442
写真图版 3	作業風景(1)……………	413	写真图版33	A06・A08住居跡……………	443
写真图版 4	作業風景(2)・土層断面……………	414	写真图版34	A 14住居跡……………	444
写真图版 5	A07・A21住居跡……………	415	写真图版35	A 15住居跡……………	445
写真图版 6	B03住居跡……………	416	写真图版36	Z 14住居跡……………	446
写真图版 7	B 13住居跡……………	417	写真图版37	B08住居跡……………	447
写真图版 8	B 15住居跡……………	418	写真图版38	C09住居跡……………	448
写真图版 9	C05住居跡(1)……………	419	写真图版39	D 13住居跡……………	449
写真图版10	C05(2)・C 17住居跡・C 17井戸跡……………	420	写真图版40	D 13・D 17—2住居跡……………	450
写真图版11	C 21住居跡・C 22住居跡状遺構……………	421	写真图版41	D 21・E 25住居跡……………	451
写真图版12	D07住居跡……………	422	写真图版42	F 13—1住居跡……………	452
写真图版13	D07・D 16—1住居跡……………	423	写真图版43	F 21住居跡・D 14住居跡状遺構……………	453
写真图版14	D 16—2住居跡……………	424	写真图版44	E 18—1・2・3墓壇……………	454
写真图版15	D 16—2・D 16—3住居跡……………	425	写真图版45	E 18—4墓壇・土坑……………	455
写真图版16	D 17—1(1)・D 17—3住居跡……………	426	写真图版46	掘立柱建物跡……………	456
写真图版17	D 17—1(2)・D 17—4住居跡……………	427	写真图版47	柱穴群……………	457
写真图版18	D 22・E 07住居跡(1)……………	428	写真图版48	溝跡……………	458
写真图版19	E 07住居跡(2)……………	429	写真图版49	埴土遺構……………	459
写真图版20	E 07住居跡(3)……………	430	写真图版50	遺構内出土遺物(1)……………	461
写真图版21	E 14・F 15—2住居跡……………	431	写真图版51	遺構内出土遺物(2) A07・A21住居跡……………	463
写真图版22	E 16—1住居跡……………	432	写真图版52	遺構内出土遺物(3) B13・B15・C05住居跡(1)……………	464
写真图版23	E 16—2住居跡……………	433	写真图版53	遺構内出土遺物(4) C05住居跡(2)……………	465
写真图版24	E 18住居跡……………	434	写真图版54	遺構内出土遺物(5) C05(3)・C 17住居跡……………	466
写真图版25	E 21住居跡……………	435	写真图版55	遺構内出土遺物(6) C 17・C 21住居跡(1)……………	467
写真图版26	F09—1・F09—2住居跡……………	436	写真图版56	遺構内出土遺物(7)	
写真图版27	F 13—2・F 15—1住居跡……………	437			
写真图版28	F 16住居跡(1)……………	438			
写真图版29	F 16住居跡(2)……………	439			
写真图版30	F 16住居跡(3)……………	440			

	C 21(2)・D 07住居跡…………… 468		F 16住居跡(4)…………… 485
写真図版57	遺構内出土遺物(8) D 16住居跡…………… 469	写真図版74	遺構内出土遺物(8) F 17・D 13・D 21・F 13 住居跡・C 22住居跡状遺 構…………… 486
写真図版58	遺構内出土遺物(9) D 16-2住居跡(1)…………… 470	写真図版75	遺構内出土遺物(9) A 14・A 15・B 08住居跡 ・柱穴出土遺物…………… 487
写真図版59	遺構内出土遺物(10) D 16-2住居跡(2)…………… 471	写真図版76	遺構外出土遺物(1) 土師器(坏形土器・内黒 の坏・黒色の坏・丹塗の 坏)…………… 488
写真図版60	遺構内出土遺物(11) D 16-2(3)・D 16-3・ D 17-1住居跡(1)…………… 472	写真図版77	遺構外出土遺物(2) 土師器(坏形土器・黒色 の坏・高坏形土器) 酸化焰焼成の須恵器(坏 形土器)…………… 489
写真図版61	遺構内出土遺物(12) D 17-1(2)・D 17-2住 居跡…………… 473	写真図版78	遺構外出土遺物(3) 土師器(甕形土器(1))… 490
写真図版62	遺構内出土遺物(13) D 17-3・D 17-4・D 22 住居跡…………… 474	写真図版79	遺構外出土遺物(4) 土師器(甕形土器(2))… 491
写真図版63	遺構内出土遺物(14) D 22・E 07住居跡(1)…… 475	写真図版80	遺構外出土遺物(5) 土師器(甕形土器(3))… 492
写真図版64	遺構内出土遺物(15) E 07住居跡(2)…………… 476	写真図版81	遺構外出土遺物(6) 土師器(壺、丹塗の壺、 盤、鉢、片口形土器) 須恵器(坏形土器)…… 493
写真図版65	遺構内出土遺物(16) E 07(3)・F 09-1・E 16- 1住居跡…………… 477	写真図版82	遺構外出土遺物(7) 須恵器(甕、壺形土器)… 494
写真図版66	遺構内出土遺物(17) E 16-1住居跡(2)…………… 478	写真図版83	遺構外出土遺物(8) 陶磁器、土製品(羽口)… 495
写真図版67	遺構内出土遺物(18) E 16-2住居跡…………… 479	写真図版84	遺構外出土遺物(9) 鉄製品、古銭、石器…… 496
写真図版68	遺構内出土遺物(19) E 18住居跡(1)…………… 480	写真図版85	遺構外出土遺物(10) 石器、磁石…………… 497
写真図版69	遺構内出土遺物(20) E 18(2)・E 21・F 13-2・ F 15-1住居跡…………… 481	写真図版86~89	C 17井戸跡出土木製品 (1)~(4)…………… 498
写真図版70	遺構内出土遺物(21) F 15-2・F 16住居跡(1)… 482		
写真図版71	遺構内出土遺物(22) F 16住居跡(2)…………… 483		
写真図版72	遺構内出土遺物(23) F 16住居跡(3)…………… 484		
写真図版73	遺構内出土遺物(24)		



図版1 岩手県全図



図版2 遺跡位置図・周辺の遺跡

I 調査に至る経過

花巻市から、花巻市街地西辺に東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ新設の要望が出され、建設の運びとなった。昭和58年10月、岩手県土木部用地高速道課から県教育委員会事務局文化課に対して当該地の埋蔵文化財調査の依頼があった。文化課はただちに分布調査を行ない、同年11月遺構確認のための試掘調査の必要を解答した。同時に花巻市教育委員会にも通知した。

昭和59年7月には日本道路公団江釣子管理事務所から、関係2遺跡について試掘調査の依頼があり、文化課は同年9月試掘調査を行った。その結果万丁目遺跡については本格的な発掘調査の必要があることを解答した。同時に花巻市教育委員会にも通知した。万丁目遺跡は周知の遺跡であり、遺跡は広い範囲に及んでいる。文化課は試掘調査の結果より、調査範囲を限定した。また花巻南インターチェンジ建設関連の道路整備にかかわって周知の遺跡である花巻市中根子字古館と上根子字米倉にわたる古館Ⅱ遺跡の発掘調査も必要となった。

昭和60年当文化振興事業団に対し発掘調査が委託された。万丁目遺跡の委託者は岩手県土木部・農政部、日本道路公団仙台管理局、花巻市である。古館Ⅱ遺跡の委託者は岩手県土木部・農政部、花巻市である。

II 調査方法と室内整理

1 野外調査の方法

調査区の設定と遺構名

本遺跡の調査区域は、道路用地、農業用水路用地を対象とした東西約30m、南北約120mの3,651㎡である。この調査区域を5×5mの区画で覆うため、調査区の東側に基準杭一、二を設定した。平面直角座標値は下記のとおりである。

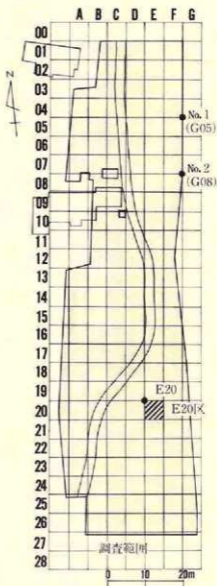
基準杭一（杭G05 X-68,862.43
Y+22,199.01）

基準杭二（杭G08 X-68,877.43
Y+22,199.19）

基準杭一、二を結ぶ南北線の方角（調査区の南北主軸方向）は、真北に対し約1度東偏し、磁北に対し約7度東偏している。

5m×5mの区画割は、基準杭を通る南北線とこれと直交する東西線、及びこれらと平行する直線により右図のように設定した。区画の名称は、東西には西から東へA、B、C……南北方向には北から南に01、02、03、……と付し、A01、A02、B01、B02、と表示した。また、区画北西隅の点（杭名）を区画名と同一にし調査をすすめた。

遺構名は、遺構の位置する区画のうち最も北、乃至西の区画名を付し、同一の遺構名が生じた際にはさらに1、2、3の番号を付しF09-1住居跡、F09-2住居跡等とした。



挿図1 基準点及び調査区画割り

掘掘りと遺構検出・遺構の精査と遺物の取りあげ

掘掘りは、畑地については人力で、宅地跡及び道路のつけ替えは重機によった。人力による場には所々に土層観察用の畦畔を残し5m×5m区画又は東西2.5m×南北10mの区画で掘った。

遺構検出面はⅢ層上面であり、この面まで掘り下げたが黒褐色土の堆積が厚くⅢ層とⅣ層の区別が出来ない区画では、2.5m×2.5mの区画で移植ペラで除々に掘り下げ遺構の検出に努めた。

中央やや南東寄りの区域では、特に黒褐色土が厚く、さらに遺構が重複していたこともあり遺構の検出には大変手間取った。

遺構の精査は、住居跡、住居跡状遺構は4分法、井戸、土坑、柱穴状ピットは2分法を原則とし調査した。溝跡は適宜土層観察用の畦畔を残し調査した。

遺物の取りあげは、出土した地点、層位を確認した上で、区画名・層位を付し取りあげた。

遺構内出土のものについても、同様であるが、層位が単層と思われるときは、埋土の上、中下位、床面と区別し、床面出土のものは、図面に記入し写真撮影の後取りあげた。土層については基本層序にはⅠ、Ⅱ、Ⅲとローマ数字で、遺構の埋土には、1、2、3層と表示した。

ただし基本層序については、細粒浮石層のⅡ層の確認が遅れたため遺物の出土層位は、Ⅲ層出土のものはⅡ層出土として、Ⅳ層出土のものはⅢ層出土として取りあげる結果となった。

2 室内整理の方法

室内整理は昭和60年11月1日から翌年3月25日までの期間で行なった。

遺構

遺構については現場で作成した実測図を点検・合成し、トレース図を作成した。トレース図は原則として縮尺1/20・1/10で作成したが、遺構の大小によっては縮小又は拡大図を作成した。

本報告書の図版の縮尺は概ね、下記のとおりであるが、一部縮尺を変えてあるものもあり、図版にはそれぞれスケールを付した。

住居跡・住居跡状遺構 平面図・断面図……1/40 カマド断面図……1/20
土坑類……1/40 焼土遺構……1/20 柱穴群……1/40又は1/60

図版中で使用した記号やスクリーントーンは以下のとおりである。

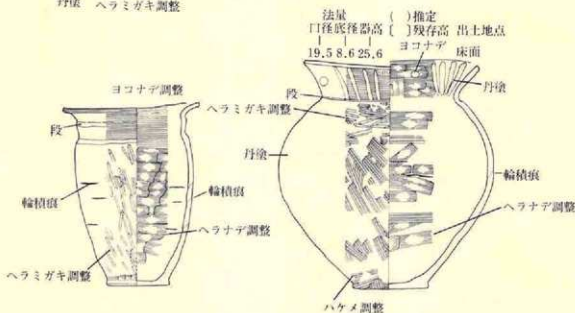
P_0 ……土器	S……礎	$P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ ……柱穴又は柱穴状ピット
焼土	炭化物	重複遺構
掘り過ぎ	水道跡	地山
調査区域外	炭化材	

挿図2 スクリーントーンの表し方

ロクロ不使用(フリーハンド)



ロクロ使用(定規)



挿図3 土器の器面調整、計測値、出土地点の表し方

遺物

土器・実物大で実測し、縮尺3分の1でのせた。

- ・原則として、4分の1以上残存する口縁部、底部は反転実測し、4分の1未満のものは平面実測した。
- ・4分の1以上2分の1未満で実測したものは口縁部の線を半分だけ引いて表現した。
- ・2分の1以上のものは口縁部の線を全部引いて表現した。
- ・実測図の左上には法量（口径・底径・器高）を、右上に出土地点を記した。反転実測で口径・底径を推定したものは（ ）、器高の残存高は〔 〕でくくって表した。
- ・ロクロ使用の土器は直線で表現した。
- ・器面に黒色処理、丹塗が施されているもの、粘土の付着はそれぞれスクリーン・トーンを使って表現した。
- ・須恵器は断面を黒く塗りつぶして表現した。

土製品、鉄製品、石器、木製品は大小によって縮尺2分の1、3分の1に分けて表現した。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と現況

位置

古館Ⅱ遺跡は国鉄東北本線花巻駅から南西約2.5kmの、県道花巻・大曲線の北側に位置している。（図2）

今回発掘調査の対象となった区域の地籍は、岩手県花巻市中根子字古館1-1、3-1、3-2、上根子字米倉226、227、230-1、231である。

調査対象区域の位置を詳細に示すと次のとおりである。

平面直角座標（第10系） X -68,840~68,970m

Y +22,165~22,200m

標高 91.5~93m

遺跡所在地点を図示する地形図は次のとおりである。

1：50,000地形図 N J-54-13-16 花巻（はなまき） 国土地理院

1：25,000地形図 N J-54-13-16-4 花巻（はなまき） 国土地理院

1：2,500花巻市都市計画図（南万丁目） 花巻市



図版 3 遺跡周辺地形図



図版 4 遺跡周辺地形分類図

現況

調査区域一帯は、県道花巻・大曲線より2m程の比高で一段と高くなっており(沖積段丘)、県道沿いには宅地、畑が、北側には水田が広がっている。調査区域の中央に道路が南北に通るこの道路によって地割が区分され、西側が上根子字米倉、東側は中根子字古館となり、道跡登録番号も2281、2282と分けられている。

調査区の現況は、南側は江戸末期から続いたという白藤氏宅地跡、北西の一区画は小屋跡で、他はほぼ平坦な畑地となっている。遺物は表面採集されなかったが、隣接する畑地からは、土師器、須恵器などの土器片が多く表採されている。

2 地形と地質

1) 地形概観

花巻市街地の東方には、南北にのびる幅数kmの北上川河谷平野があり、この平野(沖積低地)を北上川が蛇行しながら流れており、北上川を境として西側地域と東側地域とでは地形が大きく異なっている。

北上川西岸地域では、西方奥に起伏の大きな奥羽山脈が分布し、グリーンタフ、安山岩、頁岩、砂岩などから構成されている。この奥羽山脈の東麓には扇状地が発達し、西方山地から発する豊沢川、瀬川などの河川は砂礫の堆積をもたらし、扇状地性の台地(段丘)を形成している。これらの台地(段丘)は、3段以上に分類できるが、特に下位、中位のものが広く分布している。本遺跡の北400mに位置する万丁目遺跡は、下位段丘縁部に立地している。

豊沢川、瀬川などの諸河川沿いには、小面積であるが沖積段丘が分布している。本遺跡は豊沢川左岸の沖積段丘の縁部に立地している。

一方、北上川東岸地域は、古生層などを基岩とする北山上地の西縁地域にあたり、丘陵地、山地が入り組んでおり、小規模な台地及び河川沿いに沖積低地が分布している。

2) 台地と低地

台地 北上川沿いの間地は、大部分台地によって占められ、それらは上位、中位、下位の段丘として分類できる。上位段丘は西部山地東縁の丘陵地域にわずか分布しているが、開折が進み丘陵地化している。中位段丘は、主として扇状地性台地の中央から東縁にかけ分布し、緩やかな起伏を呈している。砂礫層で構成され、上位に火山灰層がのる。下位段丘は、扇状地性台地の広い部分を占め、砂礫層が覆っている。北上川河谷平野沿いの東端では、沖積地との比高は10m前後で、砂礫層を覆う土層の発達もよい。

沖積段丘は、北上川およびその支流に沿って、よく分布している。河川との比高は小さく、明瞭な段丘崖が見られず、沖積低地へと続くものが多い。

低地 北上川本流沿いに幅数kmにわたって低地が発達しており、旧河道、自然堤防、段丘状の微高地がある。又、西部山地より東流する諸河川沿いにも沖積低地が発達しており、沖積段丘化されつつある。

3) 基本層序

遺跡内の基本層序は概略次のように区分される。

第I層 黒褐色(7.5Y R3/1) 砂質土(表土)

粘性はほとんどなく、全体に柔らかい。中央から北側は畑地であり耕作土となる。層厚は約20cmあるが、南側宅地跡では削平されている。

第II層 にぶい黄褐色(10Y R7/4~6/4) 細粒浮石(十和田a降下火山灰)

ほぼ均質な砂粒状の浮石であり、平安時代住居跡の埋土中~下位にブロック状に堆積する。

第III層 黒色(7.5Y R2/1) 砂質シルト

粘性が僅かありしまっている。小礫の混入はI層に比べ少ない。土器等の遺物を包含する層で、層厚は10~20cmである。礫層面のレベルが高い地点では層厚は薄くなる。

第IV層 暗褐色(7.5Y R3/3) 砂質土

粘性なく、ややしまっている。本層上面が古代住居跡の検出面となる。層厚は約10~20cmであるが、埋没沢と思われる箇所ではより暗色で層厚も増大する。

第V層 褐色(7.5Y R4/3) 砂礫

大小の円礫及び砂の堆積層である。層厚は場所により差異があり50cm~数mに及ぶものと思われる。本層中に暗褐色、褐色シルト質の土層が認められるが細分はしていない。

第VI層 黄褐色(10Y R5/6) 砂

やや堅くしまった均質な川砂の層である。層厚は15~40cmである。

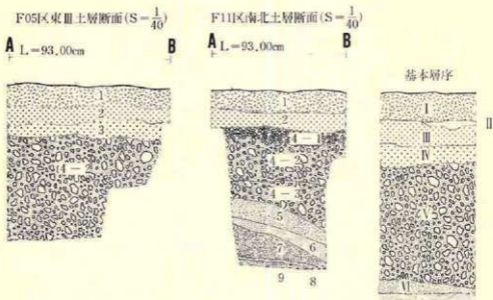
第VII層 にぶい黄褐色(10Y R6/4) シルト

粘性あり堅くしまっている。層厚は5~15cmである。

第II層の細粒浮石は分析の結果、十和田a降下火山灰と推定されている。(火山灰の蛍光X線分析 三辻利一)

3 周辺の遺跡

花巻市に所在する遺跡の総数は、岩手県遺跡地名表・岩手県教育委員会(昭和60年10月)に



挿図4 土層断面

よると、143を数えている。遺跡の時代又は種別で分類すると次のようになる。

縄文	弥生	土師	城館	古墳	墳墓・塚	その他・不明
49	2	66	9	3	5	20

(縄文・弥生1、縄文・土師8、土師・城館2は重複している)

これらの遺跡の分布を概観すると、当遺跡の周辺に若干の分布がみられるものの、その多くは、豊沢川右岸の沖積面に高密度で分布している。

以下に、本遺跡の周辺に位置する遺跡について概略を述べる。

古館遺跡 花巻町中根子字古館59ほか

古館Ⅱ遺跡の東方400mに位置し、周辺一帯は「中館」と称され、中世神貫氏の一族根子氏の居館と伝えられる。

昭和47年の発掘調査では、奈良時代の腕土遺構、中世の竪穴住居跡4棟・掘立柱建物跡と思

われる柱穴群、土塁などの遺構が検出された。遺物としては、奈良・平安時代の土師器の坏、堯中世の渡来銭（太平通宝などの宋銭、永楽通宝などの明銭）、炭化穀類が出土している。

岩手県埋文センター「岩手の遺跡」 岩手県教委「岩手県文化財調査報告書第56集」

南万丁目遺跡 花巻市中根子

古館Ⅱ遺跡の北東約700mに位置し、万丁目遺跡同様に台地性扇状地の縁辺部に立地する。

昭和48年に発掘調査され、南北8m×東西6.5mの小判形にめぐる円形周溝1基（時期不明）を検出している。遺物としては、粗掘りの際の出土であるが土師器・須恵器および陶器片がある。

岩手県教委「岩手県文化財調査報告書第56集」

万丁目遺跡 花巻市中根子39

古館Ⅱ遺跡の北約400mに位置し、台地性扇状地の下位段丘縁辺部に立地している。昭和60年4月～7月に発掘調査されている。調査の結果、次のような遺構が検出されている。

縄文時代……竪跡4（石囲炉2、土器埋設炉2） 土坑4 陥し穴状遺構3 焼土遺構2

古代 ……竪穴住居跡5（奈良3、平安2） 土坑1

中世 ……竪穴住居跡2 近世 ……カマド状焼土遺構12

その他には、掘立柱建物跡15を含む柱穴群、溝跡12、などがある。

岩手県文化振興事業団埋文センター「岩手県文化財調査報告書第102集」

熊堂古墳群 花巻市上根子87ほか

古館Ⅱ遺跡の西方500mに位置する一帯で、豊沢川左岸の沖積段丘に立地している。

古くは蝦夷塚、四十八塚などと言われ、多くの遺物を出土している著名な古墳群である。江戸時代には「出土品をこもに包んで藩公に差出し、玉類のごときは折で量るほど出土した。」との記録があり、明治～大正時代にも玉類、藤手刀とともに和同開珎や銚子金具が出土している。

これらの古墳は大半が破壊され、明治30年代には墳丘の全形が存在するもの20基、大正末年には1基と激減している。墳丘は径5m位の馒头形で、石郭は1.8m×0.9m位であるが、石郭のあるものとないものがあった。

出土品は、玉類としては翡翠・碧玉・めのう・水晶・ガラス製の勾玉、碧玉・ガラス製の管玉や切子玉、武器としては直刀、藤手刀、その他鉄斧・円頭太刀把頭・五鈴鏡がある。

岩手県埋文センター「岩手の遺跡」

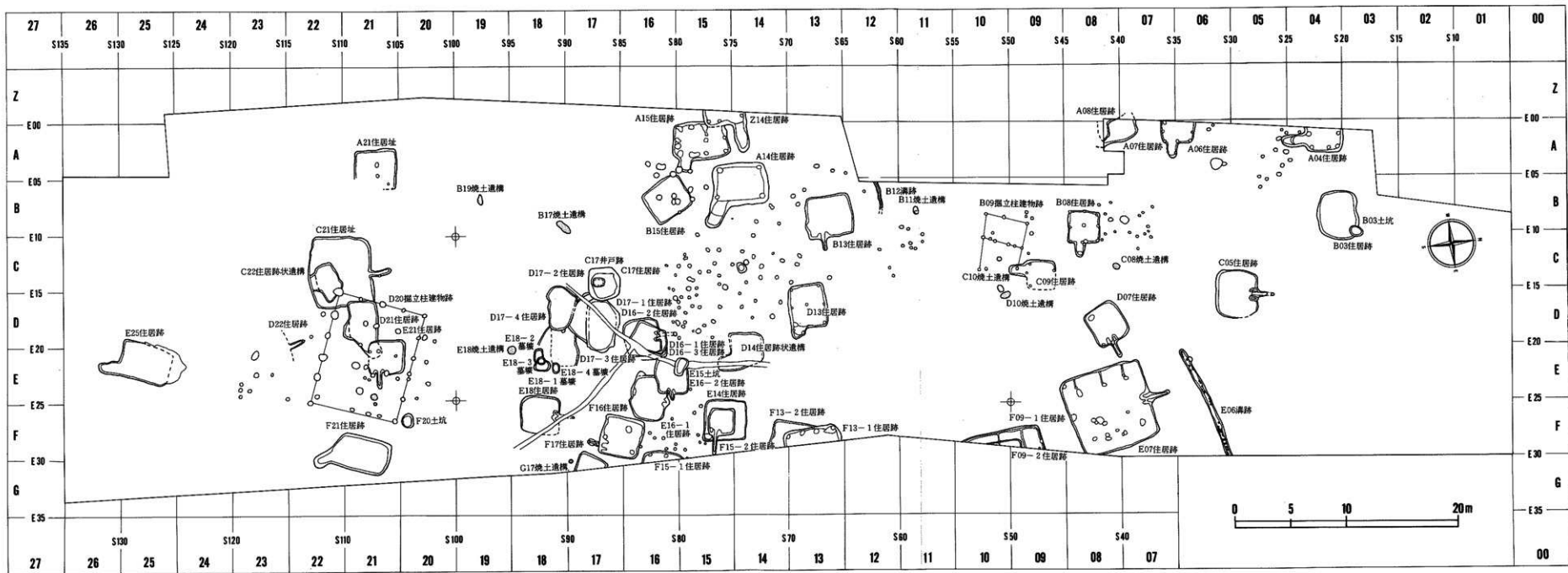
周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物
1	ME-1031	小瀬川	散布地	花巻市小瀬川9-92	縄文中層土器・石器
2	◇ 1115	子家	◇	◇ 1-54	縄文土器・石器
3	◇ 2000	輻野	◇	◇ 銅倉字殿名4-2	縄文中層土器・土師・須恵・石器
4	◇ 2267	円万寺	館跡	◇ 湯口藤立観音山	中～近世・堀・土塁他
5	◇ 0310	高円万	館跡	◇ 高円万寺46	土師器
6	◇ 0346	藤野	館跡	◇ 湯口藤立	縄文新・後・晩期土器・石器・すり石
7	◇ 1017	西宮野	◇	◇ 西宮野日3-574	◇
8	◇ 1138	木下	館跡	◇ 東宮野日葛	◇
9	◇ 0140	似内	館跡	◇ 本館332	縄文晩期土器・石器
10	◇ 0263	花巻	館跡	◇ 第5地割	土師・須恵
11	◇ 1079	巻城	館跡	◇ 城内	土師
12	◇ 2045	鬼城	館跡	◇ 上根子和田	縄文晩期土器・石器
13	◇ 2080	中堂	館跡	◇ 道副138-1	須恵・礫・砥石・直刀・勾玉・古銭他
14	◇ 2185	堂古墳	古墳群(円)	◇ 上根子87	◇
15	◇ 0128	鷹王	墳	◇ 欠端107	◇
16	◇ 2255	万丁	散布地	◇ 中根子39	縄文・古代～中近世,住居・土城・柱穴群
17	◇ 2257	南万丁	◇	◇ 22-1	土師器・須恵器
18	◇ 2230	南谷	◇	◇ 南万丁日818	土師器
19	◇ 2207	南万丁	◇	◇ 南万丁日1053	土師器
20	◇ 2293	古館	館跡	◇ 中根子古館96	土器・堀、中～近世
21	◇ 2282	古館	館跡	◇ 古館11-3	古代・中近世,住居・井戸・土師器・須恵器
22	◇ 0362	下誠	館跡	◇ 諏訪	土師
23	◇ 1306	誠大	館跡	◇ 296-5	土器・縄文・石器
24	◇ 1376	谷地	館跡	◇ 下根子大谷地	土師・須恵・晩土
25	◇ 2315	富士大	館跡	◇ 富士大学	縄文土器
26	◇ 1074	大橋	◇	◇ 太田51 敷地内	土器片
27	◇ 2300	館	◇	◇ 轟木10	土師器片
28	◇ 2324	館	◇	◇ 5	縄文土器片
29	◇ 2239	轟	館跡	◇ 9	須恵器
30	◇ 2399	百内	館跡	◇ 北宮間10	土師器
31	◇ 2093	内野	◇	◇ 10	土師器片
32	◇ 2084	内野	◇	◇ 1	須恵器

この表は岩手県遺跡地名表・岩手県教育委員会をもとに作成した。

引用・参考文献(II～III)

- 1983 岩手県埋文センター「上の山遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集
- 1984 岩手県埋文センター「川口遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第90集
- 1985 岩手県埋文センター「岩手の遺跡」
- 1985 岩手県文化振興事業団埋文センター「高王遺跡」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第93集
- 1986 岩手県文化振興事業団埋文センター「万丁日遺跡」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第102集
- 1981 岩手県教委「古館遺跡」岩手県文化財調査報告書第56集
- 1981 岩手県教委「南万丁日遺跡」岩手県文化財調査報告書第56集
- 1975 塩島山道「地形分類」『北上山系開発地域土地分類基本調査(花巻)』岩手県



圖版 5 遺構配置圖

Ⅳ 検出された遺構と遺物

発掘調査の結果、検出された遺構は次のとおりである。

古代竪穴住居跡 29棟(奈良時代 15棟、平安時代 8棟、時期が限定できないもの6棟)

中世竪穴住居跡 14棟 竪穴住居跡状遺構 2基 墓墳 4基 土坑 3基

掘立柱建物跡 2棟 柱穴群 井戸跡 1基 溝跡 2条 焼土遺構 8基

出土遺物で図示したものは590数点である。古代の遺物は土器(土師器、須恵器、酸化焰焼成の須恵器)、土製品(勾玉、紡錘車、土玉)、砥石、磨石、凹石、刀子、羽口、鉄滓、ベンガラ、などである。土器では土師器が最も多い。ロタロ使用とロタロ不使用の土師器があり、前者より後者が多い。土師器の器種には、杯、高杯、甕、壺、鉢、片口、甕、小形土器などがある。杯、高杯、壺には外面に丹塗が施されているものがある。杯の多くは内面黒色処理されている。

中世・近世の遺物は陶磁器の破片、古銭、釘、用途不明の鉄製品(鉄片)、煙管、木製品(枕、枠、板材)、炭化した穀類(米、小豆、麦)などがある。

時代不明のものとしては不定形石器、使用痕のある銅片がある。

古代竪穴住居跡

古代竪穴住居跡が29棟検出されている。その分布をみると、奈良時代住居跡はほぼ全域に亘り分布するが、平安時代住居跡は、調査区中央により多く分布し、他遺構と重複しているものが多い。

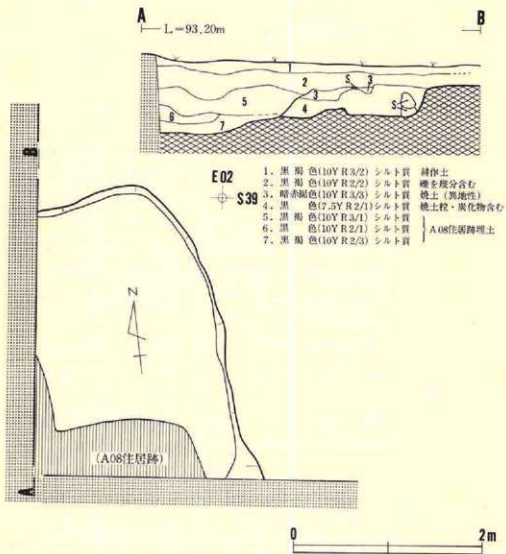
A07住居跡(図版6、写真図版5)

調査区北側の南西端に位置し、Ⅲ層下位で、土師器片、焼土粒の散在する暗色部として検出されているが、遺構の南西部は調査区域外にある。A08住居跡と南側で重複している。重複する遺構との新旧関係は、A08住居跡が新しく、本住居跡はより古い。

検出された範囲は、南北3.2m、東西2.0mで、全体の形状、規模は不明である。埋土は、調査区境界の南北断面でみると、大きく4層に分けられる。最上部は黒褐色シルト質土の耕作土、その下位は礫を幾分含む黒褐色シルト質土、中位には投げ込みと思われる暗赤褐色の焼土塊、最下部は埋土の主体をなす黒色シルト質土で、焼土粒、炭化物が僅か混入している。

壁はⅢ層下位にあり、壁高は約10cmを測る程度である。東壁は外側に膨らみをもち、北壁とは120度位の角度で接し隅丸状の形態を呈している。

床面には、径5cm前後の礫が多く散在し、小さな凹凸があるが、全体的にはほぼ平坦で、堅



図版 6 A07住居跡

くしまっている。

出土遺物 (図版83、写真図版51)

土師器

杯形土器

(埋土) 丹塗の杯-6は外面ヘラミガキ後、丹塗が施されている口縁部片である。外面の段・沈線・稜の有無、内面の区切りの有無は不明である。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

壺形土器

(埋土) 丹塗の壺-3は外面を丁寧にヘラミガキで調整した後、全面に丹塗が施されている口縁部片である。口縁部は外反し上半がやや内彎気味である。口唇部は平坦である。内面はコナデで調整された後、口縁部上半に一部丹塗が施されている。

甕形土器

(埋土) 肩部に稜をもつもの(IE類)が2点(2、4)、肩部に段・沈線のもたないもの(IF類)が1点(1)出土している。1は口縁部が外反し、体部内外面をハケメで調整されている(IF-c類)。2は口縁部が外反、口縁部外面、体部内外面がハケメ調整である(IE-a類)。4は口縁部上半、底部が欠損している。体部外面はハケメ調整後ヘラミガキ、内面は主にヘラナデが行なわれている。5は底部片である。器面調整は外面がハケメ調整後ヘラミガキ、内面はハケメである。底部外面には一部ナデがみられる。

A21住居跡(図版7、写真図版5)

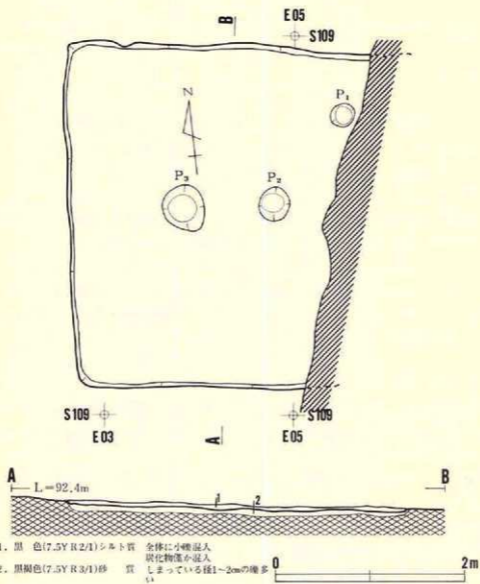
調査区南側の中央やや西寄りに位置し、N層上位で検出されている。南東15mにはC21住居跡がある。柱穴状ピット以外の重複する遺構はないが、本遺構の東側が水道管理設工によって大きく擾乱されている。

遺構の東側が損壊を受け、平面形、規模が明確にされ得ないが、残存する状況から、床面規模で3.6m前後の方形を呈する住居跡と思われる。検出面から床面までは極めて浅く、埋土は層厚5cm程の黒色シルト質土である。全体に小礫が混入し堅くしまっている。

壁高は各壁とも5cm前後を測る程度である。床面のほぼ全域に深さ7cm前後の掘り方を持ち、小礫、礫が混入する黒褐色砂質土で床面が構成され、小さな凹凸があるものの、全体的にはほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴状ピットが3基検出されている。口径・深さは各々、P₁-25cm×25cm・10cm、P₂-35cm×32cm・25cm、P₃-50cm×45cm・20cmを測る。埋土はいずれも小礫の混入の少ない黒色シルト質土で柔らかいことから、本遺構に伴うものでなく、本遺構より新しい柱穴群の一部であると考えられる。

土坑、周溝、カマドは検出されていない。



図版7 A21団住居跡

出土遺物（図版84、写真図版51）

土師器

杯形土器

（埋土）内黒の杯一7は外面にヘラミガキが施されている底部片である。内面の区切りの有無、外面の段・沈線・後の有無は不明である。底部は丸底風のものと推定される。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。掘り方の埋土から出土している。

甕形土器

（床面）8は口縁部が外反し、内外面にヨコナデが施されている口縁片である。

須恵器

甕形土器 9は外面に平行印目文が施されている体部片である。内面調整はナデである。

B03住居跡（図版8、写真図版6）

遺構は北端部西寄りに位置し、検出面は耕作土下30cmの基本層序Ⅲ層中位である。B03土坑と北東隅で重複しており、新旧関係は土坑が切っていることから（新）B03土坑→（旧）B03住居跡となる。規模は床面で4.06m×3.18mを測り、南辺側がやや外側に張り出す隅丸長方形を呈している。埋土は黒色シルト質土の単層で構成され、微量の炭化物と径5cm～15cmの亜角礫や亜円礫を混入している。

壁は西壁側と東壁側の一部に暖味な箇所もあるものの、床面から緩やかな傾斜（120度～130度）で立ち上がっている。床面の半分以上は砂礫層上面にあり、堅く締まり多少凹凸がある。壁際と南側の床面の一部は、焼成と考えられる赤色変化が顕著である。また、西壁側は最近の柱穴状の擾乱を受けている。

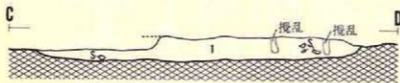
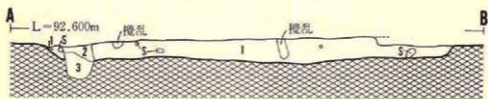
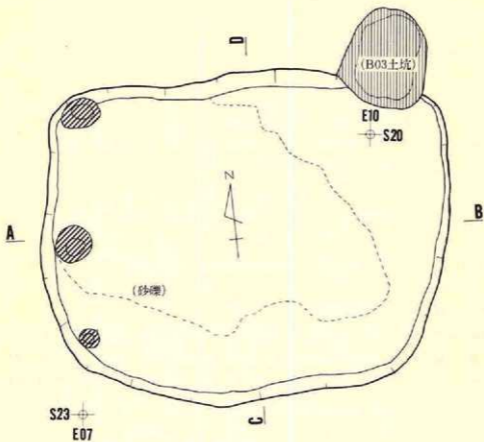
時期を決定する遺物は出土していない。

B13住居跡（図版9・10、写真図版7）

調査区中央の北西寄りに位置し、砂礫が混入するN層上位～中位で検出されている。東5mにはD13住居跡がある。他遺構との重複はない。

平面形はほぼ方形で、規模は床面中央で、南北3.85m、東西3.4mを測る。埋土は、小礫や礫が多く混入する黒色砂質シルトの単層である。全体に柔らかく粘性があり、炭化物が混入している。東壁際の埋土上位にⅡ層土と同じ灰白色細粒浮石（分析では十和田a火山灰と推定されている）が混入する。埋土下位から床面にかけて径10～15cmの礫が多くあり、人為的な埋め戻しの一部なされたものと考えられる。

壁は、北～西壁は礫の混入するN層下位、東～南壁は黒色土が混入する砂礫層（V層）上位



1. 黒色(10Y R1.7/1)シルト質 堅くしまっている
種5-15cmの礫多く含む
炭化物僅か混入
2. 黒色(10Y R2/1)砂 質 しまりなし径1-2の礫混入
3. 黒色(10Y R1.7/1)シルト質 やや堅い2層より礫多い



図版 8 B03住居跡

に構築されている。壁高は低く、各壁とも10cm程である。

床面は、暗褐色シルト質土で貼床されているが、竈が一部露呈し凹凸がある。

柱穴、土坑、周溝は検出されていない。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設けられている。袖部は床面をわずかに掘りくぼめ、凝灰岩類を芯材として用い粘土質シルトを被覆している。右袖は、やや偏平な亜角礫を1個立てシルトを厚く被って固定している。左袖には偏平な亜角礫を数個立位に並べシルトを被覆している。

シルトは火熱による強い焼成を受け、赤変し堅くしまっている。

天井部を構成していたと思われる礫が、カマドの右手後方に焼土塊と共に散在している。燃焼部には40cm×30cmの範囲に焼土が広がり、焼土の厚さは最大7cmに及び、堅くしまっている。

燃焼部から煙道部にかけて、壘底部と口縁部片が出土しているが、カマドの使用面より上位にあることから、カマド廃棄後に投棄されたものと考えられる。

煙道は、壁をわずかに掘りくぼめ、燃焼部から緩く立ち上がり、その後やや下り勾配を呈してのび、中央部から先は地面をほぼように平坦にのび、壁外方110cmまで及び。

このカマドは、全長190cm、袖幅120cmを測る。

出土遺物（図版84、写真図版52）

土師器

杯形土器

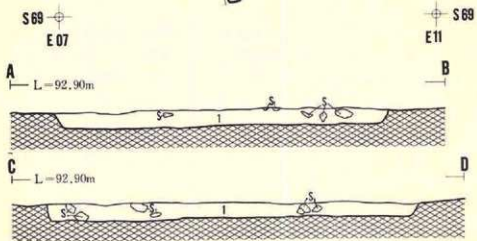
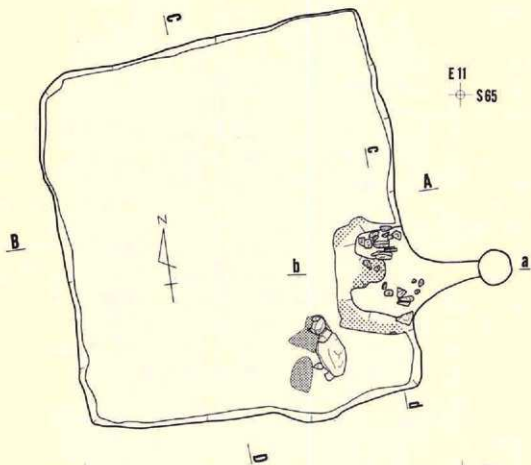
（カマド）19、20は体部外面にロクロナデ、底部に回転糸切り痕のある底部片である。ともに底部外面にはヘラケズリなどによる再調整は施されていない。内面はヘラミガキが施されている。内面の黒色が二次的加熱を受けて消失したと考えられ、2点とも内黒の杯であったと推定される。口縁部・体部が欠損しているため全体の器形は不明である。

（埋土）内黒の杯-10はロクロ使用の杯で底部が欠損している。口縁部は内彎している。体部下端はロクロナデ後、ヘラケズリによる再調整がなされている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。胎土に砂粒を含む。

甕形土器

（床面・カマド）21・22は肩部に段・沈線・縁をもたず、口縁部が短く外反している（I F 一d 類）21は底部が欠損し、口縁部が薄く、体部内外面に粗いナデ状の調整が施されている（d₁）。22は体部下半が欠損している。体部内外面はハケメで調整されている。23、27は外面を粗いヘラケズリ、内面をヘラナデで調整されている底部片である。23の底部には粗いヘラケズリ痕がみられる。胎土には5～10mm大の砂粒が含まれている。

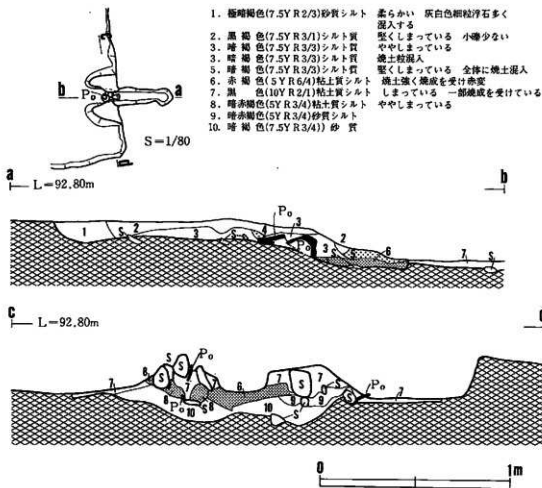
（埋土）24～26は底部片である。24は23と同様に外面粗いヘラケズリ、内面ハケメで調整さ



1. 黒色(7.5Y R 1.7/1)砂質シルト 柔らかい、炭化物混入



図版 9 B13住居跡(1)



図版10 B13住居跡(2)

れている。25は最下端にハケメ状のものがみられる。あるいは粗いナデなのかもしれない。内面はハケメで調整されている。底部外面はやや強いナデで調整された後、一部ヘラケズリがやられている。26は外面をハケメ、内面をナデで調整されている。外面のハケメは一部しか残っていないためはっきりと断定できない。あるいはやや粗い、強いナデなのかもしれない。26を除いた2点の胎土は砂粒、小石を多く含む。

酸化焙焼成の須恵器

坏形土器

(床面・カマド) 12、13、16、18は内外面ロクロナデ調整の施されているものである。13は底部を欠損している。他の3点はロクロからの切り離しが回転系切りである。底部外面の再調整はみられない。12、16の口縁部はやや外反している。13の口縁部は外傾している。

(埋土) 11、14、15、17の4点は内外面ロクロナデで調整されている。14、17は体部を、15は底部を欠損している。底部のある3点はすべて回転系切りで再調整はやられていない。11は口縁部が内彎し、底部がやや台状を呈している。15は口縁端部が外反し、体部内外面のロクロ痕が顕著である。

B15住居跡 (図版11、写真図版8)

調査区中央のやや南西寄りに位置し、砂礫が多く混入するⅣ層上位～中位で検出されている。本遺構より新しい柱穴群と重複し、壁の一部、床面が切られている。

平面形は、北西-南東方向がやや長い正方形を呈し、規模は床面中央で3.55m×3.2mを測る。埋土は、径3～5cmの礫が多く混入する黒褐色砂質土で構成され、堅くしまっている。

埋土最下部から床面にかけ、焼土のブロック及び炭化物が多く含まれている。

壁はⅣ層中～下位に構築され、各壁中央での壁高は、北壁18cm、西壁15cm、南壁5cm、東壁10cmを測る。床は黒褐色砂質シルトで貼床されている。礫が幾分露呈し凹凸があり、中央部がやや盛り上がり方を呈している。特に堅くしまっている状況ではない。床面には炭化物、焼土が多く散在しており、焼失住居跡と思われる。炭化物の樹種は、ナラ、松と同定されている。

柱穴、土坑、溝溝、カマドは検出されていない。

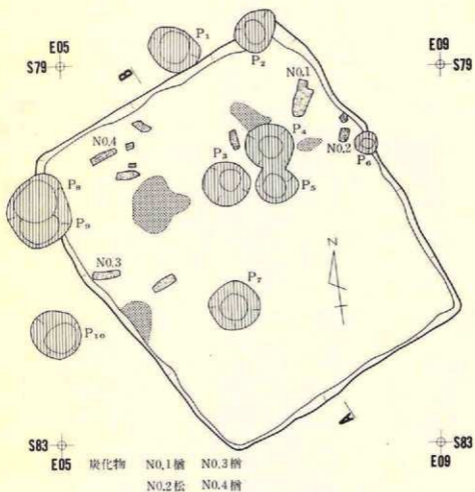
出土遺物 (図版85、写真図版52)

須恵器

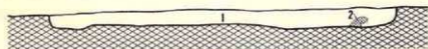
杯形土器(埋土) 28は体部が外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反している。ロクロからの底部切り離しは回転ヘラ切りである。底部外面の周囲には一部ヘラナデ、ヘラケズリ痕がみられるが、範囲が部分的で不定方向であり、再調整を意図的に行ったかどうかは断定しにくい。口径12cm、底径5.8cm、器高3.5cmである。口径に対する底径比は0.48で2分の1に近い。また、ロクロからの切り離しの位置は杯の底面よりやや低い。

C05住居跡 (図版12・13、写真図版9・10)

本遺構は、調査区北端部の中央寄りに位置している。検出は基本層序Ⅳ層中において、黒色土の方形の落ちこみによって確認されたものである。東壁の一部は擾乱削平を受けているものの、南北3.67m×東西4.04mを測り(床面で計測)、東西辺が僅かに長い隅丸方形を呈している。埋土は黒色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの2層で構成されている。大部分を占める黒



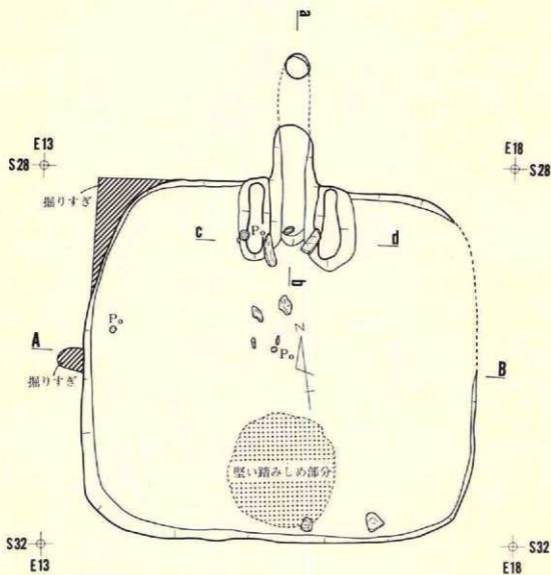
A — L = 92.60m



1. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質 礫・小礫多い 炭化物混入
 2. に近い赤褐色(5Y R 4/4) 焼土 ややしまっている



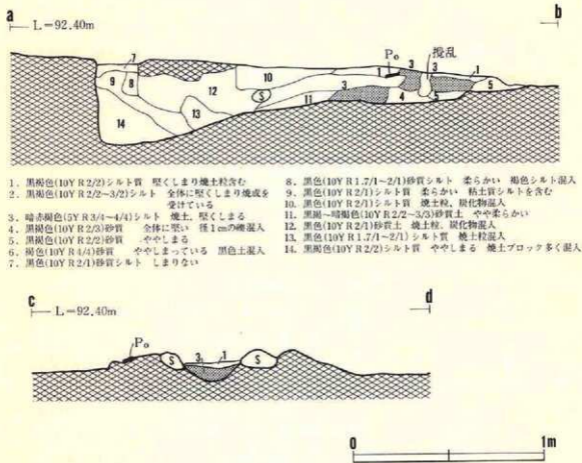
図版 11 B15住居跡



1. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト 全体に堅い 礫・土器を含む
炭化物層が混入
2. 暗褐色(10Y R 3/3~3/4)砂質シルト ややしまり砂質土多い



図版12 C05住居跡(1)



図版13 C05住居跡(2)

色土は、微量の炭と径10cm~20cm大の亜円礫を多く混入し、全体に堅く締まっている。埋土の堆積状況は自然堆積の様相を示している。

壁は床面から急傾斜(110度~120度)で立ち上がり、壁高は東壁6cm、西壁22cm、南壁10cm、北壁12cmを測る。床面は砂礫層上面にあり、大小の窪みを有し、全体に堅く踏みしめられている。また、南壁側には径1.10mの範囲が他に比較してカリカリに堅い部分が見られる。貼床は施されていない。

柱穴と周溝は検出されない。柱穴は床面が砂礫層のため、深い掘り込みができなかったとも考えられる。

カマドは北壁のはほぼ中央に設置されており、焚口上部と袖部の大部分は耕作による攪乱削平

のため崩壊している。袖部は床面を若干掘り下げ、黒褐色土混じりのシルトで構築している。焚口部の南側床面上には、焼成痕のある長さ32cm～34cm、幅10cm～12cm、厚さ7cm～9cmの直角礫が2個散在している。これらの礫は本来袖部側壁に据えられていたものと考えられる。燃焼部の焼土形成は不明瞭である。くりぬき式の煙道部は一部崩落している箇所もあるものの長さ1.36mを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。側壁は焚口部寄りでもよく焼成を受け赤色変化が著しい。煙出し部は径26cm×24cm、深さ46cmの円形土坑が掘り込まれている。燃焼部寄りには支脚抜き取痕が長さ12cm×6cm、深さ4cmである。

遺物は、土師器の破片が南西壁側とカマド左袖部脇の床下から少量と中央南西壁寄りの埋土下位から炭化種子（モモ？）が出土している。

出土遺物（図版86～88、写真図版52～54）

土師器

坏形土器

（埋土）内黒の坏一休部外面に段のもつもの（33）1点、稜のもつもの（29）1点、段・沈線・稜のもたないもの（31、32）2点出土している。33は口縁部が内彎し底部が丸底風である。外面調整は段上半がヨコナデ、下半がヘケメである（I C-a類）。遺構検出の際、カマド周辺の埋土最上部で発見された。29は休部が内彎しながら立ち上がり口縁部が外傾している。底部は中央が欠損しているが、丸底であると推定される。外面は横方向を主としたヘラミガキが施されている（I D-b類）。31、32は底部が丸底風で外面は横方向のヘラミガキで調整されている（I E-c類）。31は口縁部が外傾し、底部中央が欠損している。32は口縁部が内彎し、口径9cmと小型である。4点とも、ヘラミガキ後、黒色処理が施されている。丹塗の坏—30は内外面を丁寧にヘラミガキ後、外面に丹塗、内面に黒色処理が施されている（I D類）。丹塗は明赤色を帯んでいる。口縁部は内彎している。底部が欠損している。内面ナデの坏—52～55は口縁部ヨコナデ、休部外面ヘラケズリ、休部内面ナデで調整されている口縁部片である。52～54は口縁部が短く外反し、器高の低いものと推定される。55は口縁部が内彎し、前の3点より法量が大きいのと思われる。図示以外にも同一個体と思われる底部が出土している。外面はヘラケズリで調整されている。これらは明赤褐色を帯びており、他の坏と色調を異にしている。

高坏形土器

（床面）34は坏部が欠損し脚部が残存している。脚は上部が柱状、下部が円錐台状を呈し段を有している（I A類）。坏部の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。脚部上半の外面はヘラケズリ後、一部ヘラミガキ、内面はヘラケズリで調整されている。脚部下半の内外面の調整はナデである。

壺形土器

(埋土) 小型の壺—38は頸部が強くすぼまり、体部最上位に最大径がある器形を呈している。口縁部は欠損している。頸部はヨコナデ、体部外面はハケメまたはナデ後ヘラミガキ、体部内面はナデで調整されている(Ⅰb類)。丹塗の壺—35、39は口縁部、37は口縁部、体部上半が欠損している。35、39は体部が球形を呈し、中央に最大径をもつ。体部全面に丹塗が施されている。丹塗前はヘラナデ後、ヘラミガキが体部外面に施されている。39の体部下半はナデ調整で図示されているが、磨滅と洗浄の不注意で洗い過ぎたため、ナデが最終調整であるかは不明である。内面はハケメまたはナデで調整されている。37は小型の壺で体部外面を丁寧にヘラミガキした後、丹塗が施されている。内面はヘラナデで調整されている。57は頸部片、60は口縁部片である。ともに口縁部全面に丹塗が施されていたもの(ⅠA類)と推定される。57は肩部に段をもつ。外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、体部がハケメで調整されている。ヘラミガキされている口縁部内面にも丹塗が施されている。59は口縁部が強く外反している(ⅠA—a類)。内外面ヘラミガキ後、丹塗が施されている。口唇部は平坦で細沈線を巡らせている。57、59は小型の丹塗の壺破片と思われる。

変形土器

(床面・カマド) 46、49は底部片である。底部内面は46が丸底、49が平底を呈している。外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている。46の底部は底面が幾分外方に広がる台形状を呈している。

(埋土) 口縁部に沈線文をもつもの(ⅠA類)が3点(56、58、59)、口縁部に段をもつもの(ⅠB類)2点(43、61)、肩部に段をもつもの(ⅠD類)1点(42)、肩部に段をもつもの(ⅠE類)1点(44)などが出土している。56、58、59は口縁部下半に2本単位の連続山形沈線文が施されている口縁部片である。(ⅠA—c類)。沈線は先の尖ったもので浅くつけられている。沈線文が施文されている口縁部下半は一段で、沈線の間には煮こぼれと思われる炭化物が付着している。58は口縁部が外反し口縁部が外傾している。43は体部を欠損している口縁部片、61は口縁部小破片である。ともに口唇部は平坦である。43は肩部にも段をもち口縁部が外反している(ⅠB—b類)。体部内外面はハケメで調整されていたと推定される。42は小型の壺で口縁部が外反している(ⅠD—a₁類)。底部は欠損している。体部内外面はハケメ調整されている。口唇部は平坦である。44は底部が欠損し口縁部が外反している。外面は体部上半がヘラミガキ、下半がヘラミガキ・ハケメ、内面は体部上半がヘラナデ、下半がハケメで調整されている(ⅠE—a₁類)。口唇部は平坦である。40は体部中央がやや脹む器形を呈し、口縁部が欠損している。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケメで調整されている。底部外面はナデで調整され、中央がやや上がっている。41、45、47、48、50、51は底部片である。48以外は外面をハケメで調整されている。48の外面調整はヘラケズリである。底部内面の器形

は51が丸底でそのほかは平底・平底風である。45は底部中央が円形状の孔があり、孔の周囲が幾分摩耗していることから甕などに転用された可能性がある。

石器

(埋土) 62は使用痕のある剥片である。

埋土は黒色のシルト層で占められ、最大層厚が約30cmである。埋土最下部として取り上げた遺物は床面から10～15cm離れた位置から発見されたものである。

C17住居跡 (図版14、写真図版10)

遺構は調査区中央部南寄りに位置し、D17-1住居跡、D17-3住居跡、C17井戸跡と重複している。各遺構との新旧関係は切り合い状況から新しい順に①C17井戸跡、②D17-1住居跡、③本遺構、④D17-3住居跡となる。規模は上場で計測し、2.86m×2.82mの隅丸方形を呈している。埋土は黒褐色土主体の3層に大別され、上位から中位は微量の炭化物と径10cm～30cmの歪角礫を多く混入し、中位から下位は褐色土と砂土の混合層で構成されている。

壁は一部で崩落しているものの、床面から110度前後の勾配で外傾するように立ち上がり、壁高は90cm～100cmを測る。床面はやや堅く締まり、ほぼ平坦である。柱穴は検出されない。

出土遺物 (図版89、写真図版55)

土師器

壺形土器(埋土) 66、67は口縁部片である。66は肩部に段をもつ(1b類)。体部外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。67は肩部に段・沈線・破れをもたず口縁部が短く外反している。外面は粗いナデ状の調整が行なわれている。内面調整はハケメである。

須恵器

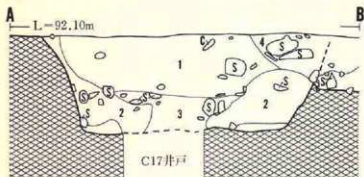
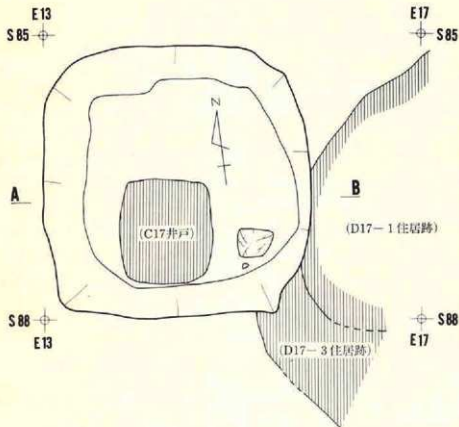
壺形土器(埋土) 63、64、69は体部片、68は頸部片である。63、64は内外面ロタロナデ後、外面をヘラケズリで調整されている。68は小型のもので内外面ロタロナデが施されている。

壺形土器(埋土) 65は体部片である。内外面に平行叩目文がみられる。外面は斜位方向に叩いた後、縦位方向に叩いたため、一部格子目状にみえる。

C21住居跡 (図版15、写真図版11)

調査区南側のはほぼ中央に位置し、N層中位～下位で検出されている。D21住居跡、C22住居跡状遺構、D20掘立柱建物跡と重複している。重複する遺構の新旧関係は、古い順に①本住居跡、②C22住居跡状遺構、③D21住居跡、④D20掘立柱建物跡である。

東壁北側がD21住居跡に切れ、北西隅が擾乱を受けているものの、平面形はほぼ方形を呈し、規模は床面中央で、南北5.3m、東西5.9mを測る。埋土は、小礫がわずかに混入する黒色シ



1. 黒褐色(7.5Y R3/1)粘性なし 径30cm前後の塊多い
2. 褐色(7.5Y R4/3)粘性若干あり 小石の混入多い
3. 黒褐色(7.5Y R3/1)1層より柔らかい塊も少ない
4. 黒褐色(7.5Y R3/1)1層に類似するが若干堅い



図版14 C17住居跡

ルト質土で構成され、やや堅くしまっている。

壁は、北半ではⅣ層下位に、南半部ではⅤ層上位に構築されているが、壁高は低く、5～10cmを測る程度である。床面は、北半が暗褐色シルト質土で平坦で堅くしまっている。南側は、礫の混入する黒色シルト質土で、全体に凹凸があり、特に堅くしまっている程でもない。

柱穴、土坑、周溝は検出されていない。

北壁中央部に設けられているカマドは、その原形をほとんど止めず、燃焼下部と煙道部が残存するのみである。燃焼部付近は径120cm位の半円状の窪みを呈し、中央部では床面より約10cm低くなっている。焼土が50cm×25cmの範囲で検出され、焼土の色調は赤褐色を呈し堅くしまっている。厚さは2～3cmに及ぶ。煙道は、壁を切って燃焼部で緩く立ち上がり、壁外では平坦にのび、壁外方170cmまでのびる。煙道の形状は湾曲を呈している。煙出し部は開口部径約45cm、深さ約65cmの土坑状を呈しており、下部には柔らかく粘性のある黒褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物（図版90～92、写真図版55・56）

土部器

杯形土器

（床面・カマド）内黒の杯—74、75は内面に区切り、外面に段・沈線・稜などをもたず、埴形に近い器形を呈する（ⅠE類）。74の外面はヘラケズリ後、丁寧なヘラミガキが行なわれている。体部下端にヘラケズリ痕を残している（ⅠE—b類）。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部がやや外反している。底部は平底風である。75は体部が外傾し口縁部が内彎している。底部は中央が欠損しているが、平底である。外面調整は上半がヘラミガキ、下半がナデ・ヘラケズリである（ⅠE—b類）。90は体部下端の破片である。外面はハケメ後、ヘラミガキされている。3点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。黒色の杯—72は体部外面に沈線を巡らせている（ⅠB類）。底部は欠損している。口縁部は内彎している。外面は横方向、内面は縦方向のヘラミガキで調整された後、両面とも黒色処理が施されている。丹塗の杯—76は外面が横方向のヘラミガキ後丹塗、内面が縦方向のヘラミガキ後黒色処理が施されている。底部が欠損している。内外面に段・沈線・稜などの区切りをもたない（ⅠD類）。口縁部は内彎している。

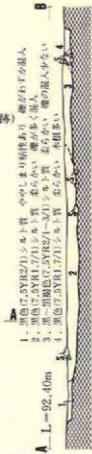
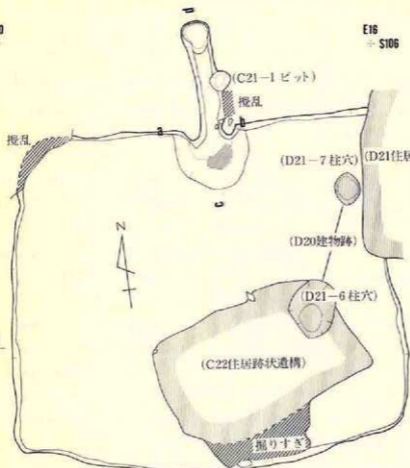
（埋土）内黒の杯—73は体部外面に稜をもち、外面をヘラミガキで調整しているが下半に一部ヘラケズリ痕を残すものである（ⅠD—b類）。口縁部が内彎し口唇部が肥厚している。底部は中央が欠損しているが平底風である。内面は縦方向のヘラミガキ後、黒色処理が施される。89は底部片、92は口縁部片である。89の体部下端はヘラケズリで調整されている。92は口縁部が外傾している。杯—88はロクロ使用の杯で内面をロクロナデ後、ヘラミガキが施されている。

E10
S106

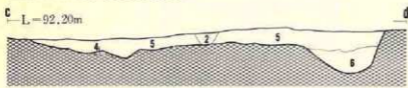
E16
S106

S113
E10

S113
E16



1. 黒色(7.5YR2/1)シルト質 ややしまり粘性あり 礫がわずかな人糞
2. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト質 柔らかい 礫が少なく人糞
3. 黒~黒褐色(7.5YR2/1~3/1)シルト質 柔らかい 礫の人糞がない
4. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト質 柔らかい 木炭多い



- | | | |
|-----------------------|--------|---------------|
| 1. 黒褐色(7.5YR3/1)砂質シルト | 堅くしまる | 黄褐色シルトと黒色土の混土 |
| 2. 黒色(7.5YR2/1)砂質シルト | しまっている | 礫混入。(攪乱部) |
| 3. 黒色(7.5YR2/1)シルト質 | 堅くしまる | 黄褐色シルトと黒色土の混土 |
| 4. 赤褐色(5YR4/6)礫土 | 堅くしまる | 褐色シルトが赤変 |
| 5. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト質 | 堅くしまる | |
| 6. 黒褐色(7.5YR2/3)シルト質 | 柔らかい | |

図版15 C21住居跡

もともと内黒の坏であったものが、二次的加熱を受けて黒色が消失したものと考えている。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。外面下端にヘラケズリによる再調整がみられる(ⅡB類)。体部、口縁部は欠損している。

壺形土器

(床面) 壺-81は口縁部、体部上半が欠損している。体部中央に最大径をもつ器形であると推定される。外面は体部中央が横方向のヘラミガキ、下半～底部までが縦方向のヘラミガキで丁寧に調整されている。下端の一部にヘラケズリ痕がみられる。内面調整はヘラナデである。

丹塗の壺-81は口縁部が縦位の帯状に、体部が全面に丹塗が施されている。体部下半は欠損している。口縁部縦位の丹塗は一部横位にのびている。肩部に段をもち、口縁が外反してしている(ⅠB-a類)。丹塗前の体部はヘラミガキが施されている。内面調整はヘラナデ、ヘケメである。84は小型の壺で、外面全体に丹塗が施されている。体部が球形を呈し、口縁部が外傾している(ⅠA-c類)。口縁部・体部外面は縦方向、口縁部内面は横方向のヘラミガキが丁寧に施されている。内面調整はヘラナデが主で下端にヘラミガキが一部みえる。87は口縁部、底部が欠損している。体部下半は磨耗していて、わずかに丹塗が残存しているだけで、調整痕がわからない。体部上半の外面はヘラナデ・ヘラケズリ後、横方向のヘラミガキで調整し丹塗が施されている。内面調整はヘラナデである。

(埋土) 丹塗の壺-86は外面ヘラミガキ後丹塗が施されている肩部片である。わずかに残存している口縁部はヨコナデが施され、丹塗がみられないことから、口縁部は縦位の帯状に丹塗が施されていた(ⅠB類)と推定される。

甕形土器

(床面) 78、79は口縁部片、80は底部片である。ともに口唇部は平直である。79は肩部に段をもち、口縁部が外反している(ⅠD-a類)。80は外面がナデ・ヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。底部内面は平底と思われる。

(埋土) 83は内外面をヘラナデで調整されている底部片である。底部外面は粗いヘラケズリで調整されているため、石の動いた跡が平行沈線文風を呈している。

須恵器 杯形土器

(床面) 91は口縁部が外傾していると推定される口縁部片である。内外面のロクロ痕が顕著である。口唇部は先細である。

酸化焰焼成の須恵器 杯形土器

(埋土) 77は内外面をロクロナデで調整されている。口縁部は欠損している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。体部・底部外面にはヘラケズリなどによる再調整はみられない。

当住居跡は東側をD21(住)、南東側をC22住居跡状遺構に切られている。精査時には重複

や新旧関係がわからず、結果的に最も古い当住居跡から調査したことや埋土が攪乱を受けていることなどから、混入していたものを当住居跡の遺物として取り上げた可能性のものもある。

D07住居跡（図版16・17、写真図版12・13）

調査区北側の南寄りに位置する。東2mにE07（住居跡）があり、本遺構の煙出口とE07（住居跡）の西壁との距離はわずか30cmである。位置関係から2棟は同時に存在しなかったと推定される。遺構は基本層序Ⅲ層下位で最初に煙出口・煙道が検出され、住居跡と判明した。住居跡中央部が雑やにぶい褐色シルトが露出し攪乱を受けている。他の遺構との重複はない。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は床面で東西3.35m、南北3.05mを測る。埋土は大きく3層に分けられる。1層は攪乱部の埋土で、下位に径10cm前後の亜円礫を含み、全体にぶい褐色シルト、褐色シルトをブロック状に多く混じる黒褐色の砂質シルトである。2層は中位に炭化材を多く含む黒色のシルトである。一般に、焼失住居跡の場合、炭化材の堆積の仕方は住居跡中央で床面直上、壁際に近づくにつれて床面より高くなるレンズ状の堆積をする。床面中央でも埋土中位に堆積し、現地性焼土が確認されていないことから、本遺構の炭化材は投げ込みによるものと推定される。3層は炭化物をわずかに含む南半の床面を覆っている黒褐色のシルトである。

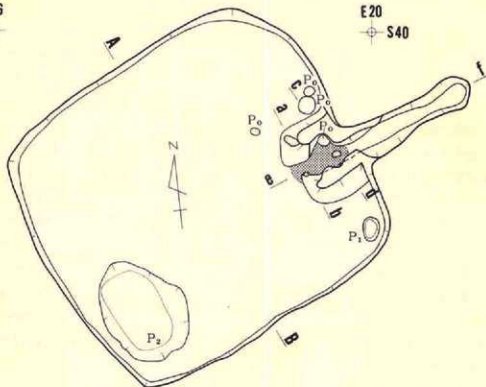
壁はほぼ真直に立ち上がる。壁高は北壁・南壁30cm、東壁25cm、西壁32cmを測る。床は掘り方をもち、Ⅳ層中位～下位まで掘り込み褐色シルトや黒褐色シルトで埋めてつくられている。掘り方は深さ5～10cm、底面がでこぼこである。床面はカマド前面が幾分かたいほかは全体にしまっていない。

床面を3回掘り下げ、その都度、柱穴と推定されるものを精査したが、規模・位置から柱穴と断定できるものは確認できなかった。柱穴の埋土が掘り方の埋土と類似していたり、柱穴が掘り方と同じ程度の深さであったりして、柱穴が検出できなかったのかもしれない。ビットP₁は位置的には良いが、浅いこと、対になるものが検出されていないことから、柱穴と認定しなかった。南西隅に壁に接する形で、底面が隅丸の長方形を呈するビットP₂が検出されている。規模は底面が東西54cm、南北90cm、床面から深さが32cmを測る。底面は丸底皿を呈している。ビットP₃は床面検出時にはわからなかったもので、掘り方精査時に検出された。形態、位置などから、住居跡に伴うものと考えられる。写真でみると、掘り方の埋土には褐色のシルトをブロック状に多く含むが、ビットの埋土にはあまり含まれていない。ビットの埋土は住居跡の埋土3層と類似していることから、住居跡廃棄時まで使用されていたと推定される。周溝は検出されていない。

カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。天井部は崩壊し袖の最下部が残存している。袖部は右袖が長さ21cm、厚さ13cm、左袖が長さ34cm、厚さ13cmの扁平な細長い亜円礫を縦位、

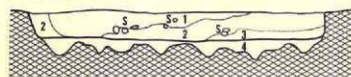
E 16
S 40

E 20
S 40

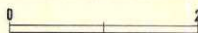


A
L=92.30m

S 44
E 20

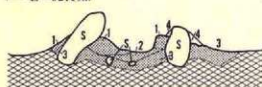


- A-B
1. 黒褐色(10Y R 3/2)砂質シルト 柔らかい 褐色シルトのブロック・小石が混入
2. 黒色(10Y R 2/1)シルト質 ややしまる 炭化物中に多く含む
3. 黒褐色(10Y R 2/2)シルト質 ややしまる 炭化物が混入
4. 黒-黒褐色(10Y R 2/1-3/1)シルト質 粘性あり しまっている



a
L=92.10m

b



c
L=92.00m



- a-b
1. 暗赤褐色(5Y R 4/3)粘土質シルト 焼土 粘性ややありしまっている
2. 赤褐色(5Y R 4/6)粘土質シルト 焼土 粘性ややあり
3. 暗赤褐色(5Y R 3/2)砂質シルト 焼土 しまっている



図版16 D07住居跡



図版17 D07住居跡(2)

斜位に埋置して芯にし、にぶい褐色シルト混じりの暗褐色土で被覆してつくられていたと推定される。燃焼部は浅皿状を呈し、加熱により赤色変化を受けている。焼土の層厚は5cmである。カマド本体の壁寄りに長さ12cm、厚さ6cmの川原石を縦位に埋め、支脚として使われている。煙道部は壁際から緩く下降し煙出部付近で上がり煙出口につながる。煙出口は径25cm、深さ30cmである。カマド本体の幅は93cm、全長は206cmである。

口縁部に格子目状沈線をもつ甕は上半が左袖脇、下半が燃焼部内から出土している。下半は倒立していた。左袖脇には坏、カマド本体前には高杯も出土している。

出土遺物 (図版93、写真図版56)

土師器

杯形土器

(床面)内黒の坏—93は内面に区切りをもち、外面に段をもち、底部が丸底を呈している(IA類)。口縁部は内彎している。内外面は表面がハチの巣状に剥離している。特に体部外面の下半は剥離が多い。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。口径が11.9cmと小型の坏である。

(埋土)94は内外面に段・沈線・稜などの区切りをもち、底部が丸底を呈している。口縁部は内彎している。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている(IE-c類)。

高杯形土器

(床面) 95は杯部が体部下半に段、脚部が上位と下位に2つの段をもつ。杯部は口縁部が内脣し底部が丸底風を呈している。脚部は円錐台形状を呈している。杯部の外面は段上部がヘラミガキ、下部が横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。脚部の内外面は上部が縦方向のヘラケズリ、下部が横方向のナデで調整されている。

甕形土器

(床面・カマド) 97は体部上半がカマド脇、下半・底部がカマド内から発見されたものである。底部は倒立していた。口縁部は軽い段を2つもち、下位の口縁部に格子目の沈線文が描かれている(ⅠA-d類)。口縁部は外反し、口縁端部が直上している。肩部にも段をもつ。体部外面の調整は磨耗して明瞭に残っていないが、ヘラナデ・ヘラミガキ後、ヘラミガキが施されていたと思われる。内面はナデ後、縦位のヘラミガキが行なわれている。底部内面は平底風を呈している。96は肩部に沈線をもち口縁部が外反している口縁部破片である(ⅠC類)。口唇部は平坦である。体部内外面はハケメで調整されている。

石器 凹石

(埋土) 98は両面の縦位にいくつものくぼみ穴をもつ白色細粒凝灰岩の凹石である。

D16—1住居跡(図版18、写真図版13)

調査区中央のやや南東寄りに位置し、砂礫が混入するN層上位で検出されている。D16—2住居跡と重複し、その上位にある。床面に多くの炭化物、焼土が散在していることから、本遺構は焼失住居と考えられる。東壁の南側部分が、水道管理設工事によって攪乱されている。

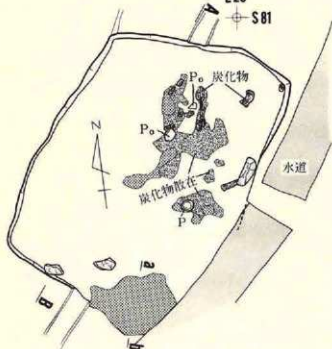
検出された状況から推測すると、平面形は北東—南西方向に長辺をもち北東壁が屈曲する台形状を呈していたと思われる。床面規模で、北東—南東が約2.8m、北東—南西が約2.0mを測る。埋土は、黒色を呈する砂質シルトの単層でやや堅くしまっている。埋土下位から床面にかけて炭化物、焼土塊が多く含まれている。

壁高は、北東壁中央部で10cm、北西壁中央部で10cm、南西壁中央部で5cm、南東壁北側で8cmを測る。床面は、ほぼ平らであるが、南西方向に僅か下り勾配を呈している。床面は黒色砂質シルトで、特に堅くしまっている状況ではない。炭化物、焼土が北半から多く検出されている。一部板片状を呈するものもみられるが、残存状況は良好でなく、細片になっているものが多い。これらの炭化物の樹種は、栗、ナラ、針葉樹と同定されている。また、少量であるがカヤの炭化物も検出されている。

南東隅の床面上部で75cm×70cmの広がりをもち、厚さ約7cmの焼土塊が検出されている。焼土には黒色土の小ブロックが多く混入するもので、本遺構に投棄された異地産の焼土と考えら

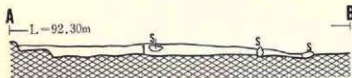
E17
S81

E20
S81

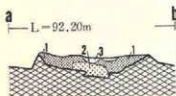
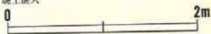


S85
E17

S85
E20



1. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 堅くしまる 炭化物、焼土混入



a-b
1. 棕色(5Y R 6/8)焼土 堅くしまる 黒色土のブロック混入
2. 暗赤褐色(5Y R 3/3)砂質シルト 焼土粒のブロック多く混入
3. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 柔らかい 焼土粒わずか混入



図版18 D16-1住居跡

れる。

柱穴状ピットが床面中央東寄りに1基ある。口径10cm、深さ15cmを測り、埋土中には炭化物(栗)が多く混入している。他に柱穴、柱穴状ピットは検出されておらず、柱穴は不明である。

出土遺物(図版94・95、写真図版57)

土師器

杯形土器

(床面)内黒の杯一(体部外面に沈線を巡せるもの〔I B類〕1点(99)、段をもつもの〔I C類〕1点(100)、稜をもつもの〔I D類〕1点)が出土している。99、100、は底部が欠損し口縁部が内傾している。99は外面がヘラミガキされている。100外面がヘラケズリ後、ヘラミガキされている。段下部により多くヘラケズリ痕がみられる〔I C-c類〕。105は外面をヘラミガキ調整し底部が丸底である〔I b-b₂類〕。口縁部が欠損している。3点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。丹塗の杯一101は体部外面に稜をもち口縁部が外傾している。底部は欠損している。内外面をヘラミガキ後、外面を丹塗、内面を黒色処理が施されている〔I C類〕。

杯一103は体部外面に沈線を巡せている体部破片である。内外面は丁寧なヘラミガキが施されている。二次的な火熱を受けて黒色が消失したものと思われる。

(埋土)102は口縁部が外傾し、底部が丸底の小型の杯である。底部は中央が一部欠損している。内外面に段・沈線・稜などの区切りをもたず、両面は丁寧なヘラミガキで調整されている。

壺形土器

(床面・カマド)壺一110、111は体部片である。外面はヘラナデ後、ヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。111は肩部に段をもつ。丹塗の壺一106は口縁部、体部下半が欠損している。肩部に段をもつ。体部外面は横方向のヘラミガキ後、丹塗が施されている。内面調整はヘラナデである。108は底部である。外面はハケメ後、丹塗が施されている。内面はナデで調整されている。111、106は床面より低い位置で検出されているため、D16-2(住)に入る可能性もある。

(埋土)壺一109は口縁部、底部が欠損している。体部は球形を呈している。外面はハケメ後、ヘラミガキ、内面はヘラナデ後、一部ヘラミガキで調整されている。丹塗の壺一107は体部下半が欠損しているが、肩部に段をもち口縁部が外反している。口縁部は磨滅して丹塗の痕跡がわずかに残っている。わずかに残っている範囲を図示した。外面の残存する丹塗の範囲や内面の丹塗から、口縁部は内外面全部に丹塗が施されていた可能性が高い。縦位の帯状に丹塗を施す場合、内面も外面と同じように丹塗されているので、107は口縁部内面が全面に丹塗されていたと推定されるから、外面にも全面に丹塗されたと思われる。体部外面はヘラミガキ後丹塗、

内面はヘラナデ調整が施されている。

甕形土器

(埋土) 112は肩部に段・沈線・稜などの区切りをもたず、口縁部が外傾している。体部、底部は欠損している。体部外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている(1F-c類)。113、114は底部片である。内外面はハケメで調整されている。

小形土器

(埋土) 104は口縁部がやや外反し、序部が丸底を呈している。底部中央が一部欠損している。内外面は主に不定方向のナデで調整されているが、底部近くに一部ヘラケズリ痕がみられる。口縁は水平でなく不規則な波状を呈している。

須恵器、甕形土器

(埋土) 115は外面に平行印目痕、内面に放射状当て具痕をもつ体部片である。焼成は悪い。

鉄製品

(埋土) 116は中央左寄りにつまみ状の突起をもつ楕円盤状の鉄製品である。

D16-2 住居跡 (図版19・20、写真図版14・15)

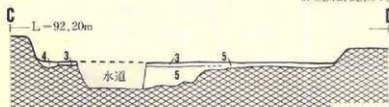
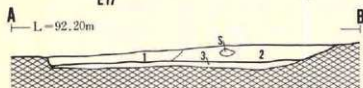
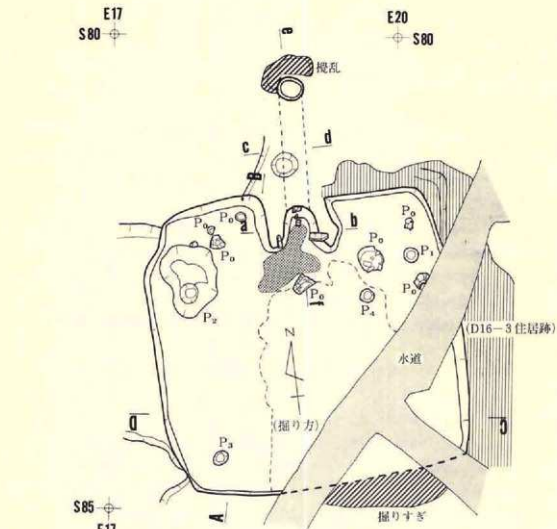
調査区中央のやや南寄りに位置し、D16-1住居跡と重複しその下位にある。D16-1住居跡の床面下から遺物が出土したことにより、本遺構の存在が判明している。東側でD16-3住居跡と重複している。また、遺構の南東部は、水道管埋設工事で大きく攪乱されている。重複する遺構との新旧関係は、新しい順に①D16-1住居跡、②本住居跡、③D16-3住居跡と思われる。

平面形は、隅丸正方形を呈しており、床面規模は南北約3.0m、東西約3.1mを測る。

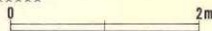
埋土は、黒色、黒褐色を呈し柔らかく、炭化物が全体に混入するシルト質土である。埋土中央から南壁寄りの2層には、礫の混入が多く、攪乱を受けていると思われる。埋土1層は自然堆積によるものと考えられる。

壁は、Ⅲ層下位からⅤ層中位に構築され、壁高は北壁西側18cm、西壁中央14cm、南壁5cm、東壁北側15cmを測る。床面下のほぼ全域に暗褐色シルト～褐色シルトが混入するシルト質土で貼床され、堅くしまっている。床面は平らであるが、緩く南側に下り勾配を呈し、北側と南側は5cm程の差がある。遺構の中央から東側に向け、深さ30～40cmの掘り方をもつ。掘り方底面はⅤ層中の黄褐色シルト面に及び凸凹している。

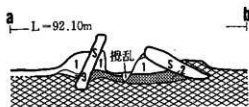
柱穴状ピットが、壁寄りに位置し4基検出されている。これらの配置から推測すると、P₁～P₄が柱穴であった可能性がある。床面の北寄りに不整形を呈するピットがある。開口部径が、75cm×60cm、底径が30cm×30cm、深さ30cmを測る。底面は凸凹し、掘り方状を呈している。埋土は、褐色シルトがブロック状に多く混入しており、人為的に埋め戻されたものと考えら



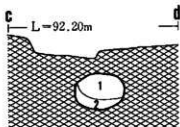
1. 栗色(7.5V R2/1)シルト質 赤らかみ 古代物混入
2. 黄一栗褐色(7.5V R2/1-2/1)シルト質 赤らかみ 1層よりやや暗色、腐化物混入する
3. 栗褐色(7.5V R2/1)シルト質 赤い 粘質シルトと栗色土の混生
4. 栗色(7.5V R2/1)シルト質 暗い 粘質土のフロッツ混入
5. 栗色(7.5V R2/1)シルト質 暗い 粘質土、赤褐色土のフロッツが多く混入する



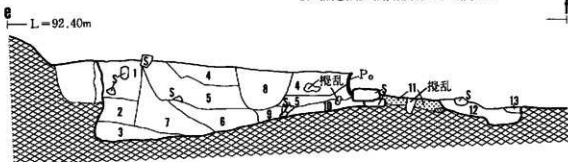
図版19 D16-2住居跡(1)



1. 黒～黒褐色(7.5Y R 2/1～3/1)シルト質 ややしまっている
2. 暗赤褐色(5Y R 3/4)シルト質 焼土、柔らかい
3. 暗褐色(7.5Y R 3/3)シルト質 しまっている



1. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 柔らかい 黄褐色シルト混入
2. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂質シルト 柔らかい



1. 黒褐色(7.5Y R 3/2)シルト質 柔らかい 黄褐色シルト質が全体に混入
2. 暗褐色(7.5Y R 2/3)砂 質 柔らかい、砂礫と暗褐色上の混土
3. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂 質 柔らかい 炭化物多く混入する
4. 暗褐色(7.5Y R 3/4)シルト質 しまっている | (地II)
5. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 しまっている
6. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂質シルト しまりが無い
7. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂 質 しまりなくぼろぼろする
礫・小礫が多く混入
8. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 ややしまっている 炭化物多く混入
9. 黒褐色(7.5Y R 3/3)砂質シルト
10. 黒褐色(7.5Y R 3/2)シルト質 ややしめる 焼土粒混入
11. にぶい赤褐色(5Y R 4/4)焼土 柔らかい
12. 黒褐色(7.5Y R 3/1)シルト質 ややしめる 暗褐色シルトと黒色の混土
13. にぶい褐色(7.5Y R 5/4)砂 質 しまっている(貼り床)

図版20 D16-2 住居跡(2)

れる。

カマドが、北壁中央に設けられている。袖部は、床面を掘り込み偏平槽門形を呈する凝灰岩を直立させ、シルトを被覆させたものと思われるが、シルトが僅か最下部に残存するのみで、殊は斜位または横位に傾いている。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
口 径 cm	15×15	20×20	18×15	25×22
深 さ cm	20	55	15	22

燃焼部には、やや方形を呈する偏平な礎が2個重ねられ、下位のは燃焼面下に埋置されており、支脚と思われる。この礎の前方には、焼土が広がっており、暗赤褐色を呈する焼土は、最大5cmの厚さを測る。

煙道はくり抜きによって構築され、燃焼部から壁をくり抜き下り勾配を呈して煙出し部まで外方130cm程のび、煙出口は柱穴状に真直に立ち上がる。煙出口の深さ40cm、径30cmを測る。

このカマドの全長は約180cm、袖幅は90cmである。

出土遺物（図版96～98、写真図版58～60）

土師器

杯形土器

（床面・カマド）内黒の杯一休部外面に沈線を巡すもの（117）、段をもつもの（119）、稜をもつもの（118）が出土している。117は口縁部が内傾し、体部下端に1～2本の沈線を巡らしている。底部中央が欠損しているが、底部は丸底風であると推定される。外面は沈線上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリ・ヘラミガキで調整されている（I C-c類）。118は口縁部が外傾し底部が平底風を呈している。外面は稜上半がヘラミガキ、下半がヘラケズリで調整されている（I D-a類）。119は口縁部が内傾し底部が丸底である。外面は主にヘラミガキで調整されている。段上半にハケメ痕が一部みられる（I C-c₂類）。140、142は口縁部破片である。140は口縁部が内傾し、外面がヘラミガキで調整されている。142は口縁部が外傾し、外面がナデで調整されている。5点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

高杯形土器

（埋土）丹塗の高杯一120は杯部の上半、脚部の下半が欠損している。杯部底部内面は丸底を呈している。脚部は円錐台形を呈している。外面は杯部がヘラミガキ、脚部がナデで調整後、丹塗が施されている。内面は杯部がヘラミガキ後、黒色処理、脚部がヘラミガキ調整が施されている（I A-b類）。

壺形土器

（床面・カマド）122は口縁部が外反し、体部が中央上位に最大径をもち底部にかけてすぼまる器形を呈している。肩部に段をもち、口唇部が平坦で中央が窪む（I C-a類）。体部外面は下端をヘラケズリ調整されているほかは縦方向のヘラミガキで調整されている。内面はハケメ後ヘラナデで調整されているが、ハケメの凹凸が多く残っている。132は口縁部、肩部が欠損している。体部は球形を呈し、外面がハケメ後ヘラミガキ、内面がハケメ、ヘラナデで調整されている。

（埋土）壺一130は口縁部、底部が欠損している。肩部に段をもち、体部が球形を呈している（I C類）。体部外面は主にヘラミガキで調整されているが、下端にヘラケズリの調整痕がみ

られる。体部内面調整はヘラナデである。丹塗の壺—131は外面をヘラミガキ後、丹塗を施している体部片である。口縁部、体部下半を欠損している。口縁部は一部残存するが磨滅が激しく丹塗が施されていたかどうかは不明である。内面はハケメ、ヘラナデで調整されている。137は外面ヘラナデ後、丹塗が施されている底部片である。

壺形土器

(床面)127は口縁部に段をもち口縁部が強く外反している。口唇部は平坦で中央に沈線を巡らせている。肩部にも段をもつ。体部外面はやや雑なヘラミガキで調整されている(ⅠB—a₂類)。体部内面はヘラナデで調整されている。内外面に輪積痕が多くみられる。136は肩部に段をもち、口縁部、体部下半が欠損している(ⅠD類)。内外面はハケメで調整されている。128は口径15.2cmと小型の壺である。

(埋土)口縁部に段をもつもの(ⅠB類)1点(125)、肩部に沈線をもつもの(ⅠC類)1点(124)、肩部に段をもつもの(ⅠE類)2点(128、129)、肩部に段・沈線・稜をもたないもの(ⅠF類)などが出土している。125は口縁部上位と肩部に段をもち口縁部が外反し口縁端部が外傾している(ⅠB—d類)。底部は欠損している。体部内外面はハケメで調整されている。124は口縁部が外反し体部下半が欠損している。口唇部は平坦である。体部外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている(ⅠC類)。128、129はともに底部を欠損し、外面がハケメで調整されている。口縁部は128がやや外傾気味に立ち上がり外反、129が直上気味で外反している(ⅠD—a類)。内面調整は128がヘラナデ、129がハケメである。128は口唇部が平坦である。126は口縁部が強く外反している。底部は欠損している。外面はヘラケズリ後、縦方向のヘラミガキ、内面は主にヘラナデ、一部ハケメで調整されている(ⅠF類)。133、141は体部外面がハケメ、内面がヘラナデされている小型の壺の体部片である。134、135、138、139は底部片である。135、136は内外面をハケメで調整されている。138は外面ヘラケズリ、内面ハケメ、139は外面ハケメ、内面ヘラナデで調整されている。134は底部内面が丸底風を呈し、底部がやや外方に広がる円錐台状を呈している。

鉢形土器

(床面)121は外面に段などの区切りをもたず口縁部が外傾している。口唇部は平坦である。体部外面はヘラケズリ後、やや雑なヘラミガキで調整されている(ⅠC—a₂類)。内面調整はヘラナデである。123は肩部に段をもち口縁部が外反している。体部外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている(ⅠA類)。

石器 不定形石器

(埋土)143は縁辺の一部に二次調整を加え刃部をつくりだしている。

D16-3 住居跡 (図版21、写真図版15)

調査区中央やや東寄りに位置している。当初遺構の存在が不明で、遺構の有無を確認するためD16-2住居跡東壁から東側へトレンチを入れた結果、本遺構が検出されたものである。

西側でD16-2住居跡と重複し、D16-2住居跡の掘り方によって切られているので、遺構の新旧関係は、本遺構が古く、D16-2住居跡が新しいと思われる。また遺構は水道管理設工事で大きく攪乱されている。

検出された範囲は、南北約2.5m、東西約1.5mで、北壁と東壁がやや丸味をもって接するようであるが、全体の形状、規模は不明である。埋土は、Ⅲ層起源の黒色シルト質土で堅くしまっている。

壁はⅣ層中に構築され、壁高は北壁28cm、東壁20cmを測る。床面は堅くしまっているが、平坦でなく、凸凹している。貼床されておらず、南側への広がりも明確にされていない。

ビット2基が北壁際で検出されている。P₁(口径45cm×30cm・深さ20cm)、P₂(口径40cm×30cm・深さ16cm)であるが、埋土に黄褐色シルト～暗褐色シルト質土がブロック状に多く混入しており、本遺構に伴うものではないと思われる。

柱穴、周溝、カマドは検出されていない。

出土遺物 (図版99、写真図版60)

土師器

杯形土器

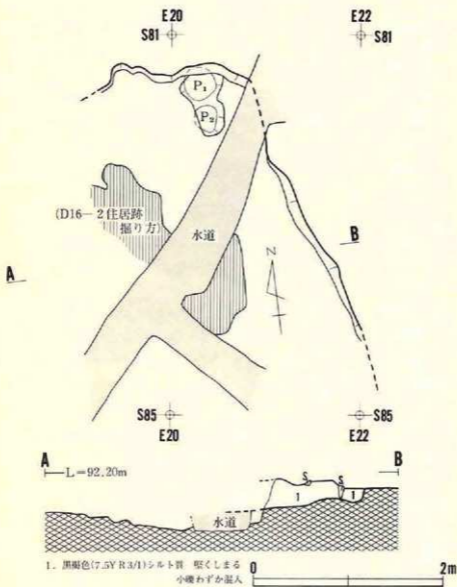
(埋土) 黒色の杯-144は体部内面に区切りをもち、外面に沈線を巡らせている。口縁部は内彎している。底部中央は欠損している。外面調整は沈線上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリ、ヘラミガキである(ⅠB類)。内面調整はヘラミガキである。内外面は黒色処理が施されている。

甕形土器

(埋土) 145～147は口縁部に段・沈線をもつものである(ⅠB類)。145は胴部にも段をもち口縁部が内彎している口縁部片である(ⅠB-c類)。146は口縁部が外反している口縁部破片である(ⅠB-b類)。147は口縁部片である。

D17-1 住居跡 (図版22、写真図版16・17)

遺構は、調査区中央部のやや南寄りにC17住居跡、D17-3住居跡の2棟と重複し位置する。新旧関係は2遺構を切っていることから本遺構が一番新しく、C17住居跡、D17-3住居跡の順に古くなる。規模は遺構西側が水道敷設工事による攪乱削平、南側が切り合い等のために一部不詳であるが、床面で4.30m×2.42mを測り、形態は楕円形状を呈している。埋土は4層に



図版 21 D16-3 住居跡

大別され、上位はやや堅く締まった黒褐色砂質シルトで、中位から下位は径10cm～20cm大の垂角礫と重門礫を多く混入する黒色シルト質土で構成されている。これらの礫は大部分が床上30cm前後の間に緻密に堆積され、人為的な埋め戻しの様相を示している。

壁は床面から130度前後の勾配で外傾し立ち上がり、壁高は重複しない北側で60cm、東側で50cm前後を測る。床面は堅く締まり、多少凹凸が見られる。また、重複する遺構床面の比高はC17住居跡が48cm程で、D17-3住居跡とは同一レベルである。柱穴は検出されない。

出土遺物（図版100・101、写真図版60・61）

土師器

杯形土器

（床面）丹塗の杯—154は外面に軽い段をもつ底部片である。丹塗前、外面は段上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリで調整されている（I B—a類）。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

（埋土）内黒の杯—149は体部に段をもち口縁部、底部が欠損している（I C類）。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。丹塗の杯—148は体部下半が欠損している。口縁部は内彎している。外面はヘラナデ、ヘラミガキ後丹塗、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

壺形土器

（埋土）152は肩部に沈線を巡らせている小型の壺である。口縁部、底部が欠損している。体部は外面がハケメ後ヘラミガキ、内面がヘラナデで調整されている。

甕形土器

（埋土）153は肩部に稜をもち、口縁部が外反している口縁部片である（I E—a類）。

須恵器 杯形土器

杯形土器

（床面）151は体部が内彎しながら立ち上り、口縁部が外傾している。底部は中央が欠損している。ロタロからの切り離しは回転系切りである。体部、底部外面の再調整はない。

甕形土器

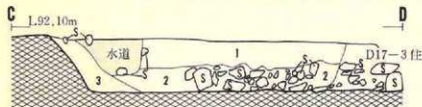
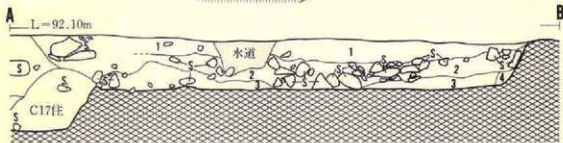
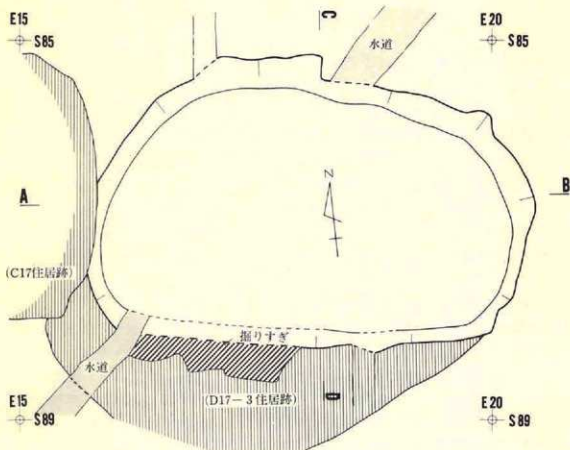
（床面）156は内外面に平行印目文をもつ体部片である。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

（埋土）150は内外面がロタロナデで調整されている。口縁部が欠損している。ロタロからの切り離しは回転系切りである。ヘラケズリなどによる体部外面の再調整はみられない。

陶器

（床面）157は天目茶碗の体部片である。瀬戸産で15世紀半ば頃のものと推定されている。体



1. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂質シルト 堅い
2. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 礫多く混入
3. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 粘土質でしまっている
4. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 褐色シルト混入



図版 22 D17-1 住居跡

部内面と体部上半の外面に釉がかけられている。

鉄製品

刀子(埋土)155は現存長17cm、最大幅2.2cmの刀子である。柄が欠損している。

環状鉄製品(埋土)158は環状を呈し、断面が円形または不整形円を呈している。

石器・石製品

盤状石製品(床面)159は円形のタイル状に加工されたものである。

磨石(床面)160は石斧形の自然礫を磨石または甲石として使用したものと推定される。

遺構の床面から奈良～中世まで遺物が出土しているのは、当遺構が他の遺構と重複関係にあることと壁が識別しにくく掘り過ぎていたためと思われる。

D17-3 住居跡(図版23、写真図版16)

遺構は、調査区中央部のやや南寄りにC17住居跡、D17-1・2・4住居跡の4棟と重複し位置している。各遺構との新旧関係は新しい順に①D17-2住居跡、②D17-1住居跡、③C17住居跡、本遺構、④D17-4住居跡となる。半分以上は他の遺構と重複し、西側は水道敷設工事による掘削平のために規模・形態の詳細は不明である。検出された北東・南西辺3.1m、北西・南東辺2.6mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトで構成され、下位は径6cm～30cm大の重円礫と重角礫を多量に含み、重複するD17-1住居跡の埋土と類似する。

壁は重複のため曖昧であり、残存する東側で36cmを測る。床面は多少凹凸があり、貼床は施されていない。D17-1住居跡の床面とは、ほぼ同一レベルを示す。柱穴とカマドは削平のため不明である。

出土遺物(図版103・104、写真図版62)

土師器

甕形土器

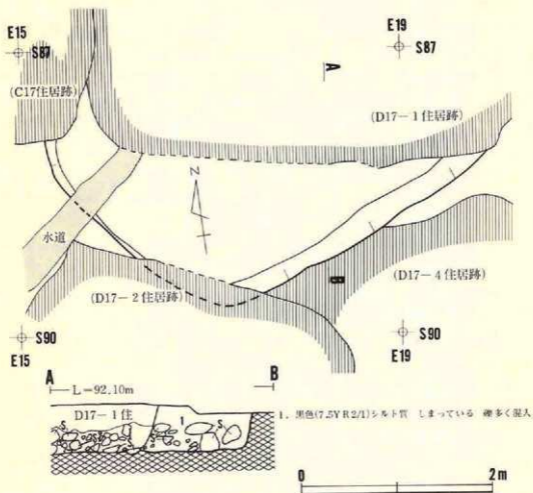
(埋土)174は口縁部、体部上半が欠損している。外面はヘラケズリ、ハケメ、内面はハケメで調整されている。

壺形土器

(床面)丹塗の壺-172は丹塗が施されている底部片である。丹塗前、外面は体部がヘラミガキ、下端がヘラケズリで調整されている。内面調整はヘラナデである。

(埋土)壺-173は上底の破片である。体部・底部外面はヘラケズリ後ヘラミガキで調整されている。内面は一部ヘラミガキされている。破片の内面は黒色を帯びていることから、内面全体を黒色化していたかもしれない。

原石



図版23 D17-3 住居跡

(床面) 175は先端部と側面の一部が剥離している黒曜石である。

砥石

(床面) 176は断面が六角形を呈し、6面に磨痕、擦痕、削痕などの使用痕がみられる。中央が磨り減って弓状に彎曲している面もある。

D17-4 住居跡（図版24、写真図版17）

遺構は、調査区中央部のやや南寄りにD17-2・3住居跡、E18-4墓坑等と重複して位置する。これらの新旧関係は、切り合い状況から新しい順に①E18-4墓坑、②D17-2住居跡、③D17-3住居跡、④本遺構となる。検出はD17-2住居跡の東壁側精査中において、黄褐色シルトの貼床の広がりによって確認されたものである。遺構の大部分は既に攪乱削平を受け、北壁の一部が残存するのみで詳細な規模・形態は不明である。検出された東西辺は3.20mを測る。規模は貼床の広がりから（3.70m×2.80m）の長方形状を呈すると推定される。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色土の単層で構成されている。

壁は北壁の一部が残存するものの曖昧な部分が多く、壁高は5cmを測る。床面はやや堅く締めまり貼床が施されている。柱穴は検出されない。

西側の貼床上には径50cm×42cm、層厚×2cm楕円形を呈す焼土があり、遺構に伴うカマド灰口部痕跡と考えられる。また、カマド本体部、煙道、煙出し部は削平され不明である。

遺物は貼床上から土師器が出土している。

出土遺物（図版104、写真図版62）

土師器

杯形土器

（床面）内黒の杯-178は体部内面に区切り外面に段をもち口縁部が外傾している。外面は段上部がヘラミガキ、下部が主にヘラミガキで調整されている（I A類）。底部は丸底風を呈している。179は内面に区切りをもち外面に稜をもち。口縁部は内傾し底部は平底風である。外面はヘラミガキされている（I B類）。2点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

小形土器

（貼床）177は底部が平底で口縁部が外傾している。外面は口縁部がコロナゲ、体部がヘラナゲで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。口径は8.3cmである。

壺形土器

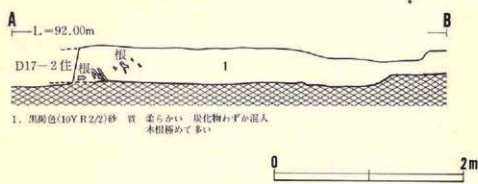
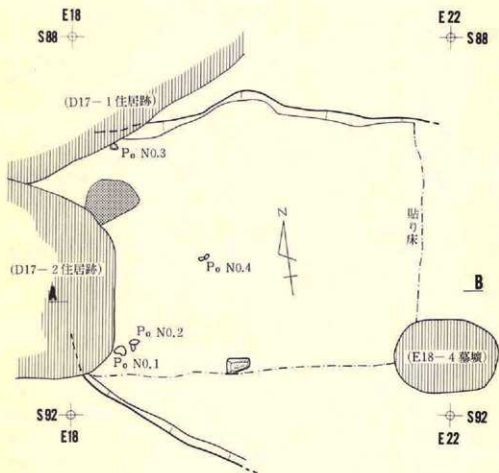
（埋土）黒色の壺-180は内外面ヘラミガキ後、黒色処理が施されている底部片である。外面にはヘラケズリ痕が一部みられる。丹塗の壺-183は外面ヘラミガキ後、丹塗が施されている肩部の破片である。内面の調整はヘラナゲである。

須恵器 杯形土器

（埋土）182は口縁部が外傾している破片である。内外面の調整はコロナゲである。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

（埋土）181はコトからの切り離しが回転糸切りである底部片である。ヘラケズリなどによる外面の再調整はみられない。



図版24 D17-4 住居跡

□22住居跡（図版25、写真図版18）

調査区南側の中央付近に位置する。この付近は家屋跡であり、基本層序Ⅰ層～Ⅳ層は削平又は攪乱を受けており、遺構の平面プランは確認され得なかったが、煙道下部の検出により住居跡であると判断したものである。

多くの土師器片がやや広い範囲から出土していることから推測すると、本住居跡は一辺6～7m規模であったかと思われる。床面と思われる面は、黒色土が混入する砂礫層の上面で、小石が露出し凸凹している。貼床は認められず、床面の広がりからも、住居跡の範囲を把握することができなかった。

柱穴、土坑は検出されていない。

カマドは北壁に設けられていたと思われ、煙道は北北西方向にのび、焼土が50cm×40cmの範囲に広がり、赤褐色を呈し堅くしまっている。厚さは7～8cmを測る。

出土遺物（図版105、写真図版62・63）

土師器

杯形土器

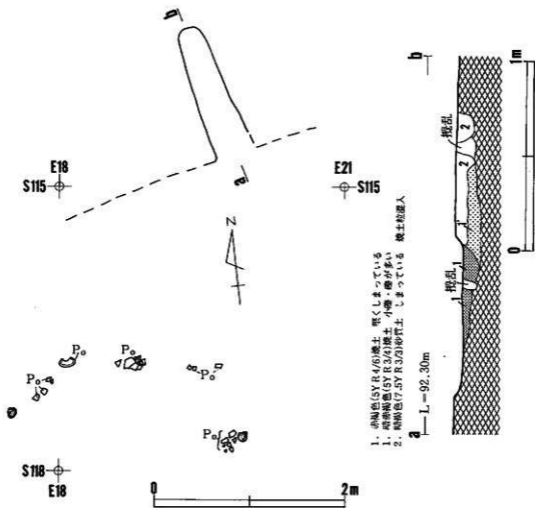
（床面）内黒の杯—185は体部外面に沈線を巡せ口縁部が外傾している。底部は欠損している。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている（ⅠC—c₂類）。188は底部片、191、194は体部破片である。188の底部外面は粗いヘラケズリ後、ヘラミガキされているため、部分的にヘラケズリ痕が残っている。191、194の体部外面はヘラミガキで調整されている。3点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。黒色の杯—186は口縁部が欠損している。体部外面に沈線を巡らせている。底部は平底である。内外面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている（ⅠB類）。

変形土器

（床面）丹塗の壺—195は口縁部が強く外反し体部が球形状に脹む。体部下半は欠損している。肩部に段をもつ。口縁部の内外面はヨコナデ後ヘラミガキ調整され、最後に全面に丹塗が施されている。丹塗前、体部外面はナデ後ヘラミガキで調整されている。肩部の内面に1本沈線を巡らせている。体部内面調整はヘラナデである（ⅠA—a）。

甕形土器

（床面）184は口縁部に段をもち口縁部が強く外反している。底部は欠損している。口唇部は平坦である。肩部にも段をもつ。体部内外面はハケメで調整されている（ⅠB—a₁類）。193は肩部に段をもち、口縁部上半、体部下半が欠損している。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。189、190は底部片である。189は外面がヘラミガキで調整され、底部内面が丸底風を呈している。



図版 25 D22住居跡

(埋土) 192は口縁部が外傾している破片である。

須恵器 短頸壺

(床面) 187は口縁部が短く直上している。底部が欠損している。内外面の調整はロクロナデである。

E07住居跡（図版26～28、写真図版18～20）

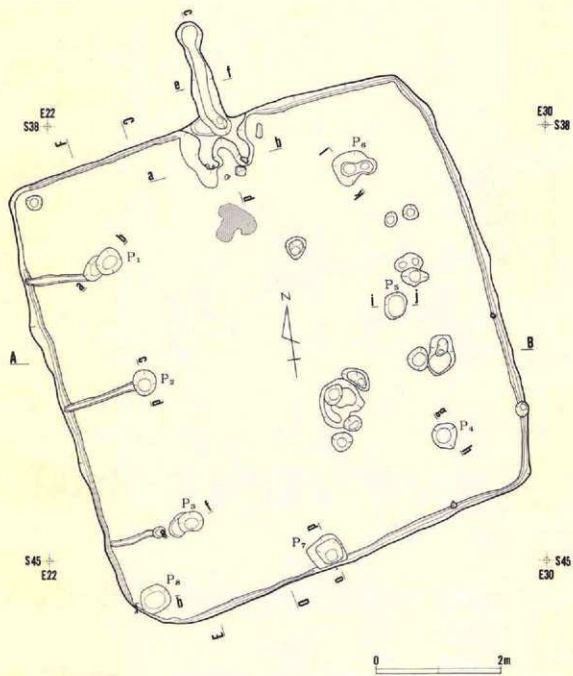
調査区北側の東寄りに位置し、西2mにD07（住居跡）がある。基本層序Ⅲ層上面で炭化材、現地性焼土が検出され、その広がりの方から住居跡の存在が確認された。平面形が不明瞭のため、東西、南北に土層観察のためのベルトを残し、全体を掘り下げⅢ層下位で平面形を把握することができた。地面が乾いてくると埋土の範囲がみえてきて、住居跡の形状がよくわかった。焼失住居跡である。他の遺構との重複はない。

平面形はほぼ方形を呈し、北東隅、南西隅が隅丸で南壁がやや賑む。規模は床面で東西7m、南北7.3mである。埋土は大きく3層に分けられる。上位が黒褐色～黒色の砂質シルト、中位がⅢ層起源とする黒色の砂質シルト、下位が炭化材、現地性焼土を多く含み小石が混じる黒色～黒褐色の砂質シルトで主に構成されている。埋土はそれぞれレンズ状に堆積しており、焼失した後、自然堆積したと推定される。炭化材は南半に多く残存している。炭化材は西壁側が東西、南壁側が南北、南東隅側が北西～南東方向に向けて堆積している。炭化材は中央で床面直上、壁に近づくにつれて床面から離れレンズ状の堆積の仕方をしている。

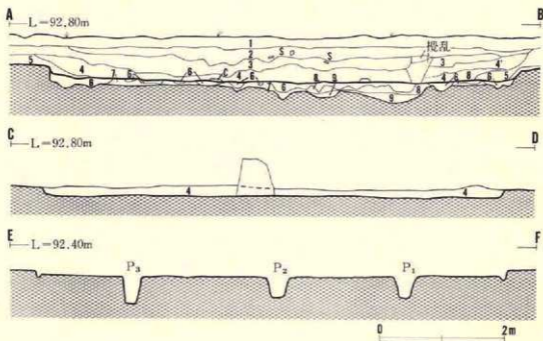
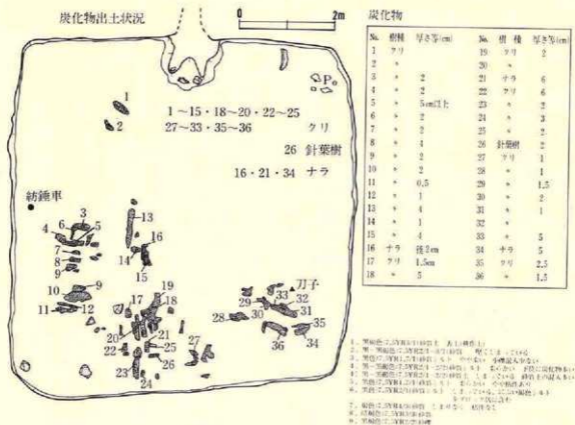
住居跡はⅣ層下部～Ⅴ層を掘り込んでつくられている。壁高は北壁14cm、東壁22cm、西壁19cm、北壁14cmである。床面はカマドのある北半がガリガリに硬く踏み固められている。南半の大部分は凹凸があり、やわらかく直接踏み固められていない。床はカマド周辺を除いて掘り方をもつ。掘り方の底面は凹凸が激しい。深さは中央部南東側が30cm、そのほかは10～20cmである。掘り方の埋土は主ににぶい褐色の砂質シルトをブロック状に含む黒褐色土や暗褐色～黒褐色土で占められている。

柱穴は南北に3本、3本の6本で、一辺4.5mの方形の配置を示している。柱穴の掘り方の規模はP₁（外径49cm、底径27cm、深さ30cm）、P₂（外径22cm、底径13cm、深さ30cm）、P₃（外径50cm、底径22cm、深さ41cm）、P₄（外径20cm、底径17cm、深さ36cm）、P₅（外径24cm、底径16cm、深さ20cm）、P₆（外径34cm、底径10cm、深さ25cm）である。南壁中央部西寄りに壁に接する形でP₇（外径43cm、底径23cm、深さ29cm）、また南西隅にP₈（外径41cm、底径34cm、深さ11cm）が検出されている。P₈の埋土は焼土粒、骨片を多く含み、下部から丹塗の高杯の脚部が発見されている。骨片は北東隅の床面からも壁の破片とともに出土している。P₇・P₈も住居跡に伴うものと思われる。P₇は支柱穴の掘り方であると推定される。西側の3本の柱穴から壁までのびる幅10～16cm、深さ3～5cmの溝が検出されている。間仕切りなどの内部施設に関連した溝と推定される。周溝はカマド、北西隅、南東隅の一部を除いた全体に巡らせている。幅は10～15cm、深さは床面から3～10cmである。

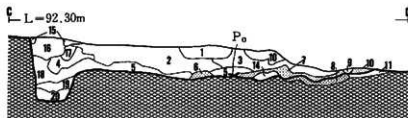
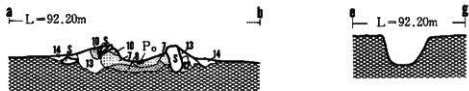
カマドは北壁中央部に設けられている。天井部、袖の上部は破壊されていて保存状態はよくない。袖下部の保存のいい右袖は長さ41cm、厚さ18cmの扁平な礎を斜位に埋めて芯にし、にぶ



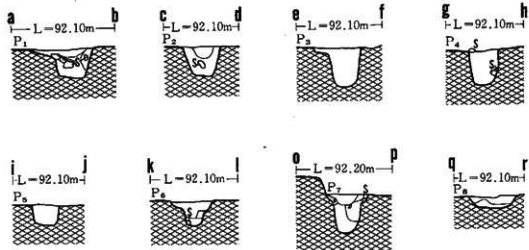
图版26 E07住居跡(1)



図版27 E07住居跡(2)



1. 黒褐色(7.5YR3/1)砂質シルト しまりなし 褐色粘土質シルト混入
2. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト しまりなし 焼土粒・炭化物を幾分含む
3. 黒色(10YR1.7/1)粘土質 しまりなし 炭化物少量含む
4. 黒褐色(5YR3/1)砂質 しまりなし 焼土粒・炭化物を多く含む
5. 暗赤褐色(5YR3/3)砂質シルト しまりなし 焼土粒多く含む
6. 極暗赤褐色(5YR2/3)シルト質 しまりなし 強く焼成を受けている
7. にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質シルト しまっている 焼成を受けている
8. 赤褐色(5YR4/8)砂質 焼成を受け赤変
9. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト ややしまる 炭化物・焼土粒含む
10. 暗赤褐色(5YR2/2)砂質シルト ややしまる 全体に焼成を受けている
11. 褐色(10YR4/3)粘土質シルト しまっている
12. 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト ややしまっている
13. にぶい褐色(10YR5/3)粘土質シルト ややしまっている 焼成を受けている
14. 暗赤褐色(5YR3/2)粘土質シルト ややしまっている
15. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト 焼土粒全体に含む
16. にぶい赤褐色(5YR4/3)粘土質シルト しまっている、強く焼成を受けている
17. 灰褐色(5YR4/2)粘土質シルト しまりなし 強く焼成を受けている
18. 黒褐色(10YR2/2)砂質 しまりなし 焼土粒含む
19. 褐色(10YR4/4)砂質 しまりなし 焼土粒含む
20. 黒褐色(10YR3/1)砂質 しまりなし 焼土粒わずか含む



図版 28 E07住居跡(3)

い褐色や暗褐色の粘土質シルトを被覆させてつくられている。カマド本体前の運円礫や焼成を受けた粘土質シルトはカマドの構成礫や構成土の一部であったと推定される。燃焼部は浅皿状を呈している。焼土の厚さは4～6cmである。煙道部は壁際で急に立ち上った後、ほぼ平坦で中間から上昇し煙出部と接続している。煙出口は煙道の底面より深く、外径31cm、底径25cm、深さ51cmの規模の柱穴状のピットを呈している。煙出口の埋土上部に褐灰色の粘土質シルトや焼成を受けた赤褐色の粘土質シルトがみられるが、これは煙出口の上部（検出面より上）施設を構成していた崩壊土と思われる。カマドの本体の幅は106cm、全長は260cmである。

出土遺物（図版106～109、写真図版63～65）

土師器

杯形土器

（床面）内黒の杯—196は口縁部が内彎している口縁部片である。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。丹塗の杯—210は外面に軽い段をもつ体部破片である。丹塗前、外面は段上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリで調整されている（ⅠB—a類）。

（埋土）丹塗の杯—197は外面にヘラミガキ後、丹塗が施されている口縁部片である。208、211は体部破片、209は口縁部破片である。211は外面に軽い段をもち、段上部がヘラミガキ、段下部がヘラケズリで丹塗前に調整されている（ⅠB—a類）。208、209は丹塗前に外面をヘラミガキで調整されている。3点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

高杯形土器

（P₁埋土）丹塗の高杯—198は杯部が欠損し、脚部が円錐台状を呈している。脚部は2つの段をもつ。残存する杯底部は内面が丸底を呈しヘラミガキ後、黒色処理が施されている。脚部の外面はナデ後、全面に丹塗が施されている（ⅠA—a類）。内面調整はナデである。

壺形土器

（埋土）壺—212は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデで調整されている体部破片である。丹塗の壺—213は肩部に段をもち、外面に丹塗が施されている肩部片である。

甕形土器

（床面・カマド）肩部に段をもつもの（ⅠD類）2点（201、202）、肩部に段・沈線・轆をもたないもの（ⅠF類）1点（201）などがある。201は口縁部が外傾し体部がやや脹らむものである。体部外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている（ⅠD—d類）。口唇部は平坦である。底部は欠損している。202は口縁部が外反し、体部下半が欠損している。体部は外面がハケメ、内面がハケメ、ヘラナデで調整されている（ⅠD—a類）。201は口縁部が外反し口唇部が平坦である。体部の大半が欠損している。体部は外面がハケメ、内面がハケメで調整されている。204は体部下半のものである。外面はハケメ、内面はハケメ、ヘラナデで調整されて

いる。207は外面がハケメ、内面がヘラナデで調整されている体部破片である。

(埋土) 肩部に段をもつもの(ⅠD類)2点(203、205)、肩部に稜をもつもの(ⅠE類)1点(200)などが出土している。200は口縁部が外反し、体部内外面がハケメで調整されている(ⅠE-a類)。底部は欠損している。203は口縁部が外反している(ⅠD-a類)。体部は大半が欠損している。体部は外面がハケメ、内面がヘラナデで調整されている。205は口縁部が外反し口唇部が平坦な口縁部破片である。体部は外面がハケメ、内面がヘラナデで調整されている。206は外面がハケメ、内面がヘラナデで調整されている底部片である。

須恵器 甕形土器

(埋土) 214は内外面に平行印目文をもつ体部片である。器壁は薄い。

土製品 紡錘車

(床面) 215は円錐台を呈し、中央に孔を穿っている。側面に一部ヘラミガキ痕がある。

鉄製品 刀子

(床面) 216は現存長10.9cm、最大幅1.5cmのものである。柄の部分に木質が付着している。

石器 台石

(床面) 217~219は扁平な自然礫を利用した台石で表面に磨痕、叩打痕などの使用痕をもつ。217、219は一部欠損している。218は形状が楕円を呈している。

石製品

(床面) 220は扁平な楕円形を呈する礫である。片面に磨痕がみられ、また、アスファルト状の黒色物質が付着している。一部破損している。221は自然礫を利用した楕円状の小型の石製品である。側縁に多くの磨痕がみられる。頂部の一つは水平に削られている。222は球状の石製品である。丹が一部に付着していたことから、全体に丹塗が施されていたかもしれない。表面に2mm大の孔がいくつもみられる。

E14住居跡(図版29、写真図版21)

調査区中央の東寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。F15-2住居跡と重複している。重複する遺構との新旧関係は、F15-2住居跡が新しく、本遺構はより古い。

平面形はほぼ正方形を呈しており、規模は床面中央部で、南北3.5m、東西3.5mを測る。本遺構がF15-2住居跡に切られているため、埋土は壁周辺部に僅か残るのみであり、Ⅲ層起源の黒色シルト質で、小礫が幾分含まれ全体にしまりなく柔らかい。

壁高は各壁とも低く5cm~8cmを測る程度である。床は、砂礫が混入するN層土中にあり、礫が露呈したり、木根の攪乱があり凹凸を呈している。貼床は認められない。

ピットは南東隅に1基ある。平面形は隅丸方形形状を呈し、開口部は60cm×50cm、底部は45cm

×35cmを測る。断面は浅皿状で、底面中央部が窪み深さは約13cmを測る。

柱穴・周溝は検出されていない。

南壁中央部に、カマドの燃焼部の底部と思われる焼土が径30cm位の範囲にみられる。焼土は明赤褐色を呈し堅くしまっている。

遺物 出土していない。

E16—1 住居跡（図版30・31、写真図版22）

調査区中央の東寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。遺構北西部がE16—2住居跡と重複し切られている。重複する遺構との新旧関係は、E16—2住居跡が新しく、本住居跡がより古い。

E16—2住居跡に北西部が切られているものの、平面形は、東西方向に長辺をもつ隅丸長方形を呈している。床面中央部での規模は、東西3.8m、南北3.9mを測る。埋土は単層で、黒褐色を呈するシルト質土で構成され、炭化物が幾分混入している。

壁高は、北壁東側で15cm、他は各壁とも約10cm前後と低い。床面は、褐色シルトや暗褐色砂質シルトが多く混入する黒色～黒褐色土で構成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。床面下のはほぼ全域に掘り方をもち、床面中央から西側では15～20cmと深くV層中の褐色シルト面まで及び、掘り方底部は凹凸を呈している。

柱穴状ピットが北東寄りて2基検出されている。P₁（口径13cm×12cm、深さ10cm）、P₂（口径30cm×24cm、深さ12cm）であるが、他に検出されず、柱穴とは考え難い。

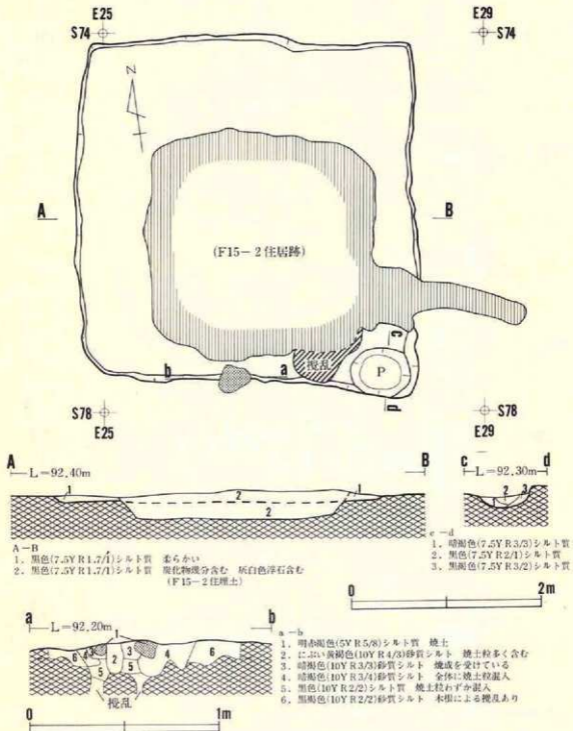
柱穴、土坑、周溝は検出されていない。

カマドが2基検出されている。北壁中央部に1基（1号カマド）、南壁中央西寄りに1基（2号カマド）ある。いずれも上部が削平され、殆ど原形を止めておらずわずかに袖下部、燃焼部下部が残存するのみである。

1号カマドは、袖部の芯材又は天井部を構成していたと思われる礎が、燃焼部の周辺に多く散在しており、原形はほとんど止めていない。袖部を構築していたシルトが、左右に僅か残存する。シルトは火熱により赤変し堅くしまっている。燃焼部には、70cm×30cmの範囲に焼土が広がっており、焼土の色調はにぶい赤褐色を呈し、厚さ5cmに及ぶ。煙道は、燃焼部から緩く立ち上がり壁外にのびるものと思われるが、削平され不明である。この1号カマドの残存値は袖幅約90cm、燃焼部の長さ90cmである。

2号カマドは、さらに残存状況は悪く、芯材と思われる礎と、80cm×40cmの範囲に広がる焼土があるのみである。焼土は、暗赤褐色を呈し厚さは約1cmを測る。

この2基のカマドは、残存状況及び焼土の形成などから推測すると、本遺構の初期の段階で

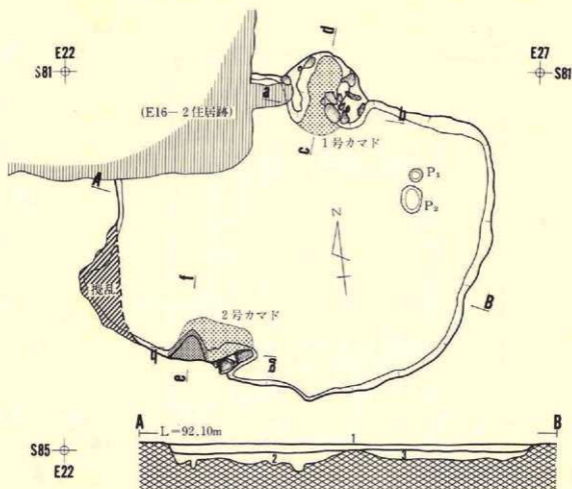


A-B
 1. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 柔らかい
 2. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 炭化物塊を含む 灰白色浮石含む (F15-2 住居跡)

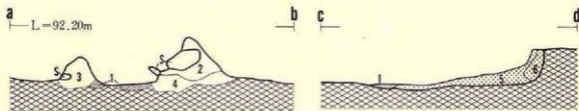
c-d
 1. 暗褐色(7.5Y R 3/3)シルト質
 2. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質
 3. 黒褐色(7.5Y R 3/2)シルト質

a-b
 1. 明赤褐色(5Y R 5/8)シルト質 焼土
 2. 濃い黄褐色(10Y R 4/3)砂質シルト 焼土粒多く含む
 3. 暗褐色(10Y R 3/3)砂質シルト 焼土を受けている
 4. 暗褐色(10Y R 3/4)砂質シルト 全体に焼土粒混入
 5. 黒色(10Y R 2/2)シルト質 焼土粒わずかに混入
 6. 黒褐色(10Y R 2/2)砂質シルト 本根による擾乱あり

図版29 E14住居跡



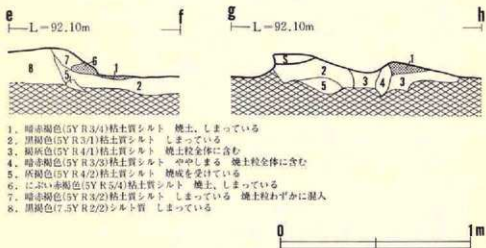
1. 黒褐色(10Y R 2/2)シルト質 炭化物混入
2. 黒色(10Y R 2/1)シルト質 しまっている 褐色シルトのプロック混入
3. 黒褐色(10Y R 3/2)砂質シルト しまっている 暗褐色砂質シルトが多く混入



1. にぶい赤褐色(5Y R 4/4)シルト質 焼土、ややしまっている
2. 暗赤褐色(5Y R 3/2)シルト 全体に焼成を受けている
3. 暗赤褐色(5Y R 3/4)砂質シルト 全体に焼成を受けている
4. 黒褐色(5Y R 3/1)シルト質 焼土粒、炭化物を含む
5. 暗赤褐色(5Y R 3/4)シルト質 焼成を受け赤変
6. にぶい赤褐色(5Y R 5/4)粘土質シルト 焼成を受けている



図版30 E16-1 住居跡(1)



図版31 E16-1住居跡(2)

南壁に2号カマドが構築され短期間使用され、その後北壁中央に1号カマドが造り替えられ、やや長期間(2号カマド使用期間に比べ)使用されたものと考えられる。

出土遺物(図版110~112、写真図版65・66)

土師器

杯形土器

(埋土)内黒の杯—228は体部外面に段をもち口縁部が内傾している。底部は欠損している。外面は段上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリ、ヘラミガキで調整されている(ⅠC-c類)。坩形に近い器形を呈していると思われる。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

壺形土器

(床面)丹塗の壺—227は口縁部が外傾し、肩部に段をもち、体部中央に最大径をもち底部にかけてすぼまる器形を呈している。口縁部内外面には4本の帯状の直線と斑点が1組の単位で丹塗が施されている。口縁部は4単位で構成されている。体部外面は全面に丹塗が施されている。丹塗前、体部外面はハケメ、ヘラミガキで調整されている。内面調整はヘラナデである(ⅠB-b類)。

(埋土)丹塗の壺—229は口縁部に縦位に帯状の直線を丹塗が施している。口縁部上半、体部下半が欠損している。肩部に段をもち、体部外面はヘラミガキ後、丹塗が施されている。体

部内面はヘラナデ、一部ヘラケズリで調整されている（ⅠB類）。230は外面がヘラミガキ後、丹塗が施されている。236は外面がハケメ後、丹塗が施されている底部破片である。

壘形土器

（床面・カマド）231は口縁部に沈線を巡せ口縁部が外反している（ⅠB-b類）。肩部にも沈線をもつ。体部下半は欠損している。口唇部は平坦で中央に沈線を巡せている。体部内外面は主にハケメで調整されている。233は内外面がハケメで調整されている。体部上半は欠損している。底部外面には木葉の圧痕がみられる。

（埋土）232、234は肩部に段をもち、口縁部が外傾している（ⅠD類）。232は体部下半、234は底部が欠損している。232は体部内外面がハケメで調整されている（ⅠD-b類）。234は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデで調整されている（ⅠD-c類）。235は内外面がヘラケズリまたは粗いナデと思われる調整で行なわれている底部片である。

須恵器 坏形土器

（埋土）237は口縁部が内傾し、外面がロクロナデで調整されている口縁部片である。

砥石

（埋土）238は断面が長方形を呈し両端と底面の一部が欠損している。表面には磨痕、削痕などの使用痕がみられる。

石器 磨石

（床面）239は不整楕円形を呈している。側縁には磨痕、叩打痕がみられる。

E16-2 住居跡（図版32・33、写真図版23）

調査区の中央やや東寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。遺構の南側がE16-1住居跡と、北東部がE15土坑と重複している。重複する遺構との新旧関係は、古い順に、①E16-1住居跡、②本住居跡、③E15土坑である。遺構の西側は水道管理設工事によって攪乱されている。

床面には、焼土、炭化物が大きく散在していることから、本遺構は焼失住居跡と考えられる。

重複する遺構との切りあい及び攪乱で、遺構全体の規模、形態が明確にされないが、検出された状況から推測すると、一辺2.8m規模の方形を呈するものと考えられる。埋土の主体は、黒色シルトでやや堅くしまっており、下位から床面にかけて焼土、炭化物が多く含まれている。

北壁際には、暗褐色シルトの堆積がみられる。この埋土の堆積状況は、主として自然堆積によるものと思われる。

壁はⅣ層中に構築され、壁高は、北壁中央で12cm、東壁中央で15cm、南壁西側で10cmを測る。

床面下のほぼ全域に掘り方をもつが、特に東壁際及び南壁寄りでは20cm～30cmと深く、砂礫層中の褐色シルト面に及び、掘り方底部は凹凸を呈している。床面は、礫、褐色シルトを多く

含む黒褐色シルトで構築され、葎が露呈し小さな凹凸があるものの、全体としてはほぼ平坦でしまっている。

柱穴、土坑、周溝は検出されていない。

カマドは東壁中央やや南寄りに設けられている。上半部は削平されほとんど原形を止めておらず、袖の芯材と思われる重角葎が、カマド周辺に散在している。袖部を構築していた粘土質シルトが、左右に残存し、火熱によって暗赤褐色焼土と化し、堅くしまっている。燃焼部には焼土が75cm×40cmの範囲に広がり、にぶい赤褐色を呈し堅くしまっている。厚さは最大5cmに及ぶ。煙道は、燃焼部から壁の外方にのび、その後立ち上がりを呈していたと思われるが、削平を受け全体の形態については不明である。

残存するカマドの全長は約125cm、袖幅は約120cmである。

出土遺物 (図版112・113、写真図版67)

土師器

杯形土器

(床面・カマド)内黒の杯-240は内外面に段・沈線・稜などの区切りをもたず、体部が内彎し口縁部が外傾している。底部は平底風を呈している。体部外面は主にヘラミガキで調整されているが、体部下端に一部ヘラケズリ痕が残っている(IE-b類)。241はロクロ使用の口縁部片である。口縁部は内彎している。2点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。杯-244は底部に回転糸切り痕をもつ破片である。体部下端にヘラ書きの刻線が一部残っている。「井」に類似した記号を刻んでいたと思われる。内面はヘラミガキ調整である。内面の黒色は二次的火熱を受けて消失したと思われる。

甕形土器

(カマド)246は肩部に段をもち口縁部が短く外反し、体部上位がやや脹らむ器形を呈している。体部外面は上半がやや粗いナデ状の調整、下半がヘラケズリで行なわれている。内面調整はヘラナデである(ID-e類)。底部外面の外周は粗いヘラケズリで調整されているため、凹凸が顕著である。

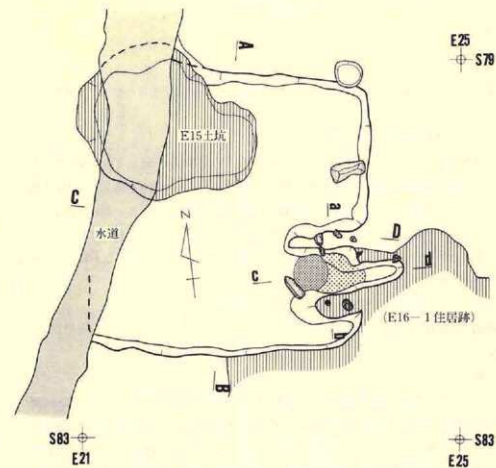
(埋土)245は肩部に段・沈線をもたず口縁部が極端に短く外反している。体部上位がやや脹らむ器形を呈している。底部中央が欠損している。体部外面は主に粗いナデ状の調整が施されている。体部外面の下端はヘラケズリで調整されている。体部内面の調整はハケメである。

須恵器 甕形土器

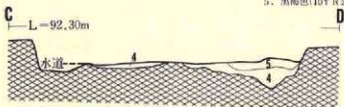
(埋土)247~249は外面に平行印目文をもつ体部片である。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

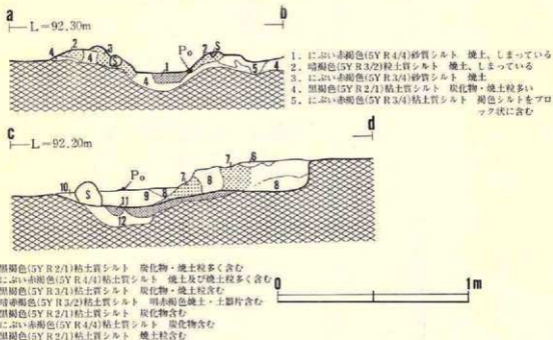
(埋土)242、243は内外面ロクロナデで調整されている。ともに底部が欠損している。242は



1. 黒色(10Y R 2/1)シルト質 焼土粒、炭化物含む
2. にじみ赤褐色(5Y R 4/3)シルト質 焼土、炭化物を多く含む
3. 暗褐色(10Y R 3/3)シルト質 焼土粒を含む
4. 黒褐色(10Y R 2/2)シルト質 しまっている 礫・褐色シルト多く含む
5. 黒褐色(10Y R 2/1)シルト質 ややしまっている 焼土を含む



図版32 E16-2住居跡(1)



図版33 E16-2住居跡(2)

口縁部が内傾し、243は口縁端部が外傾している。

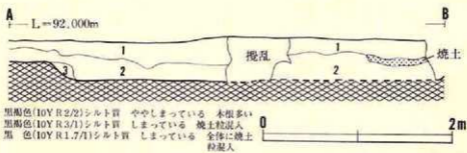
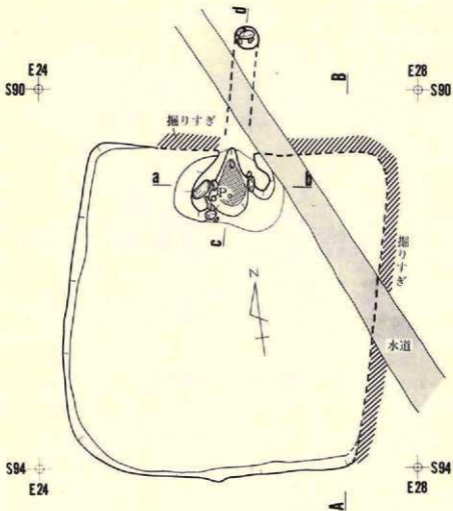
砥石

(埋土) 250は半円柱状を呈し、片側が欠損している。平坦な面には磨痕、擦痕などの使用痕がみられる。

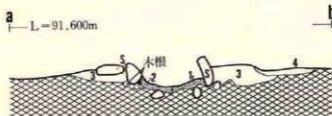
E18住居跡 (図版34・35、写真図版24)

調査区中央の南東に位置している。基本層序Ⅲ層を掘り下げた段階で土器や焼土(異地性の焼土)が多く検出され、遺構があるのではないかと考えて、埋土観察用のベルトを残して精査し住居跡と確認されたものである。本遺構は最近まで使用されていた水道の溝によって、北壁中央から東壁中央にかけて攪乱を受けている。また、スギの木根によっても攪乱を受けている。他の遺構との重複関係はない。

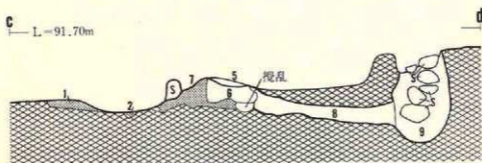
本遺構は埋没沢の上につくられているためⅢ層が厚くⅣ層まで掘り込まずにつくられている。そのため、埋土と壁との識別が難しく、かつ木根などによる攪乱があるため掘り過ぎが多い。東壁は最後まで壁を把握できなかった。北側にカマドが検出され、西壁、南壁(一部)が



図版34 E18住居跡(1)



1. 暗赤褐色(5Y R 3/2)シルト質 焼土 ややしまっている
2. 暗赤褐色(5Y R 4/3)シルト質 焼土 柔らかい
3. 暗赤褐色(5Y R 2/3)
4. 暗赤褐色(5Y R 3/3)シルト質 堅くしまっている 褐色シルトを含む



5. におい褐色(7.5Y R 5/4)シルト質 しまっている 焼成を受けている
6. 暗赤褐
7. 暗赤褐色(5Y R 3/2)シルト質 柔らかい 焼土、炭化物含む
8. におい赤褐色(5Y R 4/3)シルト質 焼土
9. 極暗赤褐色(10Y R 2/3)シルト質 焼土粒全体に混入



図版35 E18住居跡(2)

確認された段階ではじめて、全体の平面形を推定することができた。カマドの位置や把握できた壁の輪郭線から、住居跡は平面形が隅丸方形を呈し、規模が東西3.1m、南北3.4m前後であったと推定される。埋土は焼土粒、焼土塊(南壁側の埋土上部)、黄褐色パミスを含む黒褐色のシルトで占められている。

壁はほぼ真直に立ち上がる。壁高は北壁17cm、西壁20cm、南壁23cmである。床面はカマド周辺が堅くしまり、全体に凹凸がある。貼床は施されていない。柱穴、周溝は検出されていない。

カマドは北壁の中央部に設けられていると推定される。天井部、袖上部は破壊されている。

袖部の横断面の観察から、右袖は長さ31cm、厚さ11cmの扁平な碓を斜位に、左袖は長さ23cm、厚さ15cmの重円碓を埋置して芯にし、にぶい褐色シルトで被覆してつくられている。左袖周辺には長さ18～46cmの重円碓が4個検出されているが、これらはカマドの構成碓であったと推定される。燃焼部は浅皿状を呈している。焼土の厚さは6cmである。カマド本体の壁寄りに長さ10cm、厚さ4cmの川原石が支脚として使用されている。煙道部は一部水道の溝によって切られている。煙道部は壁際で立ち上がった後、煙出口部まで下降している。煙出口は外径25cm、深さ44cm、底部が丸底の柱穴状ビットを呈し、煙道底部より深い。煙出口の埋土には焼成を受け変化した重円碓（長さ6～15cm）が多く含まれてるが、これは煙出口の上部施設を形成していた碓であると考えられる。煙道は掘抜き式（トンネル式）のものである。カマド本体の幅は115cm、全長は207cmである。

出土遺物（図版114～116、写真図版68・69）

土師器

杯形土器

（床面・カマド）内黒の杯—251は外面に稜をもち口縁部が外傾している。底部は中央が欠損しているが、丸底を呈していたと思われる。外面はヘラミガキで調整されている（ⅠD—b₂類）。252は、内面に区切りもち、外面に段をもち口縁部が内傾している。底部は中央が欠損しているが丸底風を呈していたと推定される。外面は主にヘラミガキで調整されている（ⅠA類）。254は外面に段・沈線・稜をもち、口縁部が内傾し底部が丸底風を呈している。外面は丁寧なヘラミガキで調整されている（ⅠE—c類）。257は外面下端をナデ、ヘラケズリで調整されている底部片である。底部は平底風を呈している。4点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。丹塗の杯—272は外面に稜をもち、外面がヘラミガキ後丹塗、内面がヘラミガキ後黒色処理が施されている底部片である（ⅠC類）。

（埋土）内黒の杯—255は外面に稜をもち、稜上半がヘラミガキ、稜下半がヘラミガキ、ヘラケズリで調整されている（ⅠD—b₁類）。口縁部上半、底部中央が欠損している。底部は丸底風を呈していたと推定される。内面は縦方向のヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。276は体部下端がヘラケズリ調整され口縁部が外傾している破片である。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。271は外面に段をもち内外面がヘラミガキで調整されている口縁部片である。口縁部はやや内傾している。内面は黒色処理が施されている。丹塗の杯—253・256は内面に区切り、外面に段をもつ。253は口縁部が外傾し底部中央が欠損している。段上部はヘラミガキ、段下部はヘラケズリで調整されている（ⅠA—b類）。底部は平底である。256は底部が欠損している。段上部はヘラミガキ、下部は磨減しているがハケメで調整されている（ⅠA—a類）。口縁部は内傾している。273は口縁部破片、275、277は体部破片である。273と277

はともに体部に稜をもつ。273は口縁部が内傾し、稜上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリで調整されている。275、277の外側は主にヘラミガキで調整されている。5点とも外面は丹塗、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

壺形土器

（床面）丹塗の壺—264と278は外面がヘラナデ後、丹塗されている底部片と体部片である。

（埋土）丹塗の壺—262は口縁部に丹で縦位に帯状の直線が描かれ、体部外面全体に丹塗が施されている（I B類）。肩部に段をもつ。口縁部上半、体部下半が欠損している。丹塗前、体部外面はヘラミガキで調整されている。内面調整はヘラナデである。268と274は外面がヘラミガキ後、丹塗が施されている体部片である。内面調整は268がヘラナデ、274がハケメである。黒色の壺—263は口縁部が短く外反し体部が球形を呈している小型の壺である。体部下半は欠損している。内外面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

甕形土器

（カマド）259は外面がハケメ後ヘラミガキ、内面がハケメで調整されている。体部上半は欠損している。底部は外方に開く円錐台形を呈している。底部内面は丸底風である。底部外面には木栗の圧痕がみられる。260、261は内外面がヘラナデで調整されている底部片である。

（埋土）肩部に段をもつもの（I D類）1点（265）、肩部に稜をもつもの（I E類）3類（267、269、270）などがある。265は口縁部が外傾している破片である（I D-c類）。267、270は口縁部が外反している破片である。269は部体上半の破片である。外面はヘラナデ後ハケメ、内面はヘラナデで調整されている。270は外面が磨滅しているが一部ヘラミガキ、内部がヘラナデで調整されている。266は外面ハケメ、内面ナデで主に調整されている底部片である。

鉢形土器

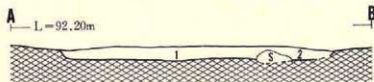
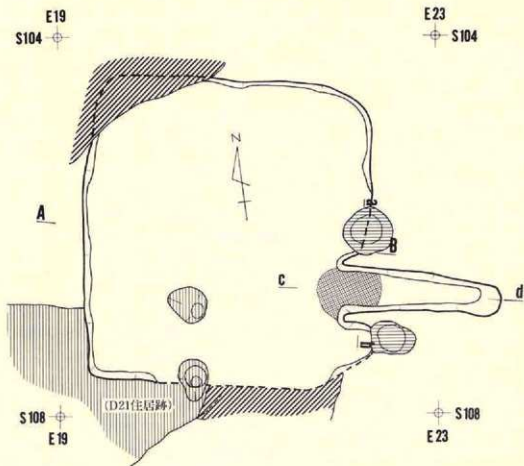
（床面）258は肩部に稜をもち口縁部が外反している。体部下半が欠損している。体部外面は一部ヘラケズリがみられるが主にヘラナデで調整されている（I B-a類）。内面調整はヘラナデである。

土製品

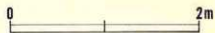
（カマド）279は土製の勾玉である。上部に孔を1つもつ。大部分が剥がれているが丹塗が施されていたと思われる。

E21住居跡（図版36・37、写真図版25）

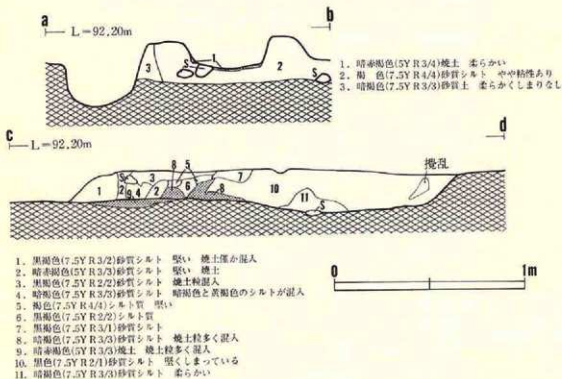
調査区南側の北東寄りに位置し、N層下位で検出されている。D21住居跡、D20掘立柱建物跡と重複している。重複する遺構との新旧関係は、古い順に、①本住居跡、②D21住居跡、③D20建物跡である。



1. 暗褐色(7.5Y R 3/2)シルト 炭化物成分含む
2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質土 黒色土に黄褐色シルト混入



図版 36 E21住居跡(1)



図版37 E21住居跡(2)

遺構の北西隅及び南壁の中央から東側が攪乱されているが、平面形はほぼ正方形を呈し、床面規模は、南北3.0m、東西2.1mを測る。埋土は、黒褐色～暗褐色を呈する砂質土及びシルト質土で構成され、強くしまっている。カマド周辺部には径5～15cm程の円礫が多く堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

壁高は、北壁中央で4cm、西壁中央で5cm、東壁北側で7cmを測る。床面はほぼ平坦である。北半は砂礫層の上面に暗褐色シルトで貼床され強くしまっている。南半部は、Ⅳ層下位相当の黒色シルト質土で、攪乱もあり特にしまりは認められない。

柱穴、土坑、周溝は検出されていない。

カマドが東壁中央やや南寄り に設けられている。上半部が削平され原形を殆どとどめていない。両袖を構築していた褐色シルトが残存し、燃焼部側がわずかに変色している。燃焼部には約70cm×40cmの範囲に焼土及び焼土粒が広がり、色調は暗赤褐色を呈し柔らかく、中央部での厚

さは約3cmに及ぶ。煙道は、壁を挟んで燃焼部からはほぼ平相に壁の外方1.3mまでのびる。

このカマドの全長は約230cmで、残存する袖幅は約80cmである。

出土遺物（図版117、写真図版69）

土師器

壺形土器

（床面）280、281は口縁部が外反し口縁端部が直上している。口縁調整がなされていないと思われるが磨減が激しくて断定できない。280は底部が欠損している。肩部に段をもつ。体部は球形を呈している。体部外面下端にハケメ後ヘラミガキした痕跡がみえる。内面調整はハケメ、ヘラナデである。281は肩部に段をもち、外面がハケメ、内面がハケメ、ヘラナデで調整されている。体部下半が欠損している（IC-b類?）。

壺形土器

（埋土）282は口縁部、底部が欠損している。外面はナデ、ハケメ、内面はハケメで調整されている。

石器 使用痕のある剥片

（床面）283の縁辺の一部に使用痕がみられるものである。

F09-1住居跡（図版38、写真図版26）

調査区北側の南東端に位置し、遺構の大半は調査区域外にある。Ⅳ層上位～Ⅴ層上面で検出されている。F09-2住居跡の上位に構築されている。

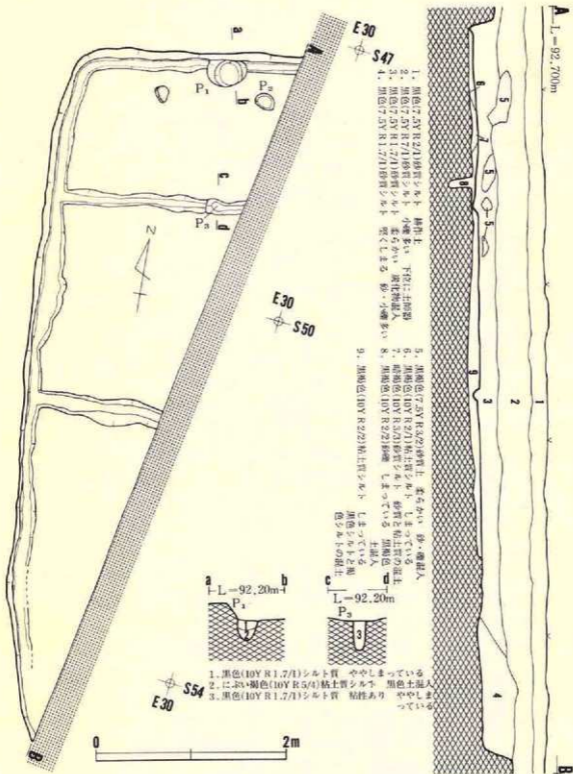
検出された範囲は西壁7.3m、北壁2.3mで、西壁はやや外方に膨らみを持つ状況を呈しているが、明確な形態、規模は不明である。埋土は、境界断面で見ると、大きく4層に分けられる。上位から、耕作土、Ⅲ層を主体とする黒色砂質シルト、埋土下位の炭化物混入する黒色砂質シルト、南壁寄りに堆積する砂粒・小礫の多い黒色砂質シルトで構成される。

壁は西壁の南寄りには砂礫層中にあるが、他はⅣ層相当の黒色土中にある。壁高は、西壁南側が約30cm、他は約20cmを測る。床面は検出部の北半及びF09-2住居跡の部分に、暗褐色～黄褐色を呈する粘土質シルトで貼床され、堅くしまっている。南側は砂礫層の直上でしまっている。

柱穴状ピットが北半部で3基検出されている。口径・深さは、P₁-40cm×28cm・20cm、P₂-21cm×15cm・7cm、P₃-40cm×18cm・30cmである。P₃は位置、深さから柱穴の可能性もある。

周溝は、壁間にめぐり、幅15cm～20cm、深さ北半部で約5cm前後である。西壁中央付近から南側にかけて浅くなり、南側では部分的に途切れる。検出された床面を3分するように、西壁に直交する周溝と同規模の溝が設けられている。これは間仕切り施設に伴うものと考えられる。

土坑、カマドの存在は不明である。



図版38 F09-1住居跡

出土遺物 (図版109、写真図版65)

土師器 甕形土器

(床面) 225は外面がハケメ、内面がヘラナデ、ハケメで調整されている底部片である。

(埋土) 223は口縁部が外反し肩部に段をもつ口縁部破片である。体部内外面はハケメで調整されている。225は外面がハケメ、内面がナデで調整されている底部片である。226は内外面がハケメで調整されている底部である。底部内面は丸底風を呈している。

F09—2 住居跡 (図版39、写真図版26)

調査区北側の南東端に位置する。F09—1住居跡と重複し、F09—1住居跡の床面で検出されている。遺構の大半は、調査区域外にある。重複する遺構の新旧関係は、F09—1住居跡が新しく本遺構がより古い。

検出された範囲は、西壁3.4m、北壁1.0m、南壁0.4mであり、各壁はほぼ直角に交わる状況であることから推測すると、規模は一辺3.4m前後の方形を呈する住居跡と思われる。

埋土は、黒褐色粘土質シルトであり、黒色シルトとにぶい褐色粘土質シルトの混合土で堅くしまっている。これらの土が、ブロック状又は帯状に混りあっている。この埋土の状況は、F09—2住居跡の構築の際に埋め戻された状況を示すものであろう。

壁高は、約5cmを測るのみである。床面はN層下位にあり、ほぼ平坦でしまっている。

柱穴、土坑、周溝、カマドの存在は不明である。

遺物 出土していない。

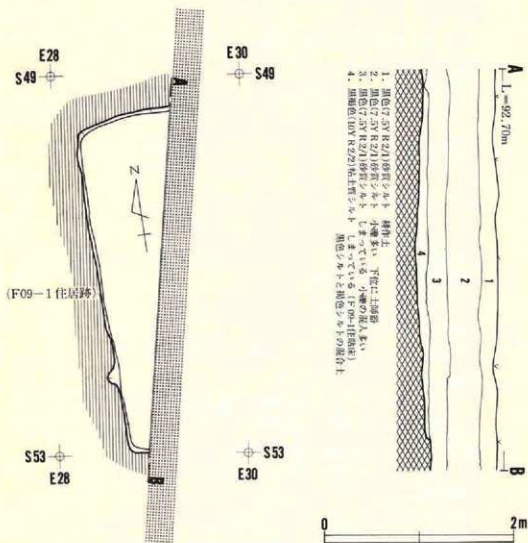
F13—2 住居跡 (図版40、写真図版27)

調査区のほぼ中央東端に位置し、Ⅲ層中において検出されている。遺構の北側は、F13—1住居跡と重複し、且つ東側は調査区域外に延びる。重複する遺構との新旧関係は、F13—1住居跡が新しく、本住居跡がより古い。

検出された範囲は、西壁3.6m、南壁2.8mであり、両壁はほぼ90度近い角度で交わる。

重複する遺構に切られていること、調査区域外に延びることから、本遺構の平面形、規模は不明である。埋土は、表土を除くと、大きく2分される。上位(3層)は、小礫の混入の少ない黒色砂質シルト、下位(6層)は黄褐色シルト質土がブロック状に混入する黒色シルト質土である。3層と6層間には、にぶい黄褐色細粒浮石(十和田マ火山灰と推定される火山灰)が混入する黒色砂質シルトの堆積層がある。

壁は、砂礫がやや混入するⅢ層下位に構築されている。壁高は、西壁が5~10cm、南壁が約10cmを測る。床面は、礫が混入する黒色シルト質土で、小さな凹凸があるが全体的には平坦で



図版39 F09-2 住居跡

しまっている。

南壁際に、幅約10cm、深さ約5cmの周溝がある。

柱穴、土坑、カマドの存在は不明である。

出土遺物（図版117、写真図版69）

土師器

坏形土器

(埋土) 内黒の坏-284は口縁部が外傾し底部外面に回転糸切り痕をもつ。外面はロクロナデ後、下端をヘラケズリで再調整が施されている(ⅡB類)。内面はロクロナデ後、上半が横方向のヘラミガキ、下半が放射状にナデ状のヘラミガキで調整され、最後に黒色処理が施されている。285は底部に回転糸切り痕をもつ底部片である。体部、底部の外面にヘラケズリなどによる再調整はみられない。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

須恵器

壺形土器

(床面) 286、288はロクロナデで調整されている体部片である。

(埋土) 287はロクロ使用の体部片である。

鉄製品(床面) 289は厚さ1cm、幅1.5cm、現存長7cmのもので、片端が鈎状に曲がっている。両端とも欠損している。全体に錆化が進んでいる。

F15-1 住居跡(図版41、写真図版27)

調査区の中央東端に位置し、遺構の東側の大半は調査区域外にある。Ⅲ層下位で検出されている。他遺構との重複はない。

検出された範囲は、南北3.7m、東西1.2mであり、各壁は丸味をもって接するもので、推定される形態、規模は、一辺3.7m前後の隅丸方形と考えられる。埋土の主体はⅢ層起源の黒色シルト質土で、やや柔らかく全体に炭化物、小礫を含む。

壁はⅣ層上～中位に構築され、壁高は北壁20cm、西壁10cm、南壁10cmを測る。床面は小石が多く散在する黒褐色砂質シルトであり、ほぼ平坦でしまっている。

柱穴状ピットが西壁際に2基検出されており、開口部・深さは、P₁-28cm×25cm・35cm、P₂-33cm×25cm・33cmを測る。埋土は柔らかい黒色シルト質土で、本遺構の埋土に似るが、遺構周辺で検出されている柱穴群の一部と思われる。

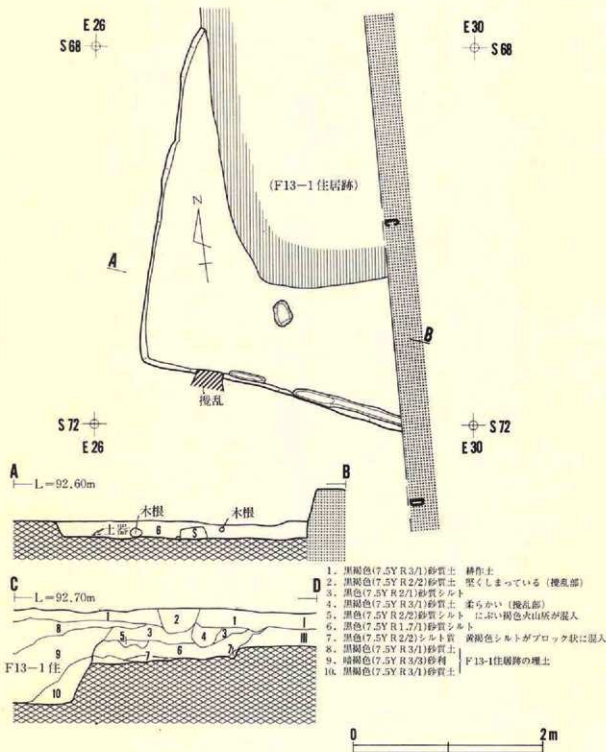
土坑・周溝・カマドは検出されていない。

出土遺物(図版118、写真図版69)

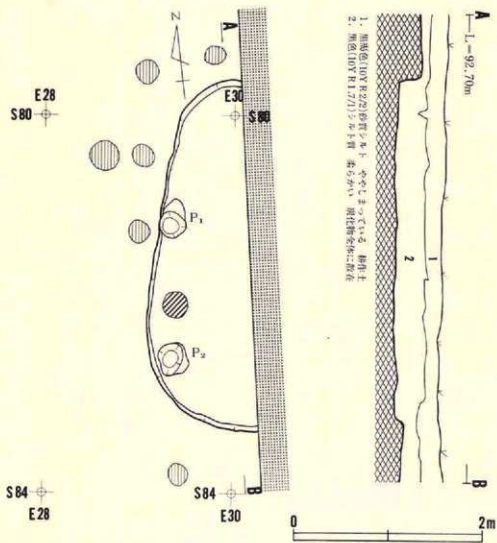
土師器

坏形土器

(埋土) 内黒の坏-290は、内外面に区切りをもたず口縁部が外傾している。底部は平底風を呈している。外面は体部下端がヘラケズリ調整されているほかはヘラミガキで調整されている(ⅠE-b類)。底部中央が欠損している。291は底部が丸底を呈し口縁部が欠損している。外面はヘラミガキで調整されている。2点とも内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。



図版40 F13-2 住居跡



図版41 F15-1 住居跡

壺形土器

(埋土) 丹塗の壺—292は外面がヘラミガキ後、丹塗が施されている底部片である。内面調整はヘラナゲである。

須恵器 甕形土器

(埋土) 298は内外面に平行叩目文をもつ体部片である。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

(埋土) 293は内外面がロクロナデで調整されている。口縁部は外傾している。底部は欠損している。

F15-2住居跡(図版42・43、写真図版21)

調査区の中央東寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。北にF13-1住居跡、南にF15-1住居跡がある。E14住居跡と重複している。重複する遺構との新旧関係は、E14住居跡が古く本遺構が新しい。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は床面中央で、南北2.05m、東西2.1mを測る。埋土は、木根が多く攪乱を受けているが、全体に小礫が混入する黒色シルト質で炭化物が幾分含まれる。また、灰黄褐色細粒浮石(十和田a火山灰と鑑定されたものと同質)も小ブロック状に全体に含まれている。

壁は砂礫の混入するⅣ層中～下位に構築され、E14住居跡の床面までの高さは、各壁とも約20cmを測る。床面は一部礫が露呈する黄褐色～暗褐色シルト質土であり、凹凸がある。

ピットが南東隅に1基ある。木根によって大きく攪乱を受けているが、おおよその規模は、開口部が約50cm×37cm、底部が約40cm×20cm、深さは55cmを測る。埋土上半は攪乱土として掘り上げた。中～下位は灰褐色粘土質シルト、黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。柱穴・周溝は検出されていない。

カマドは東壁中央やや南側に設けられている。検出時には周辺一帯に焼土塊が散在しており、カマド上半部は損壊されている。右袖は床面を掘り寝径25cm×10cmほどの礫を芯材として直立させ、粘土質シルトで固定させている。左袖には礫がなく、粘土質シルトが残存のみである。両袖部は強い焼成を受け、粘土質シルトは赤変している。焼成部には暗赤褐色を呈する焼土が広がり、厚さ5cmを測る。焼成部の煙道に袖の芯材と思われる一部赤変した亜角礫がある。煙道は壁を掘り込んだ形で上昇し、その後地面をほうように、壁の外方約175cmまでのびている。

このカマドは全長約240cm、袖部での幅は約95cmを測る。

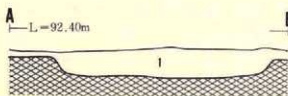
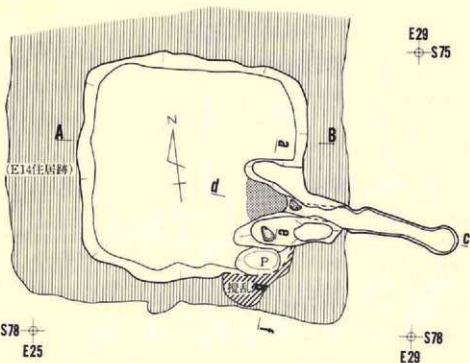
出土遺物(図版118、写真図版70)

須恵器

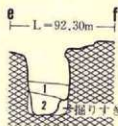
甕形土器

(埋土) 297は外面に平行叩目痕、内面に放射状の当て具痕をもつ肩部・体部上半片である。

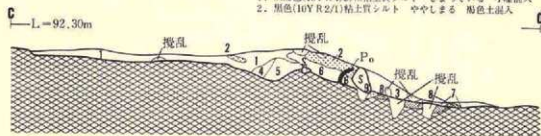
壺形土器



A-B
1. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 本根による攪乱多い 炭化物混入
灰白色粘厚石全体に混入



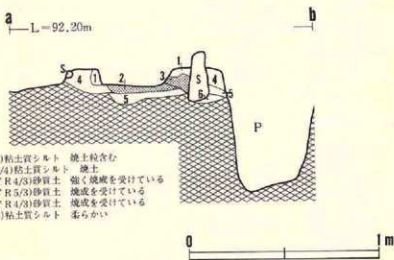
e-f
1. 灰褐色(10Y R 4/2)粘粘土質シルト しまっている 小堀混入
2. 黒色(10Y R 2/1)粘土質シルト ややしまる 褐色土混入



1. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質土
 2. 暗赤褐色(5Y R 3/4)焼土
 3. 暗赤褐色(5Y R 3/2)砂質土
 4. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト
 5. 極暗褐色(7.5Y R 2/3)砂質シルト
 6. 暗褐色(7.5Y R 3/3)砂質シルト
 7. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質土
 8. 暗赤褐色(5Y R 3/4)焼土
 9. に近い褐色(5Y R 4/3)砂質土
- 焼土粒含む
焼土粒含む
焼土粒含む
焼土粒わずかに含む
焼成を受けている



図版42 F15-2住居(1)



図版43 F15-2住居跡(2)

(埋土) 298は内外面がロクロナデで調整されている体部破片である。

酸化銅焼成の須恵器 杯形土器

(埋土) 295・296は内外面がロクロナデで調整されている。295は底部が欠損し口縁部が内傾し口唇部がわずかに外反する。296は体部が内傾し口縁部が外反している。ロクロからの切り離しは回転系切りである。体部・底部外面の再調整はみられない。

F16住居跡(図版44~46、写真図版28~30)

調査区中央の南東寄りに位置し、N層上位で、灰白色浮石が周辺部に混入する方形の暗色部及び煙出し部の礎によって検出されている。他遺構との重複はない。

平面形は、ほぼ正方形を呈し、規模は床面中央部で3.2m×3.2mを測る。

埋土は大きく3層に分けられる。上位から、埋土の上位~中位に堆積する黒色シルト(1

層)、中～下位にレンズ状に堆積する黒褐色シルト(2層)及び壁際から床面にかけ堆積する黒色～黒褐色を呈するシルト～シルト質土(3～8層)である。2層中には全体に灰白色細粒浮石(火山灰の分析によって十和田a火山灰と推定されている)がブロック状に混入し、大きいブロックを呈するものは下位に多くみられる。また、この2層には径10～20cm程の円礫及び焼土塊が中央から南壁寄りに多く混入している。この埋土の堆積状況は、人為的な埋め戻しと自然堆積との相乗作用によるものであろう。

壁は、Ⅱ層～Ⅴ層中に構築されている。本遺構周辺のⅤ層土には円礫の混入は少なく、砂粒小礫を主体とする層となっている。壁高は、北壁中央で55cm、東壁・西壁の中央部で50cm、南壁中央部で45cmを測る。壁は約70度位の角度で外傾し立ち上がる。

床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。炭化物、焼土が床面に多く散在しており、本遺構は焼失住居跡と思われる。床面下の全域に掘り方をもち、中央部、北壁及び東壁寄りでは円形～楕円形の浅皿状を呈し深さは最深部で約30cmを測る。掘り方の埋土はにぶい黄褐色シルト～暗褐色砂質シルトを多く含む黒褐色シルトであり、床面中央から北半にかけ、にぶい黄褐色砂質土で貼床されている。

ピットが3基検出されている。北壁際の東寄りにP₁(開口部径80cm×76cm、深さ14cm)、北西寄りにP₂(開口部径90cm×70cm、深さ25cm)、南壁際のカマド右袖寄りにP₃(開口部径50cm×36cm、深さ30cm)がある。P₁は平面形がほぼ円形で、断面形は浅皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は、黒色～にぶい赤褐色のシルトで焼土粒、炭化物を幾分含む。遺物は出土していない。

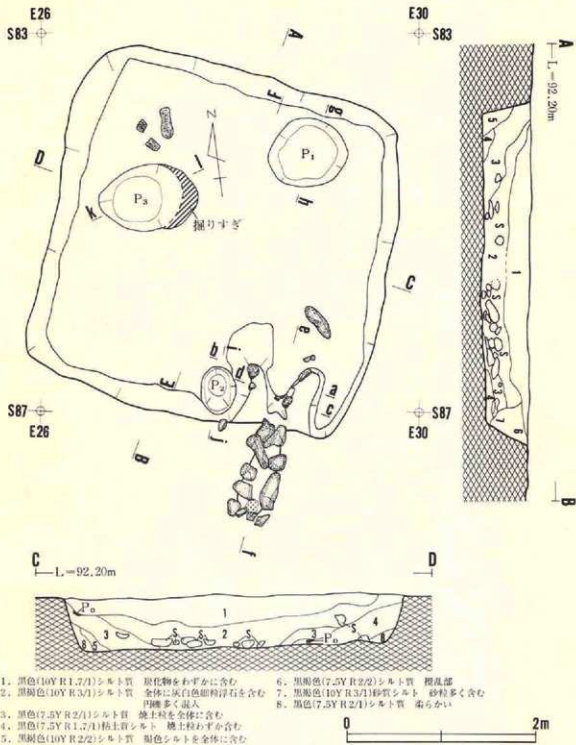
P₂は平面形が不整楕円形状で、断面形は底部に丸味をもつ浅鉢状を呈している。埋土は黒色、暗褐色のシルト質土で、炭化物と多くの黄褐色砂質シルトが多く混入しており、人為的な埋め戻しと考えられるもので、本遺構以降の時期と思われる。埋土中から須恵器葉片が出土している。P₃は、平面形は楕円形を呈し、底面中央が柱穴状に凹み、短径断面形は円筒状を呈すもので、柱穴の様な性格を有するものと思われる。

カマドが南壁の東寄りに設けられており、カマドの残存状況は良好である。袖部には、やや扁平な凝灰岩角礫を直立させ、粘土質シルトを厚く被覆し構築している。

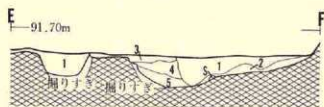
この粘土質シルトは、火熱により赤色変化しているものの、堅くしまっている程でもない。一部天井部を構成していたと思われる明赤褐色焼土が、袖部、燃焼部に付着している。

燃焼部には支脚がある。支脚は8cm×20cmほどの直方体状を呈する凝灰岩質の礫で、直立させ深く埋置されている。

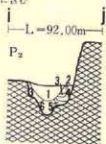
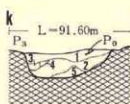
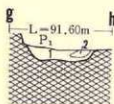
支脚の周辺及び前方の広い範囲に、暗赤褐色を呈する焼土があり、最大12cmの厚さに及ぶ。煙道部は、地面を平坦な溝状に掘り込み、扁平な礫を壁際に直立させ並べ、その上部を大き



図版44 F16住居跡(1)



1. 黒褐色(10Y R 3/2)シルト質 全体ににぶい黄褐色シルトを含む
2. 褐色(10Y R 4/4)シルト質 ややしまっている
3. にぶい黄褐色(10Y R 5/4)砂質 堅くしまっている
4. 黒褐色(10Y R 3/1)シルト質 暗褐色砂質シルトをブロック状に含む
5. 黒色(10Y R 1.7/1)シルト質 ややしまっている



g-h

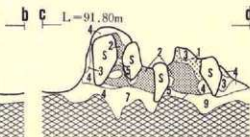
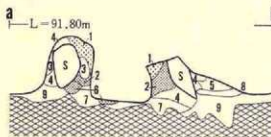
1. 黒色(10Y R 3/1)粘土質シルト 炭化物・焼土含む
2. にぶい赤褐色(10Y R 4/4)シルト質 酸化したシルト質土

i-j

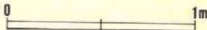
1. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂質シルト
2. 暗褐色(7.5Y R 3/5)砂質土
3. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂
4. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト
5. 褐色(7.5Y R 4/6)砂質土
6. 黒褐色(10Y R 2/3)砂質シルト

k-l

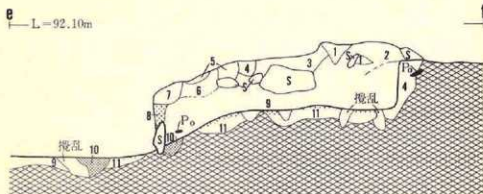
1. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 炭化物混入
2. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 炭化物混入
3. にぶい黄褐色(10Y R 5/4)砂質
4. 黒褐色(7.5Y R 3/1)シルト質
5. 暗褐色(7.5Y R 3/3)シルト質 炭化物わずか混入



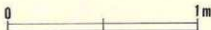
1. 明赤褐色(5Y R 5/8)シルト質 焼土
2. 暗赤褐色(5Y R 3/3)粘土質シルト 焼土、柔らかい
3. 黒褐色(5Y R 2/1)シルト質 焼土粒含む(木根による攪乱)
4. 褐色(7.5Y R 4/3)砂質シルト 堅くしまっている
5. にぶい褐色(5Y R 5/3)砂質シルト
6. にぶい赤褐色(5Y R 4/4)砂質シルト
7. 褐色(7.5Y R 4/4)砂質土 柔らかい
8. 暗褐色(7.5Y R 3/3)粘土質シルト 黒色・褐色シルトをブロック状に多く含む



図版45 F16住居跡(2)



1. 暗褐色(7.5Y R 3/3)砂質土
2. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 柔らかい
3. 黒褐色(7.5Y R 3/2)砂質土 堅くしまっている
4. 褐色(7.5Y R 3/2)砂質土 灰黄褐色浮石混入
5. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質土
6. 暗褐色(10Y R 3/3)砂質土 黒色土混入
7. 暗赤褐色(5Y R 3/4)砂質シルト
8. 暗赤褐色(5Y R 3/4)シルト質 焼成を受けている
9. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質シルト
10. 赤褐色(5Y R 4/6)粘土質シルト 焼土
11. 濃い赤褐色(5Y R 4/4)砂質シルト 焼成を受けている



図版46 F16住居跡(3)

日な扁平鎌や扁平楕円体状の礫を被せて構築している。煙道は、燃焼部から緩く立ち上がり、壁外方ではほぼ平坦で、壁外方1mまでのびる。

このカマドの全長は約180cm、袖幅は約100cmである。

出土遺物(図版119~125、写真図版70~74)

土師器 杯形土器

(床面・カマド)内黒の杯—299は内外面がロクロナデで調整され、体部が内彎し口縁端部がやや外反している。底部は欠損している。内面は横方向のヘラミガキ後、黒色処理が施されている。杯—316は内外面ロクロナデ後、内面をヘラミガキ調整している。体部が内彎し口縁部がやや外反している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。体部・底部外面の再調整はみられない。内面の黒色は二次的の火熱を受けて消失したと思われる。

(埋土)内黒の杯—300~313はロクロ使用のものである。15点のうち、底部が残存しているものは8点である。8点のうち、体部下端・底部の外面にヘラケズリによる再調整が施されているもの(ⅡA類)2点(311, 312)、体部下端にヘラケズリによる再調整が施されているもの(ⅡB類)2点(310, 313)、体部下端・底部の外面に再調整が施されていないもの(ⅡC類)

4点(301~303、309)などがある。311、312は体部上半が欠損している。310は底部中央が欠損し口縁部が内彎している。313は底部片である。310、309は体部上半が欠損している。302は口縁部が内彎し、303は口縁部が内彎し口縁端部が外反している。底部が欠損しているものは6点である。これらのうち、口縁部が内彎しているもの3点(300、306、308)、口縁端部が外反しているもの3点(304、305、307)である。15点の内面は主にヘラミガキ後、黒色処理が施されている。体部下半の内面を放射状にヘラミガキ調整しているものが7点(301、303~305、307、310、311)、ナデ状のミガキで放射状に調整しているもの3点(300、302、306)がある。前者はⅡA・ⅡB・ⅡC類に、後者はⅡC類にみられる。302の体部外面には「分」に類似した文字が墨書されている。杯-315、317、319は内面の黒色が二次的に火熱を受けて消失したと思われるものである。315は体部上半が欠損しているが、体部下端にヘラケズリによる再調整がみられる。ロクロからの切り難しは回転糸切りである。317、318は底部が欠損し、口縁端部が外反している。318の体部外面には「井」の文字が墨書されている。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

(埋土) 319~338の20点出土している。底部が残存するものは12点で、すべてロクロからの切り難しは回転糸切りである。底部外面の再調整はみられない。12点のうち1点(330)だけが体部下端の一部にヘラケズリ痕がみられる。20点のうち、口縁部が残存しているものは16点である。これらのうち、口縁部または口縁端部が外反しているものが10点(319~322、328、329、331、334、337、338)、口縁部が内彎しているものが4点(323、326、332、333)、口縁部が外傾しているものが2点(325、336)である。出土している20点のうちの大半は内外面のロクロ痕が顕著である。

土師器 高杯形土器

(埋土) 339は脚部と脚部下半が欠損している。脚部は上位に段をもち、円錐台形を呈したものと推定される。脚部は外面がヘラミガキ、内面がヘラケズリで調整されている。杯部の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

土師器 鉢形土器

(埋土) 340は肩部に段・稜などの区切りをもたず口縁部が外反している。口縁部はヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ後ヘラナデ、内面がハケメ、ヘラナデで調整されている(ⅡC-a₁類)。底部中央が欠損している。

土師器 壺形土器

(灰面) 341は口縁部が極端に短く外反し肩部に段をもつ。体部下半は欠損している。体部は外面が主にヘラケズリ、内面がハケメで調整されている(ⅡC-c類)。

土師器 土甕形器

(床面・カマド) ロタロ不使用のもの(Ⅰ類) 2点(349、352)、ロタロ使用のもの(Ⅱ類) 2点(348、353)とがある。349は体部外面がヘラケズリ後ヘラナデ、内面がヘラナデで調整されている体部片である。体部外面には焼成を受けた粘土が付着している。352は体部内外面がヘラナデで調整されている。体部上半は欠損している。底部が円錐台状を呈している。348、353は口縁部が外反し口縁端部が直上している。348は体部下半が欠損し、体部外面がロタロナデ後、部分的にヘラケズリが行なわれている。353は底部に回転糸切痕をもつ小型のものである。体部は中央がやや膨らむ。底部中央が欠損している。344、350、351は外面が主にヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている底部片である。351の体部外面には焼成を受けた粘土が付着している。3点の底部片のうち何点かは体部上半がロタロで調整されていたものも含まれていると思われる。

(埋土) ロタロ不使用のもの(Ⅰ類) 3点(342、343、354)、ロタロ使用のもの(Ⅱ類) 3点(346、347、355)などがある。342は肩部に稜をもち口縁部が短く外反している(ⅠE-c類)。体部下半は欠損している。外面はヘラナデ、内面はハケメで調整されている。343は肩部に段・沈線・稜をもち口縁部が外傾している(ⅠF-c類)。体部下半は欠損している。外面はヘラナデ、内面はハケメで調整されている。342、343の2点とも小型である。354は体部外面がヘラケズリ、内面がハケメで調整されている器壁の薄い体部片である。346は口縁部が外反し口縁端部が直上している。底部が欠損している。347は口縁部が外反し口唇部がわずかに直上している。体部下半は欠損している。346、347の2点とも小型である。355はロタロ調整後、一部外面にヘラケズリしている体部破片である。345は外面がヘラケズリ、内面がナデで調整されている底部片である。

須恵器 杯形土器

(埋土) 356~358は底部片、370、372は体部片である。すべてロタロ使用である。357、358の底部には回転糸切り痕をもつ。底部外面の再調整はみられない。356、358はやや褐色帯びた色調のものである。

須恵器 壺形土器

(床面) 359、362はロタロ使用の壺の口縁部片である。362は長頸壺のものである。

(埋土) 360は肩部片、361、369は口縁部片部である。すべて内外面はロタロで調整されている。361は長頸壺のもので口唇部が上下につまみ出されている。

須恵器 甕形土器

(カマド) 366は外面に格子目状印目文をもつ体部片である。

(埋土) 364、365、368は外面に363、369は内外面に印目文をもつ体部片である。368は格子状印目文をもつ。そのほかは平行印目文をもつ。367は側縁が整されていることから、何かに

転用された可能性がある。

石製品

(床面) 374は小判状の自然石の両面を磨いているものである。石質はチャートである。

(埋土) 373は自然石を利用した円盤状の石製品である。石質は輝石安山岩である。375は凝灰岩を加工してつくられた小判状の石製品である。一部破損している。

F 17住居跡 (図版47、写真図版31)

調査区中央の南東端に位置し、砂塵の混入の少ないN層上位で検出されている。遺構の東側は調査区域外に延びている。他遺構との重複はない。床面に多くの炭化物が散在することから本遺構は、焼失住居跡と思われる。

検出された範囲は、西壁2.5m、南壁1.8mであるが、検出された状況から一辺2.5m前後の方形を呈する住居跡と推測される。埋土は、Ⅲ層起源の砂質シルトで、埋土最下部から床面にかけて炭化物が多く混入し全体的に柔らかい。

壁は、N層中位～下位に構築されている。壁高は低く、西壁は約5cm、南壁は約10cmを測る。床面はN層下位にあり、小石を多く含みやや凹凸を呈しているが、全体的には平坦に近い状況である。やや堅くしまっている。床面出土の炭化物の樹種は、クリと同定されている。

柱穴、土枕、周溝、カマドの存在は不明である。

出土遺物 (図版126、写真図版74)

土師器

杯形土器

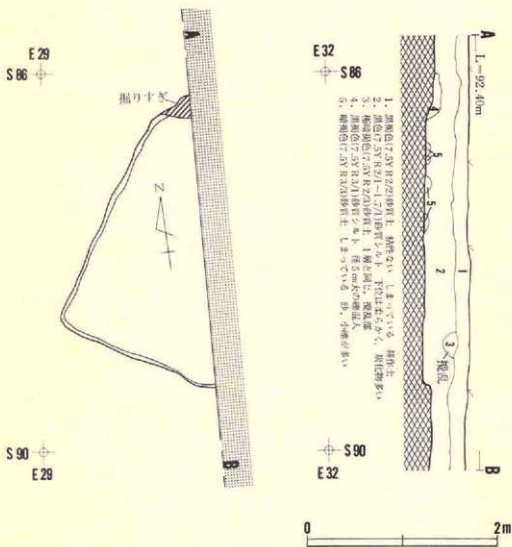
(埋土) 内黒の杯-379はロクロ使用の底部片、382はロクロ不使用の体部片である。379は底部外面がヘラケズリにより再調整が施されている(ⅡA類)ロクロからの切り離し方は不明である。377は体部外面に段をもち口縁部が内傾している。底部は欠損している。段上部はヘラミガキ、下部はヘラケズリで調整されている(ⅠC-b類)。外面に丹塗が施されていた可能性もあるが確かではない。

壺形土器

(埋土) 384は帯状の丹塗が縦位に施されている口縁部片である。378は外面がヘラミガキ後、丹塗が施されている体部片である。内面調整はヘラナデである。

須恵器 杯形土器

(埋土) 380は体部下端と底部外周にヘラケズリで再調整が施されている(B-a類)。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。口縁部は外傾している。381は口縁部が外傾し底部に回転糸切り痕をもつ(B-c類)。体部下端、底部に再調整はみられない) 383は体部片であ



図版47 F17住居跡

る。

酸化焙焼成の須恵器 杯形土器

(埋土) 376はロタロナデされている体部片である。

中世竪穴住居跡

調査区北側に位置し5棟、中央部に位置し6棟、南側に位置し3棟の計14棟検出されている。出土遺物が極めて少なく、形態的な特徴から、時期的に「中世住居跡」と位置付けたものが大半である。

遺構の壁は、砂礫層を掘り込んで構築されるものが多く、東向きまたは南東向きに張り出す方形、又は長方形の出入口施設を有する形態的特徴がある。

A04住居跡（図版48・49、写真図版32）

遺構は、調査区北端部西側のA04区からA05区にまたがって位置している。検出面は耕作土下位から基本層序Ⅲ層中位である。遺構の半分以上が調査区域外に存在するために、詳細な規模と形態は不明である。検出された南北辺は2.90m、東西辺は1.92mを測る。出入口は南辺の南東コーナー寄りに設けられており、規模は2.06m×0.76mの長方形を呈している。埋土の大部分は微量の炭を混入する黒色砂質シルトで構成され、下位に行くにしたがって強く締まり、壁際に径2cm～10cm大の円礫が多く堆積をしている。これら埋土の状況は、自然堆積の様相を示している。

壁は砂礫層中にあるために崩落が一部に見られ、壁高は40cm～45cm前後で、床面から110度で外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、全体に強く締まり、南壁寄りの床土には焼土、炭、藁灰が4cm程の層厚で分布している。出入口は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、強く締まっている。

小穴は遺構の外周と壁際に11個検出され、内P₁～P₉が柱穴と考えられる。柱穴はいずれも

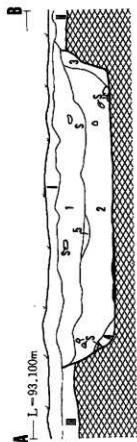
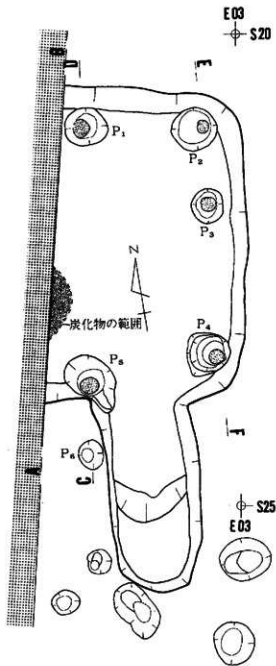
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	46×38	48×45	38×27	45×44	54×42	32×26	25×23	28×26	60×36	54×44	45×41
深さcm	34	30	26	20	24	31	33	11	22	7	25

掘り方を有し、柱痕（柱あたり）は径14cm～20cmの範疇にある。また、P₈・P₇・P₁₀は位置的に出入口に伴う小柱穴の可能性もある。

遺物は床上の炭化物中から炭化米が僅かに出土したのみで、時期を決定する資料は出土していない。当遺構も他検出の中世竪穴住居跡と形態的に類似することから見て、中世に属するものと考えられる。

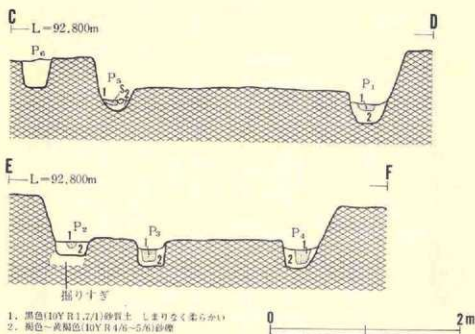
A06住居跡（図版50、写真図版33）

遺構は北端部西側に位置している。検出面は耕作土下40cm～50cm基本層序Ⅲ層下位で、黒色



1. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト 炭素の量が混入
2. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト 下部に炭が混入
3. 黒色(10Y R 1.7/1-2/1)砂質シルト
4. 黒褐色(10Y R 2.2/2-2/3)砂質土 炭多量に含有
5. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト

図版48 A04住居跡(1)



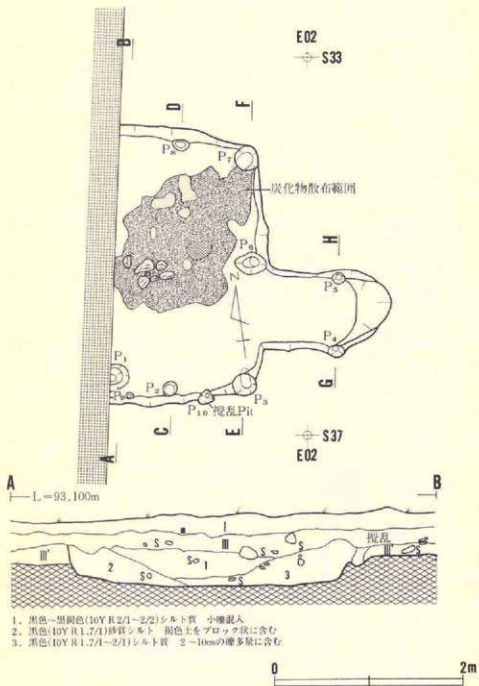
図版49 A04住居跡(2)

土の落ちこみによって確認されたものである。規模と形態は、遺構の西側半分以上が調査区域外に存在することから詳細不明である。検出された南北辺は2.70m、東西辺は1.50mを測り、東辺南東コーナー寄りに1.46m×0.70mの長方形を呈す出入口が設けられている。埋土は黒色シルト質土の3層に大別され、径2cm～10cm大の重円礫と重角礫が多く混入している。これらの礫は遺構を被う様に不自然な堆積の様相を呈しており、一部人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

壁は砂礫層中にあるために崩れやすく残存も浅い。壁高は北壁10cm～15cm、南壁10cm前後、東壁12cmで、床面から緩やかに外傾(120度～130度)するように立ち上がる。床面は一部シルトで貼床され、全体に堅く締まり、中央部で緩やかな窪みを示している。また、北東コーナー付近から中央にかけての床土には、炭化物、灰白色の灰(藁灰?)、焼土粒が2.5cm前後の層厚

()内は現存長

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	28×(19)	15×15	25×23	18×13	14×12	30×24	26×24	18×12	8×7	16×14
深さ cm	27	31	26	20	5	21	58	10	5	4



1. 黒色～黒褐色(10Y R 2/1～2/2)シルト質 小礫混入
2. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト 褐色土をブロック状に含む
3. 黒色(10Y R 1.7/1～2/1)シルト質 2～10mmの礫多量に含む

図版50 A06住居跡

で堆積している。出入口は緩やかな傾斜で床に続いている。

小穴は壁際に10個検出され、位置的に P_1 ~ P_6 が遺構に伴う柱穴と考えられる。 P_4 と P_6 は出入口に伴う小柱穴であろう。

遺物は床上から炭化穀類(炭化米)が少量出土しただけである。時期を決定する資料の出土はないものの、形態的に他の中世竪穴住居跡と類似することから見て、本遺構も中世に属すると考えられる。

A08住居跡(図版51, 写真図版33)

調査区北側の西端にあり、N層上面で検出されているが、遺構の大半は調査区域外に延びている。A07住居跡と重複している。重複する遺構との新旧関係は、A07住居跡が古く、本遺構はより新しい。

検出できた範囲は東西2m、南北0.7mであり、東向き出入口施設にあたる部分と考えられ、遺構は西側に広がるものと思われるが全体の形状、規模は不明である。出入口部の長さは約1.8mを測り、床面から検出面へ約8度の角度で傾斜し上がる。

埋土は、南側境界の東西断面でみると、上位の1層、2層は黒褐色シルト質土で基本層序の1層、3層にあたる。中位の3層は径10~20cmの礫が多く含まれる黒褐色シルト質土で、人為的に埋め戻された層と考えられる。下位の4層、5層は、粘性のある柔らかい黒色シルト質土である。

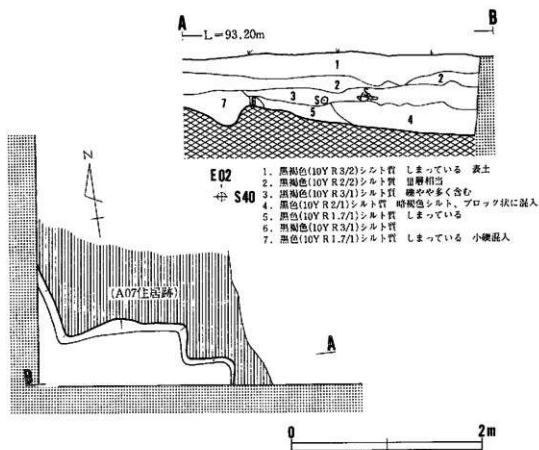
壁は、東壁の一部が検出されたのみで、壁高は約28cmを測る。床面は一部分の検出で、砂礫層上面にあり、しまっているが全体の状況は不明である。柱穴も不明である。

本遺構の時期を決定する遺物の出土はないが、検出された遺構の形態的な特徴から、中世に位置づけられると考えられる。

A14住居跡(図版52, 写真図版34)

調査区中央のやや西寄りに位置し、V層(砂礫層)の上面で暗色の長方形のプランとして検出されている。西側にはA15住居跡、Z14住居跡があり、他遺構との重複はない。

平面形は、南北方向に長辺をもつ長方形で、東壁南端には、南東に長方形に張り出す出入口施設をもつ。床面中央での規模は、南北4.0m、東西2.9mを測る。出入口部は上場計測で幅1.5m、長さ2.8mを測り、床面から検出面へ約12度の角度で傾斜し上がる。埋土は、東西断面でみると、大きく4層に分けられる。上位から、黒褐色シルト質土、径0.5~3cmの礫と砂質土の混合した砂礫、径10~15cmの円礫が多く混入する黒色シルト質土、床面上部に堆積する極暗褐色砂利層で構成される。この埋土の堆積状況及び埋土を構成する土、砂礫の様子から推測



図版51 A08住居跡

すると、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

壁は砂礫層中にあり、全体にもろく、崩壊し易い。壁高は各壁中央部で、北壁70cm、西壁・南壁75cm、東壁85cmを測り、60～75度の角度で外傾し立ち上がる。

床面下のほぼ全域に掘り方をもち、中央から北側では約10cm、南側では約5cmの深さである。

床面は砂礫と黒褐色砂質土の混合土で構成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴は4基あり、住居跡の壁隅に配置されるが、柱痕は明確にされず、掘り方によって柱穴と判明したものである。掘り方は開口部径40～50cm、床面からの深さ20～30cm程である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
口径 cm	56×55	55×45	55×50	40×30
深さ cm	31	20	28	18

特に、P₂~P₄は位置的に、壺隅を扶るように配置される。

土坑、周溝は検出されていない。

北壁中央やや東寄りの埋土下位から古銭(395)が出土しており、本遺構は中世に位置づけられると考えられる。

出土遺物(図版127、写真図版75)

古銭(埋土)395は明銭の永楽通寶である。

鉄製品 釘(埋土)396は頭部の形状が皆折形の釘である。先尖部が欠損している。断面は四角形である。

A15住居跡(図版53・54、写真図版35)

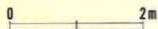
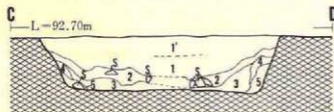
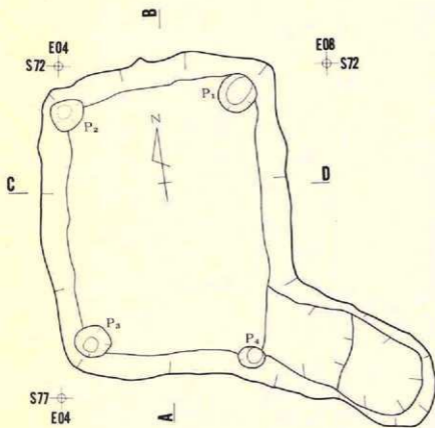
調査区中央の西寄りに位置し、黒褐色土に砂礫が多く混入するN層上面で、暗色長方形のプランとして検出されている。Z14住居跡と北西部が重複している。重複する遺構との新旧関係は、Z14住居跡が新しく、本住居跡がより古い。

平面形は、南北方向に長辺をもつ長方形を呈し、東壁南端には東側に方形気味に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央で南北4.9m、東西3.4mを測る。出入口部の上場での計測は約1.2m×1.2mで、床面から検出面へ約10度の角度で傾斜し上がる。

埋土は、黒褐色～暗褐色を呈する砂質土又は砂礫で、3層に分けられる。上位には小礫や径5cm前後の礫が多く混入する砂質土が堆積し、層厚は一定しない。床面上部に堆積する2層は小礫の混入少ない黒褐色土に小石が多く混入する砂質土で堅くしまっている。3層は、砂礫と黒色土の混合土でしまりなく、もろい。この埋土の堆積状況は、人為的に埋め戻されたことを示すと思われる。

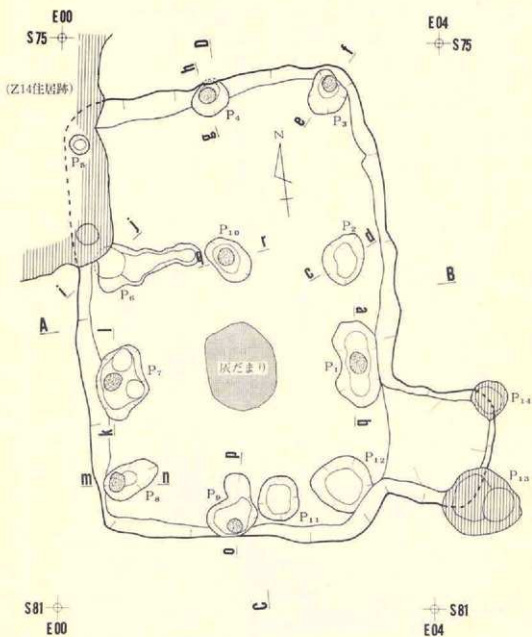
壁は、砂礫層中にあり、もろく崩壊し易い。壁高は各壁中央部では、北壁・東壁30cm、西壁35cm、南壁25cmを測る。床面下のほぼ全域に5~10cmの深さで掘り方をもち、床面は径1~3cmの小石が多く混入する黒褐色砂質土で構成され堅くしまっている。南半部の床面に比べ、北壁から約1.5mの範囲の床面が5cm程高くなっている。

床面の中央南寄りに、約90cm×70cmの楕円形を呈する炭化物の細片と灰の混合土(灰だまりと呼称)がある。上部は木炭片、炭化穀類及び灰の混合土で、下部にはシルト状を呈する灰が7~8cmの厚さで堆積している。

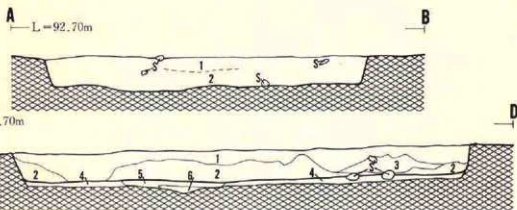


1. 黒褐色(7.5Y R 3/2)砂質シルト 堅くしまっている。礫多く混入
1. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂質土 堅くしまる。上層より暗色で礫多い
2. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 ややしまっている。径10-15cmの礫多く混入
3. 極暗褐色(7.5Y R 2/3)砂礫 しまりない。黒色土混入
4. 黒褐色(7.5Y R 3/2)砂質シルト ややしまる。礫多く混入
5. 明褐色-褐色(7.5Y R 5/6-4/6)砂礫 しまりない
6. 黒褐色(10Y R 2/2)堅くしまっている
7. 暗褐色(10Y R 3/3)砂礫 しまっている。黒褐色土混入
8. 黒褐色(7.5Y R 2/3)砂質土 径3cm前後の礫多い

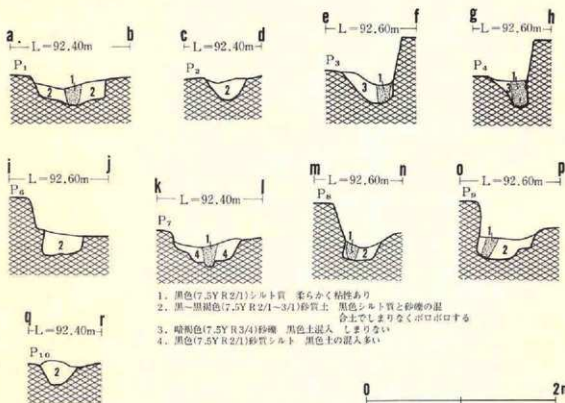
図版52 A14住居跡



図版53 A15住居跡(1)



1. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質土 堅くしまっている 炭化物含む
小礫・砂多い
2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂礫 炭化物含む
3. 褐～暗褐色(7.5Y R 4/3-3/3)砂礫 しまりなくボロボロする
4. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂質シルト しまっている 炭化物混入
5. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 柔らかい
6. 黒褐色(7.5Y R 3/1)シルト質 柔らかい
灰(10Y R 5/1褐色)が多く
炭化穀類含む
炭化物、灰が多く混入



1. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 柔らかく粘性あり
2. 黒～黒褐色(7.5Y R 2/1-3/1)砂質土 黒色シルト質と砂礫の混
合土でしまりなくボロボロする
3. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂礫 黒色土混入 しまりない
4. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 黒色土の混入多い

図版54 A15住居跡(2)

炭化穀類は、この灰だまり及び周辺部、北壁寄り、柱穴埋土中から検出されている。

柱穴及び柱穴状ピットが計14基検出されているが、出入口部に位置するP₁₃、P₁₄は本遺構を切っている柱穴群の一部である。本柱穴は、遺構内の4基（P₄、P₅、P₈、P₁₂）と北壁及び南壁中央の2基（P₁、P₉）、東壁と西壁の南寄りに位置する2基（P₁、P₇）の計8基と思われる。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
口径 cm	90×45	55×40	50×40	40×40	23×20	110×55	80×55	60×35
深さ cm	30	30	35	35	30	30	40	30

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
口径 cm	65×55	55×35	50×45	65×60
深さ cm	35	35	30	20

床面の中央やや北寄りに位置するP₂、P₁₀、P₆は間仕切り施設に伴うものと思われる。柱痕の判明しているものは、P₁、P₃、P₄、P₇、P₈、P₉であり、埋土は小礫の混入の少ない黒色シルト質土で構成され、粘性あり柔らかい。対をなすP₁、P₇には、柱のつけ替えと思われる痕跡がある。

灰だまり出土の木炭片の樹種は栗と同定されている。

本遺構の時期は、形態的な特徴から中世に位置づけられると思われる。

出土遺物（図版128、写真図版75）

鉄製品 釘（埋土）397は先尖部が曲っている釘である。断面は四角形である。

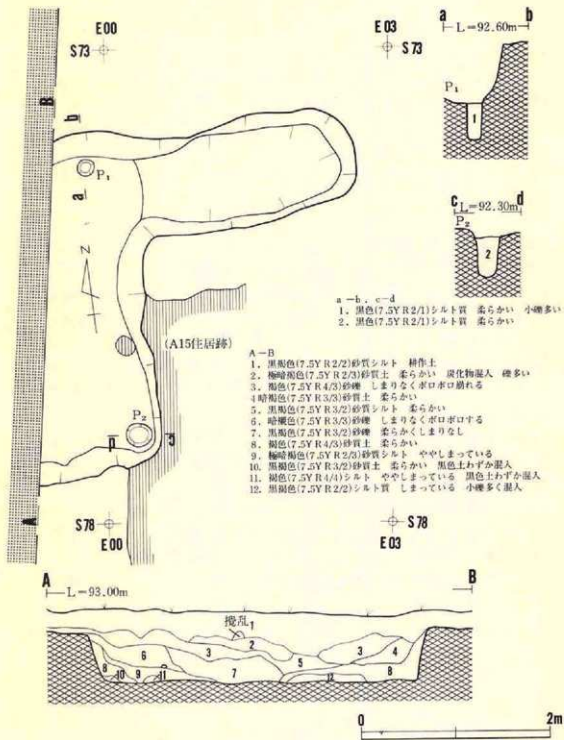
鉄製品（埋土）398は幅0.7cm、厚さ0.4cmの細長いもので両端が欠損している。ねじれ曲った状態で検出されている。名称については不明である。

Z14住居跡（図版55、写真図版36）

調査区中央の西端に位置し、Ⅲ層下位で検出されている。遺構の大半は調査区域外にある。

A15住居跡と南東部で重複している。重複する遺構との新旧関係は、A15住居跡が古く、本住居跡がより新しい。

検出された東側の状況から推測すると、平面形は方形または長方形を基調とするものであろう。東壁北端には東側に大きく張り出す長方形の出入口施設をもつ。遺構の平面計測値は、床面の南北が3.1m、出入口部は上場で幅1.0m、長さ2.4mを測る。出入口部は床面から検出面へ約12度の角度で傾斜し上がる。埋土は、調査区境界の断面でみると、検出面から上部は円礫、小礫が多く混入する黒褐色砂質シルトの耕作土、中位から下位は砂礫を主体とする層で黒褐色土の混入具合等で11層に細分されている。この埋土の堆積状況は、大半は人為的に埋め戻さ



図版55 Z14住居跡

れた状況を示していると思われる。

壁は砂礫層中に構築される。壁高は、北壁60cm、南壁及び東壁北側で55cmを測る。床面は、径数cmの礫が混入する黒褐色砂質シルトで貼床されており、ほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴は、北壁と南壁寄りで2基検出されている。口径・深さは、P₁—18cm×18cm・40cm、P₂—24cm×22cm・45cmであり、掘り方は見当らなかった。

本遺構の時期を決定する遺物の出土はないが、形態的な特徴から、中世に位置づけられると考えられる。

B08住居跡（図版56、写真図版37）

遺構は、調査区北側中央寄りに位置し、南東方向2.2mにC09住居跡（中世）、東北東方向6.6mにD07住居跡（奈良）が隣接している。規模（床面で計測し）は2.70m×2.53mの方形を呈し、東壁中央南側寄りに1.30m×0.64mの隅丸長方状の出入口を設けている。埋土は黒褐色土、極暗褐色土、黒色土の3層で構成され、上位の大部分を占める黒褐色土は黄褐色砂土との混合層で、僅かに炭化物を含んでいる。下位はやや堅く締まり、微量の炭化物と径5cm大の小礫を多く含む。埋土の堆積状況は黄褐色砂土や礫の混入が不自然であることから見て、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

壁は床面から垂直気味に立ち上がり、壁高は東壁28cm、西壁42cm、南壁41cm、北壁40cmを測る。床面はやや堅く締まり、ほぼ平坦である。遺構中央部から北東コーナーにかけ、炭化物と灰白色炭灰（①径90cm×56cm、②径60cm×36cm）の不整形の分布が2箇所に見られる。層厚は2cm前後である。出入口は中央部が僅かに高まり、床面とは約4cmの比高を生じている。

小穴は壁際を中心に14箇所検出され、位置的にP₁～P₈が遺構に伴う主柱穴である。P₁を除く柱穴には径18cm～20cmの柱底（柱あたり）が確認された。P₁₁は遺構を切っていることから新しく、P₉と同じ埋土の様相を示している。また、P₁₀とP₁₂は並列し規模等も同様であり、出入口の小柱穴と考えられる。

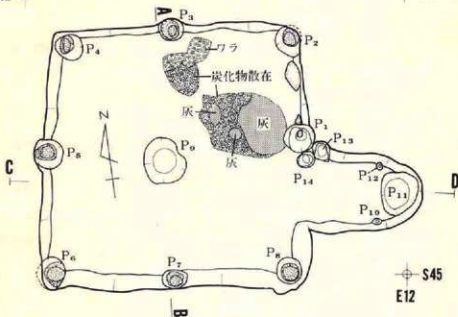
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	32×30	32×30	28×24	30×26	32×30	34×30	26×18	28×26	48×42
深さ cm	35	24	18	21	34	11	23	29	20

No.	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	11×6	46×38	8×6	20×18	20×18
深さ cm	5	13	5	14	14

遺物は炭化物と炭灰の中から炭化穀類が少量と陶器破片が1点出土している。

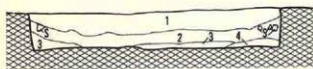
E08
S42

E12
S42

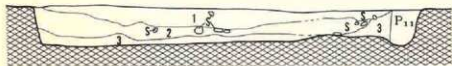


S45
E12

A
L=92.60m



C
L=92.60m



1. 黒褐色(7.5Y R 2/2-2/3)粘性なくザラザラする 柔らかい
黄褐色砂を多く含む
2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)粘性なく柔らかい 礫混入
3. 棕褐色(7.5Y R 2/3)粘性若干あり 礫混入
4. 黄褐色(10Y R 4/4-5/6)砂質

0 2m

図版56 B08住居跡

出土遺物 (図版128、写真図版75)

不定形石器 (埋土) 399は剥片の縁辺の一部に二次的調整が加えられたものである。

陶器 (埋土) 400は小壺または茶入れと推定される破片である。外面に一部鉄釉が施されている。美濃大窯のⅢ期頃 (16世紀の第3四半期) と鑑定されている。

C09住居跡 (図版57、写真図版38)

遺構は、調査区の北側中央寄りに位置し、北西方向2.2mにB08住居跡 (中世) が隣接している。既に東側半分は水道敷設工事による攪乱削平を受け、東壁下端部が僅かに残存するのみである。規模は南北辺2.55m、東西辺推定2.10mのやや長方形を呈し、南西コーナー寄りに1.47m×0.76mの長形状の出入口を設けている。埋土は黒褐色土主体の4層で構成され、上位は収らかく径5cmの小礫と炭化物を含み、中位から下位は炭化物含みの黒褐色土と黄褐色砂土の混合土で占められている。含まれる小礫は径1cm大のものが多く、下位に行くにしたがって量は僅少になる。埋土堆積状況は人為的な埋め戻しの様相を示している。

壁は一部で崩落しているものの床面から垂直気味に立ち上がっており、壁高は平均50cmを測る。床面は砂礫層中にあるため多少窪みがあり、堅く締まっている。南壁寄りの床には、3分の1程攪乱削平された灰白色炭灰と炭化物 (径80cm×60cm、層厚1cm) の広がりが見られる。出入口はやや堅く締まり、床面と段差もなく緩やかな傾斜で続いている。

小穴は壁際に4箇所検出され、位置的に見て遺構の柱穴であろう。P₂は他に比較して深い。また、東側攪乱削平箇所にも柱穴が存在していたと考えられる。

[] は推定規模

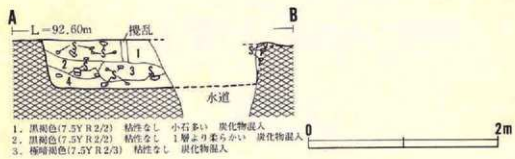
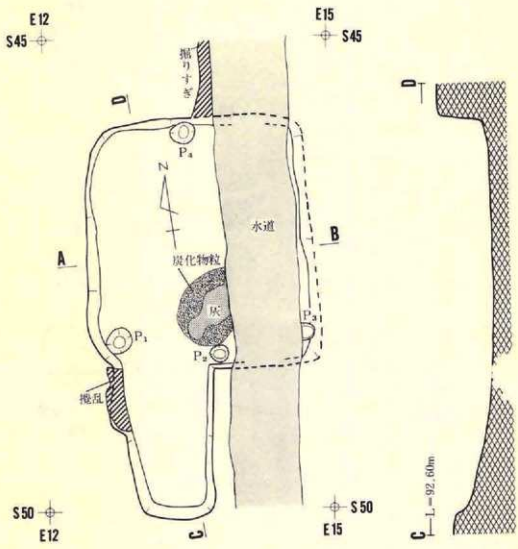
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	28×24	20×18	[20×12]	24×22
深さ cm	9	25	6	19

遺物は炭化物の広がりの中から炭化穀類が少量出土している。

D13住居跡 (図版58・59、写真図版39・40)

調査区中央の北寄りに位置し、北～東側はⅣ層上位、南～西側はⅣ層下位で検出されている。他遺構との重複はない。

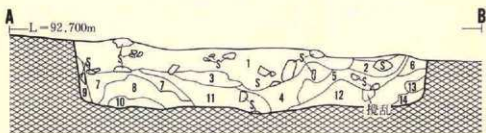
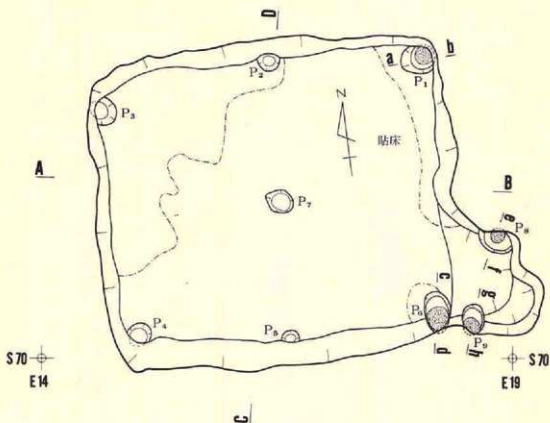
平面形は、東西方向が僅か長い長方形を呈し、東壁南端から南東方向に小さく張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央で東西3.4m、南北3.0mを測る。出入口部は上場の計測で長さ1.1m、幅1.0mを測り、床面から検出面へは小さな段をもつが、平均角約20度で傾斜し上がる。埋土は、黒色、黒褐色、暗褐色を呈する砂質土、砂質シルト、シルト質土で構成されている。全体に径2～5cmの小石が多く混入し堅くしまっている。また、埋土の上～中位には径10～20cmの円礫が多く含まれている。埋土の色調、礫の混入具合等で、14層に細分されている。



図版57 C09住居跡

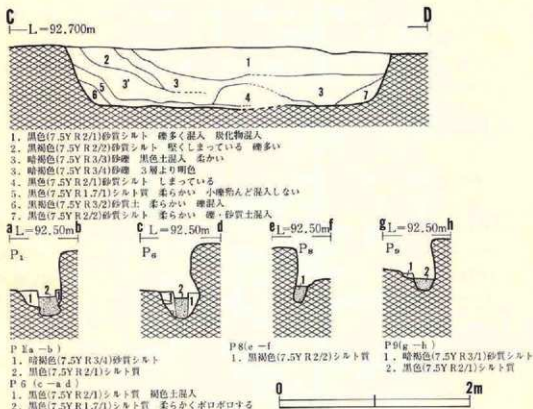
E14
S66

E19
S66



- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 礫多い 炭化物混入
 2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質シルト
 3. 暗褐色(7.5Y R 3/3)砂礫
 4. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質シルト 柔らかい 礫少量
 5. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 しまっている 礫は少ない
 6. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質シルト 堅くしまっている
 7. 黒褐色(7.5Y R 2/3)砂礫 しまりなし 黒色土混入
 8. 黒色(7.5Y R 2/3)
 8. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 しまっている 炭化物混入</p> | <p>9. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 柔らかい
 10. 極暗褐色(7.5Y R 2/3)砂礫 黒色シルト混入
 11. 黒褐色(7.5Y R 3/2)砂質シルト 下位は柔らかくしまりない
 12. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂質土 しまっている
 13. 黒色(7.5Y R 1.7/1)シルト質 柔らかくしまりなし
 14. 黒褐色(7.5Y R 3/1)砂質シルト 柔らかい</p> |
|---|--|

図版58 D13住居跡(1)



図版59 D13住居跡(2)

この埋土の堆積状況は、人為的な埋め戻しと、自然堆積との相乗作用によるものと考えられる。

壁は、北壁の東側と東壁がⅣ層下位あるが、他はⅤ層の砂礫層中にあり、もろく崩れやすい。壁高は、北壁40cm～50cm、西壁60cm～70cm、南壁60cm、東壁30cmを測る。床面には、中央から南壁にかけ、広い範囲に暗褐色シルト質土で貼床され、ほぼ平坦で堅くしまっている。又、出入口部の、床面寄りの部分も極めて堅くしまっている。

柱穴及び柱穴状ピットが計9基検出されている。これらのうち、主柱穴はP₁、P₂、P₄、P₅の

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
口径 cm	40×30	23×18	28×24	22×20	18×16	40×28	30×23	35×24	30×23
深さ cm	28	12	10	10	5	30	7	25	17

4基と思われ、北壁と南壁際の中央に位置するP₂、P₄及び床面中央のP₇は補助的の性格の柱穴と

考えられる。出入口部の壁際中央の P_4 、 P_5 は、出入口部施設に伴うものであろう。柱痕が判明しているものは、 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_6 で埋土は柔らかい黒色シルト質土である。

本遺構の時期を決定する遺物は出土していないが、形態的特徴から、中世に位置づけられると考えられる。

出土遺物（図版127、写真図版74）

須恵器 甕形土器（埋土）389は口縁調整されている口縁部片である。

D17-2 住居跡（図版60、写真図版40）

遺構は、調査区中央部のやや南寄りに位置している。北側でD17-3住居跡、東側でD17-4住居跡と重複しており、新旧関係は2遺構を切っていることから新しい順に①本遺構、②D17-3住居跡、③D17-4住居跡となる。西壁側は水道敷設による擾乱削平を受けているが、規模は3.45m×2.05mのやや台形状を呈し、南西コーナー東寄りには半円状の張り出し部がある。埋土は黒褐色土で構成され、西壁寄りの上位は径6cm～15cmの亜円礫と亜角礫を多く混入し堅く締まり、中位から下位は少量の炭化物を含んでいる。

壁は床から垂直気味に立ち上がり、壁高は西壁42cm、南壁43cmを測る。床面は木根擾乱があるものはほぼ平坦で、締まっている。柱穴は検出されない。

出土遺物（図版102・103、写真図版61）

土師器

杯形土器

（埋土）内黒の杯-161は体部外面に段をもち口縁部が内彎している。底部は欠損している。外面はヘラケズリ後ヘラミガキが行なわれているが、部分的にヘラケズリ痕がみられる（I-C類）。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

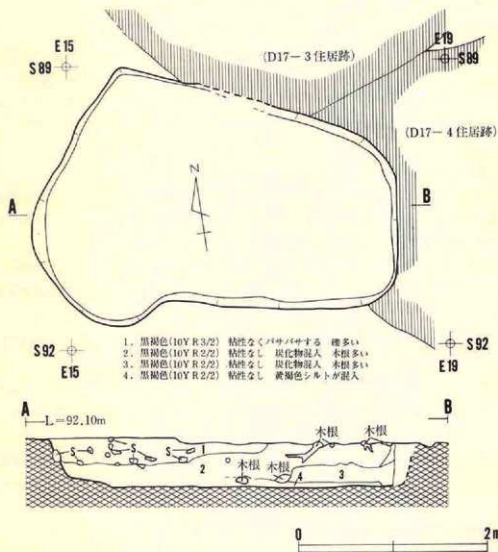
変形土器

（床面レベル）丹塗の壺-163は外面がヘラミガキ後丹塗、内面がヘラナゲ調整が施されている体部破片である。床面レベルとしたのは掘り過ぎの可能性が大きいためである。

（埋土）丹塗の壺-162は口縁部、底部が欠損している。体部は球形を呈している。肩部に段をもつ。体部外面はハケメ後ヘラミガキ調整し丹塗が施されている。残存する口縁部にも丹塗が施されている。内面はヘラナゲで調整されているが輪積み痕が多くみられる。内黒の壺-164は内面ヘラミガキ後、黒色処理が施されている底部片である。外面はハケメで調整されている。

甕形土器

（埋土）168は口縁部が強く外反している破片である。166、167は底部片である。167は底部が円錐台状を呈し底部内面が丸底風である。内外面はハケメで調整されている。



図版60 D17-2 住居跡

須恵器 壺形土器

(埋土) 169は内外面ロクロナデ調整されている体部片である。

陶器

(埋土) 165は香炉で底部に3つの脚が付くものと推定されている。瀬戸産の灰軸陶器で15

世紀半ばのものであるという。

砥石

(埋土) 170は断面が長方形を呈する細長い砥石である。4面とも全面に使用痕をもち、そのうち1面は鋭利なもので削ったような痕跡がある。2面は平坦で他の2面は弓状に彎曲している。171は断面が不整六角形を呈し中央が窪んでいる。6面とも使用痕をもち、そのうちの1面と頭部には溝状の使用痕がみられる。片側半分が欠損している。

D21住居跡 (図版61、写真図版41)

調査区南側のほぼ中央に位置し、砂礫が多く混入するN層中で検出されている。C21住居跡E21住居跡及び柱穴群の一部と重複している。E21住居跡を最初に検出精査したが、重複する遺構との新旧関係は、古い順に①C21住居跡、②E21住居跡、③本住居跡である。

平面形は、東西に長い長方形を基調とし、北東側に方形～長方形に張り出す出入口施設をもつものと思われる。規模は、床面中央部で東西3.6m、南北2.3mを測る。出入口部の規模は不明である。埋土は黒褐色～極暗褐色の砂質シルトで構成される。東西断面の3層、4層は、全体に径2～3cmの礫が多く、黄褐色シルトがブロック状に混入しており、人為的に埋め戻された層と考えられる。

壁はN層下位に構築されている。中央部での壁高は、北壁10cm、西壁5cm、南壁15cm、東壁10cmを測る。床面は砂礫の多いN層下位の黒色砂質シルトで、平坦でなく全体に凹凸がある。

E21住居跡を切っている出入口部は暗黄褐色シルトによって貼床されている。

柱穴状ピットが2基検出されている。口径・深さは、 P_1 —40cm×34cm・19cm、 P_2 —45cm×32cm・15cmである。この2基の柱穴状ピットは出入口施設に伴う可能性もある。他の P_3 ・ P_4 ・ P_5 は埋土・規模から本遺構を切っている柱穴群の一部である。

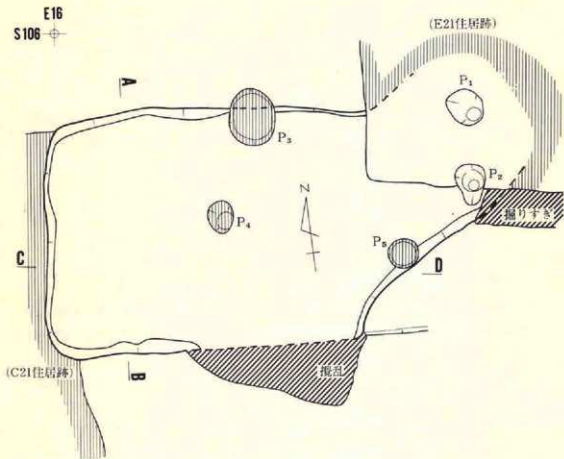
本遺構の時期を決定する遺物は出土していないが、形態的な特徴から、中世に位置づけられると考えられる。

出土遺物 (図版127、写真図版74)

土器器 坏形土器 (埋土) 390は外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ後、黒色処理が施されている体部片である。

E25住居跡 (図版62、写真図版41)

調査区南端に位置し、N層下位で検出されている。他遺構との重複はない。遺構の中央から北西部が大きく擾乱を受けているが、検出された状況から、平面形は北北東—南南西方向に長い長方形を呈し、南側に長方形に張り出す出入口を設けている。規模は床面



S111
E16

S111
E20

A
L=92.30m



B

1. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質シルト やや柔らかい
2. 黒褐色(10Y R 2/3)砂質シルト 灰黄褐色シルト混入
3. 極暗褐色(7.5Y R 2/3)砂質シルト やや柔らかい 礫・シルトが多く混入
4. 暗褐色(7.5Y R 3/3)砂質土 砂礫多い

C
L=92.30m



D

0 2m

図版61 D21住居跡

で約4.3m×3.2mを測り、出入口部は上場で幅1.1m、長さ1.7mを測る。

埋土は礫、砂、黒色土の混合する極暗褐色砂礫土であるが、大半は擾乱を受けている。

壁は砂礫層の上位にあり、残存する壁高は、西壁15cm、南壁10cm、東壁8cmである。床面は黒褐色土と砂礫の混合するV層上位にあり、礫が露呈し凹凸する。床面中央近付に炭化物混入する黒色シルト質土の堆積がみられたが、炭化穀類は検出されていない。

柱穴・ピットは検出されていない。

本遺構の時期を決定する遺物は出土していないが、形態的特徴から、中世に位置づけられると考えられる。

F13-1 住居跡（図版63・64、写真図版42）

調査区中央の東端に位置し、N層上位～V層上位にかけ検出されている。遺構の東側は、調査区域外に広がっている。F13-2住居跡と南側で重複している。重複する遺構との新旧関係は、F13-2住居跡が古く、本住居跡がより新しい。

検出された範囲は、南北5.0m、東西1.7mであり、西壁がやや外方に影らみ、両壁は90度より大きい角度で交わっている。この検出された状況から推測すると隅丸長方形を基調とする住居跡と思われる。床面での南北方向の計測値は4.7mである。

埋土は、黒色、黒褐色、暗褐色を呈するシルト質土に砂礫が多く混入する層で構成され、15層に細分されている。この埋土の堆積状況は、人為的な埋め戻しと、自然堆積との相乗作用によるものと考えられる。

壁は、北壁及び西壁北側がN層～V層中に、他はV層中に構築されている。壁高は、北壁70cm、西壁50～60cm、南壁60cmを測り、約70度の角度で外傾し立ち上がる。

床面は、砂礫層中の、黄褐色粘土質シルトが混入する面に構築されており、大小の礫が露呈し、凹凸があるものの、全体的にはほぼ平坦で堅くしまっている。

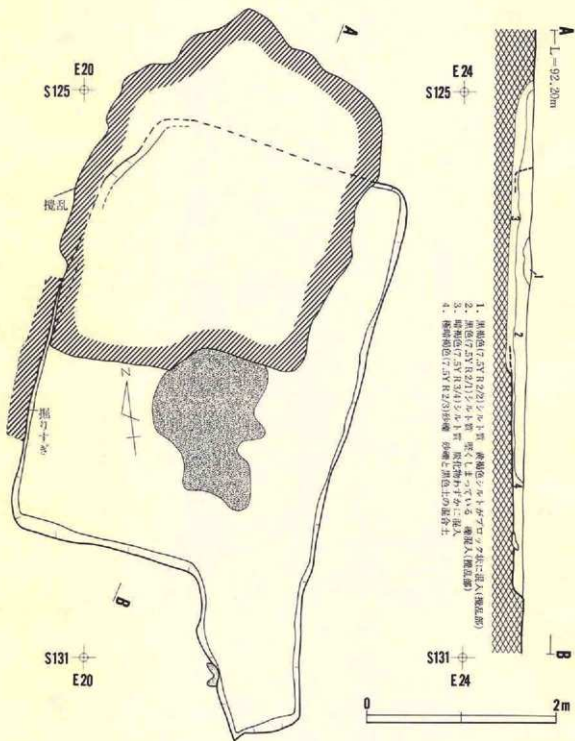
北西隅にピットが1基ある。西壁際を大きく決るようになり、平面形は、南北に長径をもつ不整形を呈するもので、断面は浅皿状を呈す。開口部径は115cm×75cm、底部径は75cm×75cm、深さは約24cmを測る。埋土は黒褐色シルト質で粘性あり柔らかく、小礫、礫がやや多く混入する。

柱穴が西壁沿いに4基あり、ほぼ等間隔に配置される。P₂～P₄には、掘り方をもっている。

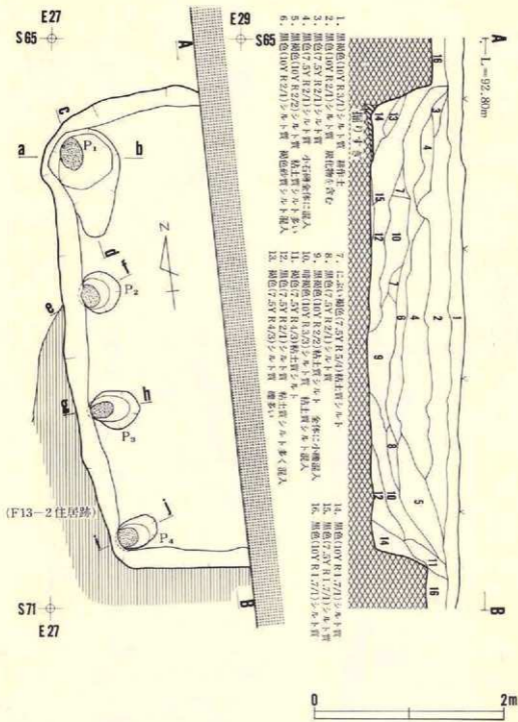
柱痕は口径20cm前後、深さ約30cmを測り、開口部より底部が壁外方に寄るようである。

埋土は、礫があまり混入しない黒褐色シルト質土で、北西隅のピットの埋土に似る。柱穴の掘

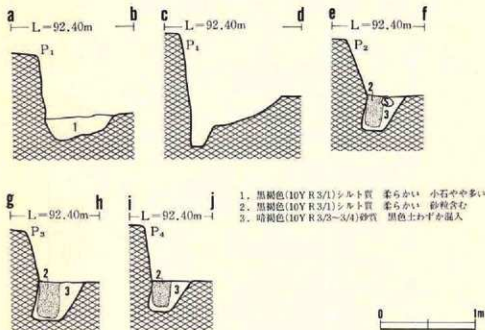
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
口径 cm	—	45×40	50×40	45×30
(柱 痕)	(18×20)	(25×18)	(24×15)	(22×18)
深さ cm	ピット底から 28	33	35	29



図版 62 E25住居跡



図版63 F13-1 住居跡(1)



図版64 F13-1 住居跡(2)

り方は、床面から壁下部を抉るような傾きをもっている。北西隅のピットと柱穴P₁は、埋土の状況から推測するとほぼ同時存在と考えられる。

本遺構の時期は、カンザシの出土、遺構の形態等から中世に位置づけられると考えられる。

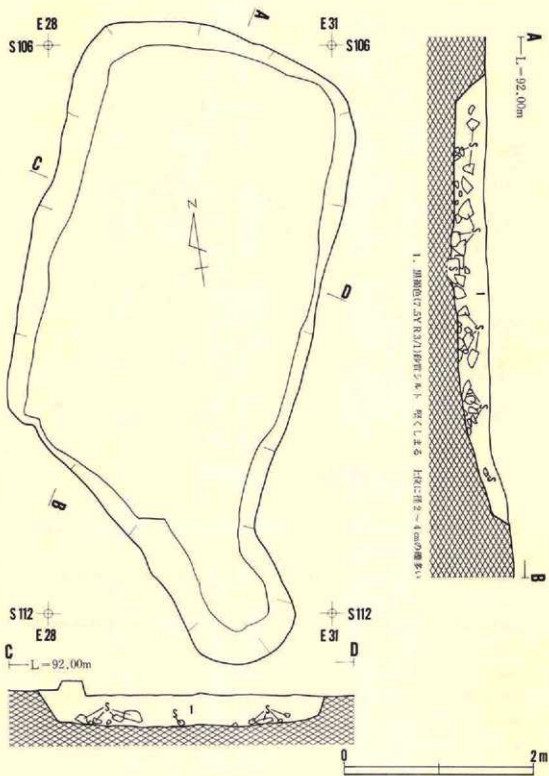
出土遺物 (図版127, 写真図版74)

土器 変形土器 (埋土) 391はロクロ成形されている底部片である。ロクロからの切り離しは回転系切りである。

鉄製品 釘 (埋土) 392は輪状に曲った釘である。断面は四角形である。

青銅品 ^{かんざし} 簪 (埋土) 393は先端の一部が欠損している。片面に花文が刻線で描かれている。頭部には耳かきがついている。中央で曲った状態で検出されている。

石製品 (埋土) 394は両端が破損している。細長い扁平な自然石を利用している。表面に磨痕がみられる。石質は凝灰岩である。



図版65 F21住居跡

F21住居跡（図版65、写真図版43）

調査区南側の北東に位置し、Ⅲ層下位～Ⅳ層上位で長方形の暗色部として検出されている。西7mにはE21住居跡がある。他遺構とは重複しない。

平面形は、南北に長い長方形を呈し、南東に舌状に張り出す出入口施設をもつ。規模は床面中央部で南北4.8m、東西2.7mを測る。出入口部は上場で、幅1.1m、長さ1.6mあり平均約10度の傾斜を呈している。埋土は、黒褐色砂質シルトの単層で堅くしまっており、埋土中位から床面にかけて径10～15cmの円礫が多く混入している。この埋土の状況は人為的に埋め戻されたことを示すものであろう。

壁は砂礫の多く混入するⅣ層中に構築されている。壁高は各壁の中央部では、北壁30cm、西壁30cm、南壁25cm、東壁27cmを測る。床面は堅くしまっているが、礫が露出し凹凸があり、且つ全体としても平坦でなく、中央部から南壁にかけ床面が凹面状を呈し北側が高くなっている。

柱穴・ピットは検出されていない。

本遺構の時期を決定する遺物は出土していないが、形態的な特徴から、中世に位置づけられるものと考えられる。

竪穴住居跡状遺構

ここで竪穴住居跡状遺構としたものは、竪穴住居跡以外の遺構で住居跡ほどの規模を有するものの遺構形態が不定なものを指している。

調査区域の中央部と南側で計2基検出されている。

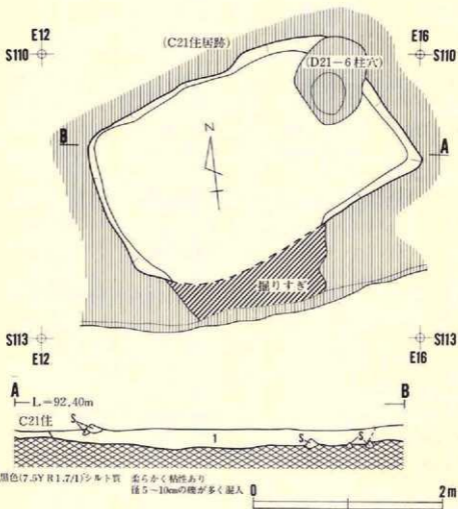
C22住居跡状遺構（図版66、写真図版11）

調査区南側のはば中央付近に位置し、C21住居跡、D20掘立柱建物跡の南東隅柱穴と重複している。重複する遺構との新旧関係は、古い順に、①C21住居跡、②本遺構、③D20建物跡である。

平面形は、東北東～西南西に長辺をもつ歪んだ長方形形状を呈している。規模は、底面中央で東西2.9m、南北1.8mを測る。埋土は単層であり、全体に小礫が混入する黒色シルト質土であるが、下位には径5～10cmの礫が、又遺構の北東隅には径10～20cmの礫の堆積がみられる。この埋土の堆積状況は、一部人為的な埋め戻しがなされたものと考えられる。

壁は、C21住居跡の床面を切って砂礫の多く混入するⅣ層土下位に構築されている。壁高（底面からC21住居跡床面まで）は全般に低く、5cm～8cmを測る程度である。

底面は、黒色土混入する砂礫層上面にあり、平坦でなく中央部がやや窪み且つ大小の礫が露



図版66 C22住居跡状遺構

最し凸凹する。

柱穴状ピット、土枕、周溝、カマドは検出されていない。

本遺構の属する時期は、出土遺物から平安時代以降と考えられる。

出土遺物 (図版126、写真図版74)

土師器

杯形土器

(埋土) 385はロタロ使用のもので内面がヘラミガキ調整されている。口縁部が欠損している。ロタロからの切り離しは回転糸切りである。内面は黒色処理されていたものであろう。

壺形土器

(埋土) 丹塗の壺—387は外面がヘラミガキ後、丹塗が施されている底部片である。内面調整はヘラナデである。

甕形土器

(埋土) 388は口縁部が外反している破片である。386は外面がハケメ、ヘラナデ、内面がヘラナデで調整されている底部片である。底部外面には木葉庄痕がみられる。

D14住居跡状遺構 (図版67、写真図版43)

調査区中央のやや東寄りに位置し、Ⅱ層下位～Ⅴ層(砂礫層)上位で検出されている。遺構の東側が水道管埋設工事によって擾乱されている。本遺構の東に、E14住居跡、F15—2住居跡がある。他遺構との重複はない。

平面の形状は、北側の台形状を呈する部分と、南側の方形に張り出す部分からなる。底面での計測値は、台形部が東西3.0m、南北2.7mを、方形部は各々約1.2mを測る。埋土は、小礫が傾か混入する黒色砂質シルトで堅くしまっている。

壁高は、砂礫を切っている西壁で7～8cmであるが、他は5cm以下と低い。底面は、西側は砂礫層の上位、東～南側は黒褐色土に砂礫が混入するⅡ層下位にあり、小さな凹凸があるが、全体的にはほぼ平坦である。

柱穴状ビット、土坑、周溝、カマドは検出されていない。

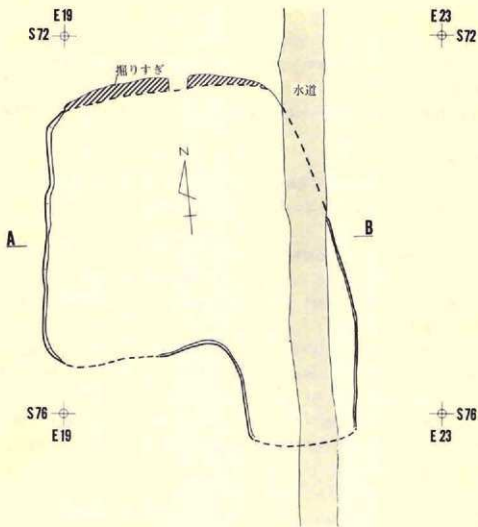
遺物の出土はなく、本遺構の属する時期は不明であるが、形態的には、方形の張り出し部をもつことから、「中世」に属する可能性もあると思われる。

墓 塚

調査区中央の南東に位置し、ほぼ同じ場所で4基検出されている。このうち3基が重複関係にある。2基が土葬墓、2基が火葬墓である。遺存状態は良好とは言えないが、各々の墓塚から人骨が出土しており、岩手医科大学野坂洋一郎教授に鑑定を依頼した。副葬品の出土はない。

E18—1墓塚 (図版68、写真図版44) 1号人骨

調査区中央の南東に位置している。東側2～3mにはE18—1住居跡がある。この付近では表土及びⅢ層黒色土の堆積が厚く、Ⅲ層下位相当面で、人骨(1号人骨)が検出され本遺構の



1. 黒色(7.5Y R 2/1)砂質シルト 小礫・礫わずかに混入



図版67 D14住居跡状遺構

存在が判明した。E18-3墓墳と西側で重複し、切られている。重複する墓墳の新旧関係は、E18-3墓墳が新しく、本遺構がより古い。

本遺構の形態、規模は、平面形が南北方向に長径をもつ楕円形で、断面形は浅皿状を呈している。開口部は $1.35\text{m} \times (0.9 + \alpha)\text{m}$ 、底部は $1.2\text{m} \times (0.8 + \alpha)\text{m}$ を測る。深さは、検出面から約 0.3m であるが、底面レベルと地表面レベルの差では約 0.75m となる。

埋土は、Ⅲ層起源の黒色シルト質土で柔らかい。

本墓墳は埋葬墓であり、人骨は後頭部を北壁寄りにやや仰向けを呈する状態で検出され、大腿骨と脛骨と思われる骨が重なるように出土している。埋葬形式は、屈身座位葬と考えられる。

副葬品等の出土はなく時期は明確にされ得ないが、墓墳の位置する場所が白藤氏宅地跡であり、かつて墓標があった地点と一致することから推測すると近世末葉ころに位置づけられるものと考えられる。

E18-2 墓墳 (図版68、写真図版44) 2号人骨

調査区中央の南東に位置している。Ⅲ層中で、炭化物及び人骨片の出土により墓墳の存在が判明したが、遺構平面形の検出は、E18-1墓墳検出面まで下がった。E18-1、3墓墳と重複し、E18-3墓墳に切られているが、E18-1墓墳との新旧関係は明確にされていない。

本遺構の形態、規模は、平面形が東西方向に長辺をもつ隅丸長方形を呈し、開口部径は南北 $0.7\text{m} \times$ 東西 $(1.1 + \alpha)\text{m}$ を測るものと思われる。検出面からは深さ 0.15m を測り、断面形は底部が平坦な浅皿状を呈しているが、底面と地表面とのレベル差は約 0.7m である。

本墓墳は、火葬再葬墓であり埋土中には火熱を受けた人骨片、炭化物が混在しており、西壁及び北壁寄りから木の材質が付着している釘が数点出土している。

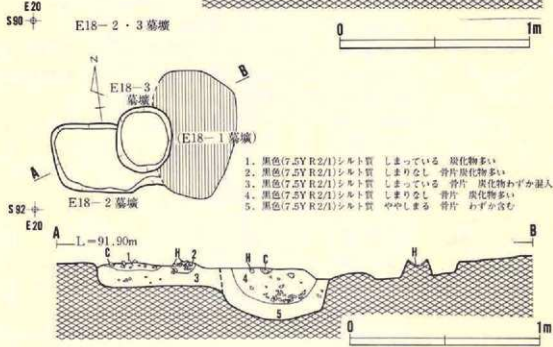
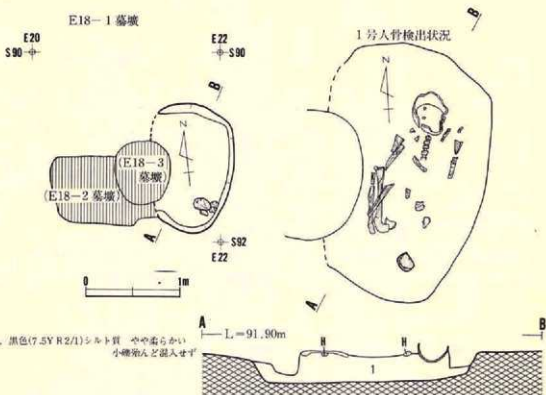
副葬品の出土はなく時期は不明であるが、E18-1墓墳と同じ墓域に属することから推測して近世末葉以降に位置づけられるものと考えられる。

E18-3 墓墳 (図版68、写真図版44) 3号人骨

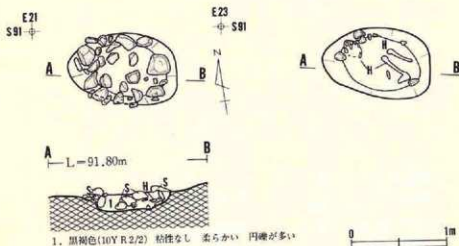
調査区中央の南東に位置し、Ⅲ層中で、炭化物、焼成を受けた人骨片の出土で墓墳の存在が判明したが、遺構平面の検出は下がり、Ⅲ層下位となった。E18-1、2墓墳と重複し、他の遺構を切っているもので、新旧関係はE18-1、2墓墳より新しい。

本遺構の形態、規模は、平面形が隅丸形状を呈し、開口部は南北 $0.68\text{m} \times$ 東西 0.58m 、底部は南北 $0.55\text{m} \times$ 東西 0.5m を測る。断面形は、底面が凹む丸底の鉢状を呈し、検出面からの深さは中央部で約 0.4m を測るが、底面中央部と地表面とのレベル差は約 0.95m である。

この墓墳は、E18-2墓墳と同様、火葬再葬墓であり埋土中には、炭化物、火熱を受けた人



図版68 E18-1・2・3 墓塚



1. 黒褐色(10YR2/2) 粘性なし 柔らかい 円礫が多い

図版69 E18-4 墓墳

骨片が混在しており、上位の4層はしまりなくボロボロしている。

副葬品の出土はないものの、E18-1墓墳より新しいことから推定して、近世末以降のものと考えられる。

E18-4 墓墳 (図版69、写真図版45) 4号人骨

調査区中央の南東に位置し、E18-1墓墳の北側約1.5mにある。Ⅲ層下位で楕円状に広がる集石によって検出されている。

形態、規模は、平面形が東西方向に長径をもつ楕円形で、開口部径が1.15m×0.75m、底部径が0.9m×0.55mを測る。断面形は、底部に若干の丸味をもつ浅皿状で、深さは検出面から約0.15mを測るが、底面と地表面とのレベル差は約1.1mである。

埋土上位(検出面付近)から底部にかけ径10cm~20cmの垂角礫が多数あり、周辺から底部中央に向け重なるように堆積している。これらの礫は、遺構が埋没する過程で上部にあったものが堆積したものであろう。

本墓墳は、埋葬墓であり人骨頭部が北西壁際に、大腿骨と思われる骨が西壁寄りから出土しているが、人骨の遺存状態は良好ではなく極めて脆くなっている。

遺構の規模、人骨の出土状況から推測して、埋葬形式は屈葬と考えられる。

本遺構の時期を決定する副葬品などの遺物の出土はないものの、E18—1、2、3墓墳とはさほどの時期差がないものと思われる。

土 坑

土坑は3基検出されている。調査区の北側、中央部及び南側に各々1基ずつ位置している。そのうちの2基が、住居跡と重複関係にあり、住居跡を切っている。

B03土坑（図版70、写真図版45）

遺構は調査区北端部西側に位置している。当初B03住居跡のカマドと考えられたものであるが、精査の結果土坑と判明した。また、B03住居跡との新旧関係は、竪穴住居跡を切っていることから（新）B03土坑→（旧）B03住居跡となる。規模は開口部1.02m×0.82m、底部0.8m×0.60m、深さ0.60mを測る。平面形は多少歪みのある隅丸長方形を呈している。埋土は黒色、黒褐色、褐色、にぶい黄褐色のシルト質ないし砂質土の12層に細分される。上部は黒色～褐色砂質シルトの混合層で占められ、南側を中心に径5cm～30cm大の亜角礫と亜円礫が40個ほど混入している。埋土の堆積状況は人為的な埋め戻しの様相を示している。

壁は底面から緩やかに外傾（100度～120度）し立ち上がる。底面は堅く締まり、ほぼ平坦である。

遺物の出土はなく時期は不明である。

E15土坑（図版70、写真図版45）

調査区中央の東寄りに位置する。E16—2住居跡と重複している。当初本遺構の存在が不明であり、E16—2住居跡の床面で検出しているが、新旧関係は本遺構が新しく、E16—2住居跡が古い。遺構の西側は、水道管埋設工事により攪乱されている。

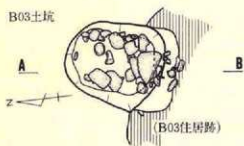
底部から、家畜の骨（白歯より馬と推測される）が出土しており、家畜埋葬穴と考えられる。

平面形は、北西—南東方向に長径をもつ不整な楕円形状を呈している。規模は、開口部が約2.0m×1.5m、底部は約1.75m×1.3mを測る。断面形は、浅鉢状を呈し、中央部での深さは西壁上面からは約0.6m、地表面からは約0.9mを測る。

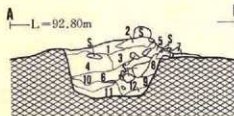
壁は、北壁の上部がⅣ層土で他はⅤ層の砂礫層である。底部は大小の礫があり凸凹する。

遺物 底面から馬と思われる家畜骨が出土している以外、他の遺物は出土していない。遺構の時期としては近世以降のものと推測される。

B03土坑

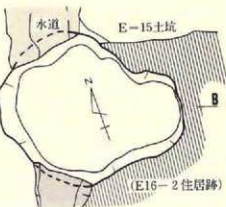
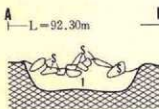
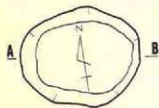


(B03住居跡)

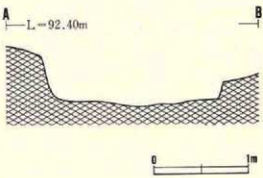


1. 黒褐色(10Y R 2/2)砂質シルト 堅くしまっている 黄褐色土混入
2. 黒～黒褐色(10Y R 2/1～2/2)砂質シルト ややしまっている
3. 黒褐色(10Y R 2/2～3/2)砂質シルト 黄褐色・黒褐色の混土
4. 黒色(Y R 2/1)シルト質 ややしまっている
5. 黒色(10Y R 2/1)砂質土 ややしまっている
6. 黒色(10Y R 2/1)シルト質 柔らかい(3層に類似)
7. 黒色(10Y R 2/1)シルト質 堅くしまる
8. におい黄褐色(10Y R 5/4)砂質土 やや柔い 粘性なくサラサラする
9. 黒色(10Y R 2/1)砂質土 黒色と黄褐色土の混土
10. 黒色(10Y R 1.7/1)砂質シルト しまりなく柔らかい
11. 黒色(10Y R 2/1)砂質土 柔らかい 粘性なくバラバラする
12. 黒褐色(10Y R 2/2)砂質土 ややしまっている

F20土坑



(E16-2住居跡)



図版70 土坑

F20土坑（図版70、写真図版45）

調査区南側の北東寄りに位置し、Ⅲ層下位で集石及び楕円形の暗色部として検出されている。南東3mにはF21住居跡がある。他遺構との重複はない。

平面形は、開口部、底部とも東西方向に長径をもつ楕円形を呈している。規模は、開口部が約1.25m×1.0m、底部は約1.0m×0.85mを測る。断面形は浅皿状を呈し、中央部での深さは約0.3mを測る。壁は、Ⅲ層下位～Ⅳ層中にあり、45度位の角度で外傾して立ち上がる。

底面はほぼ平坦で、堅くしまっている。

埋土は、Ⅲ層起源の黒色シルト質土の単層で、小礫の混入が少なく堅くしまっている。埋土上位には、径10～20cmの円礫が重なりあって堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物の出土はなく本遺構の時期は不明である。

掘立柱建物跡及び柱穴群

掘立柱建物跡

09掘立柱建物跡（図版72、写真図版46）

調査区北側の南西寄りに位置し、北東部柱穴がC09住居跡と重複し、C09住居跡を切っている。礫が多く混入するⅣ層中で検出されているが、検出面の北側が攪乱されており検出されない柱穴もあったと思われる。

検出された規模は、桁行2間、梁行2間である。棟方向は西北西—東南東にもつと思われ、殿北に対し、60度西傾している。桁行北側間尺は西から2.4m、1.7m（現行尺8.0尺、5.7尺）で、これに対応する南側間尺は西から2.2m、2.6m（現行尺7.3尺、8.7尺）である。

梁行西側間尺は北から2.2m、1.5m（現行尺7.3尺、5.0尺）であるが、東側は対応する間尺は不明で梁行3.4mを測る。全体に歪んだ柱穴配置を呈している。

柱穴は、口径20cm～28cm程の円形を呈し、埋土は黒褐色の砂質土、砂質シルトの単層で、遺物は出土していない。

この建物跡に伴う可能性のある現地性焼土遺構—C10焼土遺構が、建物跡内の東寄り検出されている。焼土が50cm×30cmの不整形な広がり呈し、色調は明赤褐色で、厚さは約5cmに及ぶ。遺物は出土していない。

この掘立柱建物跡の属する時期は、出土遺物はないもののそれほど古いとは考え難く、近世以降に属すると思われる。

D20掘立柱建物跡（図版76、写真図版46）

調査区南側の北東寄りに位置し、C21住居跡、D21住居跡、E21住居跡等と重複している。規模は、桁行5間（7.4m）、梁行4間（5.6m）で、棟方向は西北西—東南東で、磁北に対して68度西偏している。桁行北側間尺は西から1.4m、1.3m、1.4m、1.2m、1.4m、（現行尺4.7尺、4.3尺、4.7尺、4.0尺、4.7尺）で、南側間尺は西から1.4m、1.4m、1.4m、1.4m、1.8m（現行尺4.7尺、4.7尺、4.7尺、4.7尺、6.0尺）である。梁行間尺は西側では北から1.3m、1.4m、1.4m、1.5m（現行尺4.3尺、4.7尺、4.7尺、5.0尺）であるが、東側の柱穴は明確にされ得ず間尺は不明である。柱穴間の平均は、桁行、梁行ともほぼ1.4mである。

柱穴は径30cm～60cm、深さ20cm～50cmの円形ないし楕円形を呈している。柱当りは明確にされていない。柱穴はA—B列はⅣ層の黒褐色土中にあるが、A—B列の南側の柱穴はⅤ層の砂礫層中に及ぶ。埋土は、黒色～黒褐色を呈する砂質シルト、シルト質土に黄褐色シルトがブロック状に混入するものが多く、全体に柔らかくしまっていない。柱穴D21—3、D21—6には径10cm程の亜角礫が多く混入し埋まり切らず空洞部が見られる。また、柱穴D20—6、D21—2、E21—7には脱色したモミ殻状のものが多く出土している。

この建物跡に伴うと思われる炉跡が、東寄りに位置し検出されている。円形を呈する焼土が径40cm、径20cmの広がりをもって隣接している。焼土は橙色、明赤褐色を呈し、厚さは最大7cmに及ぶ。大きい焼土の周辺にはシルト質状の灰が広がっている。

この掘立柱建物跡の属する時期は、柱穴の埋土の状況や、出土するモミ殻等から近世末頃と考えられる。

出土遺物（図版128、写真図版75）

D20—6柱穴（埋土）404は断面が四角形で釘状の形態を呈する鉄製品である。周囲に木質が付着している。一部縦に割れている。頭部の片側に欠損痕がある。名称は不明である。

405は短形の切釘である。2本が頭部逆に鑄着している。

E20—6柱穴（埋土）403は釘である。断面は頭部が長方形、中央が四角形、先端部がつぶされて薄く長方形を呈している。

柱穴群

北調査区柱穴群（図版71・72、写真図版47）

北側の調査区に位置し、A04住居跡（中世）の南側にある一群（A04—06柱穴群）、B08住居跡の北側にある一群（B07—08柱穴群）、B09掘立柱建物跡の南側にある一群（C11柱穴群）がある。いずれも柱穴の分布が西側調査区域外へ広がっているものと考えられ、建物としての

まとまりを見ていない。

柱穴は、円形～楕円形を呈し、口径20cm～50cm、深さ10cm～30cmと大小様々あるが、口径30cm、深さ15cm程度のものが多い。埋土は黒褐色の砂質土、シルト質土で、全体に柔らかい。

遺物は出土していないものの、中世住居跡を切っている柱穴もあるので、时期的には中世以降に属するものと考えられる。

中央調査区柱穴群（図版73～75、写真図版47）

中央調査区の中央から西側にかけて広く分布している。又、中央東端には柱穴列を構成すると思われる一群（F15柱穴群）がある。この一画には、現代の農作業用の枕痕も多数あった。

これらの柱穴は、何棟かの建物を構成していたものと考えられるが、建物としてのまとまりを見い出せるものはない。

柱穴の規模は、口径約30cm、深さ20cm～30cm程のものが多いが、南西寄りのA16区、B15～16区に位置する柱穴は口径40cm～50cm、深さ40cm前後と規模がやや大きいものである。

埋土は単層で、Ⅱ層起源の黒色～黒褐色シルト質土で小礫、籾の混入が極めて少ないものが多い。一部の柱穴から陶器片、土師器片がわずかに出土している。又、D15～16柱穴の埋土上部から炭化米が多量に出土している。

これらの柱穴からの出土遺物は少ないものの、中世掘立柱建物跡に伴う柱穴群と考えられる。

出土遺物（図版128、写真図版75）

A16—6 柱穴跡

（埋土）401は土師器甕の体部下半の破片である。内外面はハケメで調整されている。

B15—2 柱穴跡

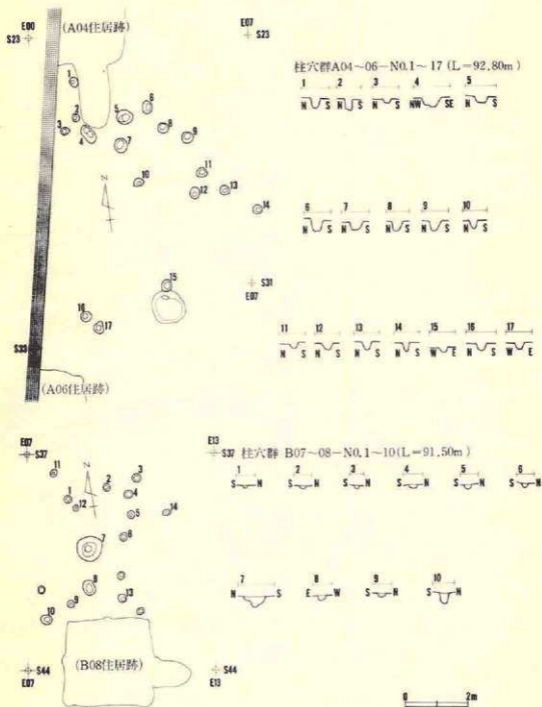
（埋土）402は長方形を呈すると推定される鉄板状の鉄製品である。厚さ1mm、幅3.2cmである。両端が欠損している。中心に径1～2mmの孔が2個みられる。両面に木質が付着している。名称は不明である。

南調査区柱穴群（図版76・77）

南側調査区の北東寄りに位置し、D20掘立柱建物跡の周辺、及び南側にある一群（E23柱穴群）である。建物としてのまとまりは見い出せない。

柱穴はほぼ円形を呈し、口径20cm～50cm、深さ20cm～40cmを測るものである。柱穴の埋土は黒褐色の砂質シルト、シルト質土で、柱当りは明確にされていない。

遺物の出土はないものの、近世以降に属すると思われる。



图版 71 柱穴群 (1)

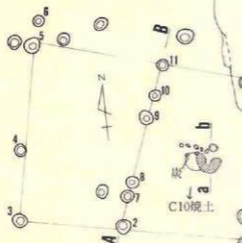
E08
S48

B09建物

C09住居跡

水道

E15
S48

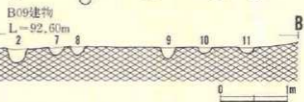
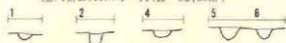


1. 明赤褐色(5Y R 5/6)焼土
2. 黒色(7.5Y R 1.7/1)炭化物を含む
3. 黒褐色(7.5Y R 2/2)砂質土

a C10焼土
L-92.60m

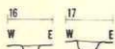


柱穴群B09N0.1~11(L=92.60m)

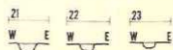
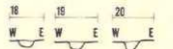


S55

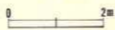
柱穴群C11-N0.13~23(L=92.60m)



水道

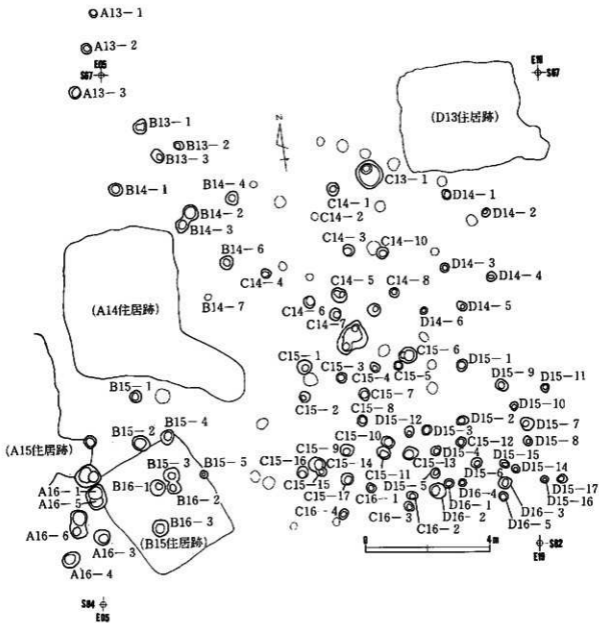


S62
E08



S62
E15

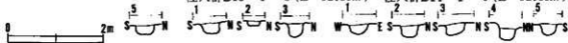
図版72 B09建物跡・柱穴群(2)



柱穴群A13-1 ~ 3 (L=92.80m) 柱穴群A16-1 ~ 5 (L=92.50m)

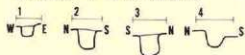


柱穴群B13-1 ~ 3 (L=92.80m) 柱穴群B14-1 ~ 6 (L=92.80m)

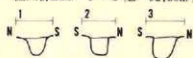


図版73 柱穴群(3)

柱穴群B15-1~4 (L=92.60m)



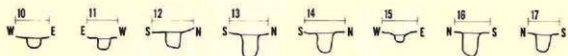
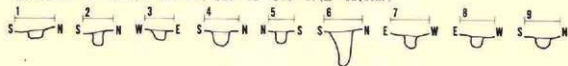
柱穴群B16-1~3 (L=92.50m)



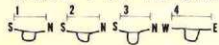
柱穴群C14-1~10 (L=92.80m)



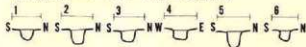
柱穴群C15-1~C15 (L=92.70m) C15-12~C15-17 (L=92.60m)



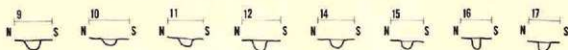
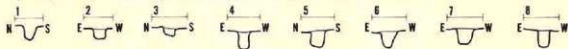
柱穴群C16-1~C16-4 (L=92.60m)



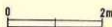
柱穴群D14-1~D14-6 (L=92.80m)



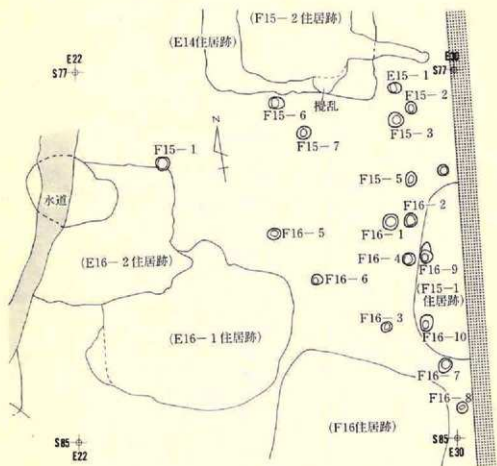
柱穴群D15-1~D15-17 (L=92.60m) D15-16 (L=92.40m)



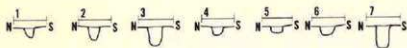
柱穴群D16-1~D16-5 (L=92.60m)



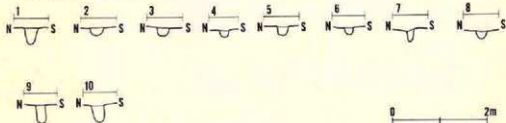
图版 74 柱穴群(4)



柱穴群F15-1~7 (L=92.30m)



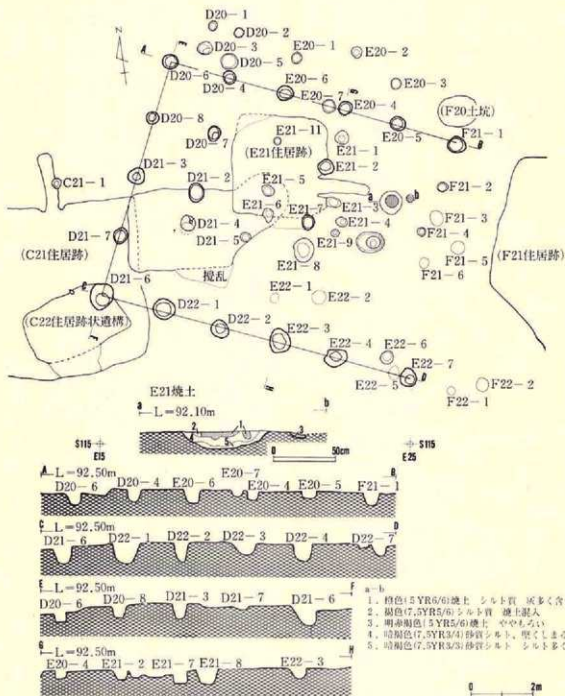
柱穴群F16-1~10 (L=92.30m)



図版75 柱穴群(5)

E15
+ S100

E25
+ S100

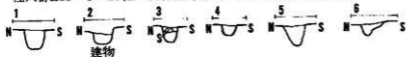


図版76 D20建物跡

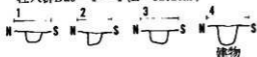
柱穴群(E20-1~7 L-92.10m、E20-6はL-92.30m、E20-7はL-92.20m)



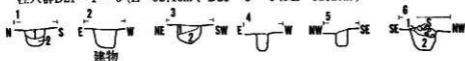
柱穴群E21-1~16(L-92.10m、E21-5・6はL-91.70m)



柱穴群D20-1~4(L-92.10m)



柱穴群D21-1~6(L-92.10m、D21-3・6はL-92.20m)



C21-2(L-92.30m)

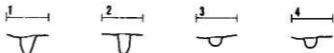


E20
S115

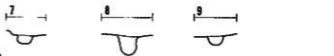
E25
S115

E23-1

柱穴群E23-1~4、7~9(L-92.40m)



E23-3



E23-4

E23-7

E23-9

E23-8

S120
E20

S120
E25



図版77 柱穴群(6)

井戸跡

調査区中央部に位置し、1基検出されている。

C17井戸跡（図版78、写真図版10）

遺構は、調査区中央部南寄りのC17住居跡と重複し位置する。新旧関係は本遺構がC17住居跡を切っていることから（新）本遺構→（旧）C17住居跡となる。検出はC17住居跡床面精査中に黒褐色土の落ちこみによって確認されたものである。規模は上場で108cm×98cm、深さ92cmの隅丸方形を呈している。埋土は冠水の為不詳な箇所もあるが黒色土と黒褐色土の交互層で構成され、砂土と径1cm～5cm大の小礫を多く含んでいる。底部は砂礫層中にあり、常時冠水をしている。地表施設の井桁や地下設備の井筒は検出されない。埋土の堆積状況は自然堆積の様相を示している。

出土遺物（図版128・144～148、写真図版75・86～89）

青磁器（埋土）601は舶載の青磁花瓶の破片である。外面に花文が貼付されている。中国の元の時代（13～14世紀）のもものと鑑定されている。一般にきぬた青磁といわれているという。

木製品（埋土）602～623の22点の木材、木製品が出土している。杭状のもの、板状のものなどが出土しているが、その名称については不明である。

石製品（埋土）406は刀状を呈し片側が欠損している。表面は磨痕や削痕がみられる。先端部は一部剥離している。石質は白色細粒凝灰岩である。

溝跡

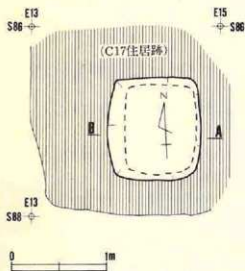
遺跡が2条検出されている。遺構は、1条が東一西にのび西側調査区域外に、もう1条は東北東一西南西にのび東側調査を区域外へと続くものである。

B12溝跡（図版80、写真図版48）

調査区中央の北西端に位置し、Ⅱ層下位で検出されている。南3mにはB13住居跡がある。他遺構との重複はない。

遺構はやや緩い湾曲状を呈し東西にのび、西側は調査区域外へと続く。東側は削平を受け不明であるが、調査区の中央部から東側にかけては検出されていないことから、東側へは5m前後延びる程度と考えられる。

検出された範囲は東西約2.3mで、規模は、開口部幅0.55m、底部幅0.4m、深さは10～15cmを測る。断面形は浅皿状を呈し、壁は30～40度の緩い角度で外傾し立ち上がる。埋土は黒褐色



図版78 C17井戸跡

の砂質土で堅くしまっている。

底部は、砂礫層の上面にあり、大小の礫が露呈している。底面レベルは、東側が若干低くなっている。

遺物の出土はなく本遺構の時期及び性格は不明である。

E06溝跡（図版79、写真図版48）

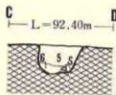
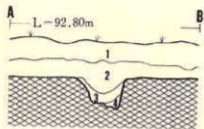
調査区北側の北東寄りに位置し、Ⅲ層下位～Ⅳ層上位で検出されている。南5mにはE07住居跡がある。他遺構との重複はない。

遺構は、東北東—西南西方向に緩く湾曲を呈し、東側は調査区域外へと続いている。検出された長さは20.5mである。規模は、開口部幅40～50cm、底部幅30～45cmで、深さは西側でやや深く約30cm、東側では約20cmを測る。

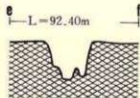
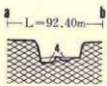
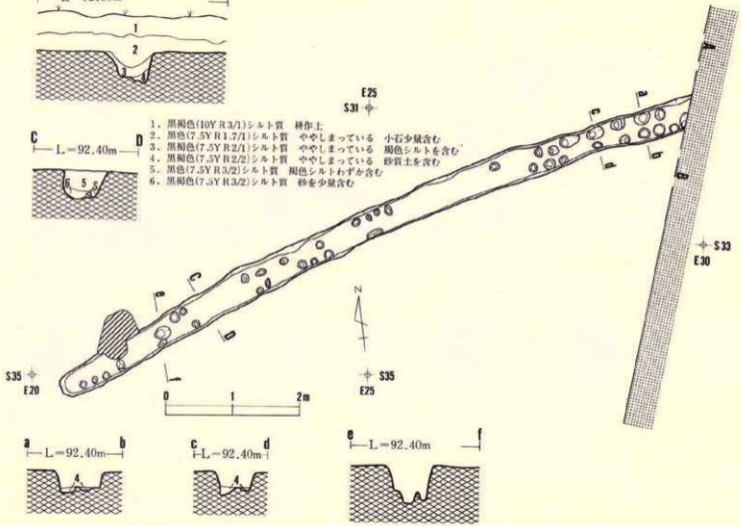
断面形は浅鉢状を呈し、壁は、一部緩い角で立ち上がる箇所もみられるものの、大半は70～80度の角度で外傾し立ち上がる。

埋土は、Ⅲ層起源の黒色シルト質土で、下部には褐色シルトがブロック状に混入する黒褐色シルト質土が堆積する。この埋土の堆積は、自然堆積によるものと考えられる。

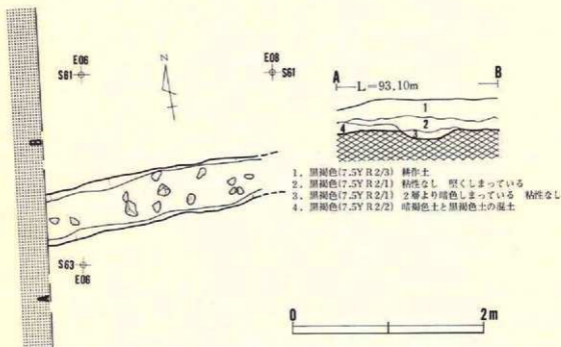
底部は、一部砂礫層上面にあるが、他はⅣ層下位にあり、底面レベル差は東西で約10cmあり



- 1. 黒褐色(10Y R3/1)シルト質 耕作土
- 2. 黒色(7.5Y R1.7/1)シルト質 ややしまっている 小石少量含む
- 3. 黒褐色(7.5Y R2/1)シルト質 ややしまっている 褐色シルトを含む
- 4. 黒褐色(7.5Y R2/2)シルト質 ややしまっている 砂質土を含む
- 5. 黒色(7.5Y R3/2)シルト質 褐色シルトわずか含む
- 6. 黒褐色(7.5Y R3/2)シルト質 砂を少量含む



図版 79 E06溝跡



図版80 B12溝跡

西側で僅か低くなっている。底部の壁際には副穴が多数あり、対をなすように全体に配置される。副穴は、円形～楕円形を呈し、開口部は25cm×15cm～10cm×10cm（径15cm程度のもが多い）で、深さは5～10cm程である。

遺物として埋土中から土師器破片が1点出土している以外、他に出土遺物はない。本遺構の時期は埋土の土質が古代住居跡のものに類似する等のことから、古代に位置づけられると思われる。

焼土遺構

焼土遺構として10基検出し、精査している。このうち2基については、掘立柱建物跡に伴うものと考えられたので、本項から除外し該当する遺構に記載した。ここでは8基の焼土遺構について記述する。8基のうち、現地性のもの3基で他は異地性と思われるものである。

B11焼土遺構（図版82）

調査区北側の南西寄りに位置し、Ⅳ層下位で検出されている。南西5mにはB12溝跡がある。焼土は径0.3mのはぼ円形に広がり、赤褐色を呈しやや堅くしまっている。焼土の厚さは約4cmを測る。周辺にある礫は僅かであるが、焼成を受け赤変している。焼土を含む0.8m×0.5mの楕円形状の範囲には、焼土粒、炭化物が僅か散在する。

この焼土遺構は、現地性のものであろう。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

B17焼土遺構（図版81、写真図版49）

調査区中央の南西寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。東6mにはD17-2住居跡がある。焼土及び焼土粒は、北東-南西方向に長い不整楕円形状の約2.1m×0.75mの範囲に広がり、検出面より下位の中央付近には、にぶい赤褐色を呈する焼土塊が約0.9m×0.6mの楕円形状に広がる。この焼土塊は、やや粘性があり堅くしまっており、黒色土が小ブロック状に混入する。焼土の厚さは最大10cmを測る。

周辺部の焼土及び焼土粒は、黒〜黒褐色土と混合しブロック状を呈している。

この焼土遺構は、現地性のものではなく、異地性のもので窪み状を呈する場所に投棄されたものと考えられる。

遺物 本遺構北側の、検出面から15cm下位の焼土粒混入する黒色シルト質土中から、有孔の貨幣（銅銭）が1点出土している。腐食が激しく、外縁は欠損しており銭文も不明である。

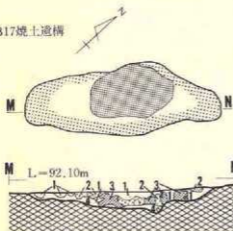
B19焼土遺構（図版81、写真図版49）

調査区南側の北西寄りに位置し、Ⅳ層上位で検出されている。北東6mにはB17焼土遺構がある。焼土及び焼土粒は、北西-南東方向に長い不整楕円形状を呈し約1.35m×0.6mの範囲に広がる。焼土の色調は褐色で、柔らかいもの固いものが混在しブロック状を呈している。

焼土の厚さは最大20cmを測る。

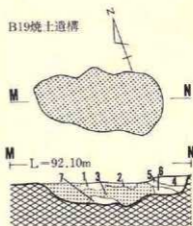
この焼土は、異地性と考えられ、窪地に投棄されたものと思われる。

B17焼土遺構

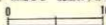


1. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 堅くしまる 焼土粒混入
2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)シルト質 黒色土と焼土の混合土
3. におい赤褐色(5Y R 4/4)シルト質 焼土 黒色土の小ブロック混入
4. 黒色(7.5Y R 2/1)シルト質 上位に焼土粘混入

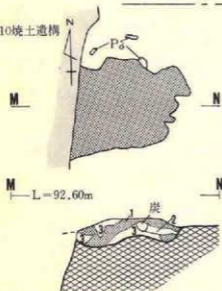
B19焼土遺構



1. 黄褐色(10Y R 5/6) 粘性なし 堅くしまっている
2. 黒褐色(10Y R 2/2) 粘性なし 柔らかい 焼土を含む
3. 黒褐色(10Y R 2/2) 粘性なし 柔らかい 焼土が全体に混入
4. 黒褐色(10Y R 2/2) 粘性なし 柔らかい
5. 黒褐色(10Y R 2/2) 粘性なし
6. 黒褐色(10Y R 2/2) 粘性なし 柔らかい 焼土混入
7. 黒色(10Y R 2/1) 粘性なし 焼土わずかな含む

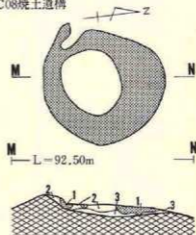


C10焼土遺構

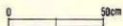


1. 赤褐色(5Y R 4/6)柔らかい。焼土
2. 黒褐色(10Y R 2/3)柔らかい。粘性なし 焼土粒混入
3. 黒褐色(10Y R 2/2)柔らかい。小粒混入

C08焼土遺構

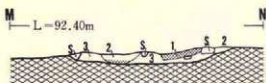
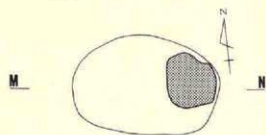


1. 明赤褐色(5Y R 5/6)シルト質 焼土
2. 黒褐色(7.5Y R 2/2)シルト質 焼土・炭混入する
3. 極暗褐色(7.5Y R 2/3)シルト質 焼土の混入少ない



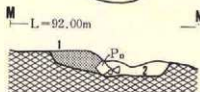
図版81 焼土遺構(1)

B11焼土遺構



1. 赤褐色(5Y R 4/8)焼土
2. 黒褐色(7.5Y R 2/1)炭化物混入 下位は焼成を受けている
3. 暗褐色(7.5Y R 3/4)砂・小石混入 炭化物含む

D10焼土遺構



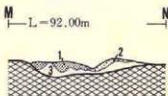
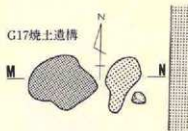
1. 赤褐色(5Y R 4/6)砂質土 焼土 炭化物混入
2. 黒褐色(10Y R 2/2)粘性なし しまっている 炭化物混入

E18焼土遺構 炭化物混入土



1. 黒褐色(10Y R 2/2)粘性なし 柔らかい 焼土わずか含む
2. 暗褐色(7.5Y R 3/3)粘性なし 柔らかい 焼土(5Y R 4/6赤褐色)と黒褐色の混土

G17焼土遺構



1. にぶい赤褐色(5Y R 4/4)シルト質 焼土
2. にぶい赤褐色(5Y R 4/3)シルト質 焼土混入する
3. 黒褐色(10Y R 2/2)シルト質 地山

0 50cm

図版82 焼土遺構(2)

遺物は出土していない。

C08焼土遺構（図版81、写真図版49）

調査区北側の中央付近に位置し、Ⅲ層下位で検出されている。東4mにはD07住居跡がある。焼土は、外径0.6m、内径0.3m程のドーナツ型に広がる。中央部は攪乱を受けたものか、焼土、炭化物が混入する黒褐色シルト質土である。

焼土の色調は明赤褐色であるが強く焼成を受けたとは思われず、炭化物が混入し柔らかい。

焼土の厚さは約5cmを測る。この焼土遺構は、現地性のものであろう。

遺物の出土はなく、時期不明である。

C10焼土遺構（図版81、写真図版49）

調査区北側の中央南寄りに位置し、Ⅳ層上位で検出されている。東側にD10焼土遺構、北3mにはC09住居跡がある。遺構の西側は、水道管理施設工事で損壊されているので、焼土は約0.55m×0.45m方形状の範囲に残存している。

焼土の色調は赤褐色を呈し、粘性はほとんどなく柔らかい。焼土の間には、木根の攪乱により黒褐色土の混入がみられる。焼土の厚さは中央部で約6cm、周辺部ではやや厚く7～8cmを測る。この焼土遺構は、現地性のものであろう。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

D10焼土遺構（図版82、写真図版49）

調査区北側の中央南寄りに位置し、Ⅳ層上位で検出されている。すぐ西側にC10焼土遺構がある。焼土及び焼土粒は、長方形を呈する約0.8m×0.35mの範囲に広がる。焼土の色調は、赤褐色で堅くしまっている。焼土の下位には楕円を呈する浅皿状の土坑がある。土坑の開口部は0.85m×0.75m、底部は0.6m×0.5mを測る。底部は砂礫層の上面で凸凹している。中央部での深さは約10cmである。東壁寄りの埋土は炭化物を備か含む黒褐色砂質土で堅くしまっている。この焼土は、異地性のもので、浅皿状を呈する土坑付近に投棄したものであろう。

遺物 焼土の下位及び土坑の底部から奈良時代の土師器製の破片が出土している。器面調整は、外面縦位のヘラミガキ、面内は横位、斜位のナデであり、焼成よく堅緻である。

出土遺物から、焼土及び土坑は、奈良時代に属するものと考えられる。

E18焼土遺構（図版82、写真図版49）

調査区中央の南側に位置し、黒褐色を呈するⅣ層中で検出されている。北2mにはE18-1

墓域、北東5mにはE18住居跡がある。

焼土及び焼土粒混合土が径0.5mの円形に広がり、中央部及び東西に焼土粒、炭化物が僅か混入する黒褐色土が覆う。焼土の色調は赤褐色を呈し、柔らかく粘性は少なく、黒褐色砂質土と混合し、レンズ状に堆積し厚さ5～7cmの暗褐色砂質シルトの焼土混土（第2層）を構成する。この焼土は、異地性のもので窪地に投棄されたものと思われる。

焼土周辺から奈良時代の土器器壁破片が出土している。

G17焼土遺構（図版82）

調査区中央の南東寄りに位置し、Ⅲ層下位で検出されている。北2mにはF17住居跡がある。焼土及び焼土粒が不整形を呈する2ヶ所にあり、0.35m×0.3mと0.3m×0.15mの広がりをもつ。焼土はにぶい赤褐色で、堅くしまっており、厚さは約5cmを測る。東側では黒褐色土が混入し暗色を呈す。この焼土は、異地性のもと思われる。

遺物として焼土内に奈良時代土器器壁破片がわずかに混入していたが、細片のため掲載していない。焼土の投棄された時期は、奈良時代以降であろう。

V 遺構外の出土遺物

土師器

杯形土器（Ⅰ類ロクロ不使用）（図版129・130、写真図版76・77）

内黒の杯 図示したものは13点である。

ⅠA-a類（外面一段・沈線、内面一区切り、段・沈線の下半—ハケメ・ヘラミガキ）1点
407はグリッドB23Q₂Ⅰ層から出土している。口縁部は内彎、底部は丸底である。

ⅠA-b類（外面一段・沈線、内面一区切り、段・沈線の下半—ヘラケズリ・ヘラミガキ）1点
408はグリッドF16Q₂Ⅱ層から出土している。口縁部、底部が欠損している。外面には沈線を巡らせている。

ⅠC-b類（外面一段・沈線、段・沈線の下半—ヘラケズリ）1点
419はグリッドF08Q₂Ⅱ層から出土している体部の破片である。

ⅠC-c類（外面一段・沈線、段・沈線の下半—ヘラケズリ・ヘラミガキ）2点
409はグリッドD23Q₂Ⅱ層、420はグリッドE17Q₂Ⅱ層から出土している。409は口縁部、底部が欠損している。420は体部破片である。

ⅠD-b類（外面一段、稜下半—ヘラケズリ・ヘラミガキ）1点
421はグリッドE19Q₂Ⅱ層から出土している口縁部の破片である。口縁部は内彎している。

ⅠE-a類（内外面一区切り無し、外面—ロコナゲ、ヘラケズリ）1点
413はグリッドF17・18のⅢ層から出土している。口縁部が内彎している。底部は欠損している。

ⅠE-c類（内外面一区切り無し、外面—ヘラミガキ）1点
414はグリッドD19Q₂Ⅱ層から出土している。口縁部が内彎し底部が丸底を呈している。外面は丁寧なヘラミガキが施されている。口径は9.5cmと小型である。

上記以外の5点は、口縁部が欠損していたり（415～417・442）、底部が欠損していたり（418）していて分類できなかったものである。底部は415が丸底風、416が丸底、417、442が平底を呈している。415は外面がヘラミガキ、416、442は底部外面がヘラケズリ、体部外面がヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。418は体部外面に段をもつ口縁部の破片である。

422は台付杯形土器の底部片と推定される。碗形に近い器形を呈している。外面はハケメ後ヘラミガキが施されている。

黒色の杯

1点出土している。グリッドF18Q₂Ⅱ層からである。内面に区切りを有し、外面に稜をもつ

I A類 口縁部が外傾し、底部が欠損している。内外面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

丹塗の杯 図示したものは7点である。すべて内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

I B-a類 (外面一段、段下半—ヘラケズリ) 1点

424はグリッドD 18Q₂Ⅱ層から出土している。口縁部がやや内傾し、底部中央が欠損している。底部は丸底を呈したと推定される。

I B-b類 (外面一段、段下半—ヘラミガキ) 1点

410はグリッドD 23Q₂Ⅱ層から出土している。口縁部が内傾している。底部は欠損している。

I B-c類 (外面一段) 1点

426はグリッドD 23Q₂・Q₃Ⅱ層から出土している。口縁部が欠損している。底部は丸底を呈している。外面はヘラミガキで調整されている。

上記以外の3点は427・429が底部片、428が口縁部片である。前者の2点の底部は平底風を呈している。427の外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、428、429の外面はヘラミガキで調整されている。

411は外面に段をもち、口縁部が内傾している。底部は欠損している。内外面はヘラミガキ調整されている。内面は黒色処理されていたものが、二次的加熱によって消失している。

杯形土器(Ⅱ類ロクロ使用)

内黒の杯 図示したものは18点である。

Ⅱ A類 (底部外面または体部下端と底部の外面にヘラケズリによる再調整) 3点

グリッドE 17Q₁Ⅱ層から2点(437、439)、F 17Q₁Ⅱ層から1点(438)出土している。すべて口縁部が欠損している。437は底部の外周に再調整が行なわれ、回転糸切り痕を残している。

Ⅱ B類 (体部外面の下端のみにヘラケズリによる再調整) 4点

グリッドF 15Q₁Ⅱ層(430)、F 17Q₁Ⅱ層(412)、F 18Q₁Ⅱ層(441)、F 19Q₁Ⅱ層(440)から、各1点出土している。430は口縁部が内傾している。内面下半のヘラミガキは放射状に行なわれている。他の3点は口縁部が欠損している。すべてロクロからの切り離しは回転糸切りである。

Ⅱ C類 (体部下端、底部外面に再調整が行なわれていない) 5点

グリッドF 16Q₁Ⅱ層から2点(435、443)、E 14Q₁Ⅱ層(445)、E 19Q₁Ⅱ層(434)、F 17Q₁Ⅱ層(436)から各1点出土している。すべて口縁部が欠損している。436の内面下半はナデ状のヘラミガキが放射状に行なわれている。底部に回転糸切り痕をもつ。

444は台付の内黒の坏である。口縁部が欠損している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。グリッドE17Q₄Ⅱ層から出土している。

431は底部が欠損し、口縁端部が外反している。432、433は墨書されている口縁部の破片である。431はE19Q₄Ⅱ層、432はF18Q₄Ⅱ層、433はF14Q₄Ⅱ層から出土している。

446～448の3点はもともと内面に黒色処理が施されたものが二次的加熱により黒色が消失したものである。446、448は口縁部が、447は底部が欠損している。446の体部下端はヘラケズリによる再調整が施されている。447は口縁部が外傾している。底部のある2点のロクロからの切り離しは回転糸切りである。446はF17Q₄Ⅱ層、447はF16Q₄Ⅱ層、448はF19Q₄Ⅱ層からそれぞれ出土している。

酸化焙焼成の須恵器

坏形土器（図版132、写真図版77）

449～451は口縁部が欠損している。すべてロクロからの切り離しは回転糸切りである。内外面の再調整はみられない。452はロクロナデが施されている口縁部の破片である。出土地点は449がE16Q₄Ⅱ層、450がB19Q₄・Q₅Ⅱ層、451がE17Q₄Ⅱ層、452がG20Q₄Ⅰ層である。

土師器

高坏形土器（Ⅰ類ロクロ不使用）（図版132、写真図版77） 2点出土している。

高坏

ⅠA類（脚上部が柱状、下部が円錐台状を呈する） 1点

453はグリッドF14Q₄Ⅱ層から出土している。坏部と脚の裾下部が欠損している。坏部の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。脚外面に段をもち、段上半が縦のヘラケズリ、下部がナデで調整されている。脚内面の調整はヘラケズリである。脚上部は中実である。

丹塗の高坏

ⅠA-b類（脚が円錐台状を呈し、脚に段をもたない）

454はグリッドE18Q₄Ⅱ層から出土している。脚の最上部、坏部が欠損している。内外面はヘラナデで調査されている。輪襷み痕がみられる。

甕形土器（Ⅰ類ロクロ不使用）（図版132～136、写真図版78～80）

ⅠA類（口縁部に沈線文） 3点

ⅠA-a類（弧状の沈線文） 1点

456はグリッドB19Q₄Ⅱ層から出土している口縁部の破片である。

ⅠA-b類（縦と山形の沈線文） 1点

455は縦の平行沈線の上に、連続山形沈線文が施されている口縁部片である。グリッドB

19Q₂Ⅱ層から出土している。

ⅠA-c類 (山形の沈線文) 1点

457はB19Q₂Ⅱ層から出土している。2本単位の連続山形沈線が施されている口縁部の破片である。

口縁部に沈線文のある土器(ⅠA類)は遺構外ではグリッドB19だけから出土している。

ⅠB類 (口縁部、頸部に段・沈線をもつ) 2点

ⅠB-a₁類 (口縁部が強く外反している) 1点

458はグリッドD23Q₂Ⅱ層から出土している。底部は欠損している。肩部にも段をもち、体部内外面はハケメで調整されている。口唇部は平坦である。

ⅠB-c類 (口縁部が内灣している) 1点

461はグリッドD17Q₁Ⅱ層から出土している口縁部片である。頸部に沈線を1本巡らせている小形の変である。

ⅠC類 (肩部に沈線をもつ) 1点

ⅠC-a₂類 (外面調整—ハケメ、ヘラミガキ)

462はグリッドE19Q₂・Q₃Ⅱ層から出土している。口縁部が外反している。体部下半は欠損している。体部外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメで調整されている。

ⅠD類 (肩部に段をもつ) 4点

ⅠD-a類 (口縁部が外反している) 2点

459・460はグリッドB18Ⅱ層から出土している。ともに長胴の変で、459は底部が欠損している。内外面は2点とも主にハケメで調整されている。459の口唇部は平坦である。

ⅠD-b類 (口縁部が外傾し外反している) 1点

463は体部の大半が欠損している。内外面はヘラナデで調整されている。グリッドF18Q₂Ⅱ層から出土している。

以上のほかに肩部に段をもつものがグリッドE17Q₁層(464)から出土している。口縁部、体部下半が欠損している。体部外面は磨滅して不明瞭だがヘラケズリ(?)、内面はヘラナデで調整されている。

ⅠE類 (肩部に段をもつ)

ⅠE-b類 (口縁部が外反し口縁端部が直上する) 1点

465は体部外面上半がヘラナデ(浅いヘラケズリかもしれない)、下半がハケメで調整されている長胴の変である。グリッドB18Ⅱ層から出土している。

ⅠE-c類 (口縁部が短く外反している)

467はグリッドF16Ⅱ層から出土している(F16住居跡の埋土の可能性もあり)。体部下半

は欠損している。体部がやや狭み、内外面は不定方向のヘラナデで調整されている。

ⅠF類（肩部に段、沈線、稜をもたない）

ⅠF—c₁類（口縁部が外傾し、体部外面調整がヘラナデ） 2点

466、468はともに体部下半が欠損している。468の口唇部は平坦で中央が窪む。ともに内面調整はハケメである。466はグリッドD10Ⅰ層、468はグリッドE19Ⅱ層から出土している。

469、471は口縁部片である。470、472、474は口縁部の破片である。470、474は肩部に段をもつ。472は口唇部が平坦である。器面調整は470がハケメ、472がヘラナデ、474がハケメ後ヘラミガキである。出土地点は469、471、474がグリッドF18Q₂Ⅱ層、479がC13Q₁Ⅰ層、472がF16Ⅱ層（F16住居跡埋土の可能性あり）である。

473はグリッドE19Q₂Ⅱ層から出土している体部片である。外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメで調整されている。

475～477は体部上半が欠損し、体部外面がヘラミガキで調整されている。内面調整は475、476がヘラナデ、477がハケメである。出土地点は475がグリッドD10、476がE06Q₂、07Q₁Ⅰ層、477がE17Q₂Ⅱ層である。477の底部外面には木葉圧痕がみられる。

478は口縁部が短く外傾し、内面がヘラミガキ後黒色処理されている口縁部片である。外面も一部ヘラミガキが施されている。グリッドE19Q₂Ⅱ層から出土している。

480、484～487、489～491は甕形土器の底部と思われるものである。外面は主にハケメ、ヘラナデで調整されている。底部内面は480が丸底風、487、491が丸底、そのほかは平底風を呈している。480はグリッドE17Q₁Ⅱ層、487はB18Q₁Ⅱ層、491はF18Q₂Ⅱ層から出土している。490、491の底部外面には木葉圧痕がみられる。

甕形土器（Ⅱ類 ロタロ使用）（図版137、写真図版80）

492はグリッドF18Q₁Ⅱ層から出土している底部である。ロタロからの切り離しは回転糸切りである。外面はロタロナデ後ヘラケズリにより再調整が行なわれている。

壺形土器（Ⅰ類 ロタロ不使用）（図版136・137、写真図版81）

壺

493は口縁部に沈線を巡らせている。体部下半が欠損している。内外面は主にヘラナデで調整されている。グリッドF17Q₁Ⅱ層から出土している。

479、481～483、488の壺形土器の底部と思われるものである。479は内外面が主にハケメで調整されている。481は外面がヘラケズリ、ヘラナデ、内面がヘラナデで調整されている。482の器面調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキである。483は外面がヘラケズリ後、部分的にヘラミガキ調整、内面がナデ状のヘラミガキ後、黒色処理が施されている。488は外面がハケ

メ、ヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。出土地点は479—E17Q₂Ⅱ層、481—F18Q₂Ⅱ層、482—E17Q₃Ⅱ層、483—A21Q₃Ⅰ層、488—E16Q₂Ⅱ層である。

丹塗の壺

I A類 (口縁部全面に丹塗) 2点

I A—b類 (口縁部が外反) 1点

495は肩部に稜をもち、底部が欠損している。丹塗前、外面はヘラナデ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリ、ヘラナデで調整されている。グリッドF17Q₁Ⅱ層から出土している。

500は内外面がヨコナデ後、ヘラミガキされ丹塗されている口縁部の口縁部の破片である。口唇部が平坦である。

I B類 (口縁部に縦の帯状の丹塗)

I B—a類 (口縁部が外反)

494はグリッドF18Q₁Ⅰ層から出土している口縁部片である。

499もI B類に属する口縁部の破片である。グリッドE17Q₂Ⅱ層から出土している。496、498はヘラミガキ後、丹塗が施されている体部の破片である。496はグリッドE17Q₂Ⅱ層、498はグリッドE19Q₄Ⅱ層から出土している。497、501は底部である。外面はナデ、ハケメで調整されている。497の内面はヘラナデ、501の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

その他の器種(図版138、写真図版81)

502は口縁部が外反し、体部外面の上半がヘラナデ、下半がヘラケズリで調整されている鉢形土器である。内面調整はハケメである。グリッドF16Q₁Ⅱ層から出土している。503は口縁部が欠損している鉢形土器である。体部外面下位に稜をもち、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。グリッドF18Q₄Ⅱ層から出土している。504は片口形土器の口縁部の破片である。外面はナデ、内面はナデ後、一部ヘラミガキが行なわれている。505は高杯形土器の脚の一部と推定されるものである。504はグリッドD10Ⅰ層、505はグリッドB18Q₁Ⅱ層から出土している。

須恵器

杯形土器(図版138・139、写真図版81)

A類 (回転ヘラ切り) 1点

515はグリッドF07Q₂Ⅱ層から出土している底部片である。

B類 (回転糸切り)

B—b類 (外面下端にヘラケズリによる再調整) 1点

511はグリッドF19Q₁Ⅰ層から出土している底部片である。

B—c類 (再調整がない) 4点

512～514、516は口縁部が欠損している。出土地点は512—F 18Q₁Ⅱ層、513—F 18Q₁Ⅱ層、514—E 18粗掘（Ⅰ層？）、516—E 17Q₁Ⅱ層である。

506～510の5点は底部が欠損している。506～508は口縁端部が外反している。517は体部の破片である。

高台环形土器（図版139、写真図版82）

524はグリッドF 18Ⅱ層から出土している。口縁部、体部上半、高台が欠損している。体部外面にはヘラケズリによる再調整がみられる。

壺形土器（図版139、写真図版82）

519～522はロクロナデで調整されている体部片である。出土地点は519—F 15Q₁Ⅰ層、520—B 19Q₁Ⅱ層、521—E 16Q₁粗掘、522—F 08Q₁Ⅰ層である。523はロクロからの切り離しが回転糸切りである底部である。F 14Q₁Ⅱ層から出土している。浅い台がついている。525は外面にヘラケズリの調整されている底部である。F 15Q₂Ⅰ層から出土している。528、533は壺の体部片と思われるものである。

甕形土器（図版139・140、写真図版82）

526、527、529～532は体部の破片である。526、529は内外面に、531、532は外面に平行印目文をもつ。527は外面に平行印目痕、内面に放射状の当て具痕をもつ。B 18Q₁Ⅱ層から出土している。530は外面に平行印目痕、内面に同心円の青海波当て具痕をもつ。D 18Q₁Ⅱ層から出土している。

518はC 17Q₂Ⅱ層から出土している口縁部片で、口唇部が左右につまみ出されている。

陶磁器（図版140、写真図版83）

536はグリッドE 21Q₁Ⅱ層から出土している皿の底部片である。軸調は薄緑である。内面は一度、釉を塗り、重ね焼きするため、周囲以外の釉をこすり取っている。瀬戸の美濃窯で大窯のⅡ～Ⅲ期にかけてのもので、16世紀の第3四半期頃であろうという。底径は5.8cmである。

541はグリッドZ 20Q₁Ⅱ層から出土している船載の白磁である。皿の底部片で切り高台がついている。中国明代の15世紀後半～16世紀中頃のものであろうという。息の長い皿で全国的に館から出土している。高台径は4.3mである。

537、540は高台付皿である。537の外面下半には平行沈線が9本施されている。口唇部が外反している。内面には花の暗文が施されている。540は口唇部が強く外反しているものである。内外面に釉が施されている。軸調は内外面が灰白色と部分的に黄褐色である。半分欠損している。537はグリッドF 19Ⅰ層、540はグリッドF 19Q₁Ⅰ層から出土している。

534は脚付の碗である。内外に施釉されている。軸調は灰白色である。脚は4個と推定される。体部が外傾し口唇部が肥厚している。グリッドF 19Q₁Ⅰ層から出土している。

538は高台付碗である。体部の外面と内面の上半に施釉されている。釉調は黒褐色である。体部は直上している。グリッドF19Q₁I層から出土している。

539は内外面に施釉されている底部片である。釉調は黄褐色である。底部外面には回転糸切り痕が残っている。グリッドC19Q₁II層から出土している。

釉の羽口（図版141、写真図版83）

542～544は土製の羽口片である。544の片端には鉄滓状のものが一部付着している。542、543はグリッドB18Q₁II層、544はグリッドC19Q₁II層から出土している。同地点から鉄滓も多く出土していることから鍛冶が行なわれていたと推定される。鍛冶跡は確認できなかった。

金属製品（図版141、写真図版84）

鉄製品

545は指輪状の鉄製品である。グリッドC04Q₁I層から出土している。546は釘である。頭部の形状は皆折形である。断面は長方形をなす。グリッドE18Q₁II層から出土している。

547は用途不明の鉄製品である。盤状の鉄製品で両端が欠損している。グリッドB18Q₁II層から出土している。

548は腕輪状の鉄製品である。一部欠損している。グリッドD22Q₁II層から出土している。

549は用途不明の鉄製品である。グリッドB18Q₁II層から出土している。

その他

550は青銅製の簪（かんざし）である。両面に鳥の図柄が刻まれている。完形品である。グリッドB23Q₁I層から出土している。

551はグリッドC04Q₁II層から出土している煙管の吸口の部分である。

古銭（図版142、写真図版84）

開元通寶2点（552、553）、紹聖元寶1点（554）、寛永通寶1点（556）、文久永寶1点（555）、不明2点（557・不掲載）が出土している。552はグリッドE16Q₁II層から遺構発出時に発見された。553、556はグリッドG11から出土している。554はグリッドG25表探、555はグリッドD19Q₁I層、557はグリッドE21Q₁II層から出土している。554は渡来銭（北宋）である。557は永樂通寶でないかと推定される。不掲載のものは二次的加熱も受けて錆けている破片である。

砥石（図版142・143、写真図版85）

6点出土している。564は板状の砥石片である。上部と右側が欠損している。欠損部以外の3面には使用痕がみられる。使用面は滑らかである。縁辺には刻み痕が一部みられる。石質は硬質泥岩である。グリッドD13Q₁II層から出土している。

565は半分欠損している方形の砥石片である。中央に摺り鉢状の窪みをもつ。貫通してい

たかもしれない。破損部以外は使用され滑らかになっている。石質は硬質泥岩である。グリッドB04Q₁層から出土している。

566は隅丸三角形を呈したものである。使用されている面は側面3つと上面である。上面には細刻線状の砥痕がみられる。石質は細砂質凝灰岩である。グリッドE15層から出土している。

567は棒状のもので片側が欠損している。表面に砥痕が多くみられる。側面に削痕が二ヶ所にみられる。石質は斜長石流紋岩である。グリッドB17の粗掘で検出されている。

568は不整長方形を呈するもので、片側が欠損している。すべての面が使用されており、表面が滑らかである。石質は流紋岩質凝灰岩である。グリッドF19Q₁層から出土している。

569は不整長方形状を呈し、端部が欠損している。使用している面は側面の4つである。そのうち、1面には細刻線状の砥痕をもち、2面は中央がへこみ弓状を呈している。使用されている面は滑らかである。石質は斜長石流紋岩である。グリッドB08Q₂層から出土している。

剃片（図版142、写真図版84・85）

558、560、561、563の4点出土している。石質は558がチャート、560、561が凝灰岩質硬質泥岩、563が粘板岩である。これらのいくつかには使用痕らしきものがみられるが、石質が泥岩、粘板岩であるため断定できない。

石製品（図版142、写真図版84）

559はグリッドF08層から出土している。原形は不明であるが、表面が丁寧に磨かれていることから石製品の一部分であると推定される。

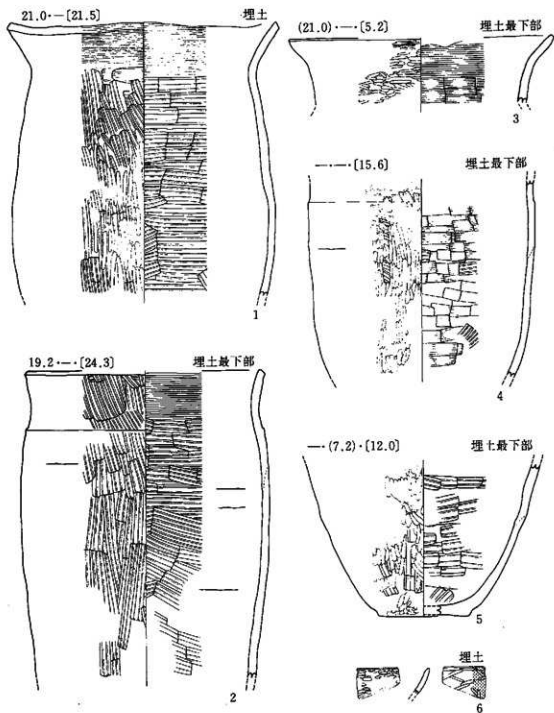
石器（図版142・143、写真図版85）

562、570は板状のもので磨痕を有するものである。562はグリッドE07Q₂層から出土したものである。片側の尖部が欠損している。570はグリッドD19Q₂層から出土している。両端が欠損している。石質は細砂質凝灰岩である。

571、572は楕円状の磨石である。571は断面が円形である。石質が細砂質凝灰岩で、グリッドE18の粗掘で検出されている。572は石質が輝石安山岩で、グリッドC08層から出土している。

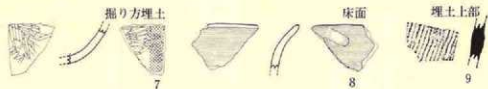
遺 物 図 版

A07住居跡(1~6)

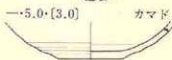
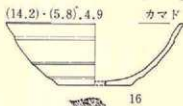
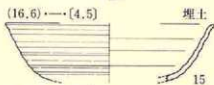
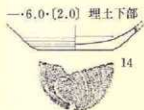
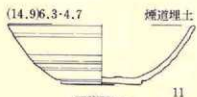


図版83 遺構内出土遺物

A21住居跡(7~9)



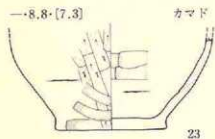
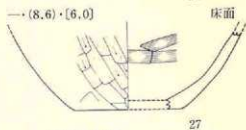
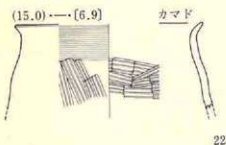
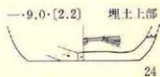
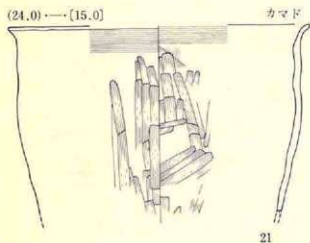
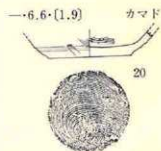
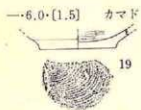
B13住居跡(1)(10~18)



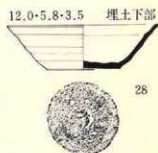
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版84 遺構内出土遺物

B13住居跡(2)(19~27)

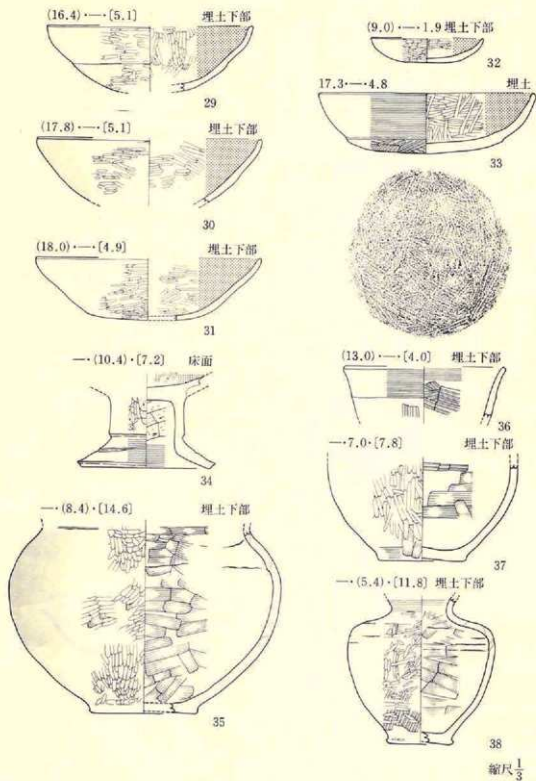


B15住居跡

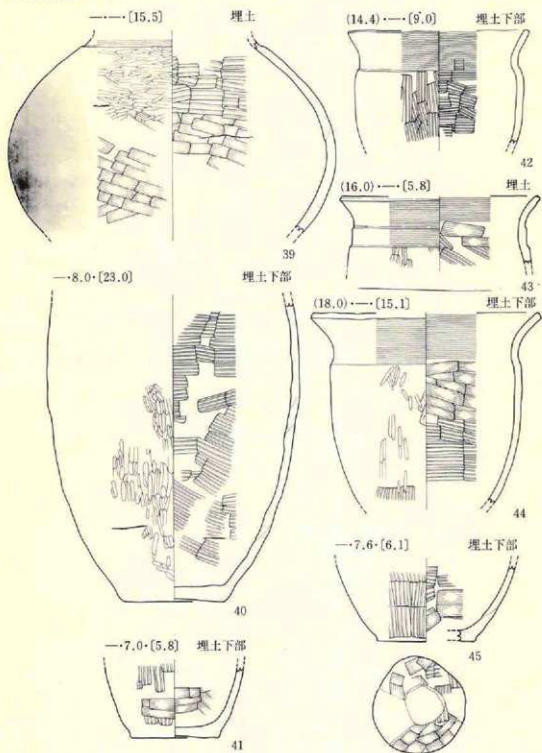


縮尺 $\frac{1}{3}$

図版85 遺構内出土遺物



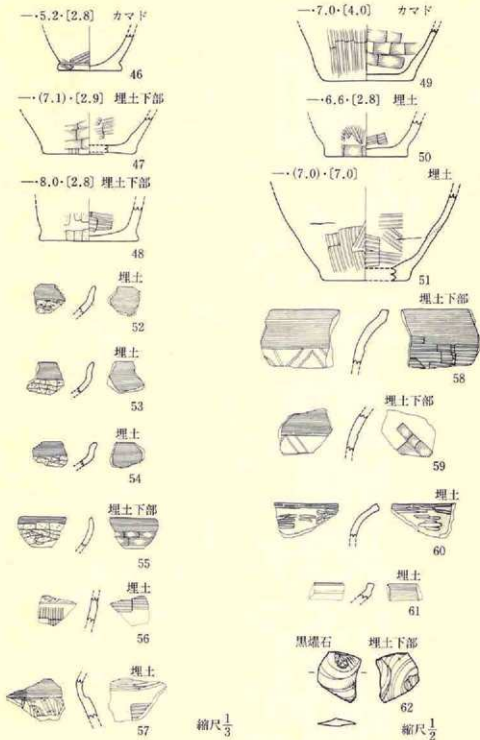
図版86 遺構内出土遺物



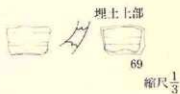
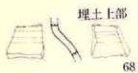
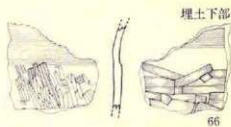
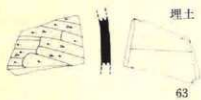
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版 87 遺構内出土遺物

C05住居跡(46~62)

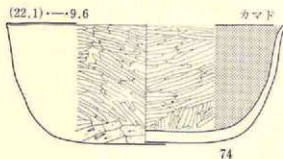
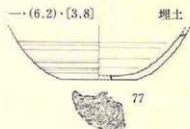
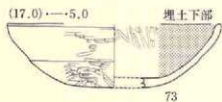
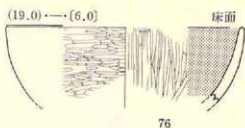
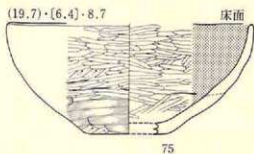
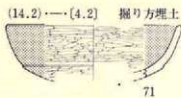


図版88 遺構内出土遺物



図版 89 遺構内出土遺物

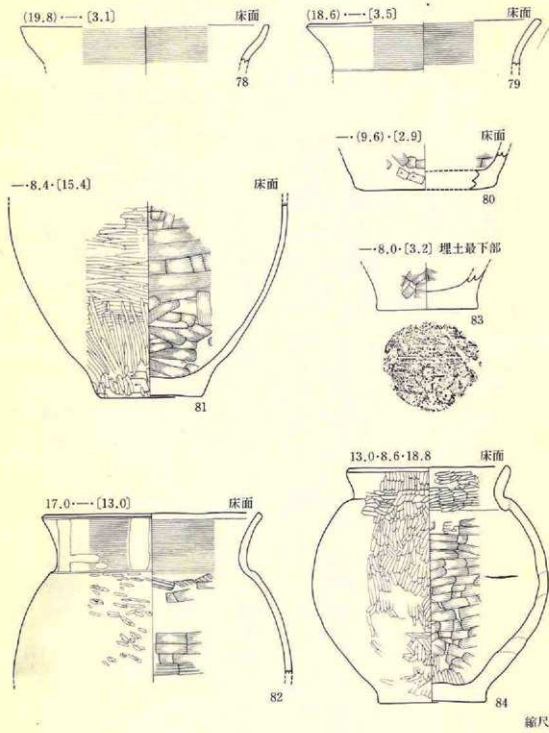
C21住居跡(71~77)



縮尺 $\frac{1}{3}$

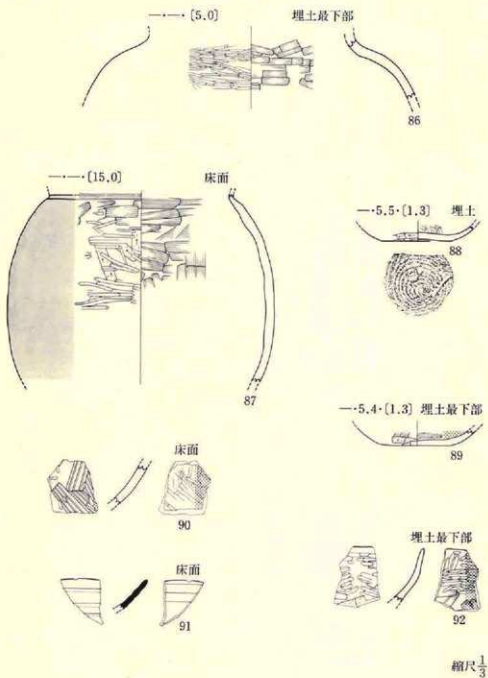
図版90 遺構内出土遺物

C21住居跡(2)(78~84)

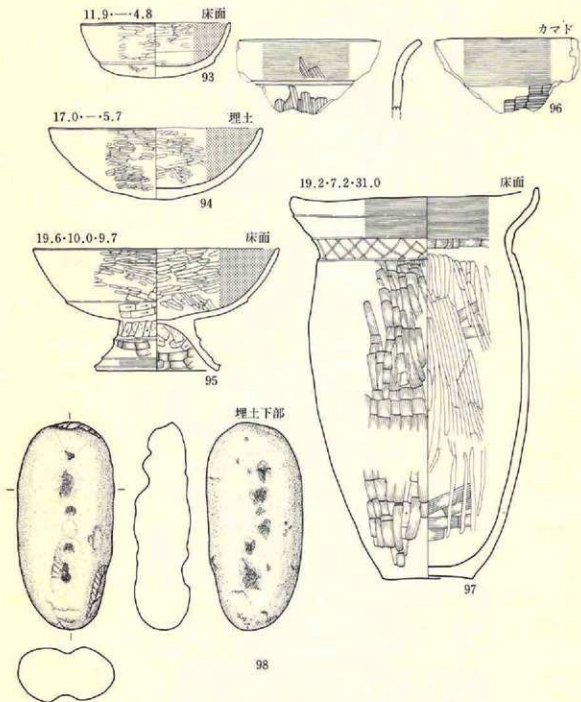


縮尺 $\frac{1}{3}$

図版91 遺構内出土遺物



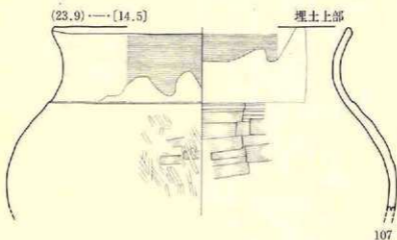
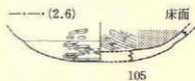
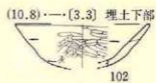
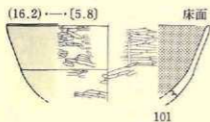
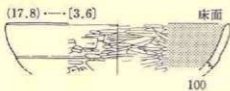
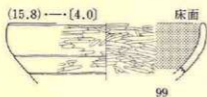
図版92 遺構内出土遺物



縮尺 $\frac{1}{3}$

図版93 遺構内出土遺物

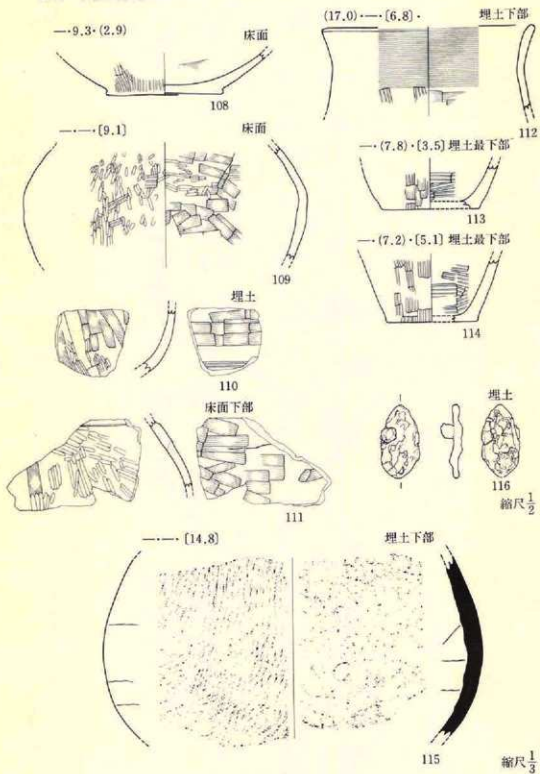
D16-1 住居跡(1)(99~107)



縮尺 $\frac{1}{3}$

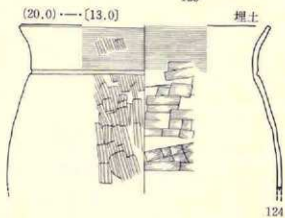
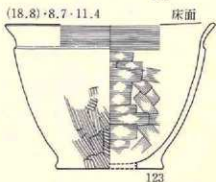
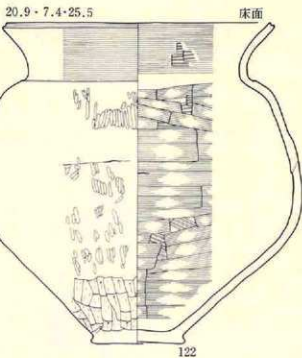
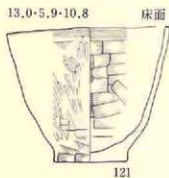
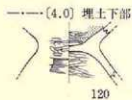
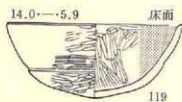
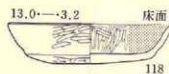
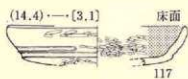
図版94 遺構内出土遺物

D16-1 住居跡(2)(108~115)



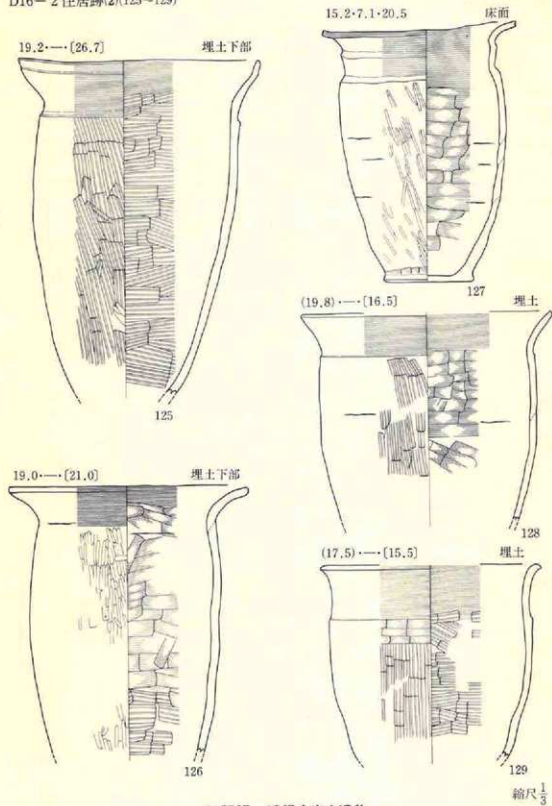
図版95 遺構内出土遺物

D16-2住居跡(1)(117~124)

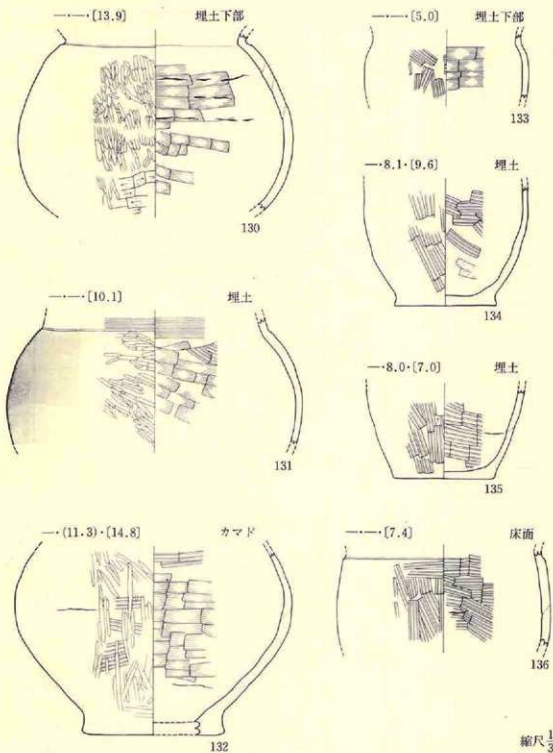


縮尺 $\frac{1}{3}$

図版96 遺構内出土遺物



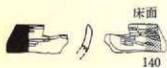
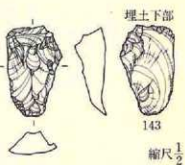
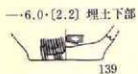
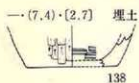
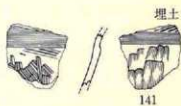
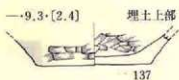
図版97 遺構内出土遺物



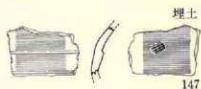
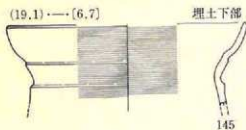
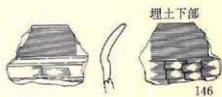
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版98 遺構内出土遺物

D16-2 住居跡(4)(137~143)

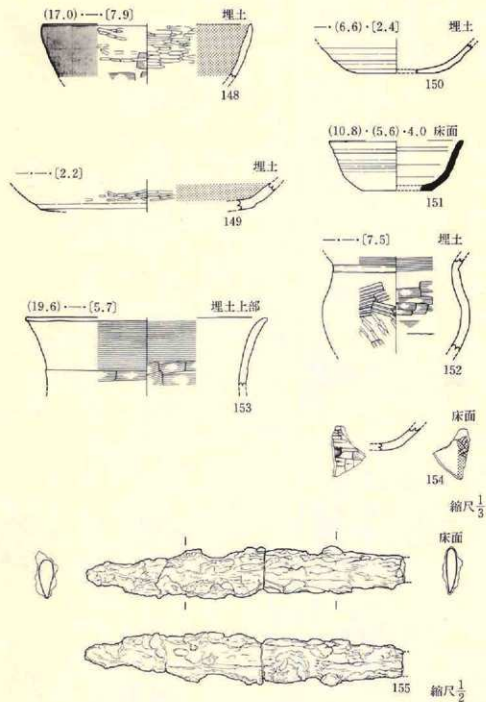


D16-3 住居跡(144~147)



縮尺 $\frac{1}{3}$

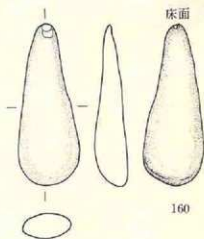
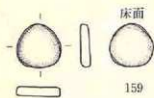
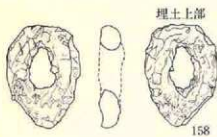
図版99 遺構内出土遺物



図版100 遺構内出土遺物

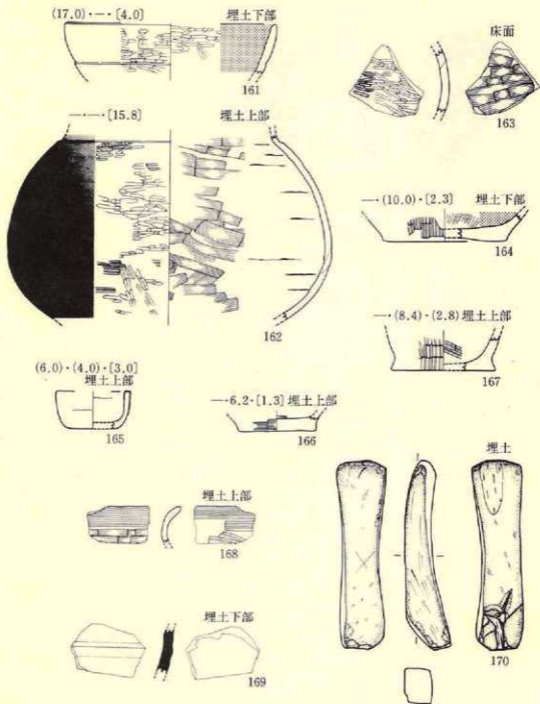


縮尺 $\frac{1}{3}$



縮尺 $\frac{1}{2}$

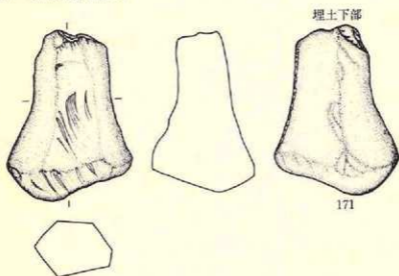
図版101 遺構内出土遺物



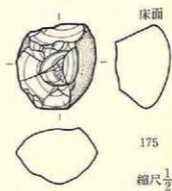
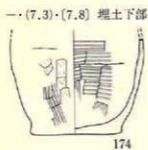
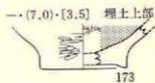
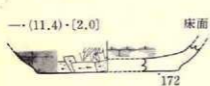
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版102 遺構内出土遺物

D17-2 住居跡(2)(171)

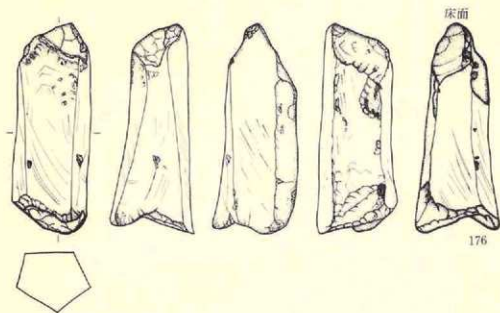


D17-3 住居跡(1)(172-175)

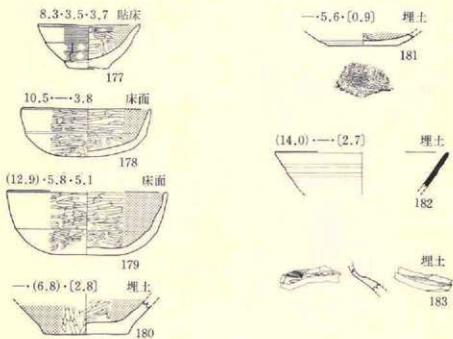


縮尺 $\frac{1}{3}$

D17-3 住居跡(2)(176)



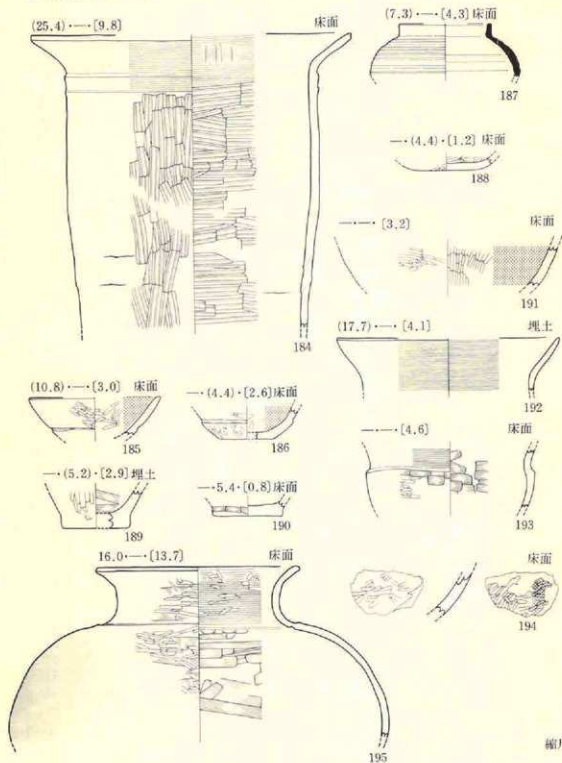
D17-4 住居跡(177~183)



縮尺 $\frac{1}{3}$

図版104 遺構内出土遺物

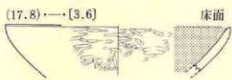
D22住居跡(184~195)



図版105 遺構内出土遺物

縮尺 $\frac{1}{3}$

E07住居跡(1)(196~202)



196



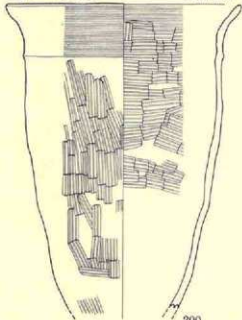
197

---7.0・[3.6]ピットP₈埋土



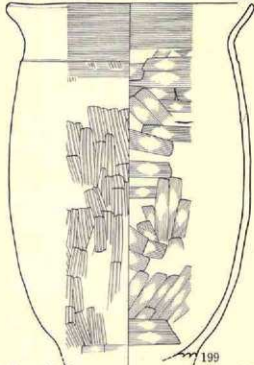
198

18.6・---[23.1] 埋土下部



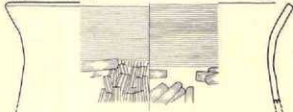
200

19.6・---[28.0] 床面



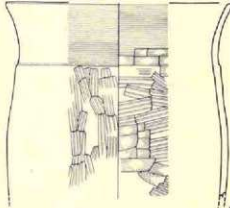
199

(23.0)・---[8.0] 床面



201

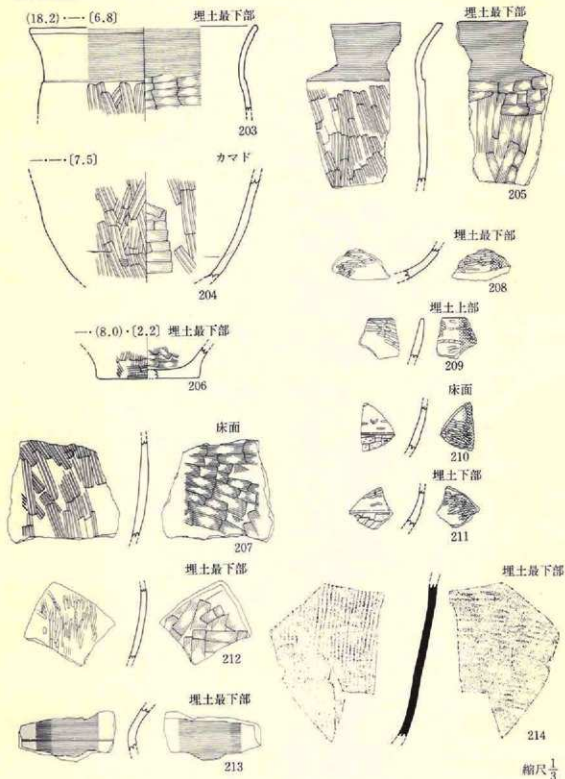
(18.0)・---[15.5] カマド



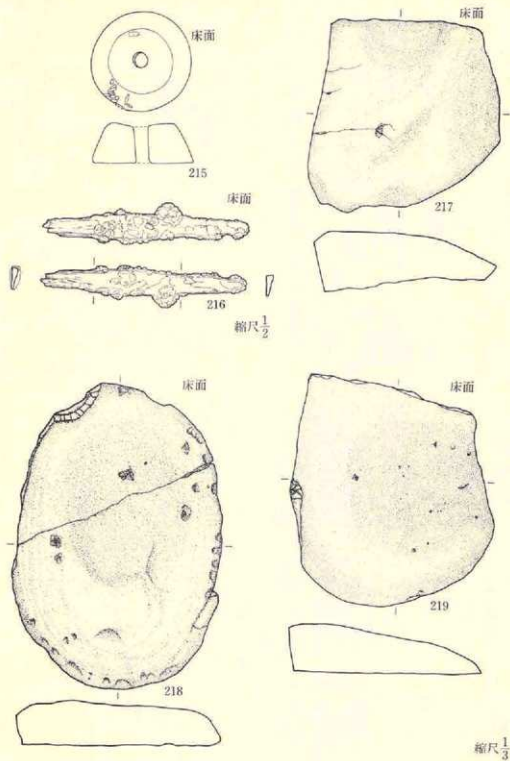
202

縮尺 $\frac{1}{3}$

図版106 遺構内出土遺物

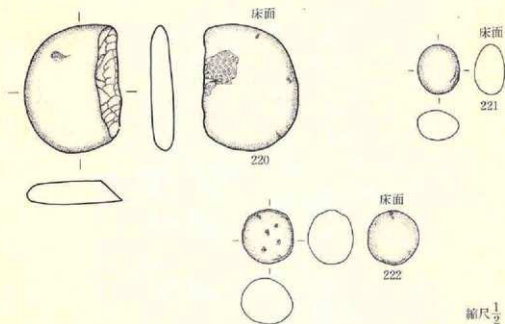


図版107 遺構内出土遺物

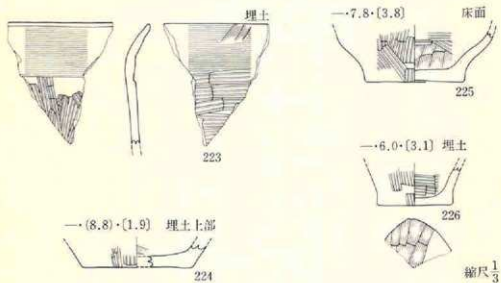


図版108 遺構内出土遺物

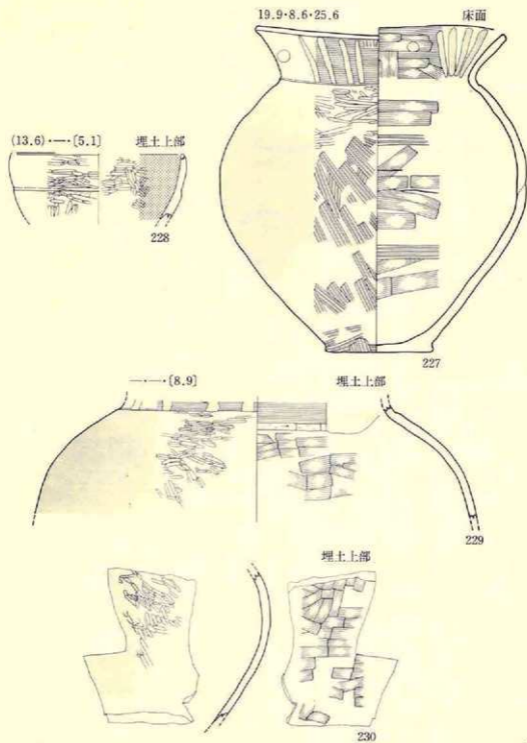
E07住居跡(4)(220~222)



F09住居跡(223~226)

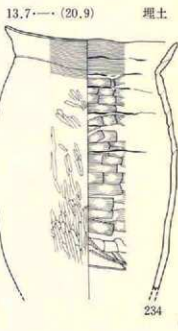
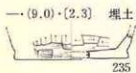
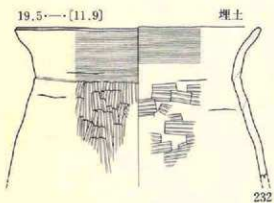
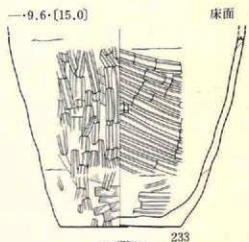
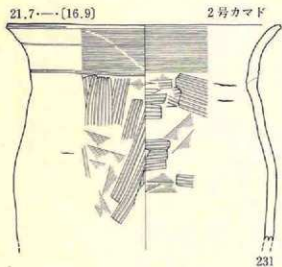


図版109 遺構内出土遺物



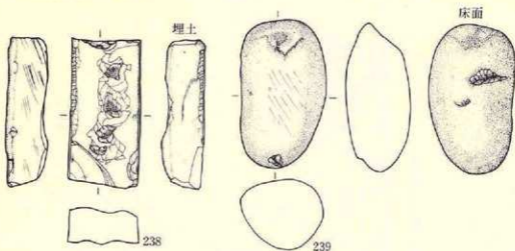
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版110 遺構内出土遺物

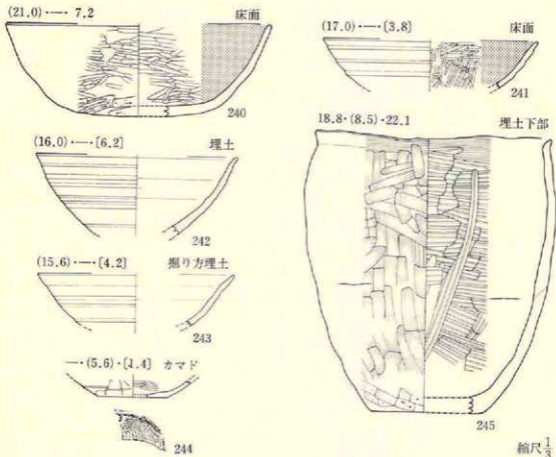


図版111 遺構内出土遺物

E16-1 住居跡(3)(238~239)



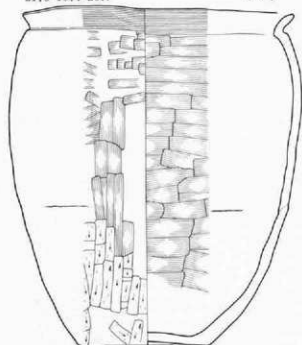
E16-2 住居跡(1)(240~245)



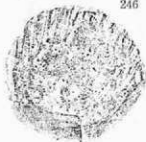
図版112 遺構内出土遺物

21.0-10.4-26.7

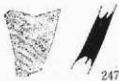
カマド



246

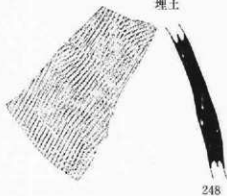


埋土下部



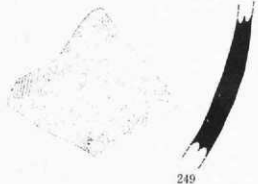
247

埋土



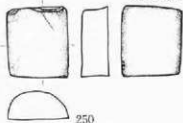
248

埋土下部



249

埋土上部

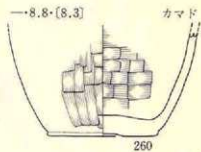
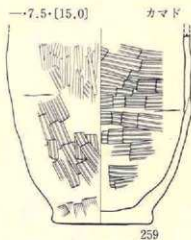
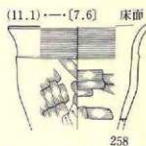
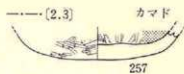
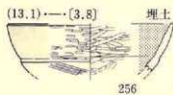
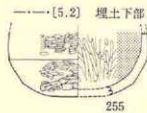
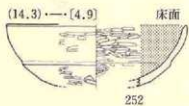
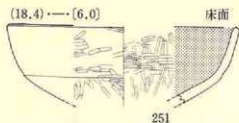


250

縮尺 $\frac{1}{3}$

図版 113 遺構内出土遺物

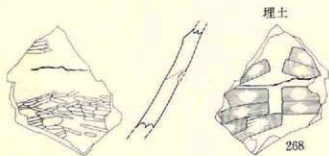
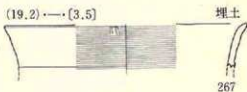
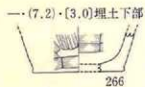
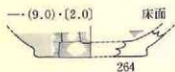
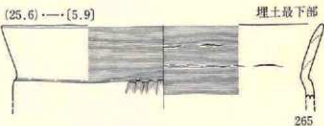
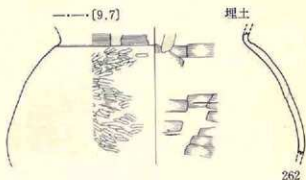
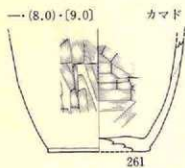
E18住居跡(1)(251~260)



縮尺 $\frac{1}{3}$

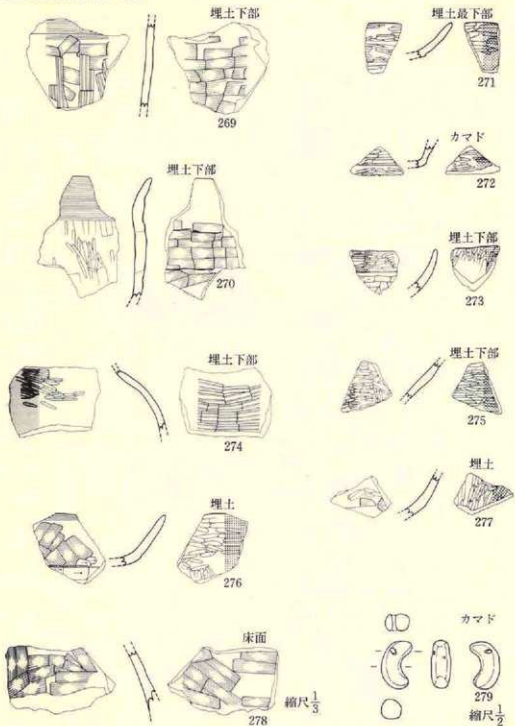
図版114 遺構内出土遺物

E18住居跡(2)(261~268)



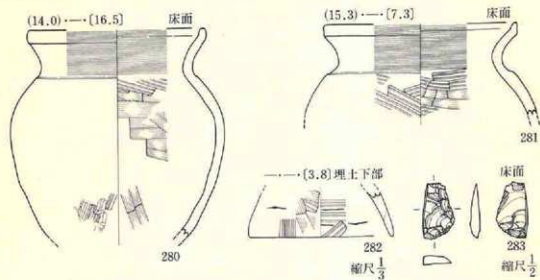
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版115 遺構内出土遺物

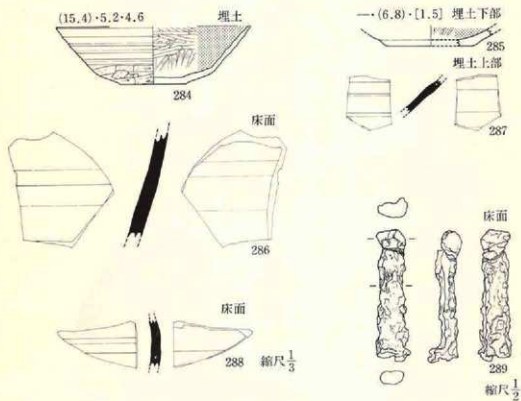


図版116 遺構内出土遺物

E21住居跡(280~283)

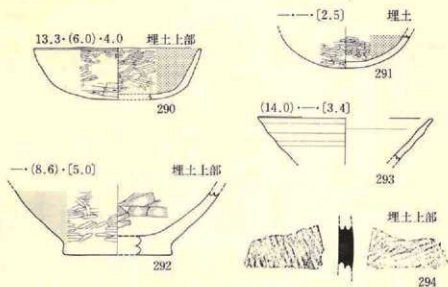


F13-2住居跡(284~289)

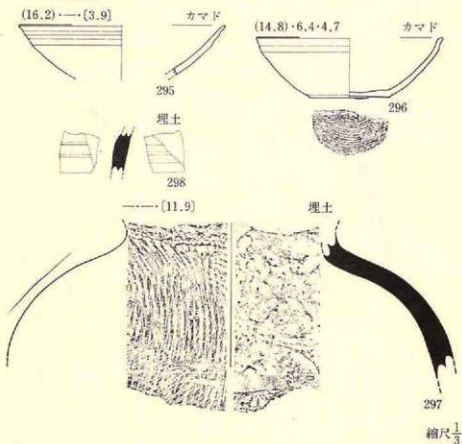


図版117 遺構内出土遺物

F15住居跡(290~294)

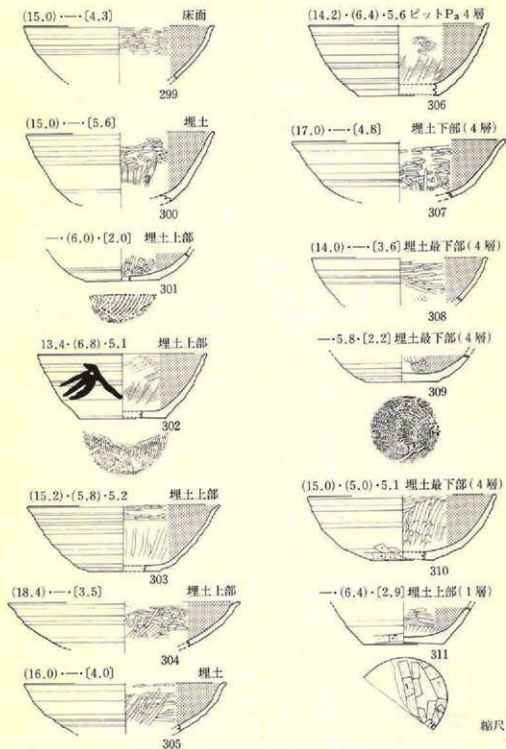


F15-2住居跡(295~298)

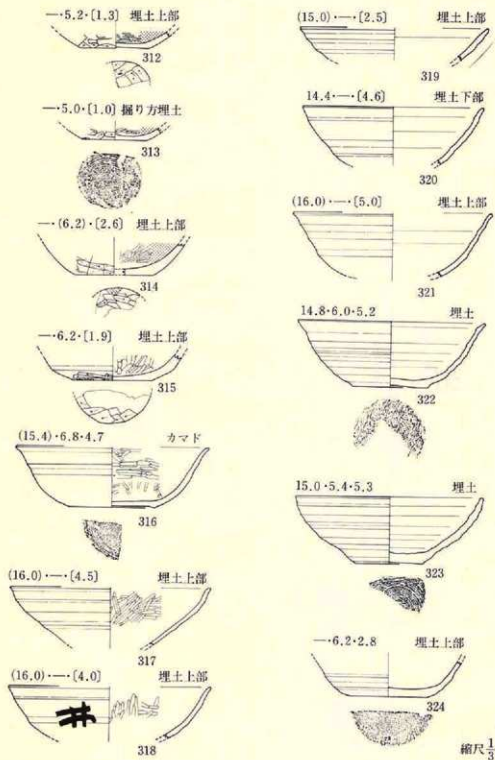


図版118 遺構内出土遺物

F16住居跡(1)(299~311)



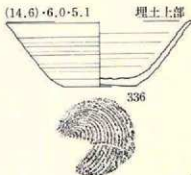
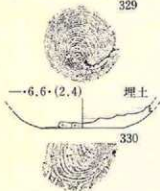
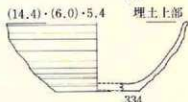
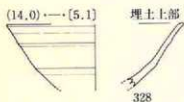
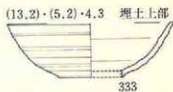
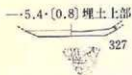
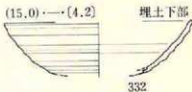
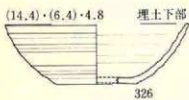
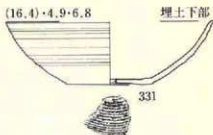
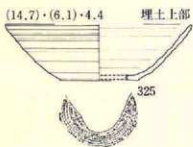
図版119 遺構内出土遺物



縮尺 $\frac{1}{3}$

図版120 遺構内出土遺物

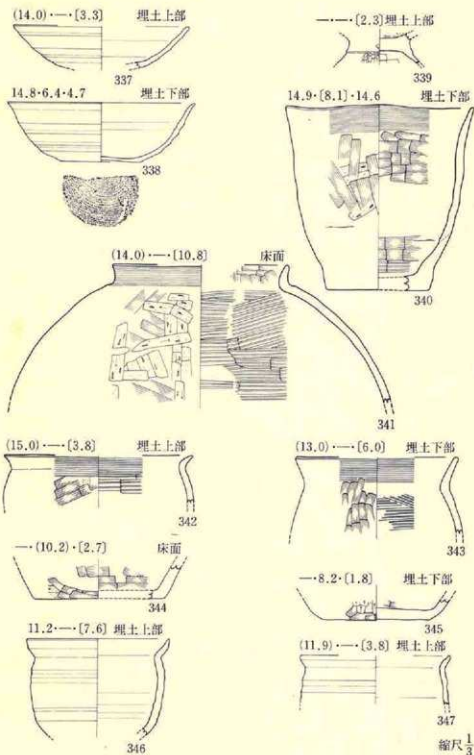
F16住居跡(3)(325~336)



縮尺 $\frac{1}{3}$

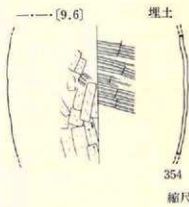
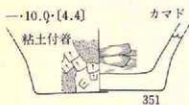
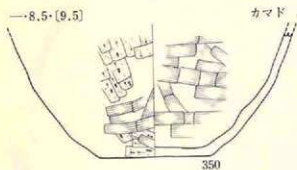
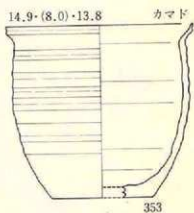
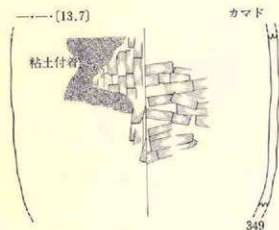
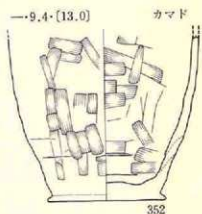
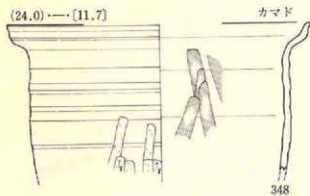
図版 121 遺構内出土遺物

F16住居跡(4)(337~347)

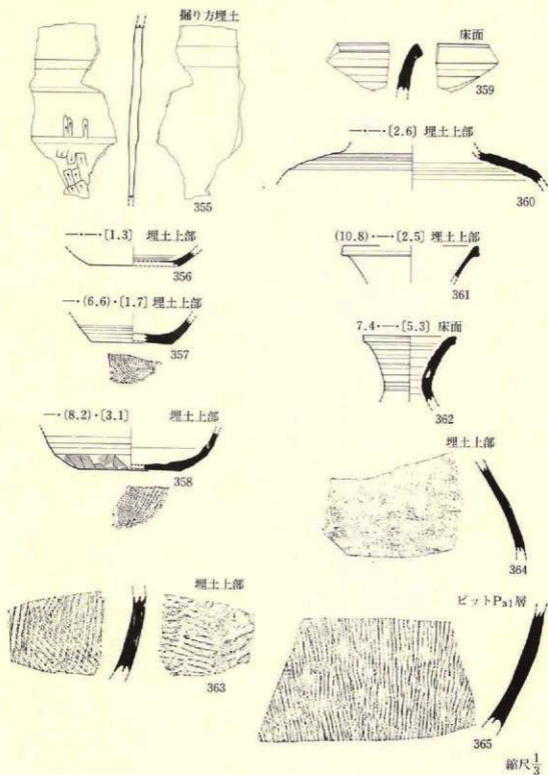


図版122 遺構内出土遺物

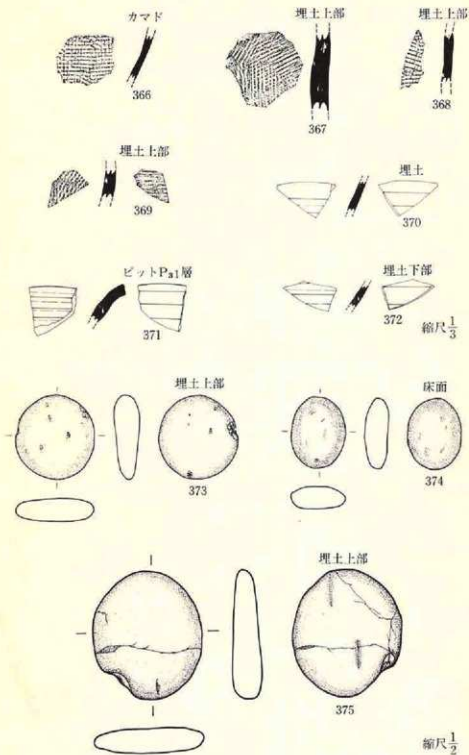
F16住居跡(5)(348~354)



図版123 遺構内出土遺物

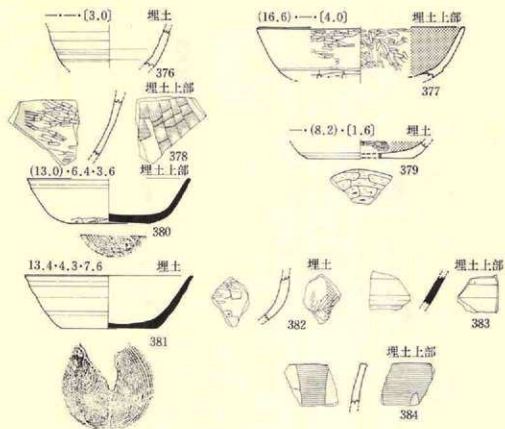


図版124 遺構内出土遺物

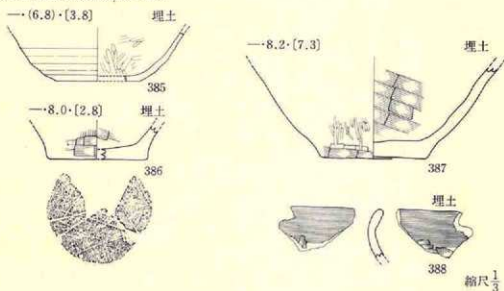


図版125 遺構内出土遺物

F17住居跡(376~384)

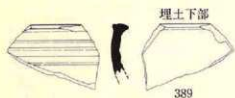


C22住居跡状遺構(385~388)



図版126 遺構内出土遺物

D13住居跡(389)



D21住居跡(390)

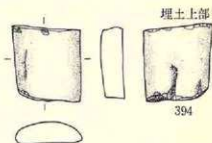
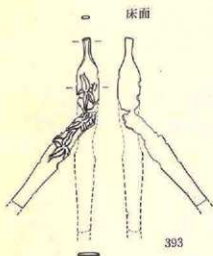
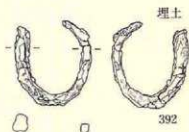


F13-1住居跡(391~394)

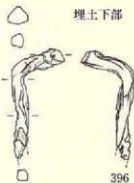
—5.6・(2.4)埋土上部



縮尺 $\frac{1}{3}$



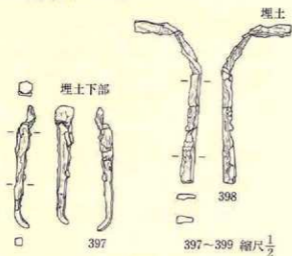
A14住居跡(395~396)



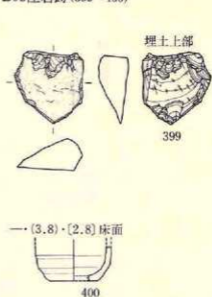
縮尺 $\frac{1}{2}$

図版127 遺構内出土遺物

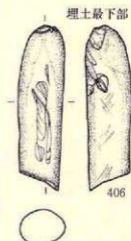
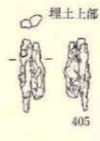
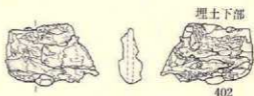
A15住居跡(397~398)



B08住居跡(399~400)



柱穴跡・井戸跡



A16柱穴-401

D20-6柱穴-404

B15-2柱穴-402

C17-井戸-406

E20-6柱穴-403

C17-井戸-601

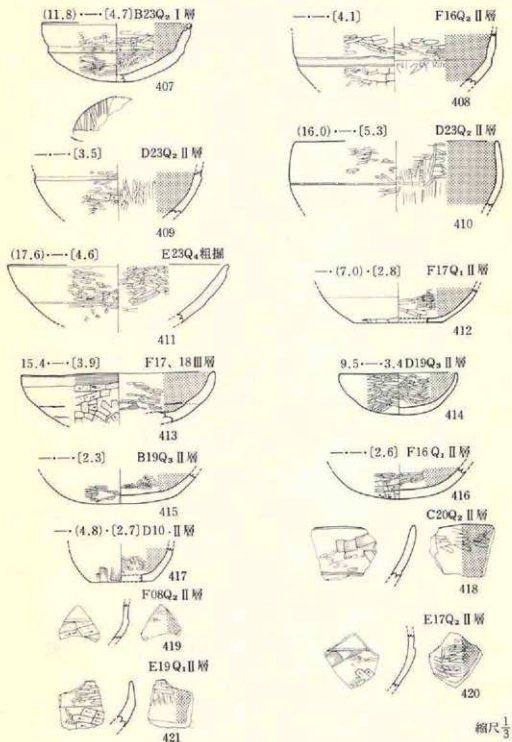
402~406 縮尺 $\frac{1}{2}$

図版128 遺構内出土遺物

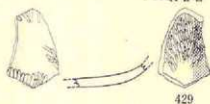
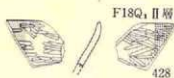
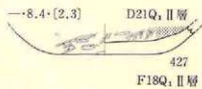
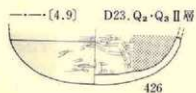
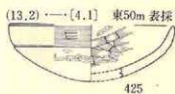
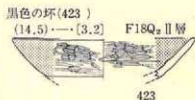
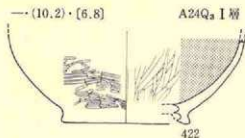
土師器

环形土器(Ⅰ類ロクロ不使用)

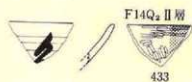
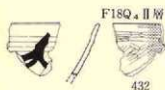
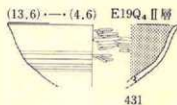
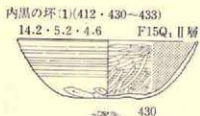
内黒の坏(407~409・413~421)



図版129 遺構外出土遺物



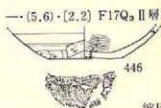
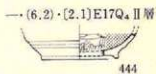
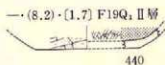
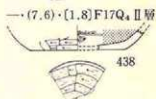
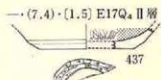
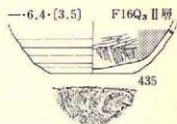
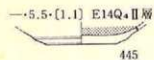
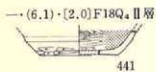
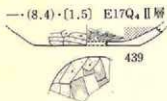
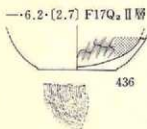
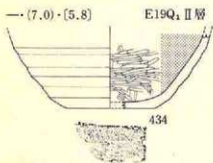
坏形土器(II類ロクロ使用)(1)



縮尺 $\frac{1}{3}$

図版130 遺構外出土遺物

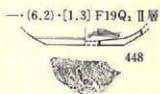
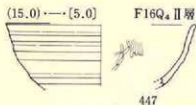
内黒の坏(2)(434-445) (442は除く)



縮尺 $\frac{1}{3}$

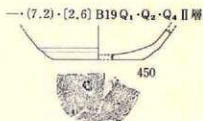
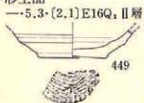
図版131 遺構外出土遺物

环形土器(Ⅱ類ロクロ使用)(2)(446~448)



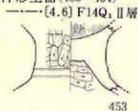
酸化焰焼成の須恵器(449~452)

环形土品

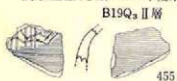


土師器

高杯形土器(453・454)

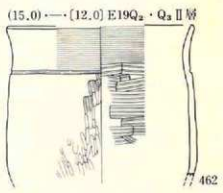
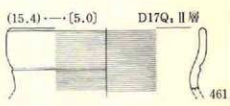
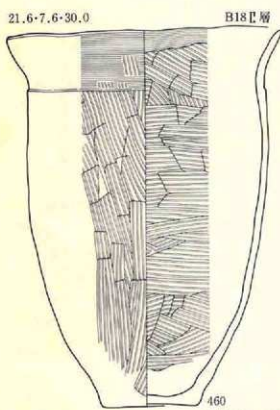
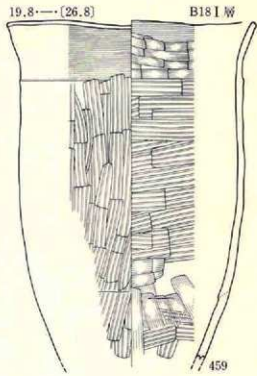
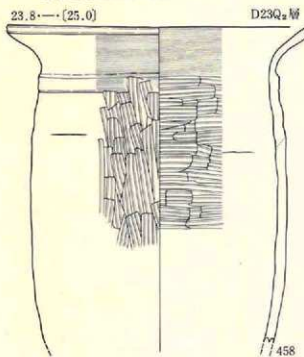


甕形土器(Ⅰ類ロクロ不使用)(1)(455~457)



縮尺 $\frac{1}{3}$

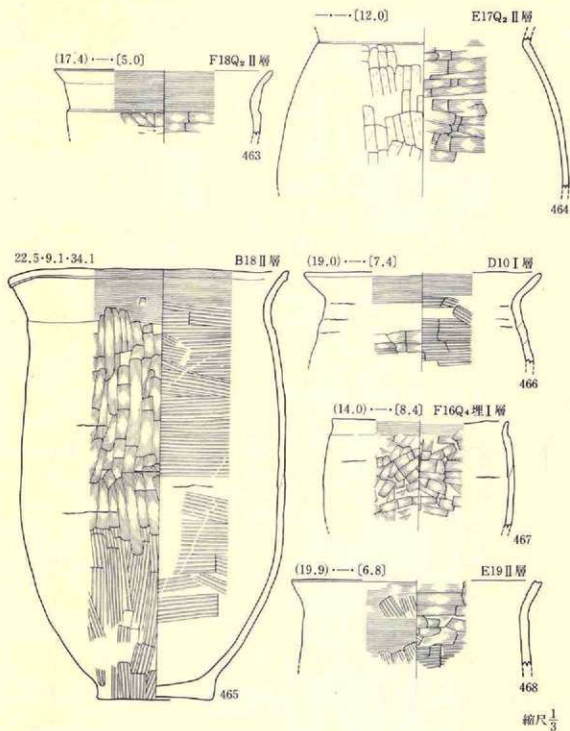
甕形土器(2)(458~462)



縮尺 $\frac{1}{3}$

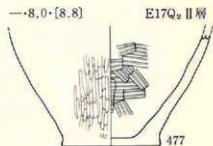
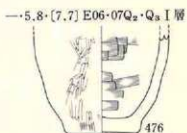
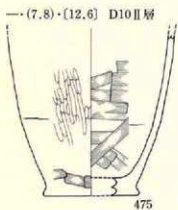
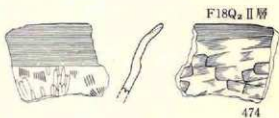
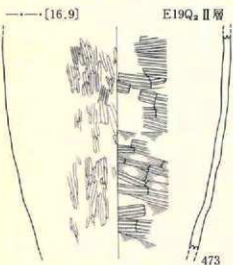
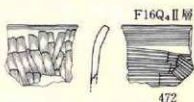
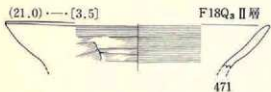
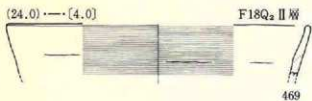
図版133 遺構外出土遺物

變形土器(3)(463-468)



圖版134 遺構外出土遺物

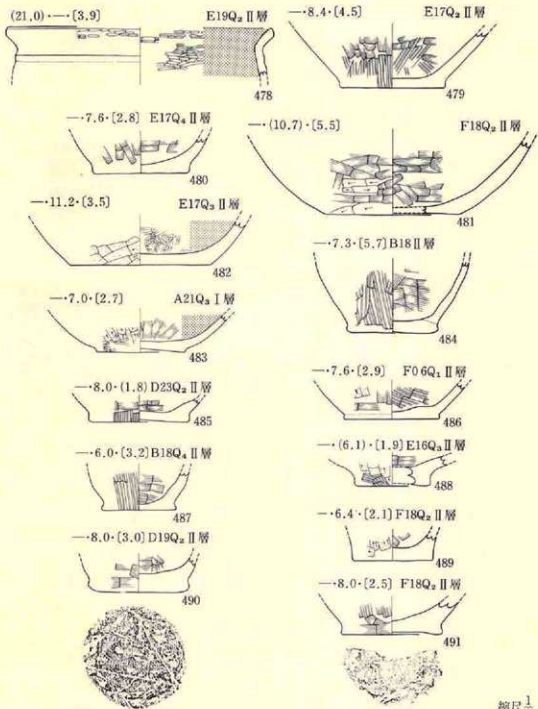
變形土器(4)(469~477)



縮尺 $\frac{1}{3}$

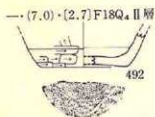
圖版135 遺構外出土遺物

麥形土器(5)(478·480·484~487·489~491)

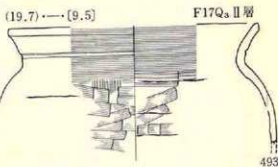


圖版136 遺構外出土遺物

斐形土器(Ⅱ類ロクロ使用)(492)

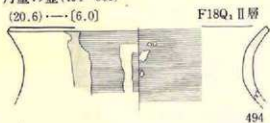


壺形土器(Ⅰ類ロクロ不使用)(479・481~483・488・493)



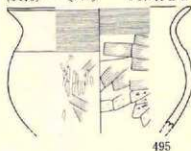
丹塗の壺(494~501)

(20.6)・(6.0)



494

(14.5)・(9.7) F17Q₃ Ⅱ層



495

—9.2・(3.1)

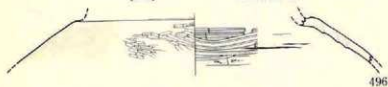
F17Q₃ Ⅱ層



497

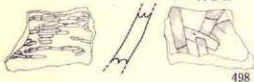
—(3.9)

E17Q₂ Ⅱ層



496

E19Q₄ Ⅱ層



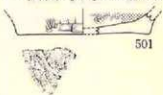
498

E17Q₃ Ⅱ層



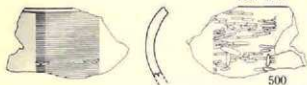
499

—(10.6)・(1.2) F17Q₂ Ⅰ層



501

A07 Ⅱ層



500

縮尺 $\frac{1}{3}$

図版137 遺構外出土遺物

土師器

盥形土器(502)

9.6・6.0・7.1 F16Q₂ II層



須恵器

502

鉢形土器(503) 片口形土器・その他(504・505)

→3.4・[3.0]
F18Q₄ II層



503

D10 I層



504

→[3.0] B18Q₄ II層



505

坏形土器(1)(506~515)

(15.1) → [3.7]

F17Q₂ II層



506

(14.3) → [3.5]

F18Q₂ II層



507

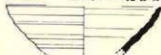
(13.2) → [4.7]

F18Q₄ II層



508

(12.4) → [3.7] E19Q₂ II層



509

(11.9) → [2.2]

G18Q₂ II層



510

→(6.0)・[1.4] F19Q₂ II層



511

→6.2・[2.2]

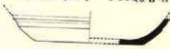
F18Q₄ II層



512



→(8.4)・[2.2] F18Q₂ II層



513



→(6.6)・[2.2]

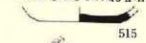
E18粗掘



514



→6.6・[0.5] F07Q₂ II層



515

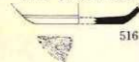


縮尺 $\frac{1}{3}$

図版138 遺構外出土遺物

环状土器(2)(516-517)

—(7.0)·[1.2] E17Q₄ II層



516

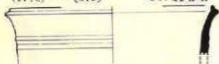
E18Q₃



517

壺形・甕形土器(1)(518-527)

(17.0)·—(3.9) C17Q₂ II層



518

—(2.7) F15Q₁ II層



519

E16Q₄ 粗掘



521

B19Q₃ II層



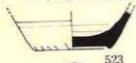
520

F08Q₃ I層



522

—6.0·[2.8] F14Q₄ II層



523

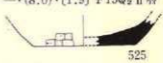
—(2.8)



524

F18 II層

—(8.0)·[1.9] F15Q₂ II層



525



526

F07Q₃ II層



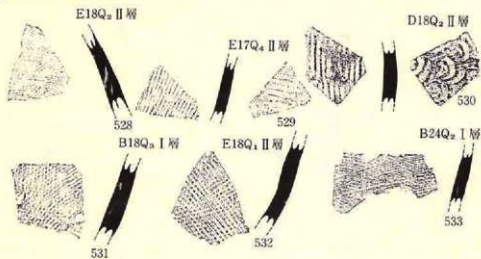
B18Q₄ II層

527

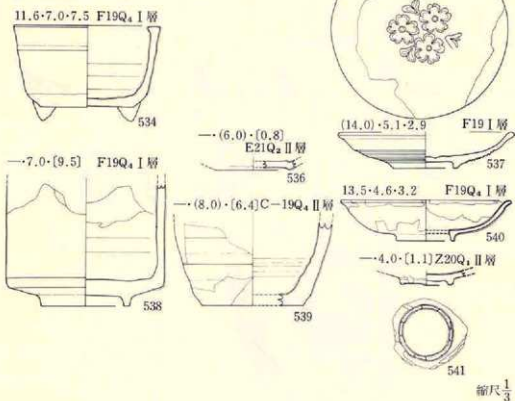
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版 139 遺構外出土遺物

斐形土器(2)(528~533)

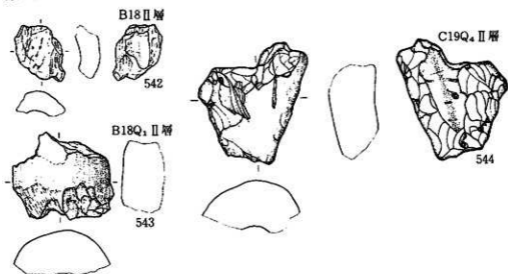


陶磁器類(534~541)

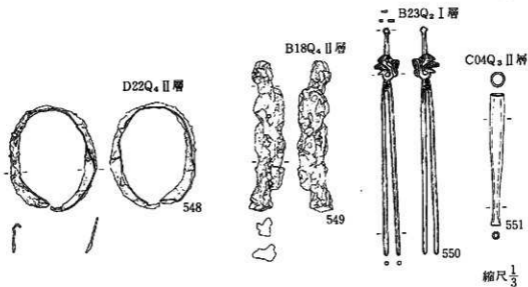
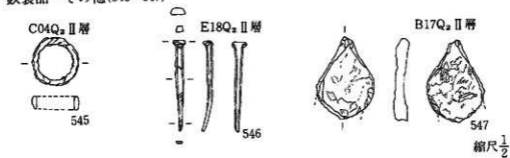


図版140 遺構外出土遺物

羽口(542~544)



鉄製品・その他(545~547)

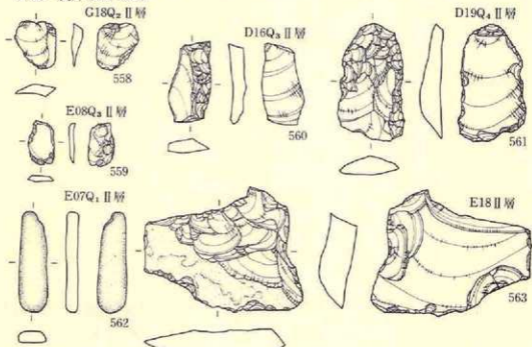


図版第141図 遺構外出土遺物

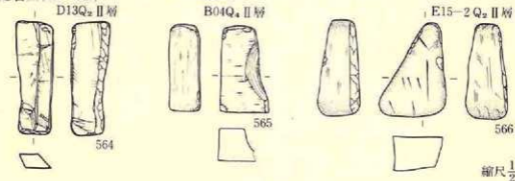
古銭(552~557)



石器・剝片(558~564)



砥石(1)(564~566)



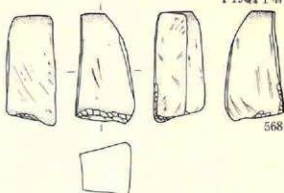
図版142 遺構外出土遺物

砥石(2)(567-569)

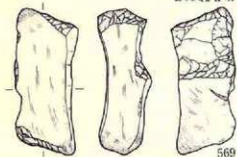
B17粗掘



F19Q₁ I層

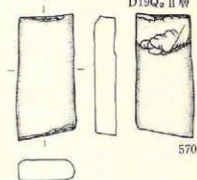


B08Q₂ II層

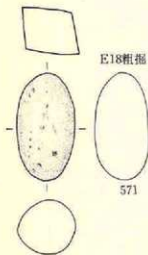


石器(2)(570-572)

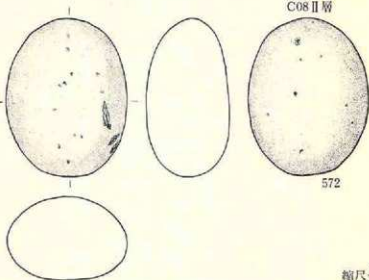
D19Q₂ II層



E18粗掘

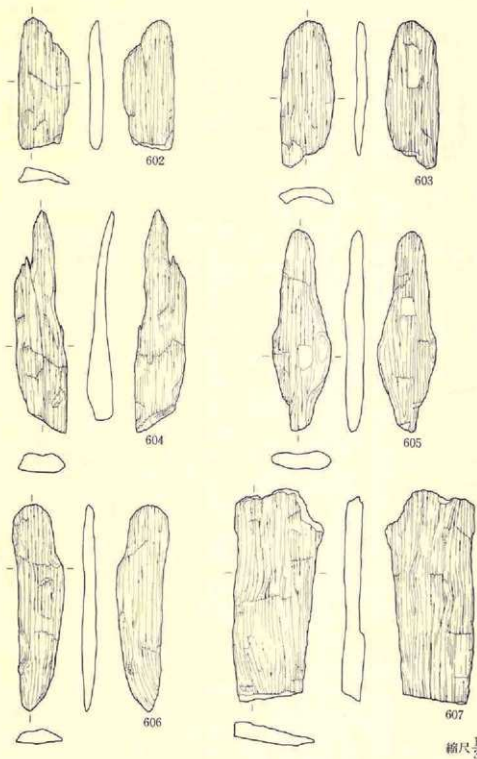


C08 II層

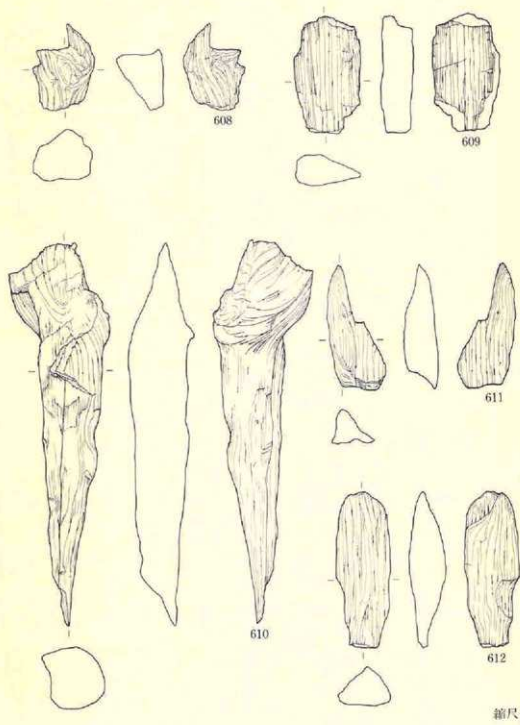


縮尺 $\frac{1}{3}$

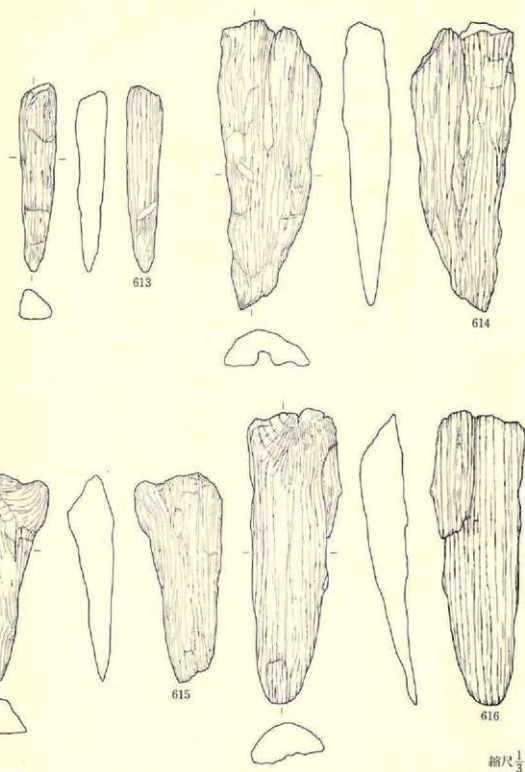
図版143 遺構外出土遺物



図版144 C17井戸跡出土木製品(1)

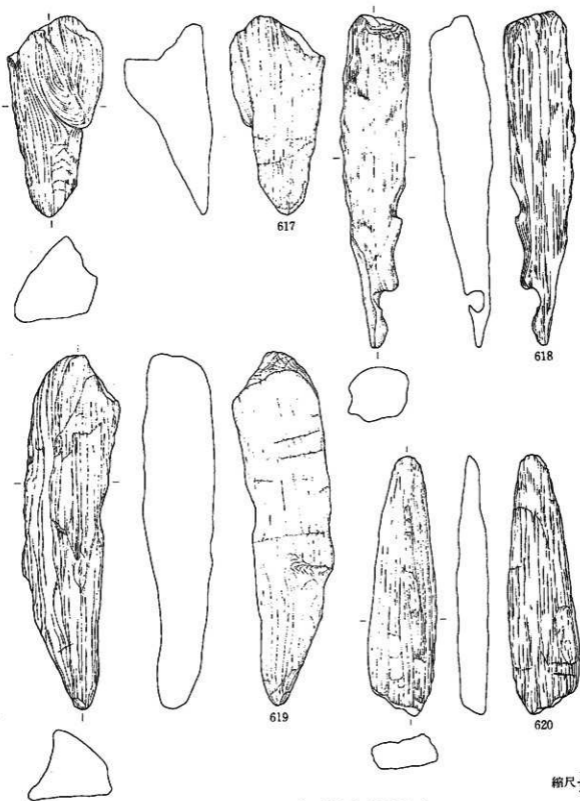


図版145 C17井戸跡出土木製品(2)



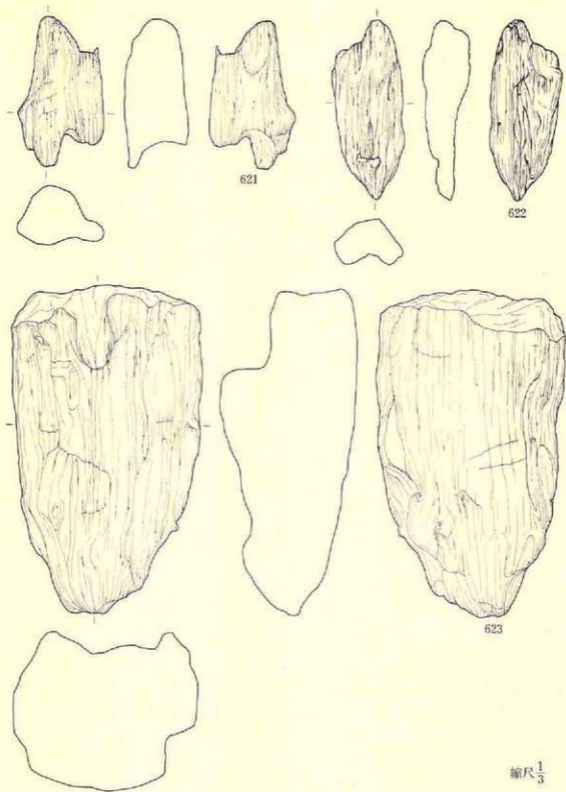
図版146 C17井戸跡出土木製品(3)

縮尺 $\frac{1}{3}$



図版147 C17井戸跡出土木製品(4)

縮尺 $\frac{1}{3}$



図版148 C17井戸跡出土木製品(5)

縮尺 $\frac{1}{3}$

Ⅵ ま と め

1 遺 構

本遺跡で検出された遺構は、古代竪穴住居跡29棟（奈良時代15、平安時代8、判別し得ないもの6）、中世竪穴住居跡14棟、竪穴住居跡状遺構2基、掘立柱建物跡2棟及び柱穴群、墓塚4基、土坑3基、井戸跡1基、溝跡2条、掘土遺構8基である。
これらの遺構について若干のまとめをすることとする。

1) 古代竪穴住居跡

a) 平面形・規模

検出された29棟のうち他遺構と重複するもの17棟、調査区域外に延びるもの6棟あり、完全な形あるいはそれに近い形で検出されているものは約半数の14棟である。

平面形について、その形状が推定され得るものも含め20棟についてみると次のようになる。

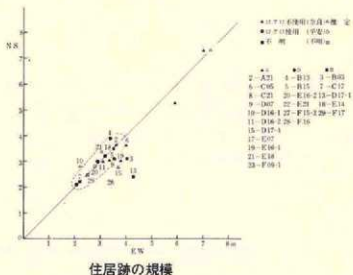
平 面 形	ロクロ未使用の坏 (奈良)	ロクロ使用の坏 (平安)	不 明
1 方 形	A21, C21, E07	B13, E15, E16-2, E21, F16	E14
2 隅 丸 方 形	C05, D07, D16-2, E18	F15-2	C17
3 隅 丸 長 方 形	E16-1		B03
4 長 方 形	D17-4		
5 不 整 台 形	A16-1		
6 楕 円 形		D17-1	
不 明	A07, D22, F16-3, F09-1, F09-2	F13-2	D17-3, F15-1, F17

注 B03は出土遺物はないが形跡上から古代遺構に含めた。
D17-3, C17, F15-1, F17はロクロ使用、未使用の土師器が混在する。

長方形や楕円形を呈するものが少数あるものの、奈良、平安時代の別なく、そのほとんどが方形を基調とした住居跡であると云える。長辺と短辺の比率でみると長辺が短辺より10%以上長い例はE16-1, D17-4, D16-1, D17-1, B03の5棟で、他は10%未満である。平面形態が不明なものでも壁がほぼ直交するものは方形を呈する遺構と思われる。

次に、規模についてみると一辺が2.1m~7.3mと大きな差異がある。床面積でみると16㎡以下と30㎡以上に2分され、そのほとんどが16㎡以下の小規模を呈する住居跡である。

1) 10㎡未満 (一辺2.1~3.1m) 8 (D16-1, D16-2, E16-2, E21, F15-2, C17-1, F17)



- 2) 10~16㎡ (一辺3.1~4 m) 10 (C05, D07, D17-4, E16-1, E18, B13, B15, F16, B03, E14)
- 3) 16~30㎡ (一辺4~5.5 m) 0
- 4) 30~50㎡ (一辺5.5~7 m) 1 (C21)
- 5) 50㎡以上 (一辺7 m以上) 1 (E07)

床面積が16㎡以下のものは、10㎡未満8棟、10㎡以上10棟と2分されるが西一性があるものではない。

時期別にみると、奈良時代のものは10㎡前後により集中し、30㎡以上の規模の大きいものが存在する。平安時代のものは4.2㎡~15㎡の範囲にあまり集中することなく分布している。

木遺跡では住居跡の分布としてのまとまりある分布は認められないものの、奈良時代の大形の住居は、住居群の核として存在したものと思われる。

b) 埋土

埋土の堆積状況を大別すると次のようである。

イ 自然堆積の様相を呈するもの 9 (C05, C21, E16-1, E16-2, F09-1, F13-2, F15-1, F17)

ロ 人為的な埋め戻しや焼土塊の投げ込みが認められるもの 14 (A07, B03, B13, B15, C17, D07, D16-1, D16-2, D17-1, D17-3, E18, E21, F09-2, F16)

前者のイは、埋土の主体がⅢ層起部の黒色~黒褐色シルト質土であり砂礫の混入が少なく、レンズ状の堆積又は単層を呈している。後者も埋土の主体は、前者とほぼ同様なシルト質土で

あるが、円礫、亜角礫、砂礫が多く混入しているもので、自然堆積+人為的作用によって埋没したものであろう。焼土塊及び炭化物の投げ込みが認められるものはA07、D07、D16-1、E18、F16の5棟である。

埋土中位～下位にかけ、十和田a火山灰と推定されている灰黄褐色細粒浮石（粉状バミス）が平安時代に属する3棟（B13、F13-2、F16）から検出されている。

c) 床面

床面の構築については次のように大別される。

イ 地山面を床面とするもの 15 (A07、B03、C05、C17、C21、D16-3、D17-1、D17-3、E14、E18、F09-2、F13-2、F15-1、F15-2、F17)

ロ 地山面に貼床を施すもの 6 (A21、B13、B15、D17-4、E21、F09-1)

ハ 掘り方をもち貼床を施すもの 6 (D07、D16-2、E07、E16-1、E16-2、F16)

地山面（掘り込み面）を床面としているものは半数強とやや多い。上記分類には含めていないD16-1住は、下位のD16-2住に何ら手を加えていない事からすると、床面の構築としてはイのタイプに含まれるものであろう。ロ、ハのタイプは住居跡の位置する地点での地層的な面が影響していると思われる。特にロのタイプは、床面下位が砂礫層であるものが多く、床面の構築は不可欠であったと思われる。また、ハのタイプは黒色～黒褐色シルト質土の層厚がやや厚い地点に位置するものが多い。

イ～ハの床面の構築方法については、奈良時代、平安時代と区別できる程の特徴は見い出せない。

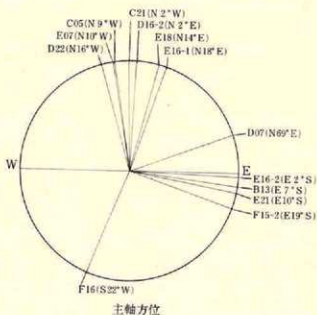
d) 土坑

土坑が検出されているもの6棟（D07、D16-2、E07、E14、F15-2、F16）である。これらの土坑は、平面形が円形、方形、楕円形、不整形円形と種々様々で、断面形は浅皿状～浅鉢状を呈している。開口部規模は径1m前後のもの、0.5m程度のものがある。土坑の付設位置として、カマド袖部の脇にあるもの2例（F15-2、F16）、住居跡隅にあるもの4例（F16、D07、E07、F15-2）がある。土坑の性格としてE07住の南壁際にあるものは出入口施設に伴うものであろうか。その他のものは、D16-2住の土坑を除き貯蔵穴の可能性もあるが、それを十分証拠だてる遺物の出土はなく明確ではない。

e) 柱穴

柱穴及び柱穴状ピットが検出されているもの5棟（D16-1、D16-2、E07、E16-1、F09-1）で、柱穴のないものは13棟、他は不明である。

主柱穴配置は、E07住が6基で東壁及び西壁に平行し等間隔に各3基が配置し、D16-2住は東壁、西壁寄りに4基配置するものと思われる。D16-1、E16-1の1～2基の柱穴状ピ



ットは、性格不明であり、この2棟も主柱穴をもたない住居跡に属するものであろう。F09—1住のP₃ピットは主柱穴の可能性があるが、全体の状況については不明である。

本遺跡検出の住居跡は2、3の大形のを除き、その殆どは小形の住居跡で柱穴をもたないものと云えるであろう。

f) カマド

カマドをもつもの13棟、カマドをもたないもの5棟で、他は不明である。カマドの位置は次のとおりである。

- 1) 北壁にあるもの 7 (C05, C21, D16—2, D22, E07, E16—1, E18)
- 2) 東壁にあるもの 5 (B13, E16—2, E21, F15—2, D07)
- 3) 南壁にあるもの 2 (F16, 旧E16—1)

北壁に位置するもの7棟のうちD22をのぞき、全て北壁中央部に位置しており、時期的に奈良時代の住居である。カマドの主軸方向は磁北から東西20度の範囲にある。

東壁にあるもの5棟で、D07を除く他の4棟は平安時代の住居であり、カマドの主軸方向は東の方向から南20度の範囲にある。南壁に位置するものは2棟であるが、E16—1住のカマドは、より旧カマドと思われるものである。F16住は平安時代の住居である。西カマドをもつ例はない。本遺跡においては、検出例が少ないので、カマド位置の時間的変化、及び住居内での

付設位置の変化について詳細は不明であるが、奈良時代にはほぼ北壁にあり、平安時代には東又は南壁に付設されるようである。

カマドの構造については、その多くが削平を受けており、F16住を除く12棟のカマド遺存状況は良好ではない。D22住をのぞく12棟について、その遺存状況から分類すると、

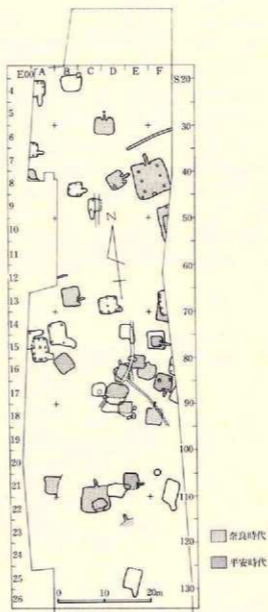
- イ 袖部の芯材として礎を用いているもの 7 (B13、D07、D16-2、E18、E16-1、E16-2、F16)
- ロ 残存する袖部から礎が検出されていないもの 5 (C05、E07、F15-2、C21、E21)

と分類される。ロに属するものは袖部がわずか残存するのみで、5棟全てが粘土質シルトで袖部を構築していたものとは考え難く、礎を芯材とし粘土を被覆させ構築していたものが多いと思われる。

燃焼部から支脚として礎が出されているもの4棟 (D07、D16-2、E18、F16) で、他に礎の抜き取り痕のあるもの1棟 (C05) である。他の8棟については不明である。土器を支脚に用いたものは見当たらない。

g 周溝、その他

周溝があるもの3棟 (F09-1、E07、F13-2) と少な



住居跡の分布

い。E07住は壁際の全周に巡り、F09-1住も検出された範囲の殆どに周溝が巡ることからE07住同様な構築と思われる。F13-2住は南壁際に一部検出されたのみで全貌は不明である。

間仕切り施設と思われるものが、奈良時代住居跡2棟(E07、F09-1)で検出されている。西壁際から壁に直交し、周溝と同程度の溝が1~2m程の長さに延びているものであり、この2棟以外では検出されていない。

h) 住居跡の分布

本遺跡として調査した範囲は、段丘縁辺部の東西幅約30m×南北長約120mであり、地形的には、周辺部と何ら変わる場所ではない。検出された住居跡は奈良時代~平安時代に属するものの、調査範囲の制約で集落としてのまとまりを見出すまでには至っていないものの遺跡周辺において古代の集落が何期かに亘って営まれたことであろう。

検出された遺構の時期別分布をみると、奈良時代の住居は調査区のはほぼ全域に分布し、北側及び南側に大形の住居が位置している。大形の住居と小形の住居との関連性は不明であるが、水沢市今泉遺跡、石田遺跡などの例にみられるように集落の中での核的性格を有するものとも考えられる。

平安時代の住居については、段丘縁辺から40~50mの地点にやや多く位置するようで、それ以北では検出されていない。又核的性格を有すると思われる住居もなく、小形を呈するものが殆どである。

(菊池利和)

引用・参考文献

- | | | | | |
|------|------------------------|------|---------------------|-----------|
| 1982 | 岩手県教育委員会・岩手県文化財調査報告書 | 第71集 | 東北縦貫自動車道関係文化財調査報告書 | |
| | | | XⅣ(備谷地遺跡) | |
| 1981 | 〃 | 〃 | 第59集 | 〃 |
| | | | | X(上側田遺跡他) |
| 1981 | 〃 | 〃 | 第60集 | 〃 |
| | | | | N(今泉遺跡) |
| 1981 | 岩手県埋文センター・岩手埋文調査報告書 | 第18集 | 金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書 | |
| | | | I(玉貫遺跡) | |
| 1982 | 〃 | 〃 | 第34集 | 〃 |
| | | | | II(橋性遺跡) |
| 1984 | 〃 | 〃 | 第70集 | 江刺家遺跡 |
| 1986 | 〃 | 〃 | 第93集 | 高玉遺跡 |
| 1981 | 岩手県教育委員会・岩手県文化財調査報告書 | 第61集 | 東北縦貫自動車道関係文化財調査報告書 | |
| | | | XI(石田遺跡) | |
| 1981 | 〃 | 〃 | 第57集 | 〃 |
| | | | | Ⅶ(大瀬川遺跡) |
| 1985 | 岩手県埋文センター・岩手の遺跡 | | | |
| 1986 | 相原康二 「胆沢城周辺のムラ」 | | 『第12回古代城郭官衙遺跡検討会資料』 | |
| 〃 | 高橋信雄 「岩手県の8~9世紀のムラ」 | | | 〃 |
| 〃 | 西野 修 「志波城内の竪穴住居と周辺のムラ」 | | | 〃 |

2) 中世整穴住居跡

本遺跡の中世整穴住居跡は、東方約400mに位置する花巻市古館遺跡^Ⅱや県北二戸市長瀬C遺跡^Ⅲ等で検出されている、所謂張り出しを持つ方形ないし長方形の整穴住居跡と平面的に近似するものである。14棟検出し内完掘できたのは6棟だけで、他の遺構は重複や一部調査区域外に延びているために不詳な点が多いものの、形態的に類似し出土遺物等から中世に属するものと考えられる。以下項目別に若干の分析を加え述べることにする。

(1) 平面形と規模

平面形は方形ないし長方形を基調とし、コーナーは隅丸を呈するものが半数を占め、出入口の張り出しを1箇所所有するものである。長方形整穴住居跡の長軸方向は、ほぼ南—北を示すのがA14住・A15住・C09住の3棟、東—西がD13住・D21住の2棟、北北東—南南西がE25住・F21住の2棟で、3方向に散在する傾向が見られる。

規模は床面直径で計測し、3群に大別される。

Ⅰ群 長軸の長さが2.5m～3.0m未満で、平均規模は2.6m×2.3mを測る。B08住・C09住の2棟が該当する。

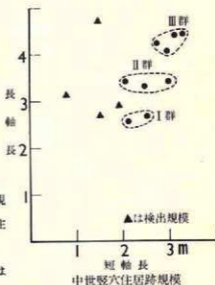
Ⅱ群 長軸の長さが3.3m～3.5mで、平均規模は3.4m×2.5mを測る。D13住・D17—2住・D21住の3棟が該当する。

Ⅲ群 長軸の長さが4.0m～4.5m未満で、平均規模は4.2m×3.0mを測る。A14住・A15住・E25住・F21住の4棟が該当する。

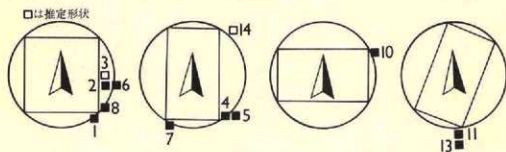
また、規模が不詳な遺構もこれらⅠ～Ⅲ群の範囲に含まれると考えられる。方形を基調とする遺構はⅠ～Ⅱ群に多く、長方形はⅡ～Ⅲ群に集中する様相を示している。

(2) 出入口施設

出入口の設置位置(不明な2棟を除く)は、東壁側8棟、南壁側2棟、南南西壁側2棟で南東コーナー寄りに半数が集中している。平面形態と出入口の位置関係は、挿図(P236)の出入口位置模式図による。平面形が方形の遺構(推定遺構も含む)は、東壁中央寄りに②A06住・⑥B08住の2棟、南東コーナーに⑧D13住、南壁南東コーナーに①A04住で、東壁側に設置するものが大部分を占めている。また、長方形を基調とする遺構も同様に東側に設置する例が多く、南東コーナーないし北東コーナーに片寄っている。⑦C09住は南壁南西コーナーに設置されている。



形状は長方形を基調とするものが大部分を占めているが、⑥A15住のように方形気味のものもある。



出入口位置模式図(Noは一覧表の遺構名と符合)

(3) 柱穴

完掘した6棟の遺構について見ると、柱穴がないE25住・F21住、4本柱のA14住、9本～10本のA15住・B08住・D13住の3タイプに分かれる。これらの柱穴はいずれも壁際を巡り、確認された柱痕(柱あたり)は径10cm～20cmの範囲にある。また、出入口施設に伴う柱穴は主柱穴よりも比較的小さく、壁際に並列し、A06住・B08住・D13住の3棟から検出されている。4本柱以上の柱穴配置は、四隅の柱穴に対し中間の柱穴は若干外側に影らむ傾向が認められる。柱間は各遺構ともぎっちりした間尺ではなく、多少歪みを呈している。

(4) 重複関係

中世遺構どうしの重複関係にあるものは、A15住とZ14住の2棟である。新旧関係はZ14住がA15住を切っていることから(新)Z14住→(旧)A15住となる。

(5) 出土遺物

時期決定資料を出土した遺構は、A14住(永楽通寶と鉄釘)、B08住(陶器の小形壺ないし茶入れ破片)、D17-2住(陶器の小形香炉破片)の3棟である。陶器の鑑定は、愛知県陶磁資料館学芸員井上喜久男氏に依頼し、B08住出土のものは美濃大窯Ⅲ期で16世紀第3四半期、D17-2住の小形香炉破片は瀬戸産で15世紀中葉に比定されるとの所見である。

また、A04住・A06住・C09住の3棟からは米・麦・小豆等の炭化穀類が少量、F13-1住は銅製の簪と鉄釘が出土している。

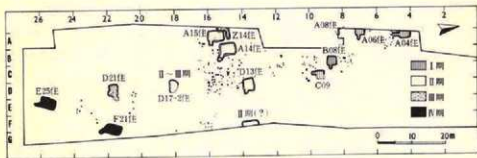
(6) 占地と時期区分

調査区の北側は方形を主体とする遺構が4棟偏在し、中央部から南側段丘縁にかけては長方形の遺構が分布している。形態的に大きく2地域に分割できることは、遺構占地の時期差とも考えられる。これらの遺構は、形態規模・出入口設置位置・長軸方向等に斉一性が認められ、時期区分がI～N期に大別可能である。時期区分は時期決定資料を出土した3棟を中心に展開をすることにする。

- Ⅰ期 平面形は方形を基調とし、調査区の北側地域に偏在する。出入口の設置位置は南壁・東壁側にあり、コーナーか中央に寄り規則性は認められない。A04住・A06住・B08住・C09住の4棟が該当し、B08住から15世紀中葉に比定される陶器片が出土している。また、出入口設置方向で2分される可能性も考えられる。
- Ⅱ期 平面形は長方形を基調とし、調査区の中央部に隣接している。長軸方向は南一北と東一西方向を示す2タイプがあり、出入口はいずれも東壁南東コーナーに設置している。A14住・A15住・D13住の3棟が該当する。A14住からは永楽通寶(16世紀)が出土している。
- Ⅲ期 Ⅱ期のA15住を切って造られていることから、Ⅱ期より新しい事が言える。平面形態は半分以上が調査区域外のため不詳であるものの、出入口は東壁北東コーナーに設置している。Z14住が該当し、D21住も形態的に斉一性を持ち同時期と考えられる。
- Ⅳ期 平面形は長方形を呈し、調査区の段丘縁に位置している。柱穴がないもので、長軸方向はⅡ～Ⅲ期に比べて20度程東偏する。出入口はほぼ南側を示している。時期決定する遺物は出土しない。

また、16世紀第3四分半期に比定される陶器片を出土したD17-2住は、占地等からⅡ期ないしⅢ期に含まれよう。出土遺物等からⅠ期～Ⅲ期の遺構は、15世紀中葉から16世紀の中世に属するものと推察できるが、Ⅳ期の時期は不詳のため中・近世の可能性もあるとしておく。調査区の中央部には、竪穴住居跡に隣接して柱穴群があるものの建物プランと棟数は不詳で明確ではないが、中世に属する柱穴も少なからずあると考えられる。

遺跡が載る豊沢川左岸の段丘面には、東方400mに中世城館の古館遺跡(中館の東端の一部を調査)があり、平面形が長方形を基調とする竪穴住居跡を4棟検出し、時期区分Ⅱ期に類似する。北方500mの方丁目遺跡からは、時期区分Ⅰ期に類似する遺構を2棟検出し、平面形態に強い斉一性が認められる。本遺跡の中世竪穴住居跡は、集落を構成するものか中世城館に伴



竪穴住居跡時期区分

うものかは不詳であるが、古館遺跡の西端部にあたり中世神貫氏の一族である根子氏居館の一部とも考えられる。今後周辺地域の調査で解明を待つ部分が多い。(高橋義介)

＜引用・参考文献＞

註1 三上 昭・他「古館遺跡」『岩手県文化財調査報告書第56集』岩手県教育委員会 1981年

註2 佐々木清文・他「長瀬C遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集』

(財)岩手県埋文センター 1981年

註3 中川 重紀・他「万丁目遺跡」『岩手県文化振興事業団埋文センター文化財調査報告書第102集』

(財)岩手県文化振興事業団埋文センター 1986年

3) 竪穴住居跡状遺構

竪穴住居跡としたもの以外の遺構で、住居跡ほどの規模を有するものを竪穴住居跡状遺構とした。調査区中央に1基(D14住状遺構)、調査区南側に1基(C22住状遺構)がある。

形態、規模は、D14住状遺構は1.2m×1.2mの方形張り出し部をもつ3.0m×2.7mの台形状を呈し、C22住状遺構は2.9m×1.8mの歪んだ長方形を呈している。

壁高は10cm未満と低く、底面は礫が露呈し凸凹を呈しており貼床等は認められない。

出土遺物としてC22住状遺構の埋土中から奈良時代壺の底部片、平安時代のロクロ使用の底部が回転糸切り難しの坏が出土している。D14住状遺構では遺物の出土はない。

遺構の属する時期は、C22住状遺構は平安時代以降と考えられるが、D14住状遺構は不明である。

4) 墓墳

調査区中央の南東寄りに位置し4基検出されている。うち3基が重複関係にある。これら4基の墓墳は同一墓域(家敷墓地)に属するものと思われる。

2基が火葬再葬墓(E18-2、E18-3)で、他の2基が土葬墓(E18-1、E18-4)である。平面形は、楕円形、隅丸長方形、隅丸方形を呈し、規模は開口部径0.7m×0.6m～1.4m×1mの範囲に含まれ、地面表と底面とのレベル差から計算すると深さは0.7m～1.1m程である。各々の墓墳から人骨が検出されているが、副葬品の出土はない。

人骨の鑑定は岩手医科大学の野坂洋一郎教授に依頼した。

墓域の時期は、副葬品の出土はないものの、前の宅地所有者の話等から推測すると、近世末業～明治初頭に属するものと思われる。

() : 現存値

墓 塚 名	平 面 形	規 模 (m)			備 考
		開 口 部	底 部	深 さ	
E18-1	楕 円 形	1.35×(0.9)	1.2×(0.8)	(0.3) 0.75	1号人骨 土葬墓
E18-2	隅丸長方形	0.7×(1.1)	0.6×(1.0)	(0.15) 0.7	2号人骨 火葬墓
E18-3	隅丸方形	0.68×0.58	0.55×0.5	(0.4) 0.95	3号人骨 火葬墓
E18-4	楕 円 形	1.15×0.75	0.9×0.55	(0.15) 1.1	4号人骨 土葬墓

5) 土坑

3基検出されている。うち1基(E15土坑)は平面形が不整楕円形状を呈し、開口部径2.0m×1.5m、地表面からの深さで約0.9mの家畜埋葬墓と思われる。出土した家畜骨は臼歯より馬であろうと推定される。供伴する遺物はなく時期は不明であるが平安時代住居跡を切っていることから考えると中世以降に属すると思われる。土坑としての明確なプランがつかめていないが、E15土坑の南10m程の地点でも家畜骨(馬と推定される)の出土があり、E15土坑同様家畜埋葬墓があったものと思われる。

他の2基は、平面形が楕円形、隅丸長方形を呈し、開口部径が1m前後、深さ0.6m、0.3mを測るものである。埋土中に多くの亜角礫が混入しており人為的に埋め戻されたものと考えられるが、遺物の出土はなく時期は不明である。

6) 掘立柱建物跡及び柱穴群

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡が2棟検出されている。調査区北側に位置するB09建物跡は、検出規模が2間×2間であるが、検出されない柱穴もあったと思われ、より規模の大きい建物であったと考えられる。遺構東寄りに炉跡と思われる焼土があり、東側に土間があった可能性もある。

調査区南側に位置するD20建物跡は、棟方向が東南東—西北西にもつ5間×4間の建物跡である。旧白藤宅と重複すること、一部の柱穴が埋まり切らず空洞部をもつこと等から推測して先々代の建物であったものと思われる。

柱穴群

柱穴が150基ほど検出されているが、建物としてのまとまりを見い出せるものはない。調査区中央に位置する柱穴群は分布密度も高く、また、東西の調査区域外へ広がるものと思われ、中世の建物を構成していたものと考えられる。

7) 溝跡

溝跡が2条検出されている。調査区北側に位置するE06溝跡は、東北東—西西南に緩く彎曲を呈して延び、検出の長さ約10.4m、開口部幅0.4~0.5m、深さ0.2~0.3mを測る。底部の壁際には杭痕と思われる幅穴が多数配されており、上部構造があったものと考えられる。埋土中から奈良時代の土師器片が出土しているため、時期的には奈良時代以降に属すると思われるが、奈良時代住居跡(E07住)の北側に位置し、北側を囲むように彎曲し位置する点から推測すると、E07住居跡に伴う施設の可能性もあると思われる。このような位置関係をもつ例として、遺跡がある。

もう1基(B12溝)は、検出の長さ2.3mで東西方向に延び、開口部幅0.55m、深さ0.1~0.15mを測り、断面形は浅皿状を呈するものである。平安時代住居跡(B13住)の北側に位置し、わずかに彎曲を呈する点で、上記溝跡と類似しているものの、遺構の時期、性格は不明である。

8) 焼土遺構

焼土遺構として記述したものは8基である。他に掘立柱建物跡に伴う炉跡と思われる現地性焼土が2基検出されている。8基のうち、現地性の焼土遺構は3基であるが供伴する遺物の出土はなく時期は明確にされない。他の5基は、異地性のもので窪地などに投棄された焼土塊である。これらの焼土塊に伴って奈良時代の土師器が出土しているもの3基、銭文が不明であるが貨幣が出土しているもの1基、などがある。また、古代堅穴住居跡に焼土塊が投棄されているもの3例(A07住、D16—2住、F16住)がある。

9) 井戸跡

1基調査区の南寄りから検出している。この井戸は地表施設の井桁や地下設備の井筒がない所謂地山井筒で、形態は直径1m前後の方形を呈しており、深さは検出面から90cmである。常時冠水をしており、埋土下位から13C~14Cに比定される中国龍泉窯産の青磁破片が出土している。遺物等から見れば中世住居跡に伴う井戸とも十分に考えられる。(菊池利和)

2 遺物

古代の出土遺物

遺構内、遺構外から出土した遺物は土師器・須恵器・土製品（勾玉・紡錘車・土玉）・鉄製品（刀子）・石製品（砥石・磨石・凹石）・羽口・鉄滓である。出土遺物の中で土師器が圧倒的多数を占めている。ここでは、古代の堅穴住居跡および遺構外から出土した土師器、須恵器を主眼にして、若干の考察を行いたい。

(1) 土師器の分類

図示した土師器は総数400数点である。それらはロクロを使用していないものと使用したものとに分けられる。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。出土量はⅡ類よりⅠ類が多い。

ロクロ不使用の土師器（Ⅰ類）

出土している器種は、杯・高杯・甕・壺・鉢・片口・盥・小形土器である。その各々は形態や調整技法などによって、次のように分類できる。

杯形土器

器内外面の黒色処理の有無、外面の朱塗の有無などから、内面のみにミガキ調整後黒色処理が施されているもの（以下を内黒の杯とよぶ）、内外面をミガキ調整後黒色処理が施されているもの（黒色の杯）、外面に丹塗が施されているもの（丹塗の杯）、内外面に丹塗、黒色処理が施されず、内面をナデで調整されている杯（内面ナデの杯）に分けられる。（丹塗の杯の内面はすべてヘラミガキ後黒色処理が施されている。）

〔内黒の杯〕

図示したものは57点である。そのうち、反転突調したものを含めれば全体の器形がわかるものは36点である。これらは器内面の区切れの有無、外面の沈線・段・稜の有無などから次のように分類される。更に、器面の調整技法から細分される。

ⅠA類 器内面に区切れをもち、外面に段・沈線を有するものである。（6点）

ドリッドB23、F16、D07（住）、D16-3（住）、D17-4（住）、E18（住）から各1点ずつ計5点出土している。底部のある3点は丸底、他の3点も丸底のものと思われる。口縁部は内彎している。外面は段上部をミガキ、下部をケズリ後ミガキ調整されている（b₁）。B23出土のものは、段下部をハケメ後ヘラミガキ（a）、D07（住）のものは、ヘラミガキ調整されている（b₂）。B23、D07（住）、D16-3（住）、D17-4（住）からのものは口径10～11cmと小型の杯である。

I B類 器内面に区切れをもち、外面に稜を有するものである。(1点)

D17-4(住)から出土している。外面は全体をミガキで調整されている。口径12.9cmの平底風の杯で口縁部が内彎している。

I C類 器内面に区切れをもち、外面に段・沈線を有するものである。(10点)更に、外面の調整技法から細分される。

a・段上部をヨコナデ、下部をハケメで調整されているものである。(1点)

C05(住)から出土している。口径17.3cmの丸底風のもので、口縁部が内彎している。段は体部下位にある。

b・段上部をヘラミガキ、段下部をヘラケズリで調整されているものである。(2点)

グリッドF08、F17(住)から1点ずつ出土している。F08のものは小破片で口縁部、底部の形態は不明である。F17(住)のものは底部が欠損している。口径16.5cm(推定)で口縁部が外傾している。

c・器外面がヘラミガキで調整されているものである。(8点)段下部がヘラケズリ後ヘラミガキ調整されるが部分的にヘラケズリ痕が残っているもの(c₁)(4点)と段下部も丁寧にヘラミガキで調整されているもの(c₂)(4点)とがある。

c₁・グリッドE17、D23、D16-1(住)、D16-2(住)、D17-2(住)、E16-1(住)から1点ずつ出土している。D16-1(住)、D17-2(住)のものは口縁部が内彎している。口径17.8cm(推定)で、底部が欠損している。

E16(住)のものは内彎しながら立ち上がり口縁部が内傾している。口径13.4cm(推定)で、底部が欠損している。

D16-2(住)のものは体部に1~2本の沈線を巡らし口縁部が内彎している丸底風の杯である。口径は14cm(推定)である。E17のものは体部片である。

c₂・グリッドC20、D16-2(住)、D22(住)から1点ずつ出土している。C20のものは口縁部片で体部に沈線を巡らせている。D16-2(住)のものは丸底で口縁部が内彎している。段上部に一部ハケメ痕がみられる。口径は14cmである。D22(住)は口縁部が外傾し体部に一部沈線を巡らしている。底部は欠損しているが丸底と思われる。口径は10.8cm(推定)である。

I D類 器内面に区切れをもち、外面に稜を有するものである。(10点)更に外面の調整技法から細分される。

a・稜上部をヘラミガキ、下部をヘラケズリで調整されているものである。(1点)

D16-2(住)から出土している。口縁部が外傾する平底風のものである。口径は13cmである。稜は体部下位にある。

b・器外面がヘラミガキで調整されているものである。(6点) 絞下部がヘラケズリ後ヘラミガキ調整されるが部分的にヘラケズリ痕が残っているもの(b₁) (3点)と絞下部も丁寧にヘラミガキで調整されているもの(b₂) (3点)とがある。

b₁・グリッドE19、C21(住)、E18(住)から1点ずつ出土している。E19のものは口縁部が外傾している破片である。C21(住)のものは口縁部が内彎している平底風の坏である。口唇部が肥厚している。口径は17cmである。E18(住)のものは体部が内彎している丸底風の坏である。口縁部は欠損している。

b₂・C05(住)、D16—1(住)、E18(住)から1点ずつ出土している。3点とも丸底のものと思われる。C05(住)のものは口径が16.4cm(推定)、口縁部が内彎し上位で外傾している。D16—1(住)のものは口縁部が欠損している。E18(住)のものは口縁部が外傾している。口径は18.2cm(推定)である。

I E類 器内面に区切れをもたず、外面に段・沈線・絞をもたないものである。(10点)更に、外面の調整技法から細分される。

a・口縁部をヨコナデ、体部をヘラケズリで調整しているものである。(1点)

F17・18から出土し接合している。口縁部が内彎している。底部は欠損しているが、丸底または丸底風のものである。口径は15.4cm(推定)である。内外面に輪痕残り凹凸がみられる。

b・体部下端をヘラケズリ、そのほかをヘラミガキで調整されているものである。(4点)
F15—1(住)、E16—2(住) ? から各1点、C21(住)から2点出土している。F15—1(住)のものは口縁部が外傾している平底風の坏である。口径は13.3cm(推定)である。C21(住)のものは1点が平底で体部が外傾しながら立ち上り口縁部が内彎している坏である。口径は19.7cm(推定)である。他の1点は平底風で、体部が内彎し口縁部が外傾している坏である。口径は22.1cm(推定)である。E16—2(住) ? のものは体部が内彎し口縁部が外傾している坏である。口径は21cmである。4点とも口縁部が外傾または外反している。F15—1(住)を除く3点は法量が他の類の坏と比べて大きい。

c・器外面をヘラミガキで調整されているものである。(5点)

グリッドD19、D07(住)、E18(住)から各1点、C05(住)から各2点出土している。D19のものは丸底で口縁部が内彎している小型の坏である。口径は9.5cmである。C05(住)のものは1点が丸底の小型の坏で口縁部が内彎している。口径は9cm(推定)である。他の1点は口縁部が外傾している丸底の坏である。口径は18cm(推定)である。D07(住)のものは口縁部が内彎している丸底の坏である。口径は17cmである。E18(住)のものは口縁部が内彎している丸底風の坏である。口径は14.2cmである。5点のうち2点は口径が10cm未満で小型の坏である。

〔黒色の坏〕

図示したものは5点で、ほぼ全体の器形がわかるものは3点である。器内外面の形態の特徴から次のように分類される。

I A類 器内面に区切れをもち、外面に稜をもつものである。(1点)

グリッドF18から出土している。口縁部は外傾している。底部は丸底であると思われる。口径は14.5cm(推定)である。

I B類 器内面に区切れをもち、外面に段・沈線を有するものである。(3点)

C21(住)から2点、D22(住)から1点出土している。C21(住)の2点は口縁部が内傾する坏である。底部は欠損している。口径は14.2cmと19.4cm(推定)である。D22のものは口縁部が欠損している平底の坏である。外面の区切りは1点が段、2点が沈線である。

〔丹塗の坏〕

図面にしたものは破片を含め18点である。そのうちほぼ全体の器形がわかるものは7点である。内面の区切りの有無、外面の段・稜の有無などの形態の特徴から次のように分類される。

I A類 器内面に区切れをもち、外面に段を有するものである。(2点)外面の調整技法から2つに分けられる。

a・段上部がヘラミガキ、下部がハケメで調整されているものである。(1点)

E18(住)から出土している。口縁部が内傾している。底部は欠損している。口径は13.2cmである。

b・段上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリで調整されているものである。(1点)

E18(住)から出土している。口縁部が外傾している平底のものである。口径は14.2cmである。

I B類 器内面に区切れをもち、外面に段を有するものである。(5点)外面の調整技法から細分される。

a・段上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリで調整されているものである。(3点)

グリッドD18、E07(住)から出土している。D18のものは丸底風で口縁部が内傾している。口径は10cm(推定)である。E07(住)の2点は体部片である。

b・外面がミガキで調整されているものである。(1点)

E18(住)から体部片が出土している。

c・段上部がコナデ、下部がヘラミガキで調整されているものである。(1点)

表面採集資料の中に1点ある。丸底で口縁部が内傾している。内面はヘラナデ後一部ヘラミガキが施されている。口径は約13cm(推定)である。

I C類 器内面に区切れをもち、外面に稜を有するものである。(2点)

D16-1(住)、E18(住)から各1点出土している。D16-1(住)のものは体部が内彎し口縁部が外傾する杯である。底部は欠損している。口径は16.2cm(推定)である。E18(住)は内彎する体部片である。

I D類 器内面に区切れをもたず、外面にも段、稜をもたないものである。(2点)

C05(住)、C21(住)から各1点出土している。C05(住)のものは口縁部が内彎し口唇部近くで外傾している。底部は欠損している。口径は17.8cm(推定)である。C21(住)のものは口縁部が内彎している杯である。口径は19cm(推定)である。

〔内面ナデの杯〕

図示したものは口縁部片3点である。口縁部外面をヨコナデ、体部外面をヘラケズリ、内面をナデで調整されている。3点ともC05(住)から出土している。口縁部が内彎または内傾しているものである。色調は赤褐色で他の出土遺物に比べて赤味を帯びている。口縁部と接合しなかったが底部が出土している。平底風で外面がヘラケズリで調整されている。

高杯形土器

遺構内外から6点出土している。全体の器形がわかるものは1点である。口縁部だけでは杯と区別できず、脚部が出土してはじめて高杯とわかるため、実際はもっと出土していると思われる。内面はすべてヘラミガキ後黒色処理が施されている。外面に丹塗を施しているもの(丹塗の高杯)と施されていないもの(内黒の高杯)とがある。

高杯

4点出土している。口縁部から脚部まであるものは1点である。これらはすべて脚部に段を有している。脚部の形態から二分される。

I A類 脚の上部が柱状、下部が円錐台状を呈するものである。(2点)

グリッドF14、C05(住)から各1点出土している。F14のものは杯部、脚の裾下部を欠損している。脚部は柱状部が中実である。内外面は主にヘラケズリで調整されている。C05(住)のものは杯部を欠損している。脚上部は外面がヘラケズリ後ミガキ、内面がヘラケズリで調整されている。脚下部の内外面はナデで調整されている。

I B類 脚が円錐台状を呈するものである。(2点)

D07(住)、F16(住)から各1点出土している。D07(住)のものは杯部と脚部が接合して器形全体がわかるものである。杯部は体部外面に段を有し口縁部が内彎する丸底風のものである。段上部はヘラミガキ、段下部はヘラケズリで調整されている。脚部は外面に2つの段を有している。脚部の外面は最上部がヘラケズリ、そのほかはナデで調整されている。内面は上部がヘラケズリ、下部がナデで調整されている。杯部の口径は19.6cmである。器高は9.7cmで

ある。F16(住)のものは脚上部の破片である。軽い段をもち、外面がヘラミガキ、内面がヘラケズリで調整されている。

〔丹塗の高坏〕

3点出土している。ともに坏部は欠損している。脚部は円錐台状を呈している(IA)。段の有無から二分される。

IA類

a・脚部に段をもつものである。(1点)

E07(住)から出土している。坏部は欠損している。脚部に段を二つもつ。丹塗前の内外面はナデで調整されている。

b・脚部に段をもたないものである。(2点)

D16-2(住)から出土している。坏部と脚の下裾部は欠損している。坏部の内部底面は窪んだ丸底を呈している。丹塗前の脚部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ・ナデで調整されている。内面はヘラケズリ後ヘラミガキで調整されている。グリッドE18から高坏の脚部下半と思われるものが出土している。丹塗前の内外面ナデで調整されている。

変形土器

口縁部の破片の平面・反転実測を含めて、分類で取り扱ったものは計53点である。これらは口縁部・頸部の沈線文の有無、肩部の段・沈線・稜の有無、口縁部の形態を主とする器形、器面の調整技法などから次のように分類される。

IA類 口縁部・頸部に沈線により弧状文・連続山形文・格子目状文・縦位の平行文などが施されているものである。更に、沈線文の文様から細分される。(7点)

a・口縁部に弧状の沈線文が施されているものである。(1点)

グリッドB19から口縁部破片が出土している。交叉する弧状文が沈線によって描かれている。外面はコナデで調整されているが一部ハケミ痕がみえる。内面は磨減して調整はみえない。

b・口縁部・頸部に沈線により縦位の平行文と連続山形文が施されているものである。(1点)

グリッドB19から口縁部破片が出土している。口縁部の沈線文下に軽い段をもち、コナデ後縦位の平行沈線文を施した上に2条の連続山形沈線文が描かれている。

c・頸部に沈線により連続山形文が施されているものである。(4点)

グリッドB19から1点、C05(住)から3点出土している。いずれも口縁部片である。2条よりなる連続小形文が頸部に描かれている。口唇部まであるものは1点で反外しながら立ち上がり口唇部近くで短く外傾している。

d・頭部に沈線により格子目状文が施されているものである。(1点)

D07(住)から出土している。長胴の甕で、口縁部が外反し口唇部近くで短く直上している。口縁部に2つの軽い段、肩部に段をもつ。器外面は磨滅しているが、ヘラナデ後ヘラミガキの調整が施されている。内面は縦位のヘラミガキで調整されている。口径19.2cm、底径7.2cm、器高31cmである。

I B類 口縁部に段・沈線をもつものである。(9点)更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が強く外反しているものである。(3点)外面調整から細分される。

甕と小甕とがある。甕—グリッドD23、D22(住)から各1点出土している。ともに長胴甕で肩部にも段をもち、底部が欠損している。器内外面はハケメで調整されている。口唇部は平坦である。口径は23.2cmと25.4cmである(a₁)。小甕—D16—2(住)から1点出土している。ほぼ完全に復元できた長胴の甕である。平坦な口唇部に1本沈線を巡らし、肩部に段をもつ。器外面はやや粗いヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。口径15.2cm、底径7.1cm、器高20.1cm(a₂)。

b・口縁部が外反しているものである。(3点)

甕と小甕とがある。甕—E16—1(住)から出土している。口縁部と肩部に沈線を巡し、体部が駢らむものである。底部は欠損している。平坦な口唇部に部分的に沈線を巡している。器内外面はナデ、ハケメで調整されている。口径は21.7cmである。小甕—C05(住)から出土している。口唇部が平坦で口縁部と肩部に段をもつ口縁片である。残存する体部の内外面はハケメで調整されている。口径は16cm(推定)である。口縁部片—口縁部下位に沈線を巡しているものがD16—3(住)から1点出土している。

c・口縁部が内彎しているものである。(2点)

甕と小甕とがある。甕—D16—3(住)から1点出土している。口縁部と肩部に段をもつ口縁片である。口径は19.1cm(推定)である。小甕—グリッドD17から1点出土している。口縁部に段をもつ口縁部片である。口径は15.4cm(推定)である。

d・口縁部が外反し口唇部近くで外傾するものである。(1点)

D16—2(住)から長胴の甕が出土している。口縁部上位に軽い段、肩部に段をもつもので底部が欠損している。器内外面はハケメで調整されている。

I C類 肩部に沈線を巡せるものである。(3点)外面調整から細分される。

甕と小甕とがある。甕—D16—2(住)から1点出土している。口縁部が外反し体部がやや駢らむものである。体部下半、底部は欠損している。器外面はハケメ、内面はナデで調整されている。口径は20cm(推定)である(a₁)。小甕—グリッドE18・19から1個体出土している。口縁部がゆるく外反している。体部下半・底部は欠損している。外面をハケメ後ヘラミガキ、

内面をハケメで調整されている。口径は15cm（推定）である（a₂）。口縁部片-D07（住）から1点出土している。口縁部は外反している。器内外面はハケメで調整されている（a₁）。

I D類 肩部に段をもつものである。（15点）更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が外反しているものである。（9点）

甕と小甕とがある。甕-グリッドB18、D16-2（住）、E07（住）から各2点計6点出土している。すべて外面はハケメ、内面はハケメまたはヘラナデ、ハケメとヘラナデで調整されている長胴甕である。B18のものは1点が口径21.6cm、底径7.6cm、器高30cmのものである。他の1点は口径19.8cm（推定）のもので底部が欠損している。D16-2（住）は2点とも底部が欠損している。口径は19.8cm（推定）と17.5cm（推定）である。B18およびD16-2（住）の各2点のうち1点は口唇部が平坦である。E07（住）のものは2点とも底部を欠損している。口径は18.2cm（推定）と18cm（推定）である。小甕-C05（住）から1点出土している。底部は欠損している。口径は14.4cm（推定）である。口縁部片-D07（住）、E07（体）から各1点出土している。E07（住）のものは口唇部が平坦である。

b・口縁部が外傾し中位から外反するものである。（2点）

グリッドF18、E16-1（住）から各1点出土している。ともに体部下半、底部を欠損している。内外面の器面調整はF18のものがナデ、E16-1（住）のものがハケメである。

E16-1（住）の口唇部は平坦である。口径は17.4cm（推定）と19.5cm（推定）である。

c・口縁部が外傾しているものである。（2点）

E16-1（住）、E18（住）から各1点出土している。E16-1（住）のものはいびつで底部が欠損している。体部中央が脹む。外面はヘラミガキ、内面は主にヘラナデで調整されている。

口径は13.7cmである。E18（住）のものは口縁部片である。口径は25.6cm（推定）である。

d・口縁部が内傾し中位から外傾するものである。（1点）

E07（住）から出土している。体部中央がやや脹らむもので底部が欠損している。器外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている。口唇部は平坦で中央に窪みをもつ。口径は19.6cmである。

e・口縁部が短く外反しているものである。（1点）

E16-2（住）から1点出土している。体部上位に最大幅をもち、口径に比べて器高の小さい器形を呈している。体部外面上半はヘラナデ、下半はヘラケズリで調整されている。内面調整はヘラナデである。

I E類 肩部に稜をもつものである。（7点）更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が外反するものである。（5点）外面調整から二分される。

A07(住)、C05(住)、D17-1(住)、E07(住)、E18(住)から各1点出土している。A07(住)とE07(住)のものは、ともに底部が欠損する長胴甕で、器内外面をハケメで調整されている。口径は19.2cm(推定)と18.4cmである(a₁)。C05(住)のものは器外面が主にヘラミガキ、内面がヘラナデ、ハケメで調整されている。口径は18cm(推定)である(a₂)。D17-1(住)とE18(住)のものは口縁部片である。口径は19.6cmと19.2cmである。

b・口縁部が外反の口唇部が直上するものである(1点)

グリッドB18から出土している。体部下位がやや脹らむ長胴甕で口唇部近くの内面に一部沈線がみられる。器外面上半は丁寧なヘラナデ、下半はハケメで調整されている。内面の調整はハケメである。口径22.5cm、底径9.1cm、器高34.1cmである。

c・口縁部が短く外反しているものである(1点)。

F16(住)から出土している。体部下半、底部が欠損している小甕である。器内外面は不定方向の雑なヘラナデで調整されている。

I F類 肩部に段・沈線・稜をもたないものである。(12点)更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が強く外反しているものである。(1点)

D16-2(住)から出土している。長胴の甕で底部が欠損している。器外面はヘラミガキ、内面はナデ・ハケメで調整されている。口径は19cmである。

b・口縁部が外反しているものである。(3点)

D16-1(住)、D22(住)、E07(住)から各1点出土している。D16-1(住)、E07(住)のものは体部下半、底部が欠損している。器外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている。E07(住)のものは口唇部が平坦である。口径は17cm(推定)と23cm(推定)である。D22(住)のものは口縁部片である。口径は17.7cmである。

c・口縁部が外傾しているものである。(5点)器外面の調整から細分される。

甕と小甕とがある。甕—グリッドD10、E19、A07(住)、D16-1(住)から各1点出土している。すべて底部が欠損している。D10、E19のものは外面がヘラナデ・ハケメ、内面が主にハケメで調整されている(c₁)。E19のものは口唇部が平坦で中央が窪んでいる。口径は19cmと19.9cm(推定)である。A07(住)のものは外面がハケメ後ヘラミガキが施されている(c₂)。内面の調整はハケメである。体部中央がやや脹らむものと思われる。口唇部は平坦である。口径は21cmである。小甕—F16(住)から1点出土している。体部下半、底部が欠損している。器外面は縦方向のヘラナデ、内面はハケメで調整されている。口径は13cm(推定)である。D16-1(住)のものは外面がハケメで調整されてい

る(c₂)。体部は大半欠損している。口縁部は外傾している。

d・口縁部が短く外反しているものである。(3点)器外面の調整から細分される。

壺と小壺とがある。壺—B13(住) E16—2(住)から各1点出土している。B13(住)のものは底部が欠損している。器内外面は粗いヘラナデで調整されている。口径は24cm(推定)である(d₁)。E16—2(住)のものは体部上位がやや脹らむ器形である。器外面は下端にヘラケズリがみられるが主にヘラナデで調整されている。内面の調整はハケメである。口径18.8cm、底径8.5cm、器高22.1cmである(d₂)。小壺—B13(住)から1点出土している。体部下半、底部欠損している。器内外面はハケメで調整されている。口径は15cm(推定)である。B13(住)のものは外面がハケメで調整されている(d₃)。

以上のほかに内面をヘラミガキ後黒色処理を施している小型の壺がグリッドE19から1点出土している。口縁部は短く外傾しているものである。体部、底部は欠損している。

壺形土器

外面を丹塗を施しているもの(丹塗の壺)と施していないもの(丹塗のない壺)とがある。本遺跡では前者が後者の2倍近く出土している。

〔壺〕

図示したもののうち、完全に復元できたもの、口縁部と肩部、肩部と体部あるものを分類の対象(8点)にした。口縁部の沈線の有無、肩部の段・沈線の有無から分類される。

I A類 口縁部に沈線を巡しているものである。(1点)

グリッドF11から出土している。体部下半が欠損している壺である。肩部に段・沈線をもたない。器内外面はヘラナデで調整されている。口縁部は外反している。口径は19.7cmである。

I B類 肩部に沈線を巡しているものである。(1点)

D17—1(住)から出土している。口縁部上半、底部が欠損している小型の壺である。器外面はハケメ後一部ヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。

I C類 肩部に段をもつものである。(6点)更に、口縁部の形態、器形などから細分される。

a・口縁部が外反しているものである。(1点)

D16—2(住)から出土している。最大径を体部中央にもち、下半がすぼむ器形を呈するものである。器外面は下端にヘラケズリがみられるが、主にヘラミガキで調整されている。内面調整はヘラナデである。口径20.9cm、頸部径17.2cm、底径7.4cm、器高25.5cmである。

b・口縁部が外反し口唇部が直上するものである。(2点)

E21(住)から2点小型の壺が2点出土している。いずれも底部が欠損している。最大径

体部上半部にある。器外面はハケメまたはハケメ後ヘラミガキで調整されている。内面調整はハケメ・ヘラナデである。口径は15.3cm（推定）と14cm（推定）である。

C・口縁部が短く外反しているものである。（1点）

F16（住）から出土している。体部は半球状を呈する。体部下半、底部が欠損している。器外面はヘラケズリ、内面はハケメで調整されている。口径は14cm（推定）である。

以上のほかにD16—2（住）から出土している。口縁部上半が欠損しているために細分類に入れることができなかつたものがある。器外面は主にヘラミガキ、内面はナデで調整されている。

I D類 肩部に段・沈線をもたないものである。（1点）

C05（住）から出土している。頸部が強くすぼまり、最大径が体部最上位にある器形を呈する小形の壺である。口縁部上半が欠損している。器外面はヘラミガキ、内面はヘラナデで調整されている。

【丹塗の壺】

図示したものは40点を越える。口縁部の丹塗の施し方の違いから大きく2つに分けられる。

I A類 口縁部外面にも、体部と同じく全面に丹塗が施されているものである。（7点）更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が強く外反しているものである。（2点）

C05（住）、D22（住）から各1点出土している。C05（住）のものは小型の壺の口縁部片である。口唇部が平坦で沈線を巡らせている。D22（住）のものは肩部に段をもち体部下半が欠損している。口径は16cm（推定）である。2点とも丹塗前に口縁部内外面をヘラミガキで調整している。

b・口縁部が外反しているものである。（4点）

壺と小型壺とがある。壺—A07（住）、D16—1（住）から各1点出土している。A07（住）のものは口唇部が平坦な口縁部片である。丹塗前口縁部外面をヘラミガキで調整している。口径は21cm（推定）である。D16—1（住）のものは肩部に段をもち、体部下半が欠損している。口縁部内外面は磨滅しているが、丹塗前にヨコナデが施されていたものと思われる。口径は23.9cm（推定）である。小型の壺—グリッドE14とF17とが接合したものが1点出土している。肩部に段をもち、底部が欠損している。丹塗前、口縁部内外面をヨコナデ調整している。口径は14.5cm（推定）である。口縁部片—グリッドA07から出土している。口縁部内外面は丹塗前に、ヨコナデ後ヘラミガキが施されている。

c・口縁部が外傾しているものである。（1点）

C21（住）から小型の壺が出土している。肩部に段をもち、最大径を体部中央にもつ器形を呈している。丹塗前、口縁部内外面、体部外面はヘラミガキで丁寧に調整されている。

口径13cm、底径8.6cm、器高18.8cmである。

以上のほかに口縁部上半が欠損しているために分類に含まれていないものがある。それらはC05(住)、E07(住)から出土している。

I B類 口縁部外面あるいは内外面に、縦位に帯状の丹塗が施されている。(8点)更に、口縁部の形態から細分される。

a・口縁部が外反しているものである。(2点)

グリッドF18、C21(住)から出土している。F18のものは口唇部が平坦な口縁部片である。口径は20.6cm(推定)である。C21(住)のものは、口唇部が平坦で肩部に段をもち、体部下半、底部が欠損している。口径は17cm(推定)である。

b・口縁部が外傾しているものである。(1点)

E16-1(住)から出土している。肩部に段をもち、最大径を体部中央にある器形を呈している。口唇部は平坦である。4本の帯と1個の斑点との組み合わせで丹塗が施されている。口径19.9cm、底径8.6cm、器高25.6cmである。

以上のほかに、口縁部の形態は不明であるが、口縁部に縦位の帯状の丹塗を施されたものが、グリッドE17、C21(住)、E16-1(住)、E18(住)、F17(住)から出土している。

また、内面をヘラミガキ後黒色処理を施した丹塗の壺の底部片がグリッドF17から1点出土している。

鉢形土器

図示したものは5点である。肩部の段、稜の有無から分類される。

I A類 肩部に段をもつものである。(2点)外面調整から2分される。

D16-2(住)、E18(住)から出土している。D16-2(住)のものは外面がハケメ、内面がヘラナデで調整されている。口径18.8cm(推定)、底径8.7cm(推定)、器高11.4cmである(a₁)。E18(住)のものは底部が欠損している。器内外面はヘラナデで調整されている。口径は11.1cm(推定)である(a₂)。2点とも口縁部は外反している。

I B類 肩部に稜をもつものである(1点)

C05(住)から出土している。口縁部は外傾している。体部下半、底部は欠損している。器内外面はハケメで調整されている。口径は13cm(推定)である。

I C類 肩部に段・沈線をもたないものである。(2点)2分される。

F16(住)から出土している。口縁部が外傾しているものである。器内外面は主にヘラナデで調整されている。外面の一部にヘラケズリ痕がみられる。口径14.9cm、底径8.1cm、器高14.6cmである(a₁)。D16-2(住)から出土しているものは外面ヘラケズリ後、ヘラミガキが施

されている (a₂)。口径13cm、底径5.9cm、器高10.8cmである。

盤形土器

図示したものは1点である。グリッドF16、から出土している。F16のものは、口縁部が外反し、肩部に段・稜をもたないものである。器壁が薄く旋成が良好である。外面は体部上半がヘラナデ、下半がヘラケズリで調整されている。内面調整はハケメである。口径9.6cm、底径6cm、器高7.1cmである。

甔形土器

グリッドA16の柱穴跡の埋土上部から1点出土している。体部下半のみで、内外面はハケメで調整されている。底径は4.7cm（推定）である。

片口形土器

グリッド10から1点出土している。口縁部片である。器外面はヘラナデ、内面はヘラナデ、一部ヘラミガキ後黒色処理が施されている。

小形土器

D16-1（住）、D17-4（住）から各1点出土している。D16-1（住）のものは丸底で口縁部が波状を呈する。口径は6cm（推定）である。D17-4（住）のものは平底で口縁部が外傾する。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はヘラナデで調整されている。内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。口径8.3cm、底径3.5cm、器高3.7cmである。

その他

グリッドB18から上部、下部が欠損している筒状のものが出土している。内面はハケメで調整されている。最大径3.4cm（推定）、残存高3cmである。高杯の脚部とも考えられるが小破片のため断定しがたい。

ロクロ使用の土師器（II類）

出土している器種は杯・甕形土器である。甕形土器は少数で、杯形土器が圧倒的に多い。

杯形土器

内面ヘラミガキ後黒色処理を施したものが大多数である。内面ヘラミガキだけの杯が出土し

ているが、内面の黒色が二次的加熱を受けて消失したものと思われる。ロクロから切り離した後、体部下端や底部外面の再調整の有無から次のように分類される。

IIA類 底部外面または体部下端と底部の外面にヘラケズリによる再調整が行なわれているものである。(6点)

グリッドF17、F17(住)から各1点、グリッドE17、F16(住)から2点出土している。5点とも口縁部が欠損している。F16(住)の1点とF17(住)のものは底部外面のみに再調整が施されている。

IIB類 体部下端にヘラケズリによる再調整が行なわれているものである。(8点)

F16(住)から3点、グリッドF15、F17、F18、C21(住)、F13-2(住)、から各1点出土している。器形全体がわかるものは3点である。グリッドF15とF16(住)の2点は口縁部が内傾している。口径14.2cm、底径5.2cm、器高4.6cmと口径15cm(推定)、底径5cm、器高5.1cmである。F13-2(住)のものは口縁部が外傾し、ロクロ痕が顕著である。口径15.4cm(推定)、底径5.2cm、器高4.6cmである。

IIC類 体部下端や底部外面に再調整が行なわれていないものである。(11点)

F16(住)から6点、グリッドE09、E14、E17、F17、D17-2(住)から各1点出土している。これらのうち、全体の器形のわかるものは2点である。F16(住)の1点は体部が外反し口唇部近くが外反している。F16(住)からのもう1点は口縁部が外反している。前者は口径15.2cm(推定)、底径5.8cm(推定)、器高5.2cm、後者は口径13.4cm、底径6.8cm、器高5.1cmである。

壺形土器

4点出土している。すべてF16(住)から出土している。壺と小型の壺とがある。壺—1点である。口縁部は短く外傾し口唇部が直上している。器面はロクロで調整されているが、外面下半に一部ヘラケズリでさらに調整されている。底部は欠損している。口径は24cm(推定)である。小型の壺—3点である。口縁部は短く外傾し口唇部が直上している。全体の器形がわかるものは1点で、他の2点は底部または体部下端・底部が欠損している。体部は中央がやや膨む。底部は回転糸切りでロクロから切り離されている。

(2) 須恵器の分類

杯、高台杯、長頸壺、短頸壺、甕などが出土している。破片のものが大半で全体の器形がわかるものは杯だけである。図示したものは遺構内45点、遺構外29点である。

環形土器

図示したものは22点ある。全体の器形がわかるものは4点である。ロクロから切り離し方、切り離し後の再調整により次のように分類される。

A類 ロクロからの切り離しが回転ヘラ切りであるものである。(2点)

B15(住)から出土している。体部が外傾しながら立ち上り口縁部がやや外反している。口径12cm、底径5.8cm、器高3.5cmである。グリッドF07から底部が出土している。

B類 ロクロからの切り離しが回転糸切りであるものである。(12点) 体部下端、底部外周の再調整の有無から細分される。

a・体部下端と底部外周にヘラケズリによる再調整が施されているものである。(1点)

F17(住)から出土している。口縁部は外傾している。口径13cm(推定)、底径6.4cm(推定)、器高3.6cmである。

b・体部外面がヘラケズリによる再調整が施されているものである。(1点)

グリッドF19から出土している。口縁部は欠損している。底径は6cm(推定)である。

C・体部・底部にヘラケズリによる再調整が施されていないものである。(10点)

グリッドE17、E18、F07、F19、D17-1(住)、F17(住)から各1点、グリッドF18、F16(住)から2点出土している。全体の器形がわかるものは2点だけで、D17-1(住)、F17(住)から出土している。D17-1(住)のものは体部が内傾しながら立ち上がり、口縁部が外傾する。口径10.8cm(推定)、底径5.6cm(推定)、器高4cmである。

F17(住)のものは体部から口縁部まで外傾している。口径13.4cm、底径7.6cm、器高4.3cmである。

高台環形土器

グリッドF18から1点出土している。口縁部および高台が欠損している。体部外面はロクロナデ後一部ヘラケズリによる再調整が施されている。底部は径10cm(推定)である。

壺形土器

長頸壺と短頸壺とがある。長頸壺の口縁部・頸部・肩部破片がグリッドF15、C17(住)、から各1点、F16(住)から4点出土している。短頸壺はD22(住)から1点出土している。底部は欠損している。口径は7.3cmである。

甕形土器

図示したものは27点である。グリッドB24、D18、E17、F17、D17-1(住)、E07(住)、

F15-1 (住) から各1点、グリッドB18、F15-2 (住) から各2点、グリッドE18、E16-2 (住) から各3点、F16 (住) から7点出土している。F15-2 (住) の1点は肩部片、その他は外部片である。外面には平行印目文、格子風印目文、内面には平行印目文、同心円の青海波文などがのこされている。

酸化焙焼成の須恵器

器種は坏形土器だけである。図示したものは遺構内36点、遺構外4点である。グリッドB19、E16、E17、G20、C21 (住)、D17-1 (住)、D17-3 (住)、F15-1 (住) から各1点、E16-2 (住)、F15-2 (住) から2点、B13 (住) から8点、F16 (住) から20点出土している。底部が残存しているものは26点で、すべて回転糸切りでロクロから切り離されている。口縁部から底部まで復元でき全体の器形がわかるものは14点である。B13 (住) が2点、F15-2 (住) が1点、F16 (住) が10点である。口縁部の形態は外傾しているものがF16 (住) の2点、体部から続いて内傾しているものがB13 (住) の1点、F16 (住) の3点、やや外反しているものがB13 (住) の2点、F15-2 (住) の1点、F16 (住) の5点である。口径は13~14cmが1点、14~15cmが10点、16~17cmが2点である。

(3) 相伴関係と組合せ

奈良時代の土師器の中でも、比較的多く出土している坏形土器(内黒・丹塗・内面ナデの坏) 壺形土器、壺形土器(丹塗の壺) を中心にして相伴関係と組合せについて考えてみたい。

坏形土器

遺構に伴う坏形土器が複数出土している住居跡はC05 (住)、C21 (住)、D16-1 (住)、D16-2 (住)、D17-4 (住)、D22 (住)、E07 (住)、E18 (住) である。

C05 (住) では、内黒の坏 | D-b₁、| E-c (大小あり)、内面ナデの坏が相伴している。埋土から内黒の坏 (| C-a)、丹塗の坏 (| D) が出土している。埋土は単層であり、層が厚くないことから、住居跡に伴う土器と埋土出土土器の廃棄された時期はほぼ同時期内と考えたいと思われる。

C21 (住) では、内黒の坏 | D-b₁、| E-b (2点) と丹塗の坏 | D が相伴している。

C05 (住)、C21 (住) 間では内黒の坏 | D-b₁ と丹塗の坏 | D が相伴している。つまり、外面に稜があり、稜下半がヘラケズリ後ヘラミガキを施されている内黒の坏と、外面に段、稜などの区切りをもたない丹塗の坏が相伴している。

E18 (住) では、内黒の坏 | A、| D-b₁、| E-c、丹塗の坏 | A-b が相伴している。埋土から内黒の坏 (| D-b₁)、丹塗の坏 (| A-a) が出土している。

住居跡名	内 黒 の 杯	丹塗の杯	内面ナゲの杯	備 考
D16-3	IC-c ₁			丹塗の高杯
D16-2	IC-c ₁ IC-c ₂ ID-a	口縁部出土		
D22	IC-c ₁			
E16-1	IC-c ₁			高杯
C05	(IC-a)	ID-b ₁ IE-c	(ID)内面ナゲの杯	
C21		ID-b ₁ IE-b	ID	
E18	IA-b ₁	(ID-b ₁)ID-b ₂ IE-c	(IA-a)IA-b	
D17-4	IA-b ₁ IB	IE-c		丹塗の高杯
E07	口縁部出土		IB-a	
D07	IA-b ₂			

() は埋土出土で住居跡とはほぼ同時期内のもの

杯形土器の相伴関係

E18(住)はC05(住)とでは内黒の杯(ID-b₁)、IE-cとが相伴し、C21(住)とでは内黒の杯ID-b₁、IE-cと相伴している。

D16-2(住)では内黒の杯IC-c₁、IC-c₂、ID-aが相伴している。

C05(住)、C21(住)と相伴している杯は出土していない。E18(住)とでは内黒の杯ID-b₂が相伴し、E16-1(住)とではIC-c₁が相伴している。

D17-4(住)では内黒の杯IA-b₁、IBが相伴している。内黒の杯IA-b₁はE18(住)からも出土している。

以上のことから、内黒の杯、丹塗の杯において、3つのまとまりが考えられる。1つはD16-2(住)で相伴している内黒の杯IC-c₁、IC-c₂、ID-aのまとまりである(杯イ群)。1つはC05(住)で相伴している内黒の杯ID-b₁、IE-c、丹塗の杯IDのまとまりである(杯ロ群)。他の1つはE18(住)で相伴している内黒の杯IA-b₁、ID-b₂、IE-c、丹塗の杯IAのまとまりである(杯ハ群)。

杯イ群は、外面に段・沈線をもち、下半をヘラケズリ・ヘラミガキ、ヘラミガキで調整されている内黒の杯と外面に稜をもち、下半をヘラミガキ調整されている内黒の杯とのまとまりである。

杯ロ群は、外面に稜をもち、下半をヘラケズリ・ヘラミガキで調整されている内黒の杯、外面に稜・段・沈線などの区切りをもたず、全面をヘラミガキ調整されている内黒の杯、外面に区切らない丹塗の杯とのまとまりである。

杯ハ群は、内面に区切り、外面に段をもち、段下半がヘラケズリ・ヘラミガキ調整されている内黒の杯、外面に区切りをもたず、上半ヨコナデ、下半ヘラミガキで調整されている内黒の杯、外面に区切りをもたず全体をヘラミガキで調整されている内黒の杯、外面に段をもつ丹塗

の坏とのまとまりである。

さらに、まとめると

坏イ群は段・沈線・稜をもつ内黒の坏

坏ロ群は稜をもつ内黒の坏、区切りをもたない内黒の坏、区切りをもたない丹塗の坏

坏ハ群は内面に区切り外面に段をもつ内黒の坏、区切りをもたない内黒の坏、段をもつ丹塗の坏である。

稜をもつ内黒の坏の下半調整は坏イ群がヘラミガキ、坏ロ群がヘラケズリ・ヘラミガキである。区切りをもたない内黒の坏の調整は坏ロ群が全面をヘラミガキ、坏ハ群が上半ヨコナデ、下半ヘラミガキのものと全面をヘラミガキのものがある。

壺形土器

出土したロタロ不使用の土師器壺（奈良時代）には大小の違いがあるが、小型のもの（口径16cm以下）は少ない。器形は長胴形である。（球胴形の器形のものも壺形土器に含めず、壺形土器の中に含めて扱った）体部外面の器面調整技法はヘラミガキ（大部分がハケメ後）、ヘラナデ、ハケメの3つがある。住居跡に伴う（床面、住居によって埋土最下部・下部）壺の外面調整を住居跡別にみると、表で明らかのように、

ヘラミガキの壺とハケメの壺とが共存する住居跡と

ハケメの壺だけが出土する住居跡とがある。

前者はA07（住）、C05（住）、D16-2（住）、E16-1（住）、後者はE07（住）、F09（住）がその代表例である。

前者のC05（住）、D16-2（住）では口縁部に段をもつ壺が伴っている。ともに小型であるが、外面調整はD16-2（住）が雑なヘラミガキ、C05（住）がハケメである。

C05（住）のものは体部がわずかしか残存しておらず正確ではないが他の遺構から口縁部に段をもちハケメ調整である

壺が出土していることから、口縁部に段をもつ壺にはハケメの壺とヘラミガキの壺とがある。また、C05（住）は口縁部に沈線文（山形）をもつ壺が共存している。D07（住）からも口縁部に沈線文（格子状）をもち、体部外面ヘラナデ状の調整が施されている壺が出土している。

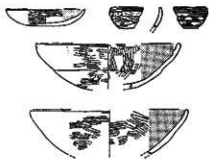
次に、ヘラミガキの壺の器形をみると、口縁部の形態が強く外反、または外傾している。ハケメの壺の口縁部形態は強く外反、外反、内彎、外傾、外傾して外反等である。これらのうち、口縁部が強く外反するハケメの壺は口縁部に段をもつものである。

調整	住居跡名		
	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラナデ
A07	2	1	1
C05	2	6	
D07			
D16-1		2	
D16-2	2	2	
D22		1	
E07		5	
E16-1	1	3	
F09		2	

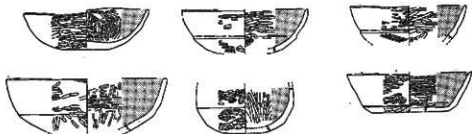
土師器壺の外面調整の違い別出土状況（奈良時代の住居跡に伴うもの）



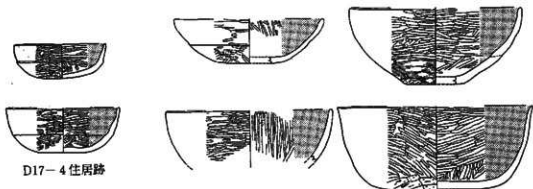
D16-2 住居跡



D05住居跡



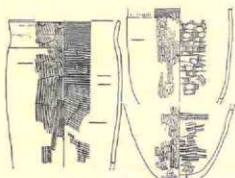
E18住居跡



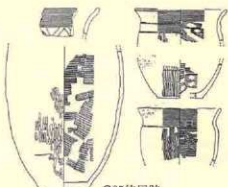
D17-4 住居跡

C21住居跡

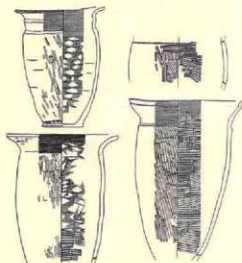
住居跡に伴う坏形土器 (奈良時代)



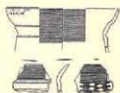
A07住居跡



C05住居跡



D16-2住居跡



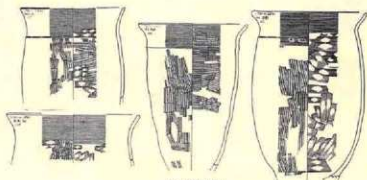
D16-3住居跡



D22住居跡



D07住居跡



E07住居跡

住居跡に伴う土師器変形土器

ヘラミガキの甕 (I B-a₁, I F-a, I D-c) と共伴するハケメ甕の器形をみると、D 16-2 (住) では口縁部に段をもち、口縁部が外反して外傾する (I B-c) のものと共伴している。C05 (住)、E16-1 (住) では口縁に段をもち、口縁部が外反している (I B-b) のものが伴っている。さらに、C05 (住) では口縁部に山形の沈線文をもつ (I A-c) のもの、E16-1 (住) では、肩部に段をもち、口縁部が外傾し口縁端部が外反している (I D-b) のものと共伴している。以上のことから、ヘラミガキの甕と共伴するハケメの甕は、

口縁部に段をもつもの (I B-b, I B-c)、沈線文をもつもの (I A-c)、口縁部の形態が外傾し外反するもの (I D-b) などである。

I B-bを除くと、他の I B-c、I A-c、I D-bの口縁部形態は外反ないし外傾した後、口縁端部が外傾・外反しているもので、大きくみれば口縁端部が屈曲する形として1つにまとめられる。そのほかにA07 (住) ではヘラミガキの甕に口縁部が外反しているハケメの甕 (I E-a₁) が最下部から出土しており、上記のほかに量としては少ないが伴うものと思われる。

丹塗の壺形土器

丹塗の壺が伴っている住居跡は、A07 (住)、C05 (住)、C21 (住)、D16-1 (住)、D22 (住)、E16-1 (住)、E18 (住) である。丹塗の壺は体部が全面に丹塗が施されている。口縁部の丹塗の施し方には2種類ある。1つは口縁部全面に丹塗するもの (I A)、もう1つは縦位の帯状に丹塗するもの (I B) である。A07 (住)、D22 (住) から出土のものはI Aで、D22 (住) の壺は口縁部が強く外反している。C21 (住) からは大小の丹塗の壺が出土している。小型の壺はI Aで、他の1つはI Bである。E16 (住) 出土のものはI Bである。そのほかのものは口縁部が欠損していて不明である。

I A類 (口縁部全面に丹塗)

I B類 (縦位の帯状に丹塗)

D22 (住) (口縁部が強く外反)

A07 (住) (口縁端部が屈曲)

C21 (住) (口縁部が外反)

C21 (住) (口縁部が外反)

E16-1 (住) (口縁部が外反)

丹塗の壺形土器と甕形土器の共伴関係をみると、

I Aの丹塗の壺に伴うハケメの甕は口縁に段をもち強く口縁部が強く外反している甕が口縁部が外反している甕が伴うのに対して、II Aの丹塗の壺に伴うハケメの甕は段をもち口縁部が外反している甕や口縁部が屈曲している甕が伴っている。ハケメの甕やヘラミガキの甕が共伴する住居跡からは丹塗の壺が伴っている。表から丹塗の壺形土器と甕形土器の共伴関係から次の

器種 調整	丹塗の壺			甕			備考
	I A (全面丹塗)	I B (瓶の丹塗)	口縁部欠損	ハケメの甕	ヘラミガキ の甕	ヘラナデの 甕	
E07			○	○			
D22	○(強く外反)			○(口縁に段)	○(小型)		
A07	○(口縁端部 屈曲)			○(外反)	○		
C21	○(小型)	○(外反)		不明 (口縁に段)	不明	不明	口縁端部屈 曲
E16-1		○		○(口縁端部 屈曲)	○(外傾)		
C05			○	○(口縁に段)	○		
D16-2			○(○)	○(口縁端部 屈曲)	○(強く外反) (口縁に段)		沈線文の甕
E18			○		○(外反)		
D07					○(外反)	○(外反) ○(格子目沈 線)	

丹塗の壺形土器、甕形土器の相伴関係

ようにまとめることができる。

ハケメの甕が主体、丹塗の壺が伴う住居跡(いグループ)

ハケメの甕とミガキの甕、丹塗の壺が相伴している住居跡で、更に、丹塗の壺によって2つに分けられる。I Aの丹塗の壺が伴う住居跡をろグループ、I Bの丹塗の壺が伴う住居跡をはグループとする。

更に、ヘラナデで調整されている甕を伴う住居跡がにグループである。

いグループはE07(住)、ろグループはD22(住)、A07(住)、はグループはC21(住)、E16-1(住)、にグループはE07(住)がその代表例である。C05(住)、D16-2(住)はB、Cグループのどちらかに属する。

(5) 出土土器の群別と年代

ロタロ不使用の土器器坏形土器を伴う奈良時代の出土土器をI群、ロタロ使用の坏形土器を伴う平安時代の出土土器をII群とする。

I群

I群の土器は前項において述べたように、土器器坏形土器と丹塗の壺形土器との組合せの違い、坏の相伴関係などから次のようにまとめることができる。

Aグループ

E07住居跡がその代表例である。甕形土器ではハケメ調整のものが主体または独占している。
壺形土器 I D-a、I D-d、I E-a、I F-bが相伴している。つまり、肩に段をもち、口縁部が外反したり、内傾して外傾したりするもの、肩部に稜をもち口縁部が外反してい

るもの、肩部に段・沈線・稜をもたずに口縁部が外反しているものが共存している。口唇部が平坦なものが多い。底部が完全に残存しているものはないが、底部内面が丸底風を呈すると推定されるものも伴っている。

環形土器 底部が欠損していて類別不能である内黒の杯、丹塗の杯ⅡB-aが共存している。丹塗の杯は外面に段をもち、段上半がヘラミガキ、下半がヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

高環形土器 丹塗の高環ⅡA-aが伴う。脚部が円錐台状を呈し、脚部に段をもつものである。段上部はヘラケズリ、下部はナデで調整されている。

埋土最下部から丹塗の変形土器の口縁部片と須恵器変形土器の体部片が出土している。

Bグループ

A07住居跡、C05住居跡がその代表例である。変形土器ではヘラミガキ調整の甕とハケメ調整の甕、丹塗の甕が共存している。丹塗の甕は口縁部全面に丹塗が施されているものが伴っている。

変形土器 A07(住)ではハケメ調整の甕ⅡE-a₁とヘラミガキ調整の甕ⅡE-a₂とが共存している。C05(住)ではハケメ調整の甕ⅡA-a₁とⅡB-bとヘラミガキ調整の甕ⅡE-a₂、それに口縁部に沈線をもつⅡA-bの甕とが共存している。

つまり、ハケメ調整の甕は頸部と肩部に段をもち、口縁部が外反しているもの、肩部に稜をもち口縁部が外反しているもの、ヘラミガキ調整の甕は肩部に稜をもち口縁部が外反しているもの、それに口縁部に山形沈線が施されているものとが共存している。これらの変形土器の口唇部は平坦であるものが大半を占めている。

丹塗の変形土器 A07(住)、C05(住)から出土している。A07(住)のものは口縁部全面に丹塗が施されている。口縁部形態は外反し中位で外傾している。C05(住)のものも残存する頸部片から口縁部全面に丹塗が施されていたと推定される。

環形土器 C05(住)からのみ出土している。内黒の杯ⅡD-b₁、ⅡE-c、丹塗の杯ⅡD、ヨコナダの杯が共存している。つまり、内黒の杯は外面に段をもち稜下半がヘラケズリ・ヘラミガキ調整のもの、外面に区切りをもたず全面ヘラミガキ調整のものである。底部は丸底で、口縁部が内彎している。口唇部が幾分立ち上がり気味である。丹塗の杯は体部に区切りをもたず全面ヘラミガキ調整されているものであり、口縁部が内彎し、底部は丸底を呈してたと推定される。焼成前に行なわれている丹塗は丁寧に施されているためしっかり土器表面に付着している。そのほかに埋土上部から内黒の杯ⅡC-aが出土している。外面に段をもち、段上半がヨコナダ、下半がハケメ調整のものである。住居跡と同時期内に入るものと推定される。ヨコナダの杯は口縁部が内彎するもの、口縁端部が外反するものである。体部外面はヘラケズリ、

内面はヘラナデで調整されている。

高坏形土器 I AがC05(住)から出土している。脚上部が柱状、下部が円錐台状を呈し、脚下半に段をもつ。脚上半がヘラケズリ、下半がナデで調整されている。

小型の壺 I DがC05(住)から出土している。頸部が強くすぼまり肩部に最大径をもつ器形のものである。体部外面はハケメ・ナデ後ヘラミガキで調整されている。

内面ナデの坏や頸部に段のあるハケメ調整の壺と近似したものが、宮城県志波郡町御駒堂遺跡12号住居跡(1982:小井川・小川)でも相伴して出土している。段をもつ壺は本遺跡のものと同様に強く外反しているものである。そのほかに、12号住居跡からは段上半ヨコナデ、下半ハケメの内黒の坏や頸部に沈線文をもつ壺が出土しており、C05(住)の出土土器の様相と類似している点が多い。しかし、12号住居跡では内外面丹塗の施されている坏が伴うことや丹塗の壺が出土していないことなど幾分異なる点もある。12号住居跡に伴っている坏のうち、口縁部が短く内彎する内面ナデの坏(御駒堂遺跡分類、内面ナデの坏Ⅱ2b類)は関東地方の鬼高式の後葉ないし真間式の初めに位置づけられるものであるという。本遺跡から出土している内面ナデの坏と、器形は不明であるが口縁部の形態、調整などの点で類似している。この移入の内面ナデ(Ⅱ2b類)の坏と器形、器面調整等の特徴において一致すると思われる坏は宮城県名取市清水遺跡、仙台市郡山遺跡、古川市名生館遺跡から出土しているという。これらの遺跡の検討結果から7世紀末～8世紀初頭に位置づけられておくとしている。(P488～491)

頸部に段をもつハケメ調整の壺は、県内では水沢市玉貫遺跡C-6-1住居跡(1981:吉田・高橋(与)・鈴木他)、水沢市東大畑遺跡9・10号住居跡等(1982:瀬川・中川)、水沢市膳性遺跡P-11住居跡(1982:高橋(与)・遠藤・高橋(義)他)二戸市上田面遺跡B15住居跡(1981:遠藤・高橋(義)他)から出土している。上田面遺跡のものは頸部に3つ、そのほかのものは肩部に1つ、頸部に1つ段を巡らせている。口縁部の形態は外反、外反気味に内彎、外傾している。口唇部は5点うち1点(東大畑遺跡の2点のうち1点)を除いて平坦で角張っている。

膳性遺跡のものは頸部に段を1つ巡らせ、口縁部が外反気味に内彎し、口唇部が平坦である。出土しているP-11住居跡は膳性遺跡Ⅱ群のDグループに属する。『Ⅱ群Dとしたものは相原編年のⅤa群(8世紀前半)より古い要素を残していることから、本種もまた、広義の意味で氏家編年Ⅴ型式(栗田式)・相原編年Ⅴ群(7世紀後半～8世紀)の範囲に入り、その中でも後半部分に位置づけられるであろう』(P562)としている(・・・部分筆者補足)。P-11住居跡から坏形土器は出土していないが、小型壺形土器は肩部に段をもち、口縁部が外反し、外面がハケメで調整されているもので、本遺跡出土のものと近似している。しかし、外面ヘラミガキ調整の壺が出土していない点は異っている。

玉貫遺跡C-6-1住居跡のものは口縁部が外傾し、口唇部が平坦である。遺構に伴って坯形土器2点と変形土器5点が出土している。坯は2点とも体部に段をもち、丸底風のもので、内外面をヘラミガキで調整されている。1点は内面を、1点は内外面を黒色処理している。本遺跡のBグループの坯形土器と共有するものはない。ヘラミガキ調整の甕が出土していないなど本遺跡と段をもつハケメの甕以外では土器の様相を異にしている。

東大畑遺跡の9・10号のものは口縁部が外反し、9号のものは口唇部が平坦である。住居跡に伴う土器をみると、9号住居跡では平底・無段の内黒の坯形土器や須恵器の変形土器、酸化焙焼成の須恵器の甕・坯形土器が出土しており、本遺跡のものと全く土器の様相を異にしている。10号住居跡では段をもつ丸底風の内黒の坯が伴っているが、本遺跡のBグループの坯形土器と共伴しているものはない。

玉貫遺跡、東大畑遺跡、上田面遺跡のものは住居跡に伴う土器の様相からみて、本遺跡のBグループのものと異なり、時間的差があるように考えられる。

口縁部に山形の沈線文を施している変形土器は前記の御駒堂遺跡12号住居跡埋土から出土しているほか、水沢市膳性遺跡C-3住居跡-1、C-6住居跡-2Aから遺構に伴って出土している。前者の甕は口縁部に段をもち、段下位に1本の沈線で連続山形文が施文されている。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。後者の甕は口縁部に沈線を巡らせ、沈線下位に1~2本の沈線で連続山形文が施文されている。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。前者には器高の低い片口土器、後者には器高の高い片口土器が共伴している。前者は膳性遺跡Ⅱ群C、後者はⅡ群D（前記）に属する。『Cは氏家編年の5型式・相原編年Ⅳ群に対比される。』という。

本遺跡C05住居跡出土のものと口縁部の形態は幾分違っているが、沈線の文様は近似している。

Cグループ

このグループはD16-2住居跡を標式とし、D16-3住居跡、E16-1住居跡が入るものと考えられる。ヘラミガキ調整の甕とハケメ調整の甕が共伴し、口縁部に縦面に丹塗を施した甕が伴っている。

変形土器 D16-2（住）ではヘラミガキ調整の甕ⅠB-a₁、ⅠF-aとハケメ調整の甕ⅠB-c、ⅠBが共伴している。E16-1（住）ではヘラミガキ調整の甕ⅠD-cとハケメ調整の甕ⅠB-b、ⅠD-bが共伴している。D16-3（住）ではⅠB-b、ⅠB-c（器面調整不明）の甕が共伴している。つまり、ヘラミガキ調整の甕は口縁部が強く外反、外傾するものである。口縁部が強く外反するものには肩部に段のあるものとなないものがあり、段のあるものは頸部に段があるものが存在する。ハケメ調整の甕は口縁部が外反、外反して外傾、外傾して外反、外反気味に内傾するものがある。ヘラミガキ調整の甕の口縁部形態である強く外反す

る、または外傾するものは伴っていない。ハケメ調整の壺は肩部に段・沈線をもつ。口縁部が外反し外傾しているものは沈線をもち、外反気味に内傾しているものは上位に軽い段をもつ。Cグループのハケメ調整で段をもつ壺はBグループのものと口縁部の形態、段の位置、高さなどの点で大きく異っている。後者は口縁部が強く外反ないし外反し、段が中位以下にもつのに対し、前者は口縁端部が屈曲するもので、段も軽く上位にある。Bグループの段をもつハケメ調整の壺はCグループの段をもつヘラミガキ調整の壺と口縁部の形態が類似している。

壺形土器 D16-2 (住) から3点出土している。全体の器形がわかるものは1点だけである。器形は口縁部が外反し、体部中央上位に最大径をもち、体部がやや丸味を帯びて脹み、底部にかけてすばまる。肩部に段をもち、口唇部は平坦である。体部外面は主に縦方向のヘラミガキ、下端がヘラケズリで調整されている。内面調整はヘラナゲである。

丹塗の壺形土器 E16-1 (住) から全体の器形がわかるI B-1bのものが出土している。口縁部内外面は点と縦線(4本)を1組の単位として丹塗が施され、4単位で構成されている。器形は口縁部が外傾し、体部中央上位に最大径をもち、体部がやや球状に脹み、底部にかけてすばまる。口唇部は平坦である。丹塗前、体部はハケメかハケメ後ヘラミガキで調整されている。

鉢形土器 D16-2 (住) から2点出土している。1つは肩部に段をもち口縁部が外反しているものである。体部外面はハケメで調整されている。他の1つは段・稜をもち口縁部が体部からそのままの傾きで外傾しているものである。口唇部は平坦である。体部外面は雑なヘラミガキで調整されている。

丹塗の高坏形土器 D16-2 (住) から出土している。坏部の底部内面は丸底を、脚部は円錐台形状を呈している(I A-b)。丹塗前、坏部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ後：黒色処理が施されている。脚部外面はナゲ、内面はヘラミガキで調整されている。

坏形土器 内黒の坏I B、I C-c₁、I C-c₂、I D-aを伴っている。つまり、内面に区切り、外面に沈線をもち、沈線下半をヘラケズリで調整されているもの、体部外面に段・沈線をもち、下半をヘラミガキ、またはヘラケズリ・ヘラミガキで調整されているもの、体部外面に稜をもち、稜下半がヘラケズリで調整されているものである。底部は丸底、平底風(器高が低い)がある。丹塗の坏破片であるが伴っている。

頸部に段をもつヘラミガキ調整の壺は、岩手県内で、二戸市堀野遺跡(1965:草間)、二戸市上田面遺跡B10・B29住居跡、二戸市長瀬C遺跡10A・11C住居跡(1981:本沢・佐々木)、二戸市長瀬D遺跡B03・D03住居跡(1981:遠藤)に伴って出土している。段をもつヘラミガキ調整の壺は県北部の馬淵川流域に多く分布している。

上田面遺跡B10住居遺跡出土の壺は頸部下位に段をもち、口縁部が外傾している。外面に段

のある内黒の坏、口縁部が外傾し、体部中央上位に最大径をもち、外面をハケメ後ヘラミガキ調整している壺形土器と共伴している。B29住居跡の壺は頸部に複数の段をもつもので、内面に段をもつ丸底で内黒の坏と共伴している。

長瀬C遺跡10A住居跡出土の壺は頸部上位に段をもち、口縁部が強く外反している。口唇部は平坦である。体部外面に段をもち、丸底の内黒坏、稜をもち平底風の内黒坏、脚部に段をもたない高坏形土器が共伴している。11C住居跡出土の壺は頸部上位に段をもち、口縁部が外反している。鉢形土器は3点共伴しており、肩部に段をもつもの（2点）ともたないものがある。口縁部はヨコナデ、体部ヘラミガキ調整で丸底の内黒坏や脚に段をもたない高坏形土器が共伴している。

長瀬D遺跡B03住居跡出土の壺は頸部上位に段をもち、口縁部が外反している。無段で平底の内黒坏が共伴している。D03住居跡出土の壺は頸部上位に段をもち、口縁部が外反している。口唇部は平坦である。有段で丸底の坏と共伴している。口縁部はヨコナデ、段下半は1点がヘラケズリ、他の1点がハケメ後ヘラミガキで調整されている。

本遺跡のCグループは共伴する土器から上田面遺跡B29住居跡の土器よりはB10住居跡のものに近い様相を呈しているように思われる。また、長瀬C遺跡、長瀬D遺跡とはヘラミガキ調整の壺の段の位置、口縁部の形態、共伴している土器などから、本遺跡のCグループと幾分様相を異にしているように思われる。

上田面遺跡B29住居跡は、堀野遺跡と同じ高橋信雄編年(1982・岩手の土器)のⅡ-1群(栗田式相当)に属している。また『上田面遺跡の土器はⅡ-2群に多用される刷毛目が認められることや、坏の器形に堀野とⅡ-2群の坏の中間形態がみられることから、堀野に後続するものと考えられる。』(P29)としている。

Dグループ

このグループの代表例はD07住居跡である。

壺形土器 口縁部に軽い段を2つもち、頸部に格子目の沈線文が施文されている。口縁部は外反し口縁端部が直上している。外面は磨滅しているがヘラケズリ・ヘラナデ後ヘラミガキ、内面はナデ後、縦方向の長いヘラミガキが施されている(ⅠA-d)。肩部に段をもち、口縁部が外反し、ハケメ調整の壺(ⅠC)も伴っている。

高坏形土器 坏部は段をもち、口縁部が内傾し、底部内面が丸底を呈している。脚部は上下に段をもち、円錐台状を呈している。

坏形土器 内面に区切り、外面に段をもち、底部が丸底を呈している。外面はヘラミガキで調整されている。また、埋土から丸底で口縁部が内傾している外面ヘラミガキ調整の坏(ⅠE-1c)が出土している。2点とも内面はミガキ後、黒色処理が施されている。

体部に格子目の沈線文を施文している坏形土器が水沢市今泉遺跡 Ai65 住居跡（新・旧）（1981：八重樫・相原）から出土している。体部に沈線を巡らせ、沈線下に格子目の沈線文を施文している。底部は平底風を呈している。内外面へラミガキ調整され、黒色処理が施されている。丸底で内外面に段をもつ坏や高坏が共存している。しかし、本遺跡 D07 住居跡に伴う坏形・高坏形土器とは形態、調整の点で大きく異っている。Ai65 住居跡（新・旧）は旧の住居跡が前半期、新の住居跡が後半期に属し、前半期・後半期の土器群は栗田式に最も類似するもので、7 世紀代を中心とする時期に想定しておくとしている。高橋信雄氏（岩手県博物館）によれば、江釣子村から丹塗の施された格子目沈線文の土器が出土しているという。格子目の沈線文をもつ甕形土器は岩手県内では数少ないものと思われる。

Eグループ

E18 住居跡、C21 住居跡がその代表例である。ヘラミガキ調整の甕とヘラナデ調整の甕が共存している。丹塗の壺も伴っている。丸底のほか、平底の内黒の坏も多く伴っている。

甕形土器 |D-a、|D-c の甕が伴っている。肩部に段をもち、口縁部が外傾または外反しているものである。E18 住居跡ではヘラナデ調整の甕とハケメ後ヘラミガキ調整の甕とが共存している。後者の甕は口縁部が欠損していて、口縁部の形態が不明である。

甕形土器 E18 住居跡から体部下半～底部にかけてのものが出土している。外面の体部下半は横方向のヘラミガキ調整、底部近くは縦方向のヘラミガキ調整が施されている。Cグループの甕形土器とは調整やヘラミガキの方向の点で異っている。

丹塗の甕形土器 口縁部全面に丹塗を施しているものと口縁部に縦の帯状の丹塗が施されているものが共存している。前者は小型の丹塗壺で、口縁部が外反し、体部が球状を呈している。丹塗前、外面は丁寧なヘラミガキで調整されている。後者は普通の大きさの甕形土器で、口縁部が外反し、体部が大きく膨らむものとそうでないものがある。口縁部の丹塗は縦のほかにも一部描かれている。

坏形土器 内黒の坏 |A、|D-b₁、|D-b₂、|E-b、|E-c が共存している。つまり、内面に区切りをもち外面に段をもつ丸底の坏、外面に稜をもち稜下半ヘラケズリ・ヘラミガキ調整の平底風の坏・稜下半ヘラミガキ調整の丸底の坏、外面に段・稜などをもちず全面ヘラミガキ調整の平底風の坏・一部下部にヘラケズリ調整されている平底の坏が共存している。

丹塗の坏 |A-a、|A-b、|C、|D が共存している。つまり、内面に区切り外面に段をもち段下半がヘラケズリ調整である平底の坏・段下半がハケメ調整である丸底の坏、外面に稜をもちヘラミガキ調整である平底風の坏、外面に段、稜をもたない坏が共存している。

黒色の坏 沈線を巡らせている丸底の坏が伴っている。

II群

ロクロ使用の土師器変形土器を伴うか伴わないかによって大きく2つに分けられる。前者をAグループ、後者をBグループとする。

Aグループ

F16住跡がこのグループに入る。土師器では変形・壺形・鉢形・坏形土器が出土している。

変形土器 ロクロ使用の壺とロクロ不使用の壺が共存している。ロクロ使用の壺は口縁部が外反し、口縁端部が直上している。体部はロクロ調整後、ヘラケズリで調整されている。小型のロクロ使用の変形土器も伴っている。小型のものは底部外面に回転糸切り痕がみられる。ロクロ不使用の壺は体部外面を主にヘラケズリ、ヘラナデで調整されている。口縁部は外傾している。体部外面には粘土が焼成を受け硬くなって付着しているものもある。

壺形土器 ロクロ不使用で、口縁部が短く外反し、体部が大きく脹らむものが伴っている。体部外面は主にヘラケズリ、内面はハケメで調整されている。

鉢形土器 肩部に段・縁などの区切りをもたず、体部がやや内傾気味に立ち上がり口縁部が外反している。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ・ヘラナデ、内面はヘラナデで調整されている。

坏形土器 内黒の坏 体部下端をヘラケズリによる再調整のものと底部及び体部外面に再調整のないものが遺構に伴って出土している。内面下半の調整はナデ状のやや幅の広いミガキのものと、普通のヘラミガキのものとがある。ともに放射状に行なわれている。器形は体部が内傾し、口縁端部が外反しているものとそうでないものが共存している。

以上土師器である。そのほかに酸化焰焼成須恵器の坏形土器、須恵器の長頸壺が共存している。

Bグループ

B13住居跡、E16-2住居跡がこのグループに入る。ロクロ不使用の土師器変形土器が伴い、ロクロ使用の変形土器は伴っていない。

変形土器 肩部に段をもち口縁部が短く外反しているもの、肩部に段・沈線をもたず口縁部が極端に短く外反しているものが共存している。体部上位がやや脹み、底部が幾分すぼまる器形を呈している。外面は主にヘラナデ、またはやや粗いナデ状の調整、下端がヘラケズリ調整されているものが多い。ハケメ調整のものも1点みられる。

坏形土器 内黒の坏 体部下端にヘラケズリによる再調整のあるもの、底部外面及び体部下端に再調整のないものが共存している。内面下半のヘラミガキ調整は放射状のものと横方向のものがある。Aグループに伴っているナデ状の幅の広いミガキのものは出土していない。体部下端にヘラ書きしているものが共存している。

土師器のほか、酸化焰焼成須恵器の坏形土器が共存している。

以上、第1群をA・B・C・D・Eの5つのグループに、Ⅱ群をA・Bの2つのグループに分け、主に周辺の遺跡と比較しながらみてきた。本遺跡のⅠ群の年代は奈良時代の前半期には含まれるものと考えられる。5つのグループの中でも、A・Bグループが古く、D・Eグループが新しく位置づけられるものと推定される。新しく位置づけられるものには、奈良時代中葉以降までくだるものもあると思われる。Ⅱ群の年代は平安後期に位置づけられる。A・Bグループに時間差があり、Aグループが古く、Bグループが新しいと考えられる（光井文行）

引用・参考文献

- 草間 俊一 1965 岩手県福岡町堀野遺跡 岩手県福岡町教育委員会
- 草間 俊一 1970 岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡 岩手町教育委員会
- 吉田洋・高橋与右衛門・鈴木憲治ほか 1981 水沢市玉貫遺跡、金ヶ崎西根遺跡—金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書第18集岩手県埋文文化財センター
- 本沢眞輔・佐々木清文・遠藤勝博 1981 二戸市長瀬C遺跡・長瀬D遺跡—二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集岩手県埋文文化財センター
- 八重樫良宏・相原康二 1981 今泉遺跡—東北縦貫自動車道関係埋文文化財調査報告書K（水沢地区） 岩手県文化財調査報告書第60集 岩手県教育委員会
- 八重樫良宏ほか 1981 石田遺跡—東北縦貫自動車道関係埋文文化財調査報告書M 岩手県文化財調査報告書第61集 岩手県教育委員会
- 遠藤勝博・高橋義介ほか 1981 二戸市上田面遺跡—二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集 岩手県埋文文化財センター
- 高橋 信雄 1982 古代 岩手の土器 岩手県立博物館
- 岡 豊 1982 堀野遺跡緊急発掘調査報告書 二戸市教育委員会
- 小井川和夫・小川淳一 1982 御駒堂遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ 宮城県文化財調査報告書第83集 宮城県教育委員会
- 高橋与右衛門・遠藤勝博・高橋義介ほか 1982 水沢市誘性遺跡—金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集 岩手県埋文文化財センター
- 瀬川司男・中川重紀 1982 東大畑遺跡—金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 岩手県埋文センター文化財調査報告書第44集 岩手県埋文文化財センター
- 高橋 信雄 1982 東北地方北部の土師器と古代北海道系土師の対比 北奥古代文化第13号

土師器 ロクロ不使用の甕形土器の住居群別出土一覧表(2)

遺構名	分類記号		I A			I B			I C		I D			I E			I F					分類外						
	1. 床面、カマド	2. 埋土	a	b	c	a ₁	a ₂	b	c	I C	a ₂	a	a ₁	b	c	c	IE	a	a ₂	c	IF		b	c	c ₁	c ₂	d ₁	d ₂
A07(住)	1																			1								2
A21(住)	1																											1
B13(住)	1																								1	1	2	
C05(住)	1																										2	
C17(住)	1																				1						8	
C21(住)	1																										2	
D07(住)	1																										2	
D16-1(住)	1																										2	
D16-2(住)	1																										1	
D16-3(住)	1																										6	
D17-1(住)	1																										1	
D17-3(住)	1																										3	
D22(住)	1																										1	
E07(住)	1																										2	
E16-1(住)	1																										3	
E16-2(住)	1																										1	
E18(住)	1																										1	
F16(住)	1																										3	
F17(住)	1																										1	

土師器 ロクロ不使用の壺形土器・高坏形土器の住居群別出土一覧表(1)

遺構名	分類記号 出土地点 1. 床面 2. カマド 3. 土	壺					丹塗の壺						高坏			丹塗の高坏			
		IA	IB	IC			ID	IA			IB			分類外	IA	IB	分類外	IA	
				IC	b	c		IA	a	b	c	IB	a					b	a
A07(住)	1 2	1												1					
C05(住)	1 2					1		1							1				
C21(住)	1 2								1										
D07(住)	1 2														1				
D16-1(住)	1 2							3											
D16-2(住)	1 2			1				2											1
D17-1(住)	1 2		1																
D17-2(住)	1 2							1											
D17-3(住)	1 2							1											
D17-4(住)	1 2							1											
D22(住)	1 2								1										1
E07(住)	1 2							1											
E16-1(住)	1 2	1									1								
E18(住)	1 2							1			1								
E21(住)	1 2				2														1
F13-2(住)	1 2																		1
F16(住)	1 2					1													1
F17(住)	1 2																		3

环形土器

内黒の環(1)

土師器Ⅰ類(ロクロ不使用)环形土器の分類・内黒の環

	内面口辺りの有無	外面段・沈線・縁の有無	外面の段・沈線・縁・下平の調整	内面区切りの有無	外面段・沈線・縁の有無	外面の段・沈線・縁・下平の調整
IA	有	段・沈線有	a	無	縁 有	a
			b ₁			b ₁
			b ₂			b ₂
IB	有	縁 有				a
IC	無	段・沈線有	a	無	段・沈線・縁無	a
			b			b
			c ₁			c
			c ₂			c



IA-a類(407)



178



93



252

IA-b₁類(178・252)



179

IB類(179)



33

IC-a類(33)



377

IC-b類(377)



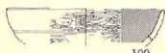
117



161



409



100

IC-c₁類(117・161・409・100)



119

IC-c₂類(119)

図版149 土師器(Ⅰ類ロクロ不使用)环形土器(1)分類図

内黒の坏(2)



118

I D-a類(118)



73

I D-b₁類(73・255)



255



29



105

I D-b₂類(29・105・251)



251



413

I E-a類(413)



290



75



240

I E-b₁類(290・75・240・74)



74



32



254



414



31

I E-b₂類(32・254・414・31・94)



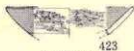
94

図版150 土師器(I類口クロ不用)环形土器(2)分類図

黒色の環

環形土器の分類②・黒色の環

	内面(区切りの有無)	外面(段・沈陥・縁の有無)
IA	有	縁 有
IB	無	段・沈陥有



IA類(423)



IB類(71,72)

丹塗の環

環形土器の分類③・丹塗の環

	内面(区切りの有無)	外面(段・沈陥・縁の有無)	外面の段・沈陥・縁の手の調整	内面(区切りの有無)	外面(段・沈陥・縁の有無)	
IA	有	段 有	a ハケズリ	IC	無	縁 有
			b ヘラケズリ			
IB	無	段 有	a ヘラケズリ	ID	無	段・沈陥・縁 無
			b ヘラミダキ			
			c ヘラミダキ(フツツ)			



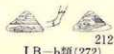
IA-a類(256)



IA-b類(253)



IB-a類(424)



IB-b類(272)



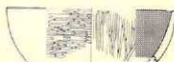
IB-c類(425)



IC類(426-110)



ID類(30-76)



ヨコナデの環(52~55)



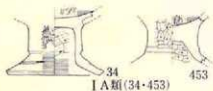
図版151 土師器(I類ロクロ不使用)環形土器(3)分類図

高环形土器

高环

土師器Ⅰ類(ロクロ不使用)高环形土器の分類・高环

	脚の形態	脚の段の有無
IA	上部が柱状、下部が円錐台状	有
IB	円錐台状	無

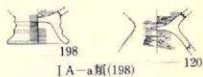


IA類(34・453)

丹塗の高环

丹塗の高环

	脚の形態	脚の段の有無	
IA	円錐台状	a	有
		b	無



IA-a類(198)



IB類(95・339)



IA-b類(120・454)

壺形土器

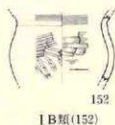
壺(1)

土師器Ⅰ類(ロクロ不使用)壺形土器の分類・壺

	口縁部の沈陥・肩部の段・沈陥・縁の有無	口縁部の形態	口縁部の沈陥・肩部の段・沈陥・縁の有無	口縁部の形態
IA	口縁部に沈陥 有		肩部に段 有	a 外反
IB	肩部に沈陥 有			b 外反して直上
				c 短く外反
ID	肩部に段・沈陥・縁 無			



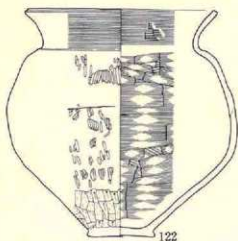
IA類(493)



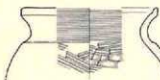
IB類(152)

図版152 土師器(Ⅰ類ロクロ不使用)高环形土器・壺形土器(1)分類図

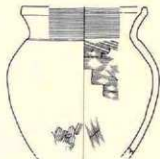
壺(2)



I C-a類(122)



281



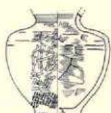
280

I C-b類(281・280)



341

I C-c類(341)



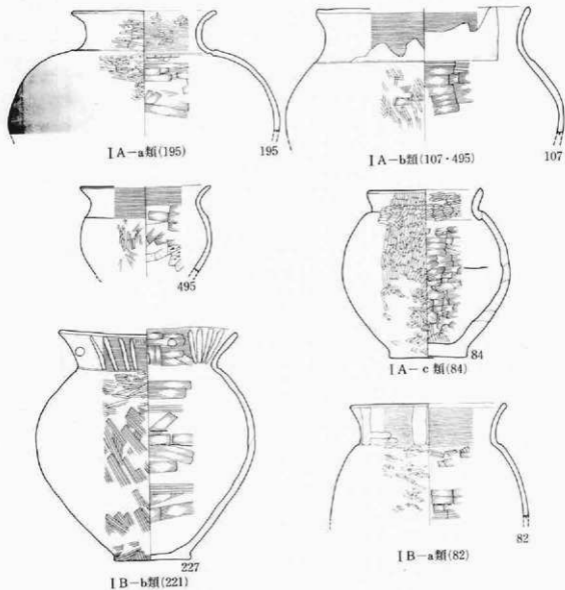
38

I D類(38)

図版153 土師器(I類口口不使用)壺形土器(2)分類図

丹塗の証

	口縁部における丹塗の施し方	口縁部の形態
IA	全面に丹塗	a 強く外反
		b 外反
		c 外傾
IB	縦位に帯状の丹塗	a 外反
		b 外傾

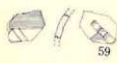


図版154 土師器(I類口口不使用)壺形土器(3)分類図

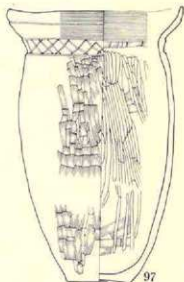
変形土器

土師器Ⅰ類(口クロ不使用)変形土器の分類

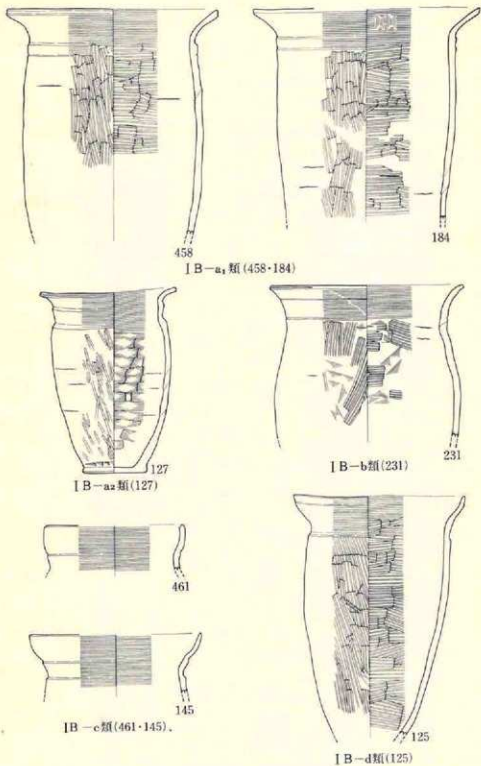
I口縁部・胴部・底縁文・肩部の段・沈線・縁の有無		I口縁部の沈線文・形態		外 反 調 整		I口縁部・胴部・底縁文・肩部の段・沈線・縁の有無		I口縁部の沈線文・形態		外 反 調 整	
IA	I口縁部に沈線文 有	a	帯状の沈線文	IE	I胴部に横 有	a	外 反	ha	ハケメ		
		b	幅状・山形の沈線文			hb	ハケミギキ				
		c	山形の沈線文								
		d	格子目状の沈線文								
IB	I口縁部・胴部に段・沈線 有	a	横く外反	IF	I肩に段・沈線・縁 無	a	横く外反				
		b	外 反								
		c	内 傾								
		d	外反して内傾								
IC	I胴部に沈線 有										
ID	I肩部に段 有	a	外 反								
		b	外傾して外反								
		c	外 傾								
		d	内傾して外傾								
		e	短く外反								



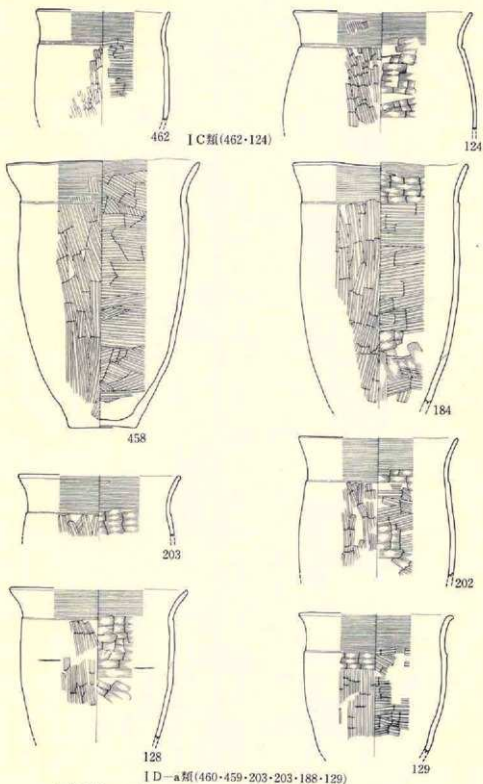
IA-c類(457・56・59・58)



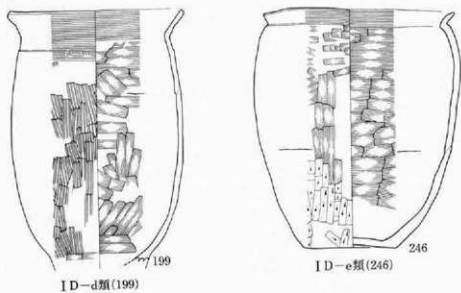
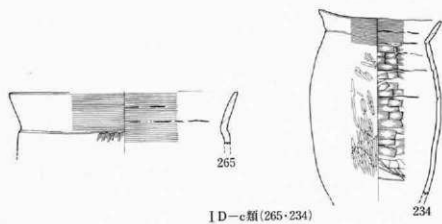
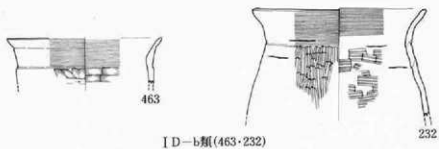
図版155 土師器(I類口クロ不使用)変形土器(1)分類図



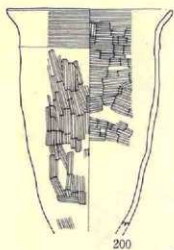
図版156 土師器(I類口不使用)甕形土器(2)分類図



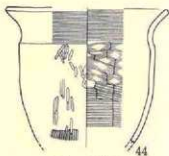
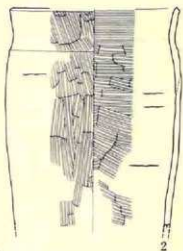
図版157 土師器(I類口ケ不使用)変形土器(3)分類図



図版158 土師器(I類口ク口不使用)変形土器(4)分類図



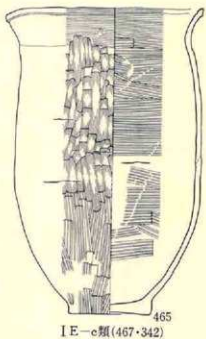
IE-a₁類(200・2)



IE-a₂類(44)

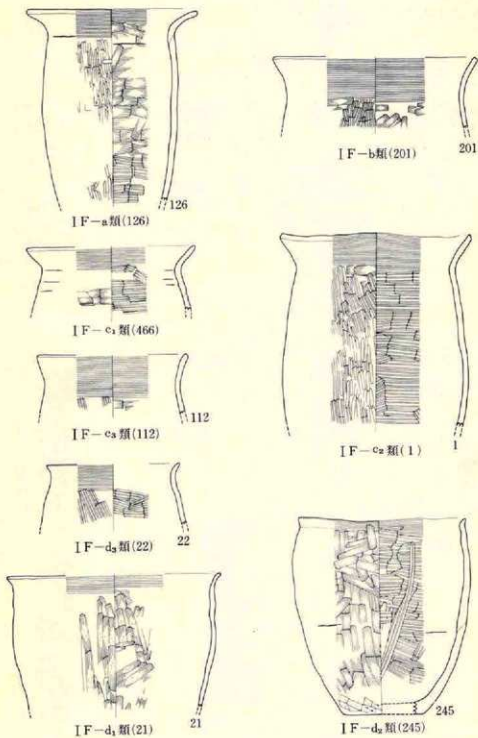


IE-b類(465)

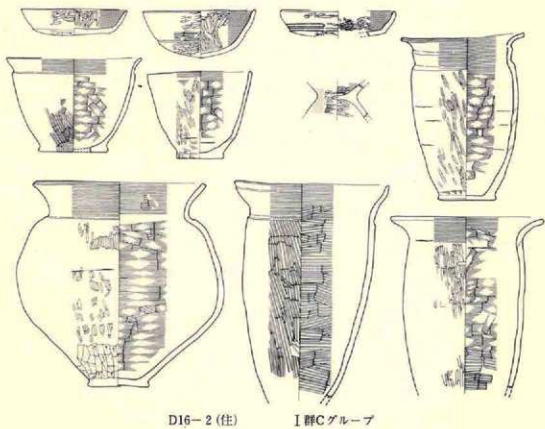
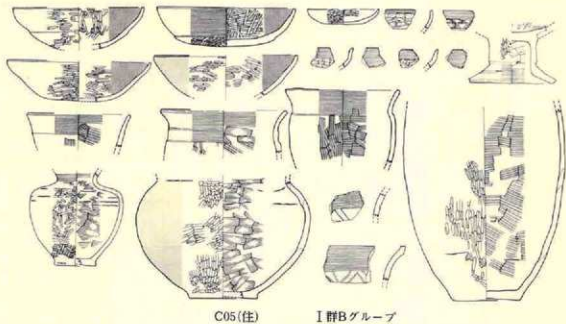


IE-c類(467・342)

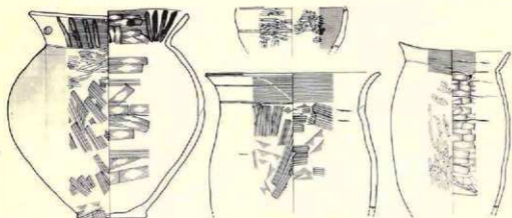
図版159 土師器(I類口ク口不使用)變形土器(5)分類図



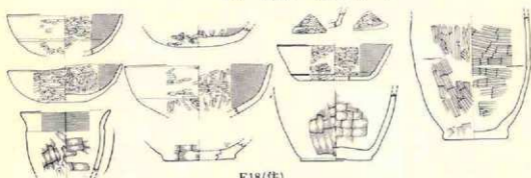
図版160 土師器(I類口く口不使岡)變形土器(6)分類図



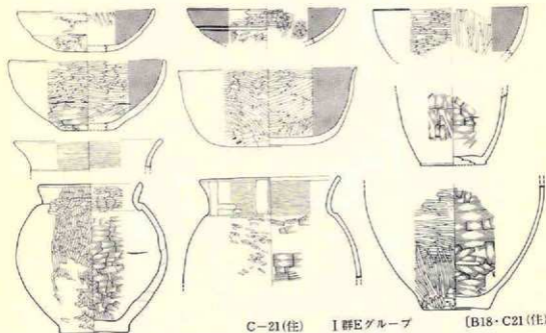
図版161 土師器 I群



E16-1 (住) I群Cグループ



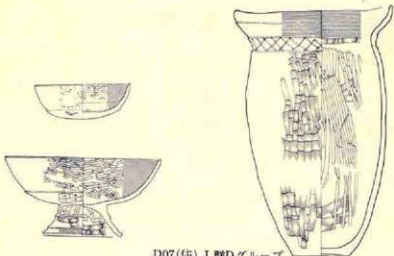
E18(住)



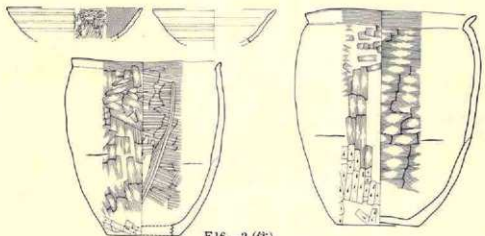
C-21(住) I群Eグループ

[B18・C21(住)]

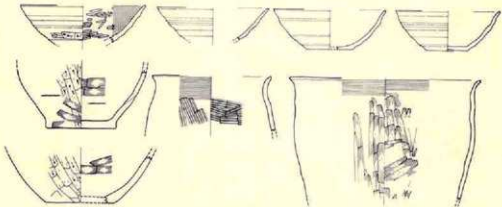
図版162 土師器 I群



D07(住) I群Dグループ



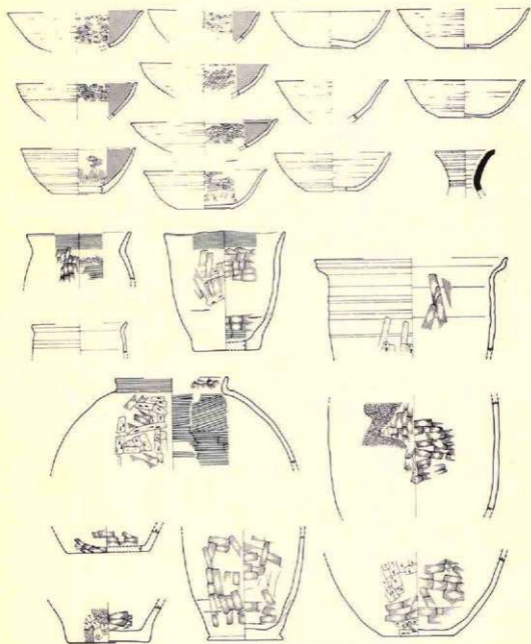
E16-2(住)



B13(住) II群Bグループ

[E16-1・B13(住)]

図版163 土師器 I群・II群



F16(住)

Ⅱ群Aグループ

図版164 土師器Ⅱ群

検出遺構、出土遺物、計測一覧表

表1 古代竪穴住居跡一覽表

項目 No.	遺構名	平面形	規模		柱穴	周溝	土、坑
			床面積(m)	面積(m ²)			
1	A07	不明	(3.2×2.0)	?	?	?	?
2	A21	方形?	3.6×(3.2)	[13]	?	?	?
3	B03	隅丸長方形	4.06×3.18	12.1	なし	なし	なし
4	B13	方形	3.85×3.4	13.0	◇	◇	◇
5	B15	方形	3.55×3.2	11.4	◇	◇	◇
6	C05	隅丸方形	4.04×3.67	14.7	◇	◇	◇
7	C17	隅丸方形	2.2×2.2	4.4	◇	◇	◇
8	C21	方形	5.9×5.3	31.2	?	◇	?
9	D07	隅丸方形	3.35×3.05	10.2	なし	なし	2
10	D16-1	不整台形	2.8×2.2	(5.7)	1	◇	なし
11	D16-2	隅丸方形	3.1×3.0	8.5	4	◇	1
12	D16-3	不明	(2.5×1.5)	?	?	?	2?
13	D17-1	楕円形	4.3×2.42	9.0	なし	なし	なし
14	D17-3	不明	(3.1×2.6)	?	?	?	?
15	D17-4	長方形?	[3.7×2.8]	[10.4]	?	?	?
16	D22	不明	?	?	?	?	?
17	E07	方形	7.3×7.0	51.0	6	各壁際	2
18	E14	方形	3.5×3.5	12.3	?	なし	1
19	E16-1	隅丸長方形	3.8×3.0	[11.4]	2+α	◇	?
20	E16-2	方形?	2.8×(2.6)	[7.8]	?	?	?
21	E18	隅丸方形	3.4×(3.1)	(10.2)	なし	なし	なし
22	E21	方形	3.0×2.9	[8.7]	◇	◇	◇
23	F09-1	不明	(7.3×2.3)	?	3+α	壁際	?
24	F09-2	不明	(3.4×1.0)	?	?	?	?
25	F13-2	不明	(3.6×2.8)	?	?	南壁際	?
26	F15-1	不明	(3.7×1.2)	?	?	?	?
27	F15-2	隅丸方形	2.1×2.05	4.2	なし	なし	1
28	F16	方形	3.2×3.2	10.2	なし	なし	3
29	F17	不明	(2.5×1.8)	?	?	?	?

() 現存値、[] 推定値

カ マ ド			図版番号	写真番号	備 考
位 置	種 道	支 脚			
不明			6	5	A08住と重複
々			7	5	
なし			8	6	B03土坑と重複
東壁南寄り	E7°S 1.1m	?	9・10	7	
なし			11	8	柱穴群と重複、焼失
北壁中央	N9°W くり抜き 1.4m	礫	12・13	9・10	
なし			14	10	D17-1、3住と重複
北壁中央	N2°W くり抜き? 1.7m	?	15	11	D21住と重複
東壁南寄り	N69°E 1.4m	礫	16・17	12・13	
なし			18	13	D16-2住と重複、焼失
北壁中央	N2°E くり抜き 1.3m	礫	19・20	14・15	D16-1、3住と重複
不明			21	15	D61-2住と重複
なし			22	16・17	C17、D17-3住と重複
不明			23	16	C17、D17-1、2、4住と重複
々			24	17	D17-3住と重複
北壁	N16°W (1.5m)	?	25	18	
北壁中央	N10°W くり抜き? 1.6m	?	26~28	18~20	焼失
南壁中央?			29	21	F15-2住と重複
北壁中央	N18°E	?	30・31	22	E16-2住と重複
東壁南寄り	E2°S	?	32・33	23	E16-1住と重複、焼失
北壁中央	N14°E くり抜き 1.3m	?	34・35	24	
東壁南寄り	E10°S 1.3m	?	36・37	25	D21住と重複
不明			38	26	F09-2住と重複
々			39	26	F09-1住と重複
々			40	27	F13-1住と重複
々			41	27	
東壁南寄り	E19°S 1.75m	?	42・43	21	E14住と重複
南壁東寄り	S22°W 石組み 1.0m	礫	44~46	28~30	焼失
不明			47	31	々

表2 中世住居跡一覧表

項目 No	遺構名	規模 (m)		平面形	出入 位置
		床面	上場		
1	A04	[2.90×1.92]	[3.36×2.06]	(隅丸方形)	南壁・南東コーナー
2	A06	[2.70×1.50]	[2.95×1.63]	(隅丸方形)	東壁・中央寄り
3	A08	—	—	—	東壁・—
4	A14	4.05×2.97	4.27×3.82	隅丸長方形	東壁・南東コーナー
5	A15	4.48×3.10	4.79×3.44	隅丸長方形	東壁・南東コーナー寄り
6	B08	2.70×2.53	2.85×2.80	方形	東壁・中央寄り
7	C09	2.55×2.10	2.66×[2.40]	長方形	南壁・南西コーナー
8	D13	3.45×3.00	3.84×3.45	隅丸方形	東壁・南東コーナー
9	D17-2	3.45×2.05	4.60×2.25	台形状	—
10	D21	3.30×2.45	3.40×2.55	隅丸長方形	東壁・北東コーナー
11	E25	[4.45]×3.30	[4.55]×3.35	長方形	南南西壁・南側
12	F13-1	[4.70×1.45]	[5.15×1.68]	—	—
13	F21	4.25×2.70	4.60×3.13	隅丸長方形	南南西壁・南側
14	Z14	[3.15×0.75]	[3.35×0.95]	—	東壁・北東コーナー

〔 〕は検出規模・（ ）は推定

口 規 模 (m)	柱 穴	図版番号	写真番号	備 考
2.06×0.76	5 + α	48・49	32	炭化穀類
1.46×0.70	8 + α	50	33	炭化穀類
—	—	51	33	大部分は調査区域外
2.55×1.10	4	52	34	永菜通寶、鉄製品
1.06×0.95	10	53・54	35	
1.30×0.64	10	56	37	陶器(小形壺ないし茶入れ破片)
1.47×0.76	4 + α	57	38	炭化穀類
0.95×0.90	9	58・59	39・40	
—	—	60	40	2棟と重複、陶器(小形香炉破片)
2.00×1.00	—	61	41	2棟と重複
1.50×0.84		62	41	
—	4 + α	63・64	42	簀と鉄釘、?は調査区域外
2.10×0.65	—	65	43	
2.10×0.90	2 + α	55	36	A 15住を切っている

古 館 II 遺 跡

表 3

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
83-1	A07(住)	土 師 器	甕	I F-c ₂	Q ₂ 埋土	YN	H M	H M
2	◇	◇	甕	I E-a	Q ₂ 埋土最下部	H	H	H
3	◇	◇	丹塗の甕		Q ₂ 埋土最下部	M		
4	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土最下部	YN	H M	M
5	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土最下部		M	H M
6	◇	◇	丹塗の坏		Q ₂ 埋土	M		
84-7	A21(住)	◇	内黒の坏		掘り方埋土			M
8	◇	◇	甕		床面	YN		
9	◇	須恵器	甕		埋土上部			T
10	B13(住)	土 師 器	内黒の坏	II B	Q ₂ 埋土下部	RN	RN	RN K
11	◇	◇	坏		煙道埋土	RN	RN	RN
12	◇	◇	坏		カマド	RN	RN	RN
13	◇	◇	坏		Q床面	RN	RN	RN
14	◇	◇	坏		Q ₂ 埋土下部		RN	RN
15	◇	◇	坏		Q ₂ 埋土	RN	RN	RN
16	◇	◇	坏		カマド	RN	RN	RN
17	◇	◇	坏		Q ₂ 埋土下部			RN
18	◇	◇	坏		カマド			RN
85-19	◇	◇	坏		カマド			RN
20	◇	◇	坏		カマド			RN N
21	◇	◇	甕	I F-d ₁	カマド	YN	N	N
22	◇	◇	甕	I F-d ₂	カマド内 Q ₂ 床面	YN	H	
23	◇	◇	甕		カマド			K N
24	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土上部			K
25	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土下部			N H
26	B13(住)	土 師 器	甕		Q ₂ 埋土下部			N H
27	◇	◇	甕		Q ₂ 床面			K
28	B15(住)	須恵器	坏		Q ₂ 埋土下部	RN	RN	RN

通 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
YN	H	H		21.0	—	[21.5]		24	51—1
YN	H	H		19.2	—	[24.3]		54	2
YN				(21.0)	—	[5.2]	内外丹塗	363	3
N	N			—	—	[15.6]		42	4
H	H			—	—	(7.2)[12.0]		23	5
M				—	—	—		362	6
		M		—	—	—		283	7
YN				—	—	—		282	8
N		T		—	—	—		364	9
M	M	M		(15.8)	—	[4.7]		324	52—10
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.9)	6.3	4.7		118	11
RN	RN	RN	再調整にK 有り	(13.2)	5.2	4.9		120	12
RN	RN	RN		(14.0)	—	[4.0]		312	13
	RN	RN	回転糸切痕	—	6.0	[2.0]		317	14
RN	RN	RN		(16.6)	—	[4.5]		325	15
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.2)	(5.8)	4.9		318	16
		RN	回転糸切痕	—	(6.5)	[1.0]		321	17
		RN	回転糸切痕	—	5.0	[3.0]		316	18
		M	回転糸切痕	—	6.0	[1.5]		322	19
		M	回転糸切痕	—	6.6	[1.9]		315	20
YN	N	N		(24.0)	—	[15.0]		133	21
	H			(15.0)	—	[6.9]		313	22
		N		—	8.8	[7.3]		95	23
		H		—	9.0	[2.2]		319	24
		H		—	(9.0)	[2.2]		320	25
		H		—	(9.0)	[2.7]		323	26
		N		—	(8.6)	[6.0]		314	27
RN	RN	RN	回転ヘラ切痕	12.0	5.8	3.5		須1	28

古 館 II 遺 跡

表4

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
86—29	C05(住)	土 師 器	内 黒 の 杯	1D—b ₁	Q ₂ 埋土下部	M	M	M
30	〃	〃	丹 塗 の 杯	1D	Q ₂ 埋土下部	M	M	
31	〃	〃	内 黒 の 杯	1E—c	Q ₂ 埋土下部	M	M	M
32	〃	〃	内 黒 の 杯	1E—c	埋土一括 Q ₂ 埋土下部	M	M	M
33	〃	〃	内 黒 の 杯	1C—a	埋土	YN	YN	H
34	〃	〃	高 杯	1A	床面			脚部式・ M, YN
35	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₂ 埋土下部		N M	M
36	〃	〃	鉢	1B—2 ₂	Q ₁ 埋土(下)一括 Q ₂ 埋土・Q ₂ 埋土下部	YN	H	
37	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₂ 埋土下部		M	N
38	〃	〃	壺	1D	Q ₂ 埋土下一括	YN	N M	H M
87—39	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₂ 埋土	YN	N M	N
40	〃	〃	壺		Q ₂ 埋土下部		M	M
41	〃	〃	壺		Q ₁ 埋土下部			N
42	〃	〃	壺	1D—2 ₁	Q ₂ 埋土下部	YN	H	
43	〃	〃	壺	1B—b	Q ₂ Q ₁ 埋土	YN	H	
44	〃	〃	壺	1E—2 ₂	Q ₁ 埋土下部	YN	K M	H M
45	〃	〃	壺		Q ₁ 埋土下部			H
88—46	〃	〃	壺		床面 カマド付近			H
47	〃	〃	壺		Q ₂ 埋土下部			N H
48	〃	〃	壺		埋土下部			K
49	〃	〃	壺		カマド左軸部上			H
50	〃	〃	壺		埋土			H N
51	〃	〃	壺		Q ₂ 埋土			H
52	〃	〃	内面ナゲの杯		Q ₂ 埋土	YN	K	
53	〃	〃	内面ナゲの杯		埋土	YN	K	
54	〃	〃	内面ナゲの杯		Q ₂ 埋土	YN	K	
55	〃	〃	内面ナゲの杯		埋土下部	YN	K	
56	〃	〃	壺	1A—c	埋土		H	

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ハラケズリ・M—ハラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
M	M	M	丸 底	(16.4)	—	[5.1]	中心部に横線有り	109	52—29
M	M			(17.8)	—	[5.1]		339	30
M	M	M	丸 底 風	(18.0)	—	[4.9]		336	31
M	M		丸 底 風	(9.0)	—	1.9		337	53—32
M	M	M	丸 底 風 ハ ケ	17.3	4.8	4.8	下半部に有段	92	33
	坏部 M	脚部 K YN		—	10.4	[7.2]	内面黒色処理、脚部分に2段に わたり有段	129	34
	N	N		—	(8.4)	[4.6]		31	35
YN	H			(13.0)	—	[4.0]		338	36
	H	N		—	7.0	[7.8]		29	37
YN	N	N		—	(5.4)	[11.8]	上半部に内外面とも輪積痕有り	99	38
	H	N		—	—	[15.5]		39	39
	H	H		—	8.0	[23.0]		21	40
		N		—	7.0	[5.8]		56	41
YN H	H			(14.4)	—	[9.0]	肩部有段	331	42
YN	N H			(16.0)	—	[5.8]	口縁部2段にわたり有段	332	43
YN	N	H		(18.0)	—	[15.1]		153	54—44
		H N	H N	—	7.6	[6.1]	底部に丸く穴があり腹に転用か	55	45
		H		—	5.2	[2.8]		328	46
		H		—	(7.1)	[2.9]		79	47
		H		—	8.0	[2.8]		330	48
		N		—	7.0	[4.0]		78	49
		H		—	6.6	[2.8]		326	50
		H		—	(7.0)	[7.0]	輪積痕	96	51
YN	YN			—	—	—		576	52
YN	YN			—	—	—		(a) 574	53
YN	YN			—	—	—		(b) 574	54
YN	N			—	—	—		575	55
	H			—	—	—	頸部に沈線文	577	56

古 館 II 遺 跡

表5

YN—ココナダ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
88-57	C05(住)	土 師 器	丹 塗 の 壺		Q ₂ Q ₃ 埋土	YN	M	
58	◇	◇	甕	IA-c	Q ₃ 埋土下部	YN		
59	◇	◇	甕	IA-c	Q ₃ 埋土下部	YN		
60	◇	◇	丹 塗 の 壺	IA-a	Q ₃ 埋土		M	
61	◇	◇	甕		Q ₃ 埋土	YN		
62	◇	石 器			Q ₃ 埋土下部			
89-63	C17(住)	須 恵 器	壺		埋土			
64	◇	◇	壺		埋土上部 Q ₃ I層			
65	◇	◇	甕		埋土上部 Q ₃ I層			
66	◇	土 師 器	甕		埋土下部			
67	◇	◇	甕		埋土最下部			
68	◇	陶 磁 器	壺		埋土上部 Q ₃ I層			
69	◇	◇	壺		埋土上部 Q ₃ I層			
70								
90-71	C21(住)	土 師 器	黒 色 の 杯	IB	掘り方埋土	M	M	M
72	◇	◇	黒 色 の 杯	IB	床面	M	M	M
73	◇	◇	内 黒 の 杯	ID-b ₁	Q ₃ Q ₄ 埋土下部	M	M	K M
74	◇	◇	内 黒 の 杯	IE-b	カマド	M	M	K M
75	◇	◇	内 黒 の 杯	IE-b	床面	M	K M	K N
76	◇	土 師 器	丹 塗 の 杯	ID	Q ₃ 床面	M	M	
77	◇	饗 須 器	杯		埋土		RN	RN
91-78	◇	土 師 器	甕		床面直上	YN		
79	◇	◇	甕	ID-a	床面	YN		
80	◇	◇	甕		Q ₃ 床面			N K
81	◇	◇	壺		Q ₃ 床面 束帯際		M	K M
82	◇	◇	丹 塗 の 壺		Q ₃ 床面直上	YN	M	
83	◇	◇	壺		Q ₃ 埋土最下部			N
84	◇	◇	丹 塗 の 壺	IA-c	Q ₃ 床面	M	M	K M

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
M	H			—	—	—	肩部有段、内面一部朱塗り	333	54—57
YN	H			—	—	—	胴上半部に山形沈線紋	(a) 329	58
M				—	—	—	胴上半部に山形沈線紋	(b) 329	59
M				—	—	—	口肩部に沈線	334	60
YN				—	—	—		578	61
				—	—	—	石器計測表参照	石37	62
				—	—	—		366	63
				—	—	—		367	64
				—	—	—		須 4	65
				—	—	—		365	66
				—	—	—		368	67
				—	—	—		(a) 須 3	55—68
				—	—	—		(b) 須 3	69
							欠 番		
M	M	M		(14.2)	—	[4.2]	胴下半部に有段	214	71
M	M	M		(19.4)	—	[4.3]	胴中心部に沈線	222	72
M	M		平 底 瓦	(17.0)	—	5.0	胴下半部に沈線	340	73
M	M	M		(22.1)	—	9.0		45	74
M	M	M		(19.7)	(6.4)	8.7		47	75
M	M			(19.0)	—	[6.0]	輪痕あり	218	76
	RN	RN	回転糸切痕	—	(6.2)	[3.6]		223	77
YN				(19.8)	—	[3.1]		219	78
YN				(18.6)	—	[3.5]	肩部有段	221	79
		N		—	(9.6)	[2.9]		213	80
	N	N		—	8.4	[15.4]		27	81
YN	H N			17.0	—	[13.0]	内面一部丹塗り	136	82
		N		—	8.0	[3.2]		216	83
M	M N	M N		13.0	8.6	18.8	輪痕あり	7	(カラー) 50—84

古 館 II 遺 跡

表 6

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
85								
92—86	C21(住)	土 師 器	丹 塗 の 壺		Q ₂ 埋土最下部		M	
87	◇	◇	丹 塗 の 壺		床面直上		N K M	
88	◇	◇	杯		Q ₁ 埋土			K
89	◇	◇	内 黒 の 杯		Q ₁ 埋土最下部			N K
90	◇	◇	内 黒 の 杯		Q ₂ 床面 Q ₂ 埋土最下部			H M
91	◇	須 恵 器	杯		Q ₁ 床面	R N	R N	
92	◇	土 師 器	内 黒 の 杯		Q ₂ 埋土最下部	N M	K M	
93—93	D07(住)	土 師 器	内 黒 の 杯	I A	床面	M	M	M
94	◇	◇	内 黒 の 杯	I E—c	Q ₂ 埋土	M	M	M
95	◇	◇	高 杯	I B	Q ₁ 床面	M	M	K
96	◇	◇	甗	I C	カマド	Y N H	H	
97	◇	◇		I A—d	床面 №2床直	Y N	N M	K N
98	◇	石 器	凹 石		Q ₂ 埋土下部			
94—99	D16(住)	土 師 器	内 黒 の 杯		床面	M	K M	
100	◇	◇	内 黒 の 杯	I C—c ₁	床面	M	M K	
101	◇	◇	丹 塗 の 杯	I C	床 Q ₂ 埋土下部	M	M	M
102	◇	◇	杯		Q ₂ 埋土下部	M	M	M
103	◇	◇	杯		床面			M
104	◇	◇	小 形 土 器		Q ₂ 埋土上部	N	N	K
105	◇	◇	内 黒 の 杯	I D—b ₂	床面			M
106	◇	◇	丹 塗 の 壺		床下		M	
107	◇	◇	丹 塗 の 壺		埋土カマド近く の上部			
95—108	◇	◇	丹 塗 の 壺		床、埋土最下部	Y N	N M	
109	◇	◇	壺		床面、下部			H
110	◇	◇	壺		カマド近くの埋土			N M
111	◇	◇	壺		床面下		N M	

造 物 一 覧 表

ナブ・N-ナブ・K-ハラケズリ・M-ハラミガキ・RN-ロクロナブ・T-タタキメ・H-ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
							欠 番		
	N			—	—	[5.0]		224	56- 86
	N			—	—	[15.0]		26	87
		M	回転未切痕	—	—	[1.3]		215	88
		M		—	—	[1.3]		220	89
		M		—	—	—		210	90
RN	RN			—	—	—		212	91
M	M N			—	—	—		211	92
M	M	M	丸 底	11.9	—	4.8	内面中心に区切、胴下半に有段	141	93
M	M	M	丸 底	17.0	—	5.7		121	94
M	M	M	高 台	19.6	10.0	9.7	内面黒色処理 胴下半部と胴部3ヶ所に有段	11	95
YN	H			—	—	—	肩部沈線	335	96
YN	N M	N M		19.2	7.2	31.0	口縁部中心と肩部に有段 頸部にやや粗い格子目状沈線文 が施されている	3	97
							石器計測表参照	石 9	98
M	M			(15.8)	—	[4.0]	胴中心部と下半部に有段	228	57- 99
M	M			(17.8)	—	[4.1]	胴中心部に有段	227	100
M	M	M		(16.2)	—	[5.8]	胴中心部に縦線	230	101
M	M	M	丸 底	(10.8)	—	[3.3]	輪横痕	229	102
		M		—	—	—	胴下半部に有段	234	103
N	N	N		(6.0)	—	[2.8]		378	104
		M	丸 底 風	—	—	[2.6]	胴下半部に縦線	232	105
	N			—	—	[6.0]	肩部に有段	379	106
				(23.9)	—	[14.5]		98	107
YN	H N			—	9.3	[2.9]	内面の口縁部に一部丹塗り	61	108
		N		—	—	[9.1]		233	109
		N H		—	—	—		235	110
	N			—	—	—		236	111

古 館 II 遺 跡

表7

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
112	D16(住)	土 師 器	甕	IF-c ₃	Q ₂ 埋土下	YN H		
113	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土最下部 Q ₃ 埋土最下部			N
114	◇	◇	甕		Q ₃ 埋土最下部			H
115	◇	須 恵 器	甕		Q ₃ 埋土下部		T	T
116	◇	鉄 製 品			埋土			
96-117	D16-2(住)	土 師 器	内 黒 の 杯	IC-c ₁	床面№.3	M	M	M K
118	◇	◇	内 黒 の 杯	ID-a	床面№.5	M	M	K
119	◇	◇	内 黒 の 杯	IC-c ₂	床面	M	M H	M
120	◇	◇	丹 塗 の 高 杯	IA-b	床5cm上 埋土(F)№.8		坏部 M K	脚部 M N
121	◇	◇	鉢	IA-a ₂	Q ₂ 埋土下部 床面№.6	YN	M	K N M
122	◇	◇	壺		床面№.3	YN	M	M K
123	◇	◇	鉢	IA	床面№.1	YN		H
124	◇	◇	甕	IC	Q ₂ Q ₃ 埋土	YN H	H	
97-125	◇	◇	甕	IB-c	Q ₂ 埋土下部	YN	H	M H
126	◇	◇	甕	IF	Q ₂ 埋土下部	YN	K M	M
127	◇	◇	甕	ID-a	床面№.4	YN	M	M N
128	◇	◇	甕	IB-a ₂	Q ₂ 埋土	YN	H	H
129	◇	◇	甕	ID-a	埋土	YN	N	H
98-130	◇	◇	壺	IC	Q ₁ 埋土下部		M	K M
131	◇	◇	丹 塗 の 壺		埋土	YN	M	
132	◇	◇	壺		カマド 埋土下部		H M	H M
133	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土下部		H	
134	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土		H	H
135	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土		K H	
136	◇	◇	甕		床面		H	
99-137	◇	◇	丹 塗 の 壺		埋土上部 Q ₂ 埋土中部			N
138	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土			K

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
Y N				(17.0)	—	[6.8]		226	57—112
		H		—	(7.8)	[3.5]		231	113
		H		—	(7.2)	[5.1]		225	114
	T	T		—	—	[14.8]		須 6	115
							鉄器計測表参照	鉄14	116
	M	M		(14.0)	—	[3.1]	胴下半部沈線	385	58—117
M	M	M	平 底 風	13.0	—	3.2	胴下半部に横線	51	118
M	M	M	丸 底	14.0	—	5.9	胴下半部に有段	90	119
	杯部 M	脚部 M		—	—	[4.0]	内面黒色処理	101	120
Y N	N	N		13.0	5.9	10.8	胴下半部に輪積痕	94	121
H Y N	H N N	H N N		20.9	7.4	25.5	口縁部に沈線、肩部に有段	33	122
Y N	N	N		(18.8)	8.7	11.4	肩部に有段	126	123
Y N	N			(20.0)	—	[13.0]	肩部に沈線	134	124
Y N	H	H		19.0	—	(21.0)	口縁部と肩部に有段	5	125
Y N N	N	H		19.0	—	(21.0)	輪積痕	22	59—126
Y N	N	N		15.2	7.1	[20.5]	口唇部に沈線、口縁中心部と肩部に有段、内外面黒付着	4	127
Y N	N	N		(19.8)	—	[16.5]	胴部に輪積痕、肩部有段	117	128
Y N	H	H		(17.5)	—	[15.5]	肩部に有段	115	129
	N	N		—	—	[13.9]	肩部に有段、輪積痕	145	130
Y N	N H N	N		—	—	[10.1]	口縁部に有段	100	131
	H N			—	(11.3)	[14.8]	輪積痕	114	60—132
	N			—	—	[5.0]		579	133
	H	H K		—	8.1	[9.6]		93	134
		H		—	8.0	[7.0]	輪積痕	113	135
	H			—	—	[7.4]	肩部有段	383	136
		N		—	9.3	[2.4]		386	137
		H		—	(7.4)	[2.7]		380	138

古 館 Ⅱ 遺 跡

表 8

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
99—139	D16-2(住)	土 師 器	甕		Q ₂ 埋土下部			H
140	◇	◇	丹塗の杯		床面	M		
141	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土	YN	H	
142	◇	◇	内黒の杯		カマド	N	N	
143	◇	不定形石器						
144	D16-3(住)	土 師 器	黒色の杯	I B	埋土下部	M	M	M K
145	◇	◇	甕	I B—c	埋土下部	YN		
146	◇	◇	甕	I B—b	埋土下部	YN N		
147	◇	◇	甕		埋土	YN		
100—148	D17-1(住)	◇	丹塗の杯		Q ₂ 埋土	M	N M	
149	◇	◇	内黒の杯	I C	Q ₂ 埋土			M
150	◇	須恵器	杯		Q ₂ 埋土		RN	RN
151	◇	須恵器	杯	B—c	Q ₂ 床面	RN	RN	RN
152	◇	土 師 器	壺	I B	Q ₂ 埋土	YN	M H	
153	◇	◇	甕	I E—a	埋土上部	YN N		
154	◇	◇	丹塗の杯	I B—a	Q ₁ 床面		M	N、K
155	◇	鉄製品	刀子		床面			
101—156	◇	須恵器	甕		Q ₁ 床面			T
157	◇	陶磁器			Q ₁ 床面			RN
158	◇	環状鉄製品			埋土上部 Q ₂ 埋土中部			
159	◇	盤状石器			Q ₁ 床面			
160	◇	磨石			Q ₁ 床面			
102—161	D17-2(住)	土 師 器	内黒の杯	I C—c ₁	埋土下部	M	K M	
162	◇	◇	丹塗の壺		Q ₂ 埋土上部 I層下部		H M	H M
163	◇	◇	丹塗の壺		床面 東側壁		M	
164	◇	◇	壺		埋土下部			H
165	◇	陶磁器	小形陶器		埋土中西壁	RN	RN	RN
166	◇	土 師 器	甕		埋土上部 I層下位			N

遺 表 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真回数 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
		N	—	6.0	[2.2]		387	60—139	
M			—	—	—		382	140	
H YN	N		—	—	—	肩部有段	384	141	
M	N M		—	—	—		381	142	
						石器計測表参照	石26	143	
M	M	M	(11.6)	—	[2.5]	内外面黒色処理、胴下半部に沈線	377	144	
YN			(19.1)	—	[6.7]	口縁中心と肩部に有段	388	145	
YN	N		—	—	—	頸部に2段にわたり沈線	375	146	
YN H			—	—	—	口縁中心部に有段	376	147	
M	M		(17.0)	—	[7.9]	内面黒色処理	253	148	
		M	—	—	[2.2]	胴下半部に有段	243	149	
	RN	RN	回転糸切底	—	(6.6) [2.4]		239	150	
RN	RN	RN	回転糸切底	(10.8)	(5.6)	4.0	242	151	
YN	N		—	—	[7.5]	頸部にやや大目の沈線を巡らしている。内面輪積痕あり	244	152	
YN N			(19.6)	—	[5.7]		240	153	
		M	—	—	—	内面黒色処理、胴下半部に有段	241	154	
			—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄20	155	
		T	—	—	—		須 5	61—156	
		RN	—	—	—	釉かけ	陶 6	カラー 50—157	
			—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄16	61—158	
			—	—	—	石器計測表参照	石20	159	
			—	—	—	石器計測表参照	石19	160	
M	M		(17.0)	—	[4.0]	胴中心部に有段	250	161	
	N	N	—	—	[15.8]	内外面輪積痕あり 肩部に有段	144	162	
		N	—	—	—		255	163	
		M	—	(10.0)	[1.8]	内面黒色処理	249	164	
RN	RN	RN	(6.0)	(4.0)	3.0	釉かけ	陶 3	165	
		N	—	6.2	[1.3]		251	166	

古 館 II 遺 跡

表 9

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
102—167	D17-1(住)	土 師 器	甕		埋土上部 I 覆下位			H
168	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土上部	YN	N	
169	◇	須 恵 器	壺		Q ₂ 埋土下部			RN
170	◇	石 器	砥 石		Q ₂ 埋土 石群の上			
103—171	◇	◇	砥 石		埋土下部			
172	D17-3(住)	土 師 器	丹 塗 の 壺		床面			M K
173	◇	◇	壺		埋土上部			M K
174	◇	◇	甕		埋土下部		K	H
175	◇	石 器	コ ア		床面			
104—176	D17-3(住)	石 器	砥 石		床面			
177	D17-4(住)	土 師 器	小 形 土 器		貼床下№4	YN	N	N
178	◇	◇	内 黒 の 杯	I A	床面№2	M	M	K M
179	◇	◇	内 黒 の 杯	I B	床面№1	M	M	M
180	◇	◇	黒 色 の 壺		埋土			M K
181	◇	◇	内 黒 の 杯		埋土			RN
182	◇	須 恵 器	杯		東西ベルト 埋土	RN	RN	
183	◇	土 師 器	丹 塗 の 壺		東西ベルト 埋土		M	
184	D22(住)	◇	甕	I B—a ₁	床面№2	YN	H	H
105—185	◇	◇	内 黒 の 杯	I C—c ₂	床面		M	M
186	◇	◇	内 黒 の 杯		Q ₂ 床面			M
187	◇	須 恵 器	壺		床面№1	RN	RN	
188	◇	土 師 器	内 黒 の 杯		Q ₂ 床面			M
189	◇	◇	甕		埋土			K M
190	◇	◇	甕		床面			N
191	◇	◇	内 黒 の 杯		床面		M	
192	◇	◇	甕		埋土	YN		
193	◇	◇	甕		床面土器№3	YN	N M	
194	◇	◇	内 黒 の 杯		床面土器№3			M

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
		H		—	(8.4)	[2.8]		252	61—167
YN	H			—	—	—		254	168
		RN		—	—	—		須 7	169
				—	—	—	石器計測表参照	石96	170
				—	—	—	石器計測表参照	石42	171
		N		—	(11.4)	[2.0]		256	62—172
		M		—	(7.0)	[3.5]	内面黒色処理	237	173
	H	H N		—	7.3	[7.8]	内外面輪積痕	125	174
				—	—	—	石器計測表	石34	175
				—	—	—		石 1	176
N	M	M		8.3	3.5	3.7	外面中央部に稜線あり 内面黒色処理	140	177
M	M	M	丸 底 風	10.5	—	3.8	胴中心部に有段 内面ミガキ研磨	88	178
M	M	M		(12.9)	5.8	5.1	胴部中央に稜線あり 内面中央に区切あり	260	177
		M	K M	—	(6.8)	[2.8]	内面黒色処理	257	180
		RN	回転糸切痕	—	5.6	[0.9]		258	181
RN	RN			(14.0)	—	[2.7]		須38	182
	N			—	—	—	肩部有段	259	183
YN N	H	H		(25.4)	—	[9.8]	口縁部に2段にわたり有段	53	184
	M	M		(10.8)	—	[3.0]	胴下半部に沈線あり	352	185
		M		—	(4.4)	[2.6]	胴下半部に有段	351	186
RN	RN			(7.3)	—	[4.3]		須 8	187
		M		—	4.4	[1.2]		349	188
		N		—	(5.2)	[2.9]		355	189
				—	5.4	[0.8]		353	190
	M			—	—	[3.2]		350	191
YN				(17.7)	—	[4.1]		124	192
	N			—	—	[4.6]	肩部有段	354	193
		M		—	—	—		356	194

古 館 II 遺 跡

表10

YN—ヨコナダ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
105—195	E07(住)	土 師 器	丹塗の壺	IA-a	床面土器No.3	YN M	N M	
106—196	◇	◇	内黒の杯		Q ₃ 床面	M	M	
197	◇	◇	丹塗の杯		Q ₃ 埋土下部	M	M	
198	◇	◇	丹塗の高杯	IA-a	ビットP ₃ 埋土			脚 YM HN
199	◇	◇	甕	ID-b	Q ₄ 床面	YN	YN	
200	◇	◇	甕	IE-a	Q ₄ 、Q ₃ 埋土下部	YN	H	H
201	◇	◇	甕	IF-b	Q ₃ 床面	YN	H	
202	◇	◇	甕	ID-a	カマド (カマド内)	YN	H	
107—203	◇	◇	甕	ID-a	Q ₃ 埋土最下部 埋土上部	YN	H	
204	◇	◇	甕		カマド (カマド内)			H
205	◇	◇	甕		Q ₃ ベルト Q ₄ 埋土最下部	YN	H	
206	◇	◇	甕		Q ₄ 埋土最下部			H
207	◇	◇	甕		床面		H	
208	◇	◇	丹塗の杯		Q ₄ 埋土最下部			M
209	◇	◇	丹塗の杯		Q ₃ 埋土中部	M	M	
210	◇	◇	丹塗の杯	IB-a	床面		M	K
211	◇	◇	丹塗の杯	IB-a	埋土下部		M	K
212	◇	◇	壺		埋土Ⅱ層 埋土最下部			M
213	◇	◇	丹塗の壺		Q ₃ 埋土最下部	YN	YN	
214	◇	◇	甕		Q ₁ 、Q ₂ ベルト 埋土最下部			T
108—215	◇	土 製 品	紡 錘 車		Q ₄ 床面			
216	◇	鉄 製 品	刀 子		床面			
217	◇	石 器	台 石		床面			
218	◇	◇	台 石		Q ₃ 床面			
219	◇	◇	台 石		Q ₃ 床面			
109—220	◇	盤状石製品			Q ₃ 床面			
221	◇	球状石製品			Q ₃ 床面			
222	◇	◇			床面			

遺 物 一 覧 表

ナグ・N—ナグ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナグ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
YN M	N		16.0	—	[13.7]	肩部有段 内面肩部区切	28	63—196	
M	M		(17.8)	—	[3.6]		391	196	
M	M		(17.8)	—	[2.7]	内面黒色処理	394	197	
	坏部 M	胸部 YN	—	7.0	[3.6]	内面黒色処理	130	198	
YN M	N	N	19.6	—	[28.0]	肩部有段、内面輪襷痕あり	32	199	
YN H	H		18.6	—	[23.1]	肩部に稜あり	44	200	
YN	N		(23.0)	—	[8.0]		400	201	
N YN	H N		(18.0)	—	[15.5]	肩部有段	399	202	
YN	H		(18.2)	—	[6.8]	肩部有段	41	64—203	
		H N	—	—	[7.5]	内外面輪襷痕あり	40	204	
YN	N		—	—	—	肩部有段	389	205	
		N	—	(8.0)	[2.2]		397	206	
		N	—	—	—		393	207	
		M	—	—	—	胴中心部に有段、内面黒色処理	395 a	208	
M	M		—	—	—	内面黒色処理	395 b	209	
	M	M	—	—	—	胴中心部に有段、内面黒色処理	396 a	210	
	M	M	—	—	—	胴中心部に有段、内面黒色処理	396 b	211	
		N	—	—	—		392	212	
YN	YN		—	—	—	肩部に有段	390	213	
		T	—	—	—		乳 9	214	
			—	—	—	土製品計測表参照	土22	215	
			—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄21	216	
			—	—	—	石器計測表参照	石12	217	
			—	—	—	石器計測表参照	石11	218	
			—	—	—	石器計測表参照	石10	219	
			—	—	—	石器計測表参照	石15	65—220	
			—	—	—	石器計測表参照	石35	221	
			—	—	—	石器計測表参照、朱塗	石32	222	

古 館 II 遺 跡

表11

YN—ヨコナゲ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
109—223	F09-1(住)	土 師 器	甕	I D—a	埋土	YN	H	
224	々	々	甕		埋土中			H
225	々	々	甕		Q ₂ 床直			H
226	々	々	甕		Q ₂ 埋土			H
110—227	E16-1(住)	々	丹塗の壺	I B—b	床面	H YN	M H	H
228	々	々	内黒の杯	I C—c	埋土上部	M	K	
229	々	々	丹塗の壺	I B	Q ₁ 埋土上部	YN	M	
230	々	々	丹塗の壺		Q ₂ 埋土上部		M	M
111—231	々	々	甕	I B—b	2号カマド Q ₁ 埋土下部	YN	H N	
232	々	々	甕	I D—b	Q ₂ 埋土	YN	H	
233	々	々	甕		Q ₁ 床面		H N	
234	々	々	甕	I D—c	Q ₁ 埋土	YN	M	M
235	々	々	甕		埋土			N K
236	々	々	丹塗の壺		Q ₂ 埋土最下部			H N
237	々	須恵器	杯		埋土最下部	RN	RN	
112—238	々	石 器	砥 石		Q ₁ 埋土			
239	々	々	磨 石		Q ₂ 床面			
240	E16-2(住)	土 師 器	内黒の杯	I E—b	Q ₂ 床面	M	M	M K
241	々	々	内黒の杯		床面	RN	RN	
242	々	酸焰須恵器	杯		Q ₂ 埋土	RN	RN	
243	々	々	杯		Q ₁ 掘り方埋土	RN	RN	
244	々	土 師 器	杯		カマド構築土内			RN
245	々	々	甕	I F—d ₂	埋土下部 (一括土器)	YN	N	K N
113—246	々	々	甕	I D—e	埋土下部(一括土器) カマド構成土中	YN	N	K
247	々	須恵器	甕		Q ₂ 埋土下部			T
248	々	々	甕		埋土		T	
249	々	々	甕		Q ₁ 埋土下部			T
250	々	石 器	砥 石		Q ₁ 埋土上部			

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口徑	底徑	器高			
N YN	H			—	—	—	肩部有段	327	65—223
		N		—	(8.8)	[1.9]		247	224
		H N		—	(7.8)	[3.8]		245	225
		H	N	—	6.0	[3.1]		246	226
N YN	N H	N H		19.9	8.6	25.6	肩部有段、口縁部内面一部丹塗	6	227
M	M			(13.6)	—	[5.1]	胴中心部に有段	371	228
YN K	N			—	—	[8.9]	肩部有段、内面一部丹塗	137	229
	N	N		—	—	—		138	230
YN	H N			21.7	—	[16.9]	口唇部、口縁部中心、頸部に沈線、内外面輪積痕あり	25	66—231
YN	H			19.5	—	[11.9]	頸部有段、内外面輪積痕あり	34	232
H N	H	H	木 葉 痕	—	9.6	[15.0]	内外面輪積痕あり	35	233
YN	N	N M		13.7	—	[20.9]	肩部有段、内面輪積痕あり	150	234
		K		—	(9.0)	[2.3]		370	235
		N		—	(8.0)	[2.7]		531	236
RN	RN			—	—	—		須13	237
							石器計測表参照	石4	238
							石器計測表参照	石13	239
M	M	M		(21.0)	—	[7.2]		87	67—240
M	M			(17.0)	—	[3.8]		372	241
RN	RN			(16.0)	—	[6.2]		67	242
RN	RN			(15.6)	—	[4.2]		369	243
		M	回転糸切痕	—	(5.6)	[1.4]	へら書による刻線あり	373	244
YN	H	H		18.8	(8.5)	22.1	内外面輪積痕あり	46	245
YN	N	N	K	21.0	10.4	26.7	肩部有段、内外面輪積痕あり	60	246
		T		—	—	—		須12	247
				—	—	—		須14	248
				—	—	—		須39	249
				—	—	—	石器計測表参照	石41	67—250

古 館 II 遺 跡

表12

YN—ヨコナゲ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
114—251	E18(住)	土 師 器	内 黒 の 杯	ⅠD—b ₂	Q ₁ 床面	M	M	M
252	〃	〃	内 黒 の 杯	ⅠA	床面	M	M	M K
253	〃	〃	丹 塗 の 杯	ⅠA—b	Q ₁ 埋土最下部	M	M	K
254	〃	〃	内 黒 の 杯	ⅠE—c	カマド周辺埋土	M	M	M
255	〃	〃	内 黒 の 杯	ⅠD—b ₁	埋土下部		M	M K
256	〃	〃	丹 塗 の 杯	ⅠA—a	Q ₁ 埋土	M	H	
257	〃	〃	内 黒 の 杯		カマド内			K M
258	〃	〃	鉢	ⅠB—a ₁	Q ₂ 床面	YN	N K	
259	〃	〃	甕		カマド内埋土		H M	H N
260	〃	〃	甕		カマド内			N
115—261	〃	〃	甕		右袖カマド内		N	
262	〃	〃	丹 塗 の 壺	ⅠB	埋土	YN	H M	
263	〃	〃	黒 色 の 壺		埋土上部	M	M	
264	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₁ 床面			N
265	〃	〃	甕	ⅠD—c	埋土最下部	YN N	N	
266	〃	〃	甕		埋土下部			H N
267	〃	〃	甕	ⅠE	埋土	H YN		
268	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₁ 埋土			M
116—269	〃	〃	甕	ⅠE	埋土下部	YN	H N	
270	〃	〃	甕	ⅠE	埋土下部	YN	M	
271	〃	〃	内 黒 の 杯		埋土最下部	M	M	
272	〃	〃	丹 塗 の 杯	ⅠC	カマド			M
273	〃	〃	丹 塗 の 杯		埋土下部	M	K	
274	〃	〃	丹 塗 の 壺		埋土下部		M	
275	〃	〃	丹 塗 の 杯		埋土下部			M
276	〃	〃	内 黒 の 杯		Q ₁ 埋土	YN	N	K
277	〃	〃	丹 塗 の 杯		埋土			N M
278	〃	〃	丹 塗 の 壺		Q ₁ 床面		N	

遺 物 一 覧 表

ナゲ・N—ナゲ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナゲ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
	M	M		(18.4)	—	[6.0]	下半部に稜線あり	201	68—251
M	M	M		(14.3)	—	[4.9]	下半部有段	205	252
M	M	M		(14.2)	(8.4)	4.5	内面黒色処理 下半部に有段 内面下半部に区切	281	253
M	M	M	丸 底 風	14.2	5.6	4.5		10	254
	M	M		—	—	[5.2]	中心部に稜線あり	280	255
M	M			(13.1)	—	[3.8]	下半部に有段、内面に区切あり 内面黒色処理	206	256
		M N	平 底 風	—	—	[2.3]		209	257
YN	N			(11.1)	—	[7.6]	肩部有段	208	258
	H	H	木 葉 痕	—	7.5	[15.0]	内外面輪積痕あり	43	259
		N		—	8.8	[8.3]		59	260
	N			—	(8.0)	[9.0]		57	261
	N			—	—	[9.7]	口縁部は内面に一部朱塗	37	262
M				(6.0)	—	[2.2]	内面黒色処理	276	263
		N		—	(9.0)	[2.0]		204	264
YN				(25.6)	—	[5.9]	肩部に輪積痕あり、煤付着 内面輪積痕あり	360	265
		N		(7.2)	[2.0]			275	266
YN				(19.2)	—	[3.5]	頸部に稜あり	203	267
		N		—	—	—	内外面輪積痕あり	346	268
	N			—	—	—	頸部に稜あり	269	269
	N			—	—	—	内面に輪積痕あり	278	270
M	M			—	—	—	下半部に有段	345	271
		M		—	—	—	内面黒色処理	343	272
M				—	—	—	中心部に有段、内面黒色処理	277	273
	H			—	—	—		279	274
		M		—	—	—	内面黒色処理	270	69—275
M	M	M		—	—	—	下半部に有段	342	276
		M		—	—	—	内面黒色処理 下半部に稜あり	271	277
	N			—	—	—		344	278

古 館 II 遺 跡

表13

YN-ヨコナゲ・HN-ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
116-279	E18(住)	土 製 品	勾 玉		床直, カマド			
117-280	E21(住)	土 師 器	壺	IC-b	床面	YN		H M
281	◇	◇	壺	IC-b	床面	YN	H	
282	◇	◇	高 杯		Q ₂ 埋土下部			脚部 H.N
283	◇	不定形石器			Q ₂ ・Q ₃ ベルト 床面・直上			
284	F13-2(住)	土 師 器	内黒の杯	IB	Q ₂ 埋土	RN	RN	K
285	◇	◇	内黒の杯		Q ₂ 埋土下部			RN
286	◇	須恵器	壺		Q ₂ 床面			RN
287	◇	◇	壺		埋土上部			RN
288	◇	◇	壺		Q ₂ 床面	RN		
289	◇	鉄 製 品			Q ₂ 床面			
118-290	◇	土 師 器	内黒の杯	IE-b	Q ₂ 埋土Ⅱ層	M	M	K M
291	◇	◇	内黒の杯		Q ₂ 床面 埋土直上			M
292	◇	◇	丹塗の壺		埋土上部		M	M
293	◇	酸焙須恵器	杯			RN	RN	
294	◇	須恵器	甕		埋土上部		T	
295	F15-2(住)	酸焙須恵器	杯		カマド内	RN	RN	
296	◇	◇	杯		カマド内床面	RN	RN	RN
297	◇	須恵器	壺		Q ₂ 埋土		T	
298	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土			RN
119-299	F16(住)	土 師 器	内黒の杯		Q ₂ 埋土中部 Q ₂ 床面	RN	RN	
300	◇	◇	内黒の杯		Q ₂ 埋土中部	RN	RN	RN
301	◇	◇	内黒の杯	IC	Q ₂ 埋土中部			RN
302	◇	◇	内黒の杯	IC	Q ₂ 埋土上部	RN	RN	RN
303	◇	◇	内黒の杯	IC	埋土上部	RN	RN	RN
304	◇	◇	内黒の杯		埋土Ⅱ層 Q ₂ 埋土	RN	RN	
305	◇	◇	内黒の杯		埋土Ⅲ層	RN	RN	
306	◇	◇	内黒の杯		ビットP ₂ Ⅴ層	RN	RN	RN

遺物一覽表

ナデ・N-ナデ・K-ヘラケズリ・M-ヘラミガキ・RN-ロクロナデ・T-タタキメ・H-ハケメ

内面調整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口徑	底徑	器高			
				—	—	—	土製品計測表参照	土23	279
YN	H N	N		(14.0)	—	[16.5]	肩部有段	49	280
YN	N H			(15.3)	—	[7.3]	ク	91	281
		脚部 H		—	11.4	[3.8]	内外面輪痕あり	202	282
				—	—	—	石器計測表参照	石43	283
M	N H	N	再調整あり	(15.4)	5.2	4.6		9	284
		M		—	(6.8)	[1.5]		248	285
		RN		—	—	—		須15	286
		RN		—	—	—		須17	287
RN				—	—	—		須16	288
				—	—	—	鉄器計測表参照	鉄 8	289
M	M	M		13.3	(6.0)	4.0		143	290
		M		—	—	[2.5]		262	291
	N	N		—	(8.6)	[5.0]		263	292
RN	RN			(14.0)	—	[3.4]		264	293
	T			—	—	—		須37	294
RN	RN			(16.4)	—	[3.9]		261	70-295
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.8)	6.4	4.7		119	296
	T			—	—	[11.9]		須11	297
		RN		—	—	—		須10	298
M	M			(15.0)	—	[4.3]		111	299
M	M N			(15.0)	—	[5.6]		305	300
		M	回転糸切痕	—	(6.0)	[2.0]		286	301
M	M N	N	回転糸切痕	13.4	(6.8)	5.1	墨書土器	85	302
M	M	M		(15.2)	(5.8)	5.2		73	303
M	M			(18.4)	—	[3.5]		298	304
M	M			(16.0)	—	[4.0]		74	305
M	M	N		(14.2)	(6.4)	5.6		83	306

古 館 II 遺 跡

表14

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
119—307	F16(住)	土 師 器	内黒の杯		埋土N層	RN	RN	
308	◇	◇	内黒の杯		埋土N層	RN	RN	
309	◇	◇	内黒の杯	ⅡC	埋土N層			RN
310	◇	◇	内黒の杯	ⅡB	埋土N層	RN	RN	K
311	◇	◇	内黒の杯	ⅡA	Q ₄ 埋土I層			RN K
120—312	◇	◇	内黒の杯	ⅡA	Q ₃ 埋土中部			K
313	◇	◇	内黒の杯		Q ₁ 掘り方埋土			K
314	◇	◇	内黒の杯	ⅡA	埋土上部			K
315	◇	◇	内黒の杯	ⅡA	Q ₃ 埋土中部			RN K
316	◇	◇	杯		カマド本体	RN	RN	RN
317	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土中部	RN	RN	
318	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土中部	RN	RN	
319	◇	釅 焙 須 恵 器	杯		Q ₂ ・Q ₄ ベルト(火山 灰中) Q ₃ 埋土Ⅱ層 Q ₄ 埋土上部	RN	RN	
320	◇	◇	杯		Q ₄ 埋土下部	RN	RN	
321	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土上部	RN	RN	RN
322	◇	◇	杯		埋土	RN	RN	RN
323	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土	RN	RN	RN
324	◇	◇	杯		Q ₄ 埋土Ⅰ層		RN	RN
121—325	◇	釅 焙 須 恵 器	杯		Q ₃ 埋土上部 Q ₄ 埋土Ⅰ層 埋土中	RN	RN	RN
326	◇	◇	杯		埋土下部	RN	RN	RN
327	◇	◇	杯		ベルトQ ₃ ・Q ₄ (火山 灰中) 埋土Ⅱ層			RN
328	◇	◇	杯		Q ₄ 埋土Ⅱ層	RN	RN	RN
329	◇	◇	杯		埋土Ⅲ層	RN	RN	RN
330	◇	◇	杯		埋土			K
331	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土下部	RN	RN	RN
332	◇	◇	杯		Q ₄ 埋土下部	RN	RN	RN
333	◇	◇	杯		Q ₄ 埋土中部	RN	RN	RN

遺 物 一 覧 表

ナゲ・N—ナゲ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナゲ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
M	M			(17.0)	—	[4.8]		309	70—307
M	M			(14.0)	—	[3.6]		84	308
		M	回転糸切痕	—	5.8	[2.2]		303	309
M	M	M	再調整あり	(15.0)	(5.0)	5.1		82	310
		M	再調整あり	—	6.4	[2.9]		110	311
		M	K	—	5.2	[1.3]		307	71—312
		M	回転糸切痕	—	5.0	[1.0]		310	313
		M	K	—	(6.2)	[2.6]		273	314
		M	回転糸切痕 再調整あり	—	6.2	[1.9]		288	315
M	M	M	回転糸切痕	(15.4)	6.8	4.7		302	316
M	M			(16.0)	—	[4.5]		289	317
M	M			(16.0)	—	[4.0]	墨書土器	301	318
RN	RN			(15.0)	—	[2.5]		284	319
RN	RN			14.4	—	[4.6]		80	320
RN	RN	RN		(16.0)	—	[5.0]		295	321
RN	RN	RN	回転糸切痕	14.8	6.0	5.2		69	322
RN	RN	RN	回転糸切痕	15.0	5.4	5.3		68	323
		RN	回転糸切痕	—	6.2	[2.8]		287	324
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.7)	(6.1)	4.4		72	325
RN	RN	RN		(14.4)	(6.4)	4.8		86	326
		RN	回転糸切痕	—	5.4	[0.8]		547	写真省略
RN	RN	RN		(14.0)	—	[5.1]		106	328
RN	RN	RN	回転糸切痕	14.8	6.0	4.7		50	329
		RN	回転糸切痕	—	6.6	[2.4]		306	330
RN	RN	RN	回転糸切痕	(16.4)	(4.9)	6.8		103	331
RN	RN	RN		15.0	—	[4.2]		294	332
RN	RN	RN		(13.2)	(5.2)	4.3		81	333

古 館 II 遺 跡

表15

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
121—334	F16(住)	酸焰須恵器	杯		埋土上部 Q ₃ 埋土中部	RN	RN	RN
335	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土中部			RN
336	◇	◇	杯		埋土中部	RN	RN	RN
122—337	◇	◇	杯		埋土Ⅱ、Ⅲ層	RN	RN	RN
338	◇	◇	杯		埋土V層	RN	RN	RN
339	◇	土 師 器	高 杯	I B	Q ₃ 埋土上部			脚 M
340	◇	◇	鉢	I C—a ₁	Q ₃ 埋土Ⅳ層	YN	K N	
341	◇	◇	壺	I C—c	床面、埋土中部	YN	N K	
342	◇	◇	甕	I E—c	Q ₃ 埋土上部	YN	N	
343	◇	◇	甕	I F—c	Q ₃ 埋土上部	YN	N	
344	◇	◇	甕		Q ₃ 床面			N K
345	◇	◇	甕		Q ₃ 埋土下部			K N
346	◇	◇	甕		埋土中部	RN	RN	RN
347	◇	◇	甕		埋土Ⅱ層	RN	RN	
123—348	◇	◇	甕		Q ₃ 埋土下部 カマド内掘り方埋 土	RN	RN K	
349	◇	◇	甕		カマド内埋土№2 (一括土器)		K N	
350	◇	◇	甕		カマド内 (一括土器)			K N
351	◇	◇	甕		カマド内			K
352	◇	◇	甕		カマド内 (一括土器)		N	N
353	◇	◇	甕		埋土下部 埋土中部 カマド内、本体	RN	RN	RN
354	◇	◇	甕		Q ₃ 埋土		H K	K
124—355	◇	◇	甕		Q ₃ 掘り方埋土		RN K	
356	◇	須 恵 器	杯		Q ₃ 埋土中部			RN
357	◇	◇	杯		埋土中部			RN
358	◇	◇	杯		Q ₃ 埋土中部			N RN
359	◇	◇	壺		Q ₃ 床面	RN		
360	◇	◇	壺		Q ₃ 埋土中部		RN	

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.4)	(6.0)	5.4		105	71—334
		RN	回転糸切痕	—	(6.6)	[1.8]		285	335
RN	RN	RN	回転糸切痕	(14.6)	6.0	5.1		66	336
RN	RN	RN		(14.0)	—	[3.3]		290	337
RN	RN	RN	回転糸切痕	14.8	6.4	4.7		102	338
		坏部 M		—	—	[2.3]	脚部有段	131	339
YN	N	H N		14.9	(8.1)	14.6	内外面輪積痕あり	75	72—340
N	H			(14.0)	—	[10.8]	胴部有段	64	341
YN	H			(15.0)	—	[3.8]		97	342
YN	H			(13.0)	—	[6.0]		291	343
		N		—	(10.2)	[2.7]		311	344
		N		—	(8.2)	[1.8]		299	345
RN	RN	RN		11.2	—	[7.6]		62	346
RN	RN			(11.9)	—	[3.8]		304	347
RN N	RN N			(24.0)	—	[11.7]		135	348
	N			—	—	[13.7]	粘土付着	76	349
	N			—	8.5	[9.5]		77	350
	N			—	10.0	[4.4]	粘土付着	300	351
	N	N		—	9.4	[13.0]		70	352
RN	RN	RN	回転糸切痕	14.9	(8.0)	13.8		48	353
	H	H		—	—	[9.6]		147	73—354
	RN			—	—	—		292	355
		RN		—	—	[1.3]		須21	356
		RN		—	(6.6)	[1.7]		須19	357
		RN	回転糸切痕	—	(8.2)	[3.1]		107	358
RN				—	—	—		須34	359
	RN			—	—	[2.6]		須22	380

古 館 II 遺 跡

表16

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
361	F16(住)	須 恵 器	壺		Q ₂ 埋土上部	RN		
362	◇	◇	壺		床№2	RN		
363	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土上部 火山灰埋土			T
364	◇	◇	甕		埋土上部		T	
365	◇	◇	甕		ビットP ₃ 1層			T
125—366	◇	◇	甕		カマド内			T
367	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土中部			T
368	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土中部			T
369	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土中部			T
370	◇	◇	杯		Q ₂ 埋土			RN
371	◇	◇	壺		ビットP ₃ 1層	RN		
372	◇	◇	杯		Q ₂ 埋土下部			RN
373	◇	石 器			Q ₂ 埋土中部			
374	◇	◇			Q ₂ 床面			
375	◇	◇			Q ₂ 埋土中部			
126—376	F17(住)	釀 造 須 恵 器	杯		Q ₂ 埋土		RN	
377	◇	土 師 器	内黒の杯	I C—b	埋土上部	M	M	K
378	◇	◇	丹塗の壺		埋土上部			M
379	◇	◇	内黒の杯		Q ₂ 埋土			RN
380	◇	須 恵 器	杯		埋土上部	RN	RN	RN
381	◇	◇	杯			RN	RN	RN
382	◇	土 師 器	内黒の杯		埋土			K
383	◇	須 恵 器	杯		埋土上部			RN
384	◇	土 師 器	丹塗の壺		埋土上部	YN		
385	C22住居跡 状遺構	◇	杯		Q ₂ 埋土		RN	RN
386	◇	◇	甕		床Q ₂ 埋土Q ₂			K R N
387	◇	◇	丹塗の壺		埋土			N M
388	◇	◇	甕		Q ₂ 埋土	YN N		

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
RN				(10.8)	—	[2.5]		須20	73—361
RN				7.4	—	[5.3]		須35	362
		T		—	—	—		須28	363
				—	—	—		須33	364
				—	—	—		須27	365
				—	—	—		須41	366
				—	—	—		須26	367
				—	—	—		須25	368
		T		—	—	—		須24	369
		RN		—	—	—		須29	370
RN				—	—	—		須18	371
		RN		—	—	—		須23	372
				—	—	—	石器計測表参照	石17	373
				—	—	—	石器計測表参照	石18	374
				—	—	—	石器計測表参照	石16	375
	RN			—	—	[3.0]		267	74—376
M	M			(16.6)	—	[4.0]	胴下半部に有段	401	377
		N		—	—	—		265	378
		M	再調整あり	—	(8.2)	[1.6]		374	379
RN	RN	RN	回転糸切痕	(13.0)	6.4	3.6		須31	380
RN	RN	RN		13.4	4.3	7.6		須30	381
		M		—	—	—		266	382
		RN		—	—	—		須32	383
YN				—	—	—	内面一部丹塗	268	384
	M	M	回転糸切痕	—	(6.8)	[3.8]		347	385
		N	木 葉 痕	—	8.0	[2.8]		217	386
		N		—	8.2	[7.3]		65	387
YN N				—	—	—		348	388

古 館 II 遺 跡

表17

YN—ヨコナゲ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
127—389	D13(住)	須 恵 器	甕		Q ₂ 埋土下部	RN		
390	D21(住)	土 師 器	内 黒 の 杯		Q ₂ 埋土			N
391	F13-1(住)	◇	甕		Q ₂ 埋土上部			RN
392	◇	鉄 製 品			Q ₂ 埋土			
393	◇	◇	甕		床面			
394	◇	石 製 品			Q ₂ 埋土上部			
395	A14(住)	古 銭			Q ₂ 埋土下部			
396	◇	鉄 製 品	釘		Q ₂ 埋土下部			
128—397	A15(住)	◇	釘		埋土下部			
398	◇	◇			Q ₂ 埋土			
399	B08(住)	不定形石器			埋土中部			
128—400	B08(住)	陶 磁 器	小 形 鉢		出入口部分床 Ⅱ層下位床面	RN		RN
401	A16柱穴	土 師 器	甕		柱穴埋土下部	H		N
402	B15-2柱穴	鉄 製 品			柱穴埋土下部			
403	E20-6柱穴	◇			柱穴底部			
404	D20-6柱穴	◇			柱穴埋土上部			
405	◇	◇			埋土中部			
406	C17井戸	石 器	砥 石		埋土最下部			
601	◇	青 磁 器	皿		埋土			RN
144—602	◇	木 製 品			埋土			
148—623								
129—407	B23	土 師 器	内 黒 の 杯	IA-a	Q ₂ I層	M	M	M
408	F16	◇	内 黒 の 杯	IA-b	Q ₂ II層	M	M	K
409	D23	◇	内 黒 の 杯	IC-c ₁	Q ₂ II層	M	KM	—
410	◇	◇	丹 塗 の 杯	IB-b	Q ₂ II層	M	M	
411	E23	◇	杯		Q ₂ 粗掘	M	M	
412	F17	◇	内 黒 の 杯	II	Q ₂ II層			RN
413	F17・18	◇	内 黒 の 杯	IE	II層	YN	K	K

遺 物 一 表 覧

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(㎝)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
RN				—	—	—		須36	389
		M N		—	—	—		358	390
		RN		—	5.6	[2.4]		565	391
							鉄製品計測表参照	鉄13	392
							鉄製品計測表参照	鉄 1	393
							石器計測表参照	石21	394
							古銭計測表参照	C 5	75—395
							鉄製品計測表参照	鉄 6	396
							鉄製品計測表参照	鉄 5	397
							鉄製品計測表参照	鉄15	398
							石器計測表参照	石31	399
	RN	RN		—	(3.8)	[2.8]		陶 2	カラー 50—400
	N	N K		—	9.6	[4.7]	土製品計測表参照	402	75—401
							鉄製品計測表参照	鉄10	402
							鉄製品計測表参照	鉄 3	403
							鉄製品計測表参照	鉄 2	404
							鉄製品計測表参照	鉄 7	405
							石器計測表参照	石 6	406
		RN					軸かぎ	陶 1	カラー 50—601 86—602 ? 89—623
							木製品計測表参照		
M	M	M	H	(11.8)	—	[4.7]	中心部に有段 内面に区切あり	506	76—407
M	M	—		—	—	[4.1]	内面に区切あり 中心にやや太い沈線あり	545	408
—	M	—		—	—	[3.5]	中心部有段	515	409
M	N			(16.0)	—	[5.3]	中心部に軽い有段 内面黒色処理	517	410
M				(17.6)	—	[4.6]	中心に有段	536	411
		M		—	(7.0)	[2.8]		551	412
M	M	—		15.4	—	[3.9]	内外面輪痕あり	122	413

古 館 II 遺 跡

表18

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
129—414	D19	土 師 器	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層	M	M	M
415	B19	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層			M
416	F16	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層			M K
417	D10	◇	内 黒 の 坏	ⅡC	焼土遺構			N
418	C20	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層	N		N M
419	F08	◇	内 黒 の 坏	ⅠC—b	Q ₂ Ⅱ層			K
420	E17	◇	内 黒 の 坏	ⅠC—c ₁	Q ₂ Ⅱ層			N MK
421	F19	◇	内 黒 の 坏	ⅠD—b ₁	Q ₂ Ⅱ層	M	MK	
130—422	A24	◇	高 台 坏		Q ₂ Ⅰ層			M H
423	F18	◇	黒 色 の 坏	ⅠA	Q ₂ Ⅱ層	M	M	
424	D18	◇	丹 塗 の 坏	ⅠB—a	Q ₂ Ⅱ層	M	M	K
425	表採	◇	丹 塗 の 坏	ⅠB—c	表採	H YN	M	
426	D23	◇	丹 塗 の 坏	ⅠC	Q ₂ Q ₂ Ⅱ層	M	M	M
427	D21	◇	丹 塗 の 坏		Q ₂ Ⅱ層			M K
428	F18	◇	丹 塗 の 坏		Q ₂ Ⅱ層	M	M	
429	F18	◇	丹 塗 の 坏		Q ₂ Ⅱ層			M
430	F15	◇	内 黒 の 坏	ⅡB	Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	K
431	E19	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層		RN	
432	F18	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
433	F14	◇	内 黒 の 坏		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
131—434	E19	◇	内 黒 の 坏	ⅡC	Q ₂ Ⅱ層			RN
435	F16	◇	内 黒 の 坏	ⅡC	Q ₂ Ⅱ層			RN
436	F17	◇	内 黒 の 坏	ⅡC	Q ₂ Ⅱ層			RN
437	E17	◇	内 黒 の 坏	ⅡA	Q ₂ Ⅱ層			RN
438	F17	◇	内 黒 の 坏	ⅡA	Q ₂ Ⅱ層			K
439	E17	◇	内 黒 の 坏	ⅡA	Q ₂ Ⅱ層			K
440	F19	◇	内 黒 の 坏	ⅡB	Q ₂ Ⅱ層			K
441	F18	◇	内 黒 の 坏	ⅡB	Q ₂ Ⅱ層			RN K

遺 物 一 覧 表

ナデ・N-ナデ・K-ヘラケズリ・M-ヘラミガキ・RN-ロクロナデ・T-タタキメ・H-ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量 (cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
M	M	M	丸 底	9.5	—	3.4		89	414
		M	丸 底 風	—	—	[2.3]		507	415
		M	丸 底	—	—	[2.6]		548	416
		M		—	(4.8)	[2.7]		569	417
	M			—	—	—	中心部に沈線あり	562	418
		M		—	—	—	中心部に有段	403	419
	M	M		—	—	—	中心部に有段	529	420
M	MN			—	—	—	上半部に稜線あり	534	421
		M (ナデ状)		—	(10.2)	[6.8]	内面黒色処理	502	422
M	M			(14.5)	—	[3.2]	下半部に稜線あり、内面に区切あり、内面黒色処理	544	423
M	M	M	丸 底	(10.0)	—	[3.1]	中心部に有段、内面黒色処理	511	424
N M	N M			(13.2)	—	[4.1]	中心部に有段	562	425
M	M	M	丸 底	—	—	[4.9]	中心部に稜線、内面黒色処理	514	426
		M		—	8.4	[2.3]	内面黒色処理	513	427
M	M			—	—	—	内面黒色処理	272	428
		M		—	—	—	内面黒色処理	543	429
M	M	M	回転糸切痕	14.2	5.2	4.6		71	77-430
M	M			(13.6)	—	[4.6]		533	431
M	M			—	—	—	外面墨書	541	432
M	M			—	—	—	外面墨書	564	433
		M	回転糸切痕	—	(7.0)	[5.8]		522	434
		M	回転糸切痕	—	6.4	[3.5]		296	435
		N	回転糸切痕	—	6.2	[2.7]		559	436
		M	回転糸切痕 再調整K(1部)	—	(7.4)	[1.5]		527	437
		M	ロクロ後 再調整K	—	(7.6)	[1.8]	底部回転ヘラケズリ	553	438
		M	ロクロ後 再調整K・N	—	(8.4)	[1.5]		523	439
		M		—	(8.2)	[1.7]		572	440
		M		—	(6.1)	[2.0]		542	441

古 館 II 遺 跡

表19

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺 傳 名 地 区 名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
131—442	C 18	土・師器	内黒の杯		Q ₂ Ⅱ層 Q ₄ Ⅱ層			M K
443	F 16	々	内黒の杯	ⅡC	Q ₃ Ⅱ層			RN
444	E 17	々	台付杯		Q ₄ Ⅱ層			RN
445	F 14	々	内黒の杯	ⅡC	Q ₄ Ⅱ層			RN
446	F 17	々	杯		Q ₃ Ⅱ層			K RN
132—447	F 16	々	杯		Q ₄ Ⅱ層	RN	RN	RN
448	F 19	々	杯		Q ₁ Ⅱ層			RN
449	E 16	融熔須恵器	杯		Q ₁ Ⅱ層			RN
450	B 19	々	杯		Q ₁ Q ₂ Q ₄ Ⅱ層			RN
451	E 19	々	杯		Q ₃ Ⅱ層			RN
452	G 20	々	杯		Q ₃ Ⅱ層		K	
453	F 14	土・師器	高 杯	I A	Q ₁ Ⅱ層			脚部 K
454	E 18	々	丹塗の高杯	I A—b	Q ₃ Ⅱ層			脚部 N
455	B 19	々	甕	I A—b	Q ₃ Ⅱ層	YN		
456	々	々	甕	I A—a	Q ₃ Ⅱ層	YN		
457	々	々	甕	I A—C	Q ₃ Ⅱ層	YN		
133—458	D 23	々	甕	I B—a ₁	Q ₂ Ⅱ層	YN	H	
459	B 18	々	甕	I D—a	I層	YN	H	H
460	々	々	甕	I D—a	Ⅱ層	H YN	H	H
461	D 17	々	甕	I B—c	Q ₁ Ⅱ層	YN		
462	E 19	々	甕	I C—a ₁	Q ₂ Q ₃ Ⅱ層	YN	H M	
134—463	F 18	々	甕	I D—b	Q ₂ Ⅱ層	YN	K N	
464	E 17	々	甕		Q ₂ Ⅱ層		K	
465	B 18	々	甕	I E—b	Ⅱ層	N YN	N	H N
466	D 10	々	甕	I F—c ₁	I層		M	N
467	F 16	々	甕	I E—c	Q ₄ 埋土Ⅰ層	YN	N	
468	E 19	々	甕	I F—c ₁	Ⅱ層	YN H	N	
135—469	F 18	々	甕		Q ₂ Ⅱ層	YN		

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
		M		—	5.5	[2.4]		567	77—442
		M	回転糸切痕	—	(5.7)	[1.7]		308	443
	M	M		—	(6.2)	[2.1]		519	444
		RN		—	5.5	[1.1]	内面炭化物付着	539	445
		M	回転糸切痕 再調整K(一部)	—	(5.6)	[2.2]		108	446
	M	M		(15.0)	—	[5.0]		104	447
		M	回転糸切痕	—	(6.2)	[1.3]		560	448
		RN	回転糸切痕	—	5.3	[2.1]		526	449
		RN	回転糸切痕	—	(7.2)	[2.6]		503	450
		RN	回転糸切痕	—	5.8	[1.5]		532	451
				—	—	—	上部に沈線あり	571	452
	環部 M	胴部 K		—	—	[4.6]	脚下半分に2段の有段	38	453
		胴部 N・H		—	(7.0)	[4.9]	内面に輪積痕あり	254	454
YN				—	—	—	肩部に有段、沈線文あり	505	78—455
				—	—	—	沈線文あり	504	456
YN				—	—	—	山形沈線文あり	510	457
YN	H			23.8	—	[25.0]	口縁部に2段にわたり有段 輪積痕あり	52	458
YN H	H	N		19.8	—	[26.8]	肩部有段 内外面輪積痕あり	30	459
YN H	H	H		21.6	7.6	30.0	肩部有段	2	460
YN				(15.4)	—	[5.0]	口縁部中心に有段	573	461
H YN				(15.0)	—	[12.0]	肩部に沈線	132	462
YN	N			(17.4)	—	[5.0]	肩部有段	149	79—463
YN	N			—	—	[12.0]		148	464
H YN	H	H		22.5	9.1	34.1		1	465
	N	N		(19.0)	—	[7.4]		152	466
YN	N			(14.0)	—	[8.4]		36	467
N	H			(19.9)	—	[6.8]		538	468
YN				(24.0)	—	[4.0]	輪積痕あり	127	469

古 館 II 遺 跡

表20

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
135—470	C 13	土 師 器	甕		Q ₁ I層	YN	H	
471	F 18	◇	甕		Q ₂ II層	N YN		
472	F 16	◇	甕		Q ₂ 埋土II層	YN N		
473	E 19	◇	甕		Q ₂ II層		H M	M
474	F 18	◇	甕		Q ₂ II層	YN	H M	
475	D 10	◇	甕		II層 焼土遺構			M N
476	E 07	◇	甕		E06、R07 Q ₂ Q ₃ I層			H M
477	E 17	◇	甕		Q ₂ II層			M
138—478	E 19	◇	内 黒 の 甕		Q ₂ II層	M		
479	E 17	◇	壺		Q ₂ II層			H N
480	E 17	◇	甕		Q ₂ II層			N
481	F 18	◇	壺		Q ₂ II層			N K
482	E 17	◇	壺		Q ₂ II層			K
483	A 21	◇	壺		Q ₂ I層			K M
484	B 18	◇	甕		II層			H
485	D 23	◇	甕		Q ₂ II層			N H
486	F 05	◇	甕		Q ₂ II層			K N
487	B 18	◇	甕		Q ₂ I層			H
488	E 16	◇	壺		Q ₂ II層			H K
489	F 18	◇	甕		Q ₂ II層			K
490	D 19	◇	甕		Q ₂ II層			N
491	F 18	◇	甕		Q ₂ II層			H N
137—492	F 18	◇	甕		Q ₂ I層			R N K
493	F 17	◇	壺		Q ₂ II層	YN	H N	
494	F 18	◇	丹 塗 の 壺		Q ₁ II層	YN		
495	F 17	◇	丹 塗 の 壺		Q ₁ II層	YN	M N	
496	E 17	◇	丹 塗 の 壺		Q ₂ II層		M	
497	F 17	◇	丹 塗 の 壺		Q ₂ II層			H N

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内面調整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
YN	H			—	—	—	肩部有段	566	80—470
YN				(21.0)	—	[3.5]		554	471
YN				—	—	—		297	472
N	H N	H N		—	—	[16.9]		146	473
YN	N			—	—	—	肩部有段	561	474
		N		—	(17.8)	[12.6]	輪積痕	151	475
		N		—	5.8	[7.7]		580	476
		H	木 葉 痕	—	(8.0)	[8.8]		123	477
M				(21.0)	—	[3.9]	内面黒色処理	535	478
		H N		—	8.4	[4.5]		528	479
		N		—	7.6	[2.8]		525	480
		N		—	(10.7)	[5.5]		540	481
		M		—	11.2	[3.5]	内面黒色処理	537	482
		N		—	7.0	[2.7]	内面黒色処理	501	483
		N		—	7.3	[5.7]	輪積痕	58	484
		N		—	8.0	[1.8]		516	485
		H		—	7.6	[2.9]		568	486
		H N		—	6.0	[3.2]		509	487
		N		—	(6.1)	[1.9]		520	488
		N		—	6.4	[2.1]		549	489
		N	木 葉 痕	—	8.0	[3.0]		512	490
			木 葉 痕	—	8.0	[2.5]		549	491
		RN	回転糸切痕	—	(7.0)	[2.7]		556	492
YN	N H			(19.7)	—	[9.5]	口縁中心部に沈線、輪積痕	112	81—493
YN				(20.6)	—	[6.0]		546	494
YN	K N			(14.5)	—	[9.0]	肩部に稜線	116	495
	H K			—	—	[3.9]	肩部有段 輪積痕	139	496
		N		—	9.2	[3.1]		552	497

古 館 II 遺 跡

表21

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
137—498	E 19	土 師 器	丹塗の壺		Q ₁ Ⅱ層			M
499	E 17	◇	丹塗の壺		Q ₂ Ⅱ層	YN		
500	A 07	◇	丹塗の壺		Ⅱ層	M YN		
501	F 17	◇	丹塗の壺		Q ₂ Ⅰ層			N H K
138—502	F 16	◇	釜?		Q ₁ Ⅰ層	YN	N	K
503	F 18	◇	鉢		Q ₁ Ⅱ層			M
504	D 10	◇	片 口		Ⅰ層	N		
505	B 18	◇	(高杯)?		Q ₁ Ⅱ層			
506	F 17	須恵器	杯		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
507	F 18	◇	杯		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
508	◇	◇	杯		Q ₁ Ⅱ層	RN	RN	RN
509	E 19	◇	杯		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	RN
510	G 18	◇	杯		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
511	F 19	◇	杯	B—b	Q ₁ Ⅱ層			RN K
512	F 18	◇	杯	B—c	Q ₁ Ⅱ層			RN
513	F 18	◇	杯	B—c	Q ₂ Ⅱ層			RN
514	E 18	◇	杯	B—c	粗掘			RN
515	F 07	◇	杯	A	Q ₂ Ⅱ層			RN
139—516	E 17	◇	杯	B—c	Q ₁ Ⅱ層			RN
517	E 18	◇	杯		Q ₂			RN
518	C 17	◇	壺?		Q ₂ Ⅱ層	RN	RN	
519	F 15	◇	壺		Q ₁ Ⅰ層		RN	
520	B 19	◇	壺		Q ₂ Ⅱ層	RN		
521	E 16	◇	壺		Q ₁ 粗掘			RN
522	F 08	◇	壺		Q ₁ Ⅰ層		RN	
523	F 14	◇	壺		Q ₁ Ⅱ層			RN
524	F 18	◇	高台付杯		Ⅱ層			RN K

遺 物 一 覧 表

ナデ・Nーナデ・Kーハラケズリ・Mーハラミガキ・RNーロクロナデ・Tータタキメ・Hーハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
		K N		—	—	—		521	81—498
K N YN				—	—	—	輪積痕あり	530	499
M				—	—	—	内外面丹塗	361	500
		M	K	—	(10.6)	[1.2]	内面黒色処理	558	501
YN	H	H		9.6	6.0	7.1		63	502
	M	M		—	3.4	[3.0]	内面黒色処理、内面に付着物あり	555	503
N M				—	—	—		570	504
		N H		—	—	[3.0]		508	505
RN	RN			(15.1)	—	[3.7]		須45	506
				(14.3)	—	[3.5]		須49	507
RN	RN	RN		(13.2)	—	[4.7]	内面に付着物あり	須43	508
RN	RN	RN		(12.4)	—	[3.7]		須52	509
RN				(11.9)	—	[2.2]		須55	510
		RN		—	(6.0)	[1.4]		須47	511
		RN		—	6.2	[2.2]		557	512
		RN		—	(8.4)	[2.2]		須53	513
		RN		—	(6.9)	[2.2]		須54	514
		RN	回転ヘラ切痕	—	6.6	[0.5]		須40	515
		RN	回転糸切痕	—	(7.0)	[1.2]		518	516
		RN		—	—	—		須46	517
RN	RN			(17.0)	—	[3.9]		須59	82—518
	RN			—	—	[2.7]		須48	519
RN				—	—	—		須61	520
		RN		—	—	—		須44	521
	RN			—	—	—		須60	522
		RN	回転糸切痕	—	6.0	[2.8]		須62	523
		K		—	—	[2.8]		須63	524

古 館 II 遺 跡

表22

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出土地点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
139—525	F15	須 恵 器	壺		Q ₂ Ⅱ層			K
526	F07	◇	甕		Q ₂ Ⅱ層			T
527	B18	◇	甕		Q ₂ Ⅱ層			T
140—528	E18	◇	壺		Q ₂ Ⅱ層			
529	E17	◇	甕		Q ₂ Ⅱ層			T
530	D18	◇	甕		Q ₂ Ⅱ層		T	
531	B18	◇	甕		Q ₂ Ⅰ層			T
532	E18	◇	甕		Q ₂ Ⅱ層			T
533	B24	◇	壺		Q ₂ Ⅰ層			T
534	F19	陶 磁 器	鉢		Q ₂ Ⅰ層		RN	
535								
536	E21	陶 磁 器	皿		Q ₂ Ⅱ層			
537	F19	◇	脚 付 碗		I 層			
538	F19	◇	高 台 付 皿		Q ₂ Ⅰ層			
539	C19	◇	碗		Q ₂ Ⅱ層			
540	F19	◇	高 付 皿		Q ₂ Ⅰ層			
541	Z20	◇	切 り 高 付 皿	白 磁	Q ₂ Ⅱ層			
141—542	B18	土 製 品	羽 口		Ⅱ層			
543	B18	◇	羽 口		Q ₂ Ⅱ層			
544	C19	◇	羽 口		Q ₂ Ⅱ層			
545	C04	鉄 製 品	指 輪		Q ₂ Ⅰ層			
546	E18	◇	釘		Q ₂ Ⅱ層			
547	B17	◇	◇		Q ₂ Ⅱ層			
548	D22	鉄 製 品			Q ₂ Ⅱ層			
549	B18	◇			Q ₂ Ⅱ層			
550	B23	青 銅 製 品	管		Q ₂ Ⅰ層			
551	C04	金 属 製 品	煙 管		Q ₂ Ⅱ層			
142—552	F16	古 銭			Q ₂ Ⅱ層			

遺 物 一 覧 表

ナデ・N—ナデ・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナデ・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
				—	(8.0)	[1.9]		須56	82—525
		T		—	—	—		須50	526
		T		—	—	—		須 2	527
				—	—	—		須42	528
		T		—	—	—		須57	529
	T			—	—	—		須64	530
				—	—	—		須58	531
				—	—	—		須51	532
				—	—	—		須65	533
	RN	RN		11.6	7.0	7.5		陶12	83—534
							欠 番		
				—	(6.0)	[0.8]	釉	陶 5	カラー 50—536
				(14.0)	5.1	2.9	内面に花紋様有り	陶 9	83—537
				—	7.0	[9.5]		陶 8	538
				—	(8.0)	[6.4]	釉	陶11	539
			上 底 風	13.5	4.6	3.2	釉	陶10	540
			回転糸切痕	—	4.0	[1.1]	釉	陶 4	カラー 50—541
							土製品計測表参照	土26	83—542
							土製品計測表参照	土24	543
							土製品計測表参照	土25	544
							鉄製品計測表参照	鉄11	84—545
							鉄製品計測表参照	鉄 4	546
							鉄製品計測表参照	鉄 9	547
				—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄17	84—548
				—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄19	549
				—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄 2	550
				—	—	—	鉄製品計測表参照	鉄18	551
				—	—	—	古銭計測表参照	C 6	552

古 館 II 遺 跡

表23

YN—ヨコナデ・HN—ヘラ

図版番号	遺構名 地区名	種 類	器 種	分類記号	出 土 地 点	外 面 調 整		
						口縁部	体部 上半	体部 下半
142—553	G 11	古 銭			表採			
554	G 25	＊			表採			
555	D 19	＊			Q ₃ I 層			
556	G 11	＊			II 層			
557	E 21	＊			Q ₁ II 層			
558	G 18	銅 片			Q ₂ II 層			
559	E 08	石 製 品			Q ₃ II 層			
560	D 16	銅 片			Q ₃ II 層			
561	D 19	＊			Q ₄ II 層			
562	E 07	石 器			Q ₁ II 層			
563	E 18	銅 片			II 層			
564	D 13	石 器	砥 石		Q ₂ II 層			
565	B 04	＊	砥 石		Q ₄ II 層			
566	E 15	＊	砥 石		Q ₂ II 層			
143—567	B 17	＊	砥 石		粗掘			
568	F 19	＊	砥 石		Q ₁ I 層			
569	B 08	＊	砥 石		Q ₂ II 層			
570	D 19	磨 石			Q ₂ II 層			
571	E 18	＊			粗掘			
572	C 08	＊			II 層			

遺 物 一 覧 表

ナド・N—ナド・K—ヘラケズリ・M—ヘラミガキ・RN—ロクロナド・T—タタキメ・H—ハケメ

内 面 調 整			底 部	法 量(cm)			備 考	登録 番号	写真図版 番 号
口縁部	体部 上半	体部 下半		口径	底径	器高			
				—	—	—	古鏡計測表参照	C 7	553
				—	—	—	古鏡計測表参照	C 3	554
				—	—	—	古鏡計測表参照	C 1	555
				—	—	—	古鏡計測表参照	C 4	556
				—	—	—	古鏡計測表参照	C 2	557
				—	—	—	石器計測表参照	石27	558
				—	—	—	石器計測表参照	石39	559
				—	—	—	石器計測表参照	石25	560
				—	—	—	石器計測表参照	石29	561
				—	—	—	石器計測表参照	石38	85-562
				—	—	—	石器計測表参照	石28	563
				—	—	—	石器計測表参照	石 3	564
				—	—	—	石器計測表参照	石 2	565
				—	—	—	石器計測表参照	石22	566
				—	—	—	石器計測表参照	石 7	567
				—	—	—	石器計測表参照	石30	568
				—	—	—	石器計測表参照	石 5	569
				—	—	—	石器計測表参照	石40	570
				—	—	—	石器計測表参照	石14	571
				—	—	—	石器計測表参照	石33	572

古館Ⅱ遺跡土製品、鉄製品計測表

表24

種類	図版番号	器種	出土地点	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考	登録 番号	写真 番号	図版 番号
土製品	108-215	紡錘車	E07(住)Q ₄	床直	5.3	5.4	2.15		22	64-215	
◇	116-279	勾玉	E18(住)	床直 カマド	2.5	1.1	1.1		23	69-279	
◇	141-542	羽口	B18	Ⅱ層	4.5	3.9	2.0		26	83-542	
◇	141-543	◇	B18Q ₁	Ⅱ層	6.8	8.0	3.8		24	83-543	
◇	141-544	◇	C19Q ₄	Ⅱ層	9.5	8.7	4.1		25	83-544	
鉄製品	95-116		D16(住)	埋土	3.8	2.1	1.1		14	57-116	
◇	100-155	刀子	D17-1(住)	床面	17.0	2.6	1.2		20	60-155	
◇	101-158	環状鉄品	D17-1(住)Q ₄	埋土中部	5.5	3.9	1.1		16	61-158	
◇	108-216	刀子	E07(住)	床面	10.9	2.0	0.5		21	64-216	
◇	117-289		F13-2(住)Q ₂	床面	7.0	1.5	1.0		8	69-289	
◇	127-392		F13-1(住)Q ₂	埋土	4.1	4.5	0.9		13	74-392	
◇	127-393	管	F13-1(住)	床面	10.2	1.2	0.2		1	74-393	
◇	127-396	釘	A14(住)Q ₁	埋土下部	5.7	0.9	1.0		6	75-396	
◇	128-397	釘	A15(住)	埋土下部	6.6	1.1	0.8		5	75-397	
◇	128-398		A15(住)Q ₁	埋土	8.6	0.7	0.4		15	75-398	
◇	128-402		B15-2柱穴	埋土下部	3.2	4.7	1.2		10	75-402	
◇	128-403		E20-6柱穴	底部	4.5	0.8	0.7		3	75-403	
◇	128-404		D20-6柱穴	埋土上部	5.1	1.1	0.9		12	75-404	
◇	128-405		D20-6柱穴	埋土中部	3.9	1.3	0.6		7	75-405	
◇	141-545	指輪	C04Q ₂	I層	2.6	2.5	0.25		11	84-545	
◇	141-546	釘	E18Q ₂	Ⅱ層	4.8	0.7	0.3		4	84-546	
◇	141-547		B17Q ₂	Ⅱ層	4.3	3.0	0.7		9	84-547	
◇	141-548		D22Q ₁	Ⅱ層	8.2	6.7	0.2		17	84-548	
◇	141-549		B18Q ₄	Ⅱ層	11.9	2.4	1.5		19	84-549	
◇	141-550	管	B23Q ₂	I層	17.9	2.0	0.2		2	84-550	
◇	141-551	煙管	C04Q ₁	Ⅱ層	10.4	1.1	1.1		18	84-551	

古館Ⅱ遺跡木製品一覧表

表25

図版番号	遺構名	出土地点	樹種	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	最大長 (cm)	登録 番号	写真図版 番号	備 考
144-602	C17井戸跡	埋 土	タリ	4.1	1.1	10.2	14	86-602	
603	〃	〃	〃	4.2	0.8	11.5	11	603	
604	〃	〃	〃	4.0	2.0	17.5	7	604	
605	〃	〃	〃	4.6	1.5	15.9	3	605	
606	〃	〃	〃	3.7	1.2	16.2	2	606	
607	〃	〃	〃	7.1	1.6	16.8	13	607	
145-608	〃	〃	〃	4.8	3.7	6.8	15	608	
609	〃	〃	〃	5.2	2.5	9.3	12	609	
610	〃	〃	〃	7.1	4.9	30.2	20	87-610	
611	〃	〃	〃	4.0	2.7	9.9	10	611	
612	〃	〃	〃	4.4	2.9	11.2	1	612	
146-613	〃	〃	〃	2.8	2.5	15.0	4	613	
614	〃	〃	〃	8.2	3.8	22.8	16	614	
615	〃	〃	〃	6.9	3.6	16.6	6	615	
616	〃	〃	〃	7.1	3.4	23.3	18	88-616	
147-617	〃	〃	〃	7.5	6.4	15.7	9	617	
618	〃	〃	〃	5.2	4.6	26.4	17	618	
619	〃	〃	〃	6.9	5.5	28.1	21	619	
620	〃	〃	〃	5.3	2.5	20.6	5	89-620	
148-621	〃	〃	〃	6.8	5.0	11.9	19	621	
622	〃	〃	〃	5.5	3.8	14.3	8	622	
623	〃	〃	〃	15.0	10.7	26.0	22	623	

古 館 II 遺 跡 石

表26

図版番号	出土地点	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
88-62	C05(住)Q ₃	埋土下部	フレーク	2.8	2.3	0.4	1.9
93-98	D07(住)Q ₃	埋土(下)	凹石	16.5	7.7	4.5	470.0
99-143	D16-2(住)	埋土下部	不定形石器	4.8	3.0	1.6	16.75
101-159	D17-1(住)Q ₁	床面	盤状石器	2.3	2.4	0.6	3.45
101-160	D17-1(住)Q ₁	床面	磨石	3.6	3.3	1.8	44.0
102-170	D17-2(住)Q ₂	埋土(石群の上)	砥石	15.2	4.0	3.7	210.0
103-171	D17-2(住)Q ₂	埋土下部	◇	13.6	6.3	4.3	47.0
103-175	D17-3(住)	床直	コア	4.6	4.3	3.0	70.0
104-176	D17-3(住)	床面	砥石	16.9	6.1	6.6	700.0
108-217	E07(住)	床	台石	15.4	15.2	4.7	1600.0
108-218	E07(住)Q ₂	床	◇	24.4	16.7	4.1	1860.0
108-219	E07(住)Q ₂	床	◇	18.4	16.5	4.3	940.0
109-220	E07(住)Q ₂	床面	盤状石製品	6.7	5.2	1.3	56.0
109-221	E07(住)Q ₂	床面	球状石製品	2.7	2.2	1.6	7.1
109-222	E07(住)	床面	球状石製品	2.9	2.8	2.4	11.35
112-238	E16-1(住)Q ₁	埋土	砥石	11.8	3.4	5.6	310.0
112-239	E16-1(住)Q ₂	床面	磨石	11.6	6.9	5.2	540.0
113-250	E16-2(住)Q ₁	埋土上部	砥石	5.7	4.8	2.1	7.0
117-283	E21(住) Q ₂ -Q ₃ ベクト	床面直上	不定形石器	2.9	5.7	0.5	2.8
125-373	F16(住)Q ₂	埋土中部		4.5	4.2	1.4	4.6
125-374	F16(住)Q ₂	床面		3.8	2.9	1.2	21.0
125-375	F16(住)Q ₂	埋土中部		6.9	5.8	1.6	44.95
127-394	F13-1(住)Q ₂	埋土上部		4.1	3.6	1.3	20.9
128-399	B08(住)	埋土中部	不定形石器	3.9	3.7	1.7	24.7
128-406	C17井戸	埋土最下部	砥石	8.8	2.5	1.9	47.4
142-558	G18Q ₁	Ⅱ層		2.6	2.2	0.6	2.7

器 計 測 表 (1)

石 質	備 考	登録 番号	写真図版 番号
黒曜石	雫石、小赤沢(?)	37	54—62
白色細粒凝灰岩	新第三系、中新統	9	56—98
黒曜石	雫石、小赤沢(?)	26	60—143
白色細粒凝灰岩	新第三系、中新統	20	61—159
細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)	新第三系、中新統	19	61—160
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	36	61—170
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	42	61—171
黒曜石	雫石、小赤沢(?)	34	62—175
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	1	62—176
輝石安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	12	64—217
輝石安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	11	64—218
輝石安山岩	岩手火山周辺、第四系	10	64—219
輝石安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	15	65—220
細砂質凝灰岩(硬質凝灰岩)	新第三系、中新統	35	65—221
白色細粒凝灰岩	新第三系、中新統	32	65—222
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	4	66—238
輝安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	13	66—239
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	41	67—250
チャート	北上山地、古生界	43	69—283
輝安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	17	73—373
チャート	北上山地、古生界	18	73—374
白色細粒凝灰岩	新第三系、中新統	16	73—375
細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)	新第三系、中新統	21	74—394
黒曜石	雫石、小赤沢(?)	31	75—399
白色細粒凝灰岩	新第三系、中新統	6	75—406
チャート	北上山地、古生界	27	84—558

古 館 II 遺 跡 石 器 計

表27

図版番号	出土地点	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
142-559	E08Q ₃	Ⅱ層	石器	2.2	1.4	0.3	1.2
560	D16Q ₃	Ⅱ層	剥片	4.4	2.3	1.1	9.1
561	D19Q ₄	Ⅱ層	◇	6.2	3.6	1.2	23.6
562	E07Q ₁	Ⅱ層	石器	5.3	1.6	0.6	7.9
563	E18	Ⅱ層	剥片	6.6	8.4	2.0	10.0
564	D13Q ₂	Ⅱ層	砥石	6.0	2.0	1.0	12.35
565	B04Q ₄	Ⅱ層	◇	4.6	2.6	1.6	27.5
566	E15Q ₂	Ⅱ層	◇	5.1	3.5	2.2	31.4
567	F19Q ₄	I層	◇	8.6	4.8	4.0	24.0
568	B17	粗掘	◇	10.1	3.2	2.2	56.5
569	B08Q ₂	Ⅱ層	◇	11.5	5.1	4.2	280.0
570	D19Q ₂	Ⅱ層	磨石	9.9	4.7	1.7	13.0
571	E18	粗掘	◇	8.4	4.6	4.3	23.0
572	C08	Ⅱ層	◇	12.5	9.5	6.6	1120.0

貨幣計測表

図版番号	出土地点	層位	銭名	測定値 (cm)	
				径	孔径
127-395	A14住Q ₁	埋土(下)	寛永通寶	2.5×2.5	0.6×0.6 (方形)
142-552	E16Q ₁	Ⅱ層	開元通寶	2.4×2.4	0.6×0.7 (方形)
◇-553	G11区	表採	◇	2.5×2.5	0.7×0.7 (方形)
◇-554	G25	表採	紹聖元宝	2.4×2.4	0.6×0.6 (方形)
◇-555	D19Q ₃	I層	文久永寶	2.6×2.6	0.7×0.7 (方形)
◇-556	G11	表採	寛永通寶	2.5×2.5	0.6×0.6 (方形)
◇-557	E21Q ₁	埋土	不明	2.3×2.3	0.6×0.5 (方形)
—	B17埋土	—	◇	2.1×2.2	0.7×0.5 (方形)

測 表 (2) 貨 幣 計 測 表

石 質	備 考	登録 番号	写真図版 番 号
凝灰質硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	39	84-551
凝灰質硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	25	◇-560
凝灰質硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	29	◇-561
凝灰質硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	38	85-562
粘板岩	北上山地、古生界	28	85-563
硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	3	◇-564
硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	2	◇-565
細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)	新第三系、中新統	22	◇-566
流紋岩質凝灰岩	北上山地、古生界	30	◇-567
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	7	◇-568
斜長石流紋岩	雫石西南部、新第三系、中新統	5	◇-569
輝石安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	40	◇-570
細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)	新第三系、中新統	14	◇-571
輝石安山岩	奥羽山地、新第三系、中新統	33	◇-572

重 量 (g)	備 考	登録 番号	写真図版 番 号
2.6	黄褐色砂利土	C 5	75-395
1.8		C 6	84-552
2.9		C 7	◇-553
3.0	古寛永(北宋)	C 3	◇-554
3.5		C 1	◇-555
3.1	古寛永	C 4	◇-556
1.8		C 2	◇-557
1.9	不掲載		

写 真 图 版

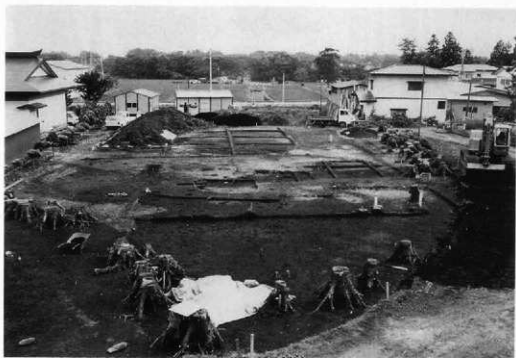


写真図版1 空中写真

遺跡上空の南から



調査前の現況（南から北側を臨む）



調査中（南側区域）

写真図版2 遺跡近景



精査・実測（7月）



粗掘り（4月）

写真図版3 作業風景(1)



作業風景 (10月)



F11区南北土層断面



F05区東西土層断面

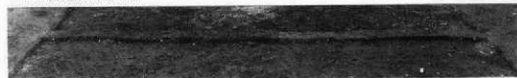
写真図版4 作業風景(2)・土層断面



A07住居跡（東から）



A21住居跡（西から）



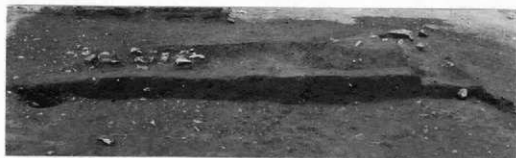
A21住居跡・埋土断面（南北）



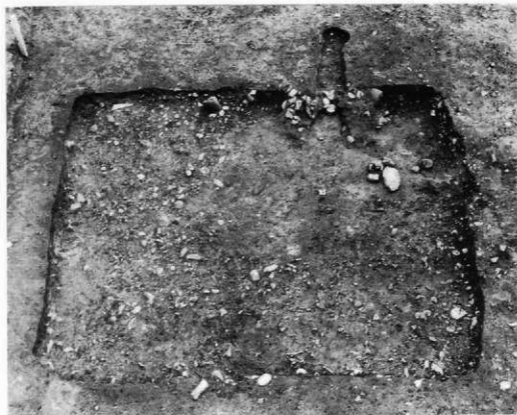
平面（南から）



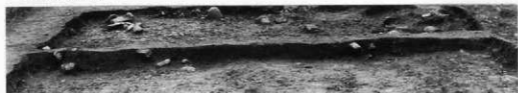
埋土断面（南北）



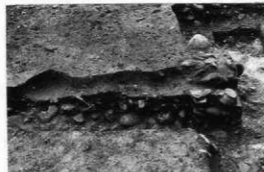
埋土断面（東西）



平面 (西から)



埋土断面 (南北)

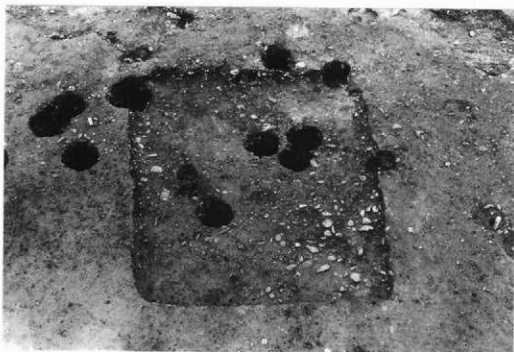


煙道部 (断面)



カマド (断面)

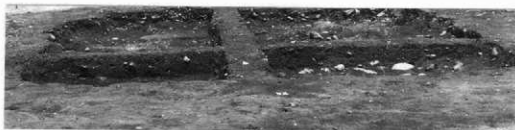
写真図版7 B13住居跡



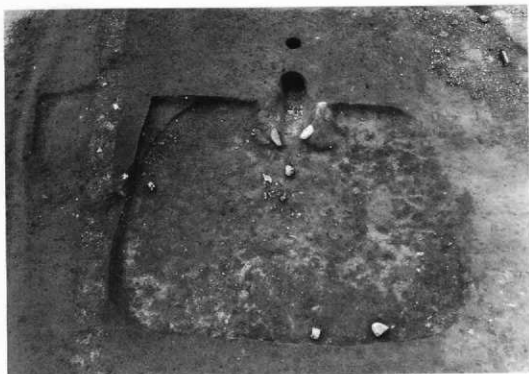
平面（南から）



埋土断面（南北）



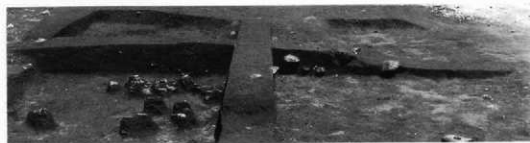
埋土断面（東西）



平面 (南から)



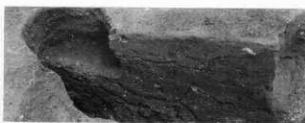
埋土断面 (南北)



埋土断面 (東西)



C05住居跡・カマド



C05住居跡・煙道部 (断面)



C05住居跡・カマド (断面)



C05住居跡・カマド (断面)



C17井戸跡・断面



C17住居跡・C17井戸跡 (西から)

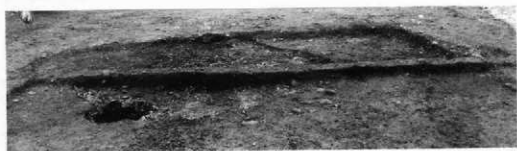


C17住居跡・埋土断面 (東西)

写真図版10 C05・C17住居跡・C17井戸跡



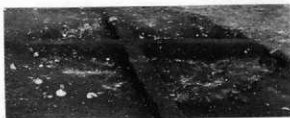
平面（南から）



C21住居跡・C22住居跡状遺構・断面（東西）

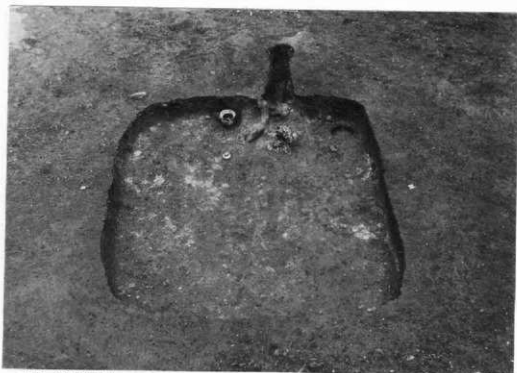


C21住居跡・遺物出土状況

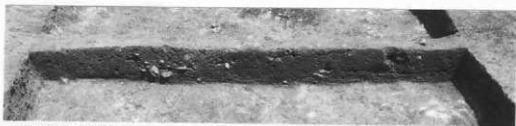


C22住居跡状遺構・断面（南北）

写真図版11 C21住居跡・C22住居跡状遺構



平面（南西から）



埋土断面（南北）



遺物出状状況

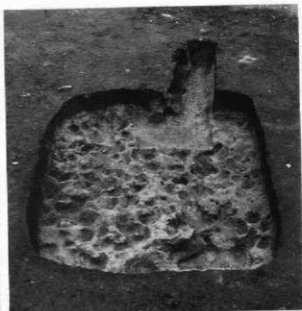


カマド

写真図版12 D07住居跡



D07住居跡・カマド(断面)



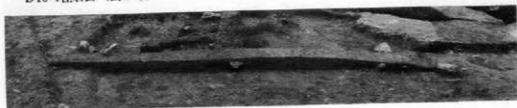
D07住居跡・掘り方



D07住居跡・カマド

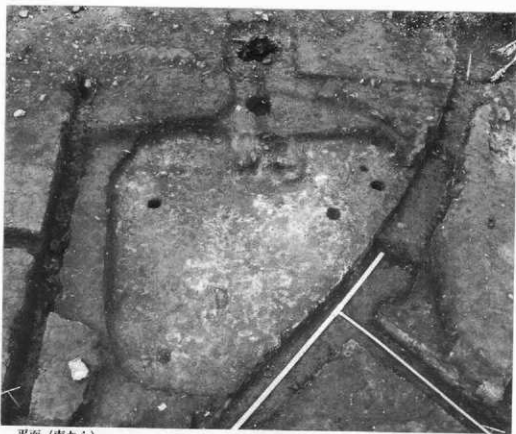


D16-1住居跡(西から)

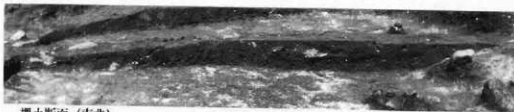


D16-1住居跡・埋土断面(南北)

写真図版13 D07・D16-1住居跡



平面（南から）



埋土断面（南北）



カマド



カマド（断面）

写真図版14 D16-2住居跡



D16-2住居跡・遺物出土状況



D16-2住居跡・掘り方



D16-2住居跡・遺物出土状況



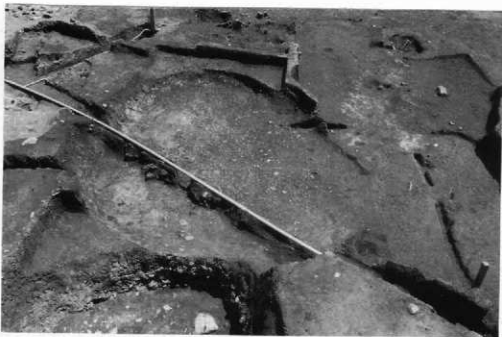
D16-2住居跡・遺物出土状況



D16-3住居跡（南西から）



D16-3住居跡・ヒット断面



D17-1・D17-3住居跡（西から）



D17-1住居跡・埋土断面（東西）



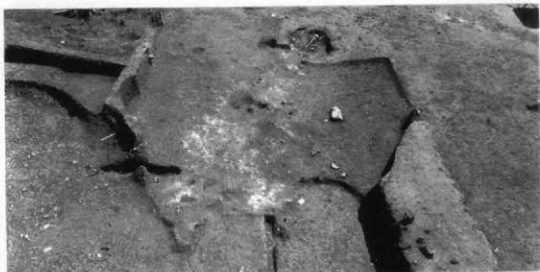
D17-1住居跡・埋土断面（南北）



D17-1住居跡・遺物出土状況



D17-4住居跡・遺物出土状況



D17-4住居跡（西から）



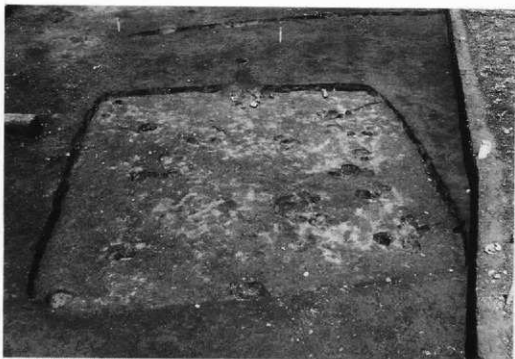
D17-4住居跡・埋土断面（東西）



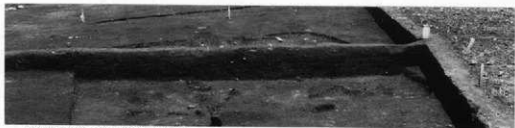
D22住居跡・遺物出土状況



D22住居跡・遺物出土状況



E07住居跡（南から）



E07住居跡・埋土断面（東西）

写真図版18 D22・E07住居跡



炭化物出土状況



カマド



カマド (断面)

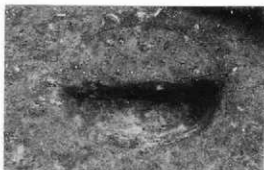


煙出し部 (断面)



煙道部 (断面)

写真図版19 E07住居跡(2)



ビット断面



ビット断面



柱穴断面



柱穴断面



柱穴断面



掘り方

写真図版20 E07住居跡(3)



E14住・F15-2住居跡（西から）



F15-2住居跡・カマド



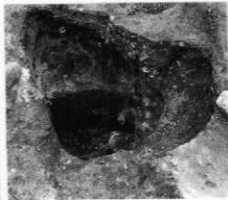
F15-2住居跡・カマド（断面）



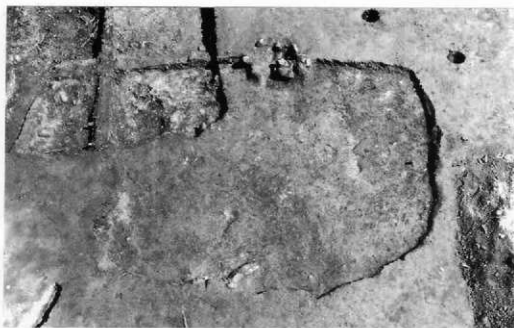
埋土断面（東西）



E14住居跡・ピット断面



F15-2住居跡・ピット断面



平面（南から）



カマド



カマド（断面）



カマド煙（断面）



振り方



平面（西から）



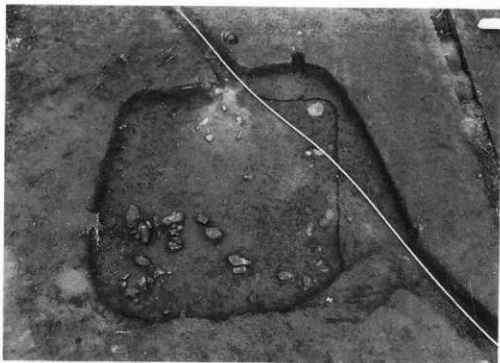
埋土断面（南北）



カマド



掘り方及びE15土坑



平面（南から）



埋土断面（南北）



カマド



カマド（断面）

写真図版24 E18住居跡



平面 (南から)



埋土断面 (南北)



埋土断面 (東西)



F 09-1住居跡 (西から)



F 09-1住居跡・埋土断面 (南北)



F 09-2住居跡 (西から)

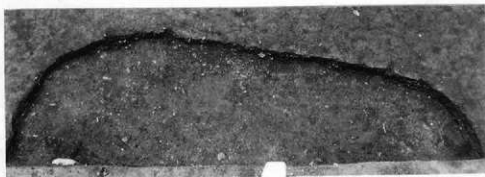
写真図版26 F 09-1・F 09-2住居跡



F13-2住居跡（西から）



F13-2住居跡・埋土断面（南北）



F15-1住居跡（東から）



F15-1住居跡・埋土断面（南北）

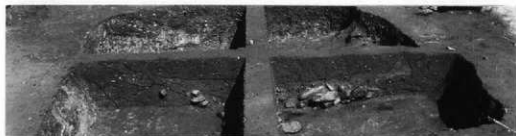
写真図版27 F13-2・F15-1住居跡



平面（北から）



埋土断面（東西）



埋土断面（南北）



カマド



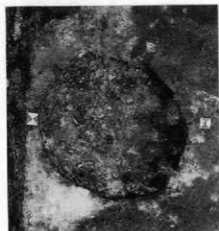
カマド



煙道部



カマド (断面)



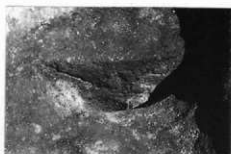
ビットP1



ビットP1断面



ビットP₃断面



ビットP₂断面



掘り方



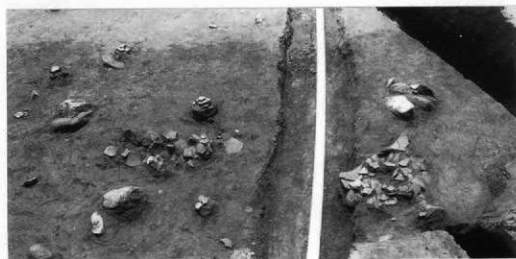
掘り方(断面)



F17住居跡（東から）



F17住居跡・埋土断面（南北）



B18区遺物出土状況

写真図版31 F17住居跡・B18区遺物出土状況



平面（東から）



埋土断面（南北）



柱穴断面



柱穴断面



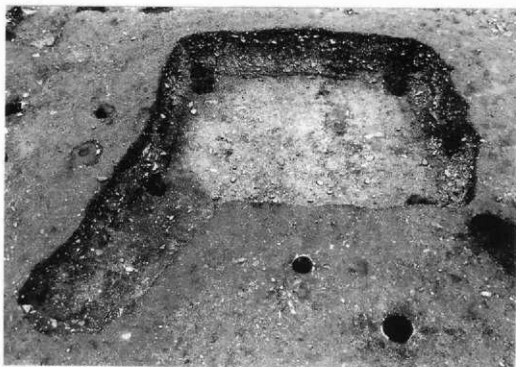
A06住居跡（東から）



A06住居跡・埋土断面（南北）



A08住居跡（東から）



平面 (掘り方 東から)



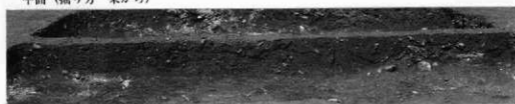
埋土断面 (南北)



埋土断面 (東西)



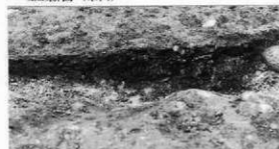
平面 (掘り方 東から)



埋土断面 (南北)



埋土断面 (東西)



灰だまり断面



柱穴断面



平面（東から）



埋土断面（南北）



平面 (東から)



埋土断面 (南北)



平面（南から）



埋土断面（東西）



平面（南から）



埋土断面（南北）



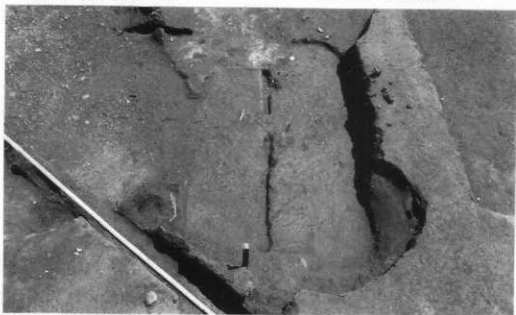
埋土断面（東西）



D13住居跡・柱穴P₆断面



D13住居跡・柱穴P₁断面



D17-2住居跡（西から）

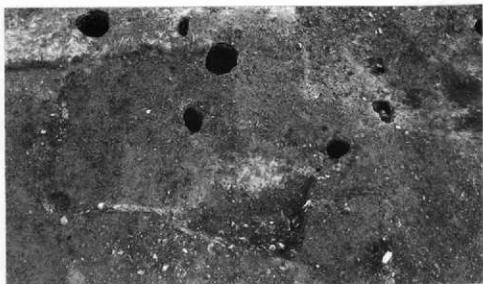


D17-2住居跡・埋土断面（東西）

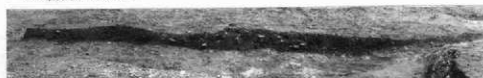


D17-2住居跡・埋土断面（南北）

写真図版40 D13・D17-2住居跡



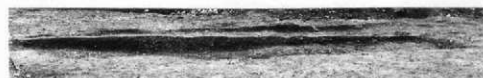
D21住居跡 (南から)



D21住居跡・埋土断面 (東西)

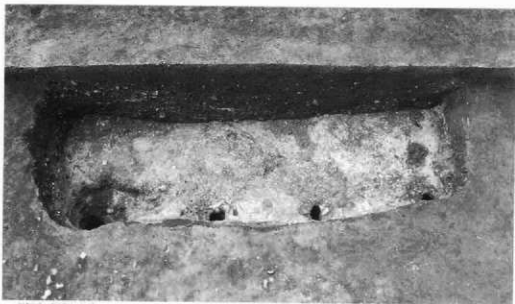


E25住居跡 (西から)

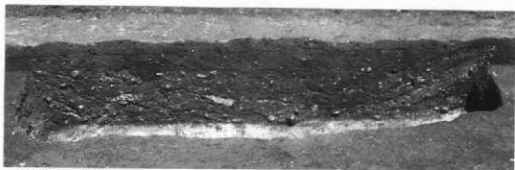


E25住居跡・埋土断面 (南北)

写真図版41 D21・E25住居跡



平面（西から）



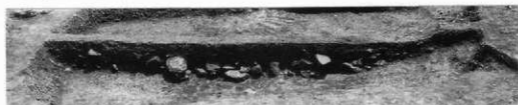
堀土断面（南北）



ビット断面



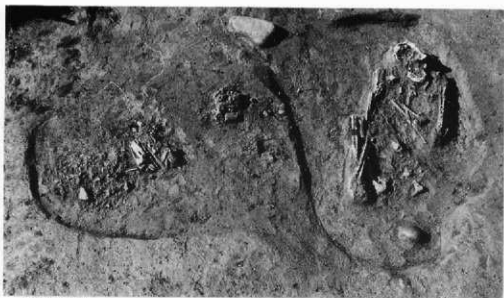
F21住居跡（西から）



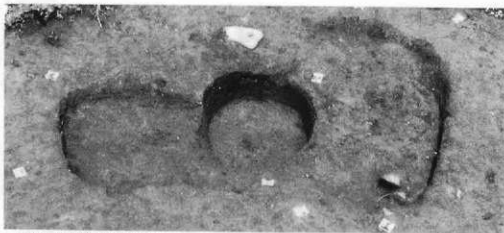
F21住居跡・埋土断面（南北）



D14住居跡状遺構（南から）



人骨出土状況



E18-1・2・3墓壇（南から）



E18-2・3墓壇・断面



E18-4墓墳 (南から)



E18-4墓墳・断面



B03土坑



B03土坑



F20土坑



F20土坑



F20土坑

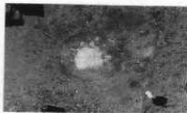


E15土坑

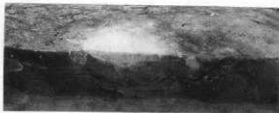
E18-4墓墳・土坑



D20建物跡 (南から)



E21焼土



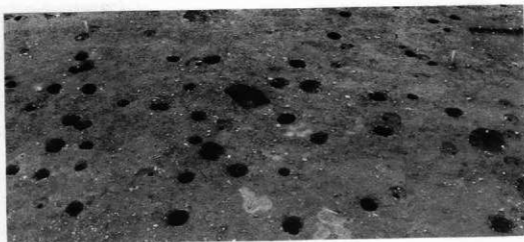
E21焼土 (断面)



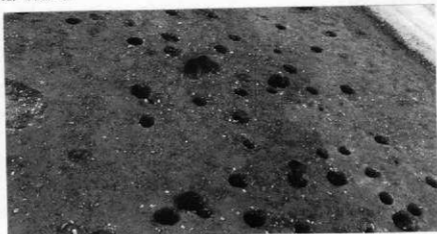
B09建物跡 (南西から)



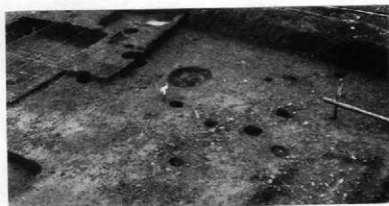
C10焼土 (断面)



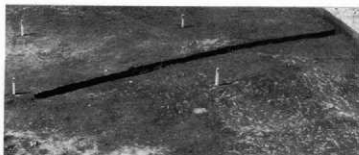
中央地区柱穴群（東から）



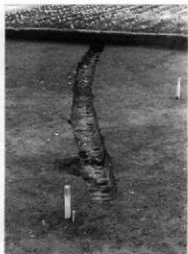
中央地区柱穴群（南から）



B07・08区柱穴群（東から）



E06溝跡 (南から)



E06溝跡 (西から)



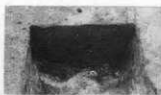
E06溝跡 (北から)



E06溝跡



E06溝跡・断面



E06溝跡 (断面)



B12溝跡・断面

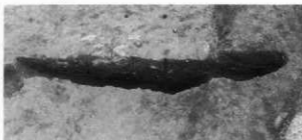


B12溝跡 (東から)

写真図版48 溝跡



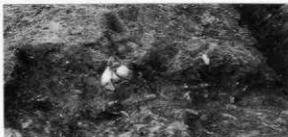
B17焼土遺構



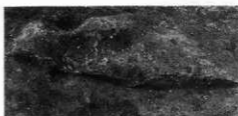
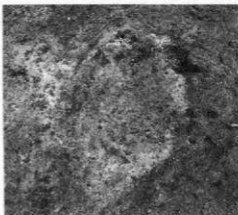
B19焼土遺構



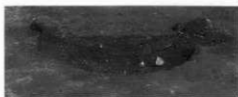
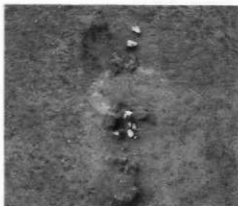
C10・D10焼土遺構



D10焼土遺構



C08焼土遺構



E18焼土遺構

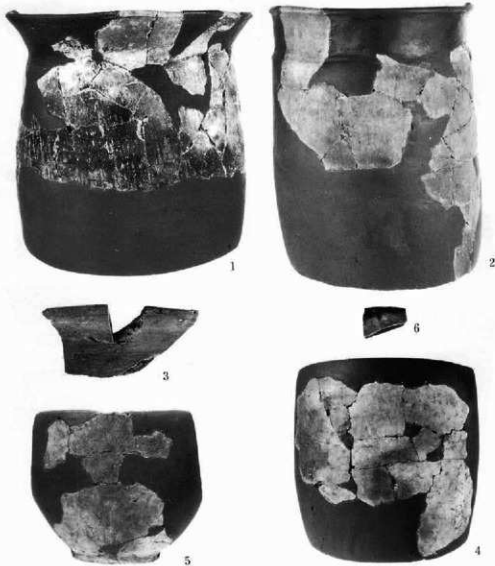
写真図版49 焼土遺構



C-21(住)床面

写真図版50

A07住居跡 (1~6)



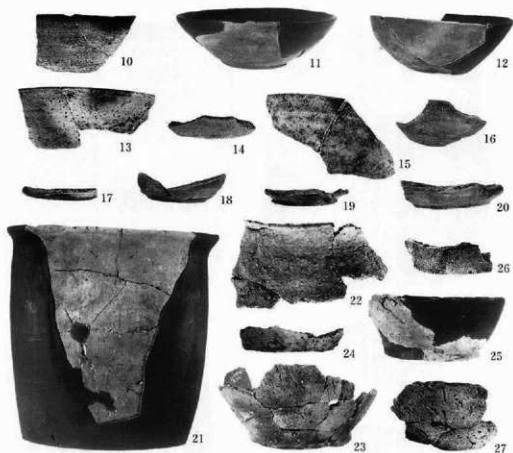
A21住居跡 (7~9)



縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版51

B13住居跡 (10~27)



B15住居跡 (28)

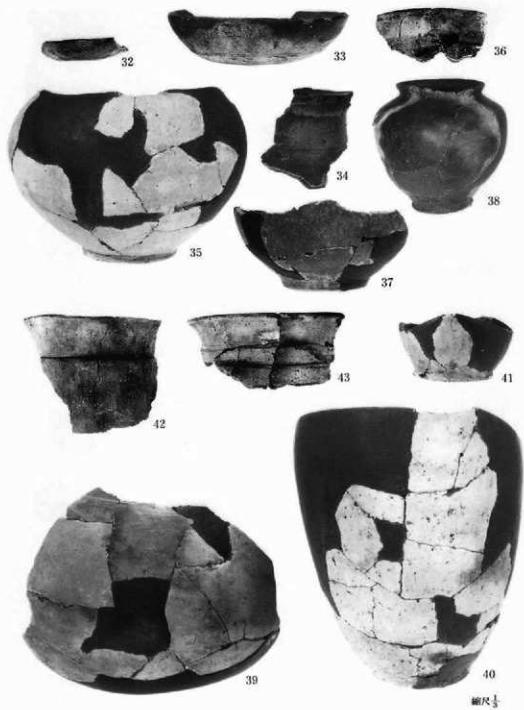


C05住居跡(1) (29~31)



写真図版52

C05住居跡(2) (32-43)



写真図版53

C05住居跡(3) (44~62) 52~56・61は実物大

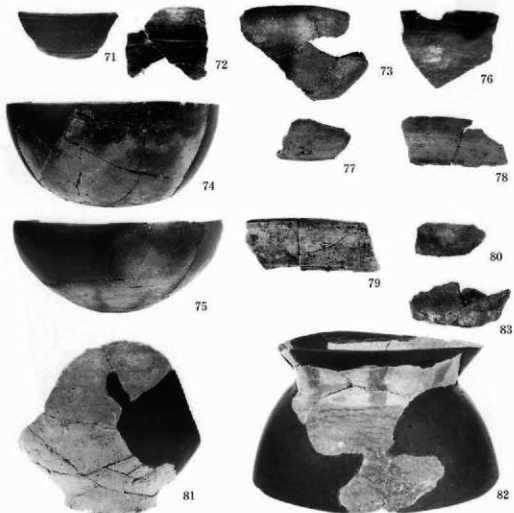


写真図版54

C17住居跡(2) (68-69)



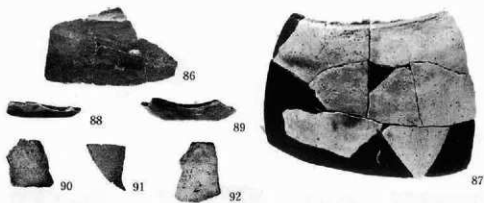
C21住居跡(1) (71-83) 84はカラー図版



縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版55

C21住居跡(2) (86~92)



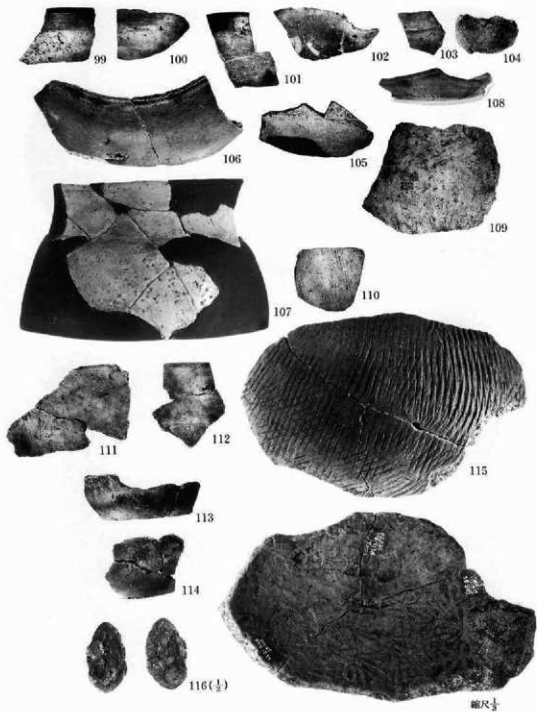
D07住居跡 (93~98)



写真図版56

縮尺 $\frac{1}{2}$

D16住居跡 (99-116)



写真図版57

D16-2住居跡(I) (117~125)



写真図版58

D16-2住居跡② (126~131)



126



127



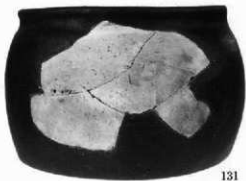
128



129



130

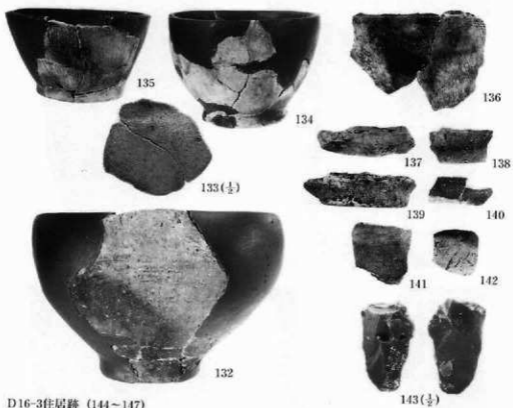


131

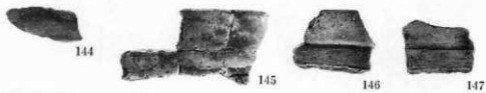
縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版59

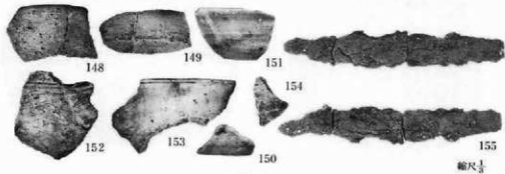
D16-2住居跡(3) (132~143)



D16-3住居跡 (144~147)

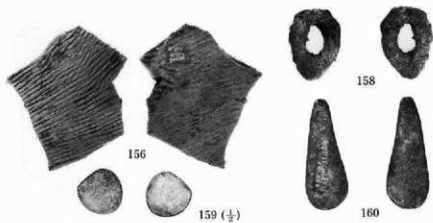


D17-1住居跡(i) (148~155)

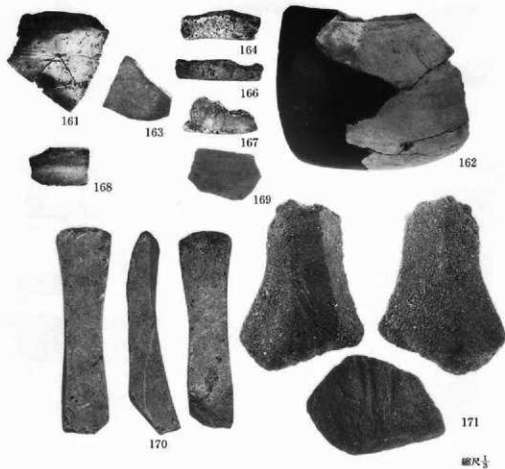


写真図版60

D17-1住居跡(2) (156-160) 157はカラー図版



D17-2住居跡 (161-171) 165はカラー図版



写真図版61

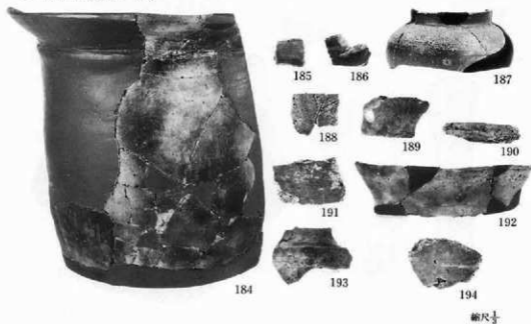
D17-3住居跡 (172~176)



D17-4住居跡 (177~183)



D22住居跡(D) (184~194)



D22住居跡 (195)



195

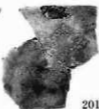
E07住居跡(1) (196~202)



196



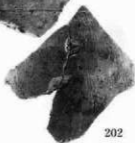
197



201



198



202



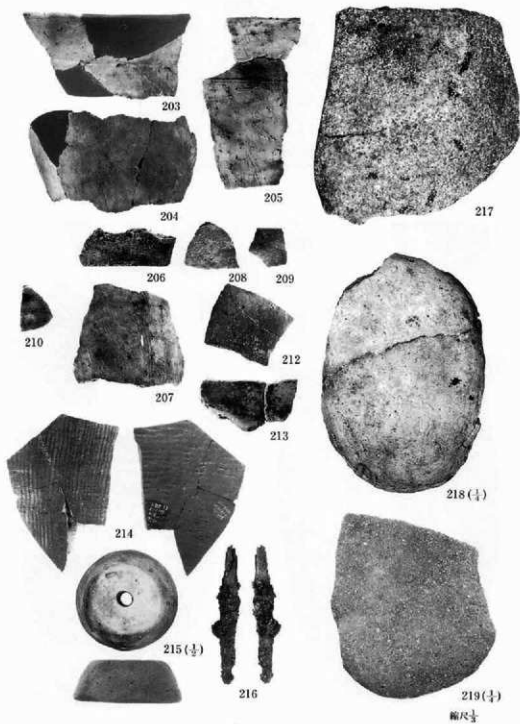
199



200
縮尺 $\frac{1}{2}$

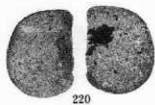
写真図版63

E 07住居跡(z) (203~219)



写真図版64

E07住居跡(3) (220~222)



F09-1住居跡 (223~226)

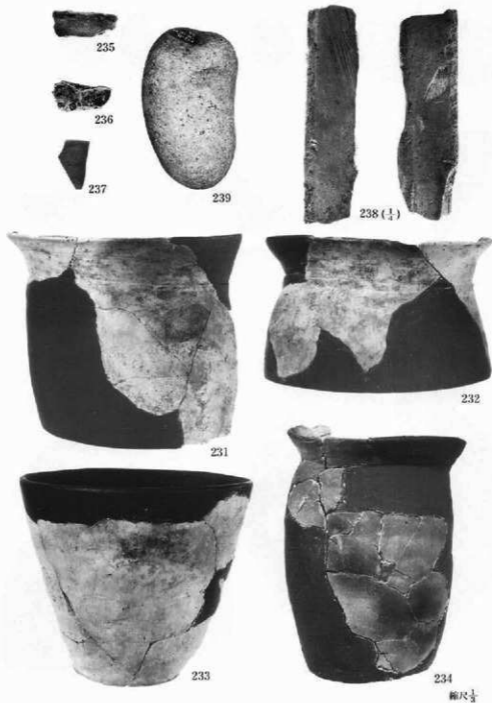


E16-1住居跡(1) (227~230)



写真図版65

E16-1住居跡② (231~239)



写真図版66

E 16-2住居跡 (240-250)



240



242



243



241



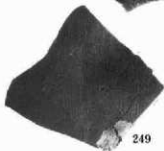
244



247



248



249



250



245

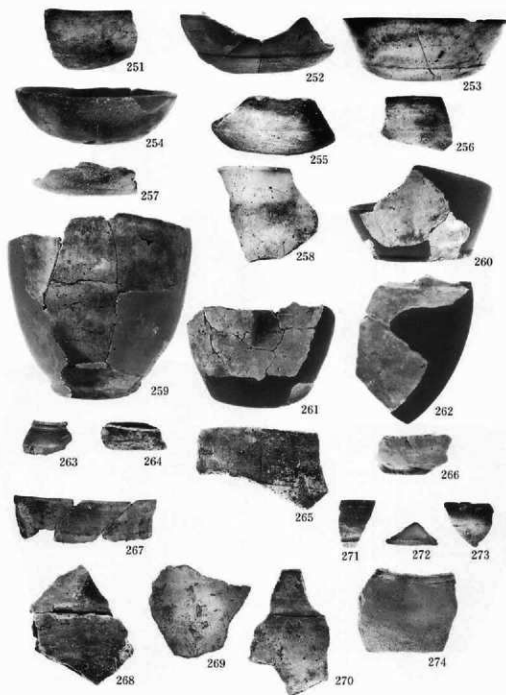


246

縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版67

E18住居跡(1) (251~274)



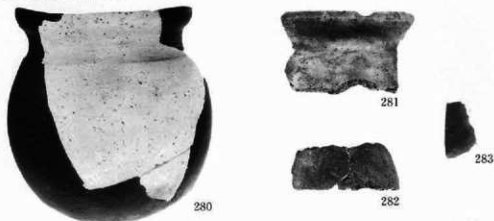
縮尺 $\frac{1}{4}$

写真図版68

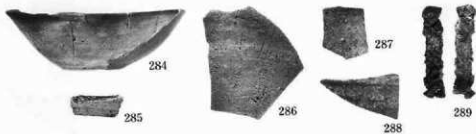
E 18住居跡(2) (275~279)



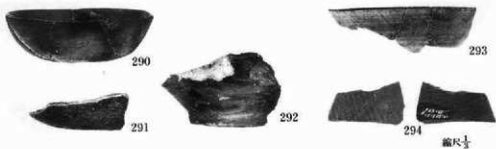
E 21住居跡 (280~283)



F 13-2住居跡 (284~289)

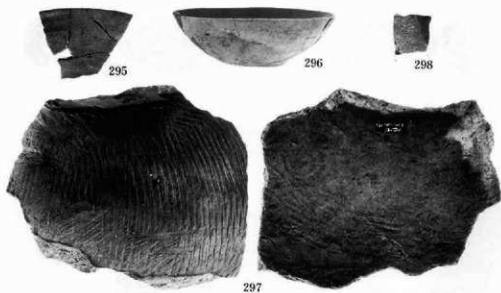


F 15-1住居跡 (290~294)

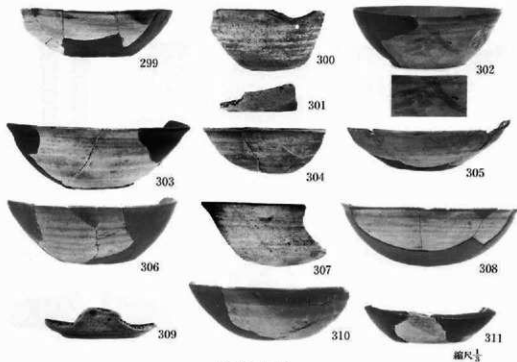


写真図版69

F 15-2住居跡 (295~298)

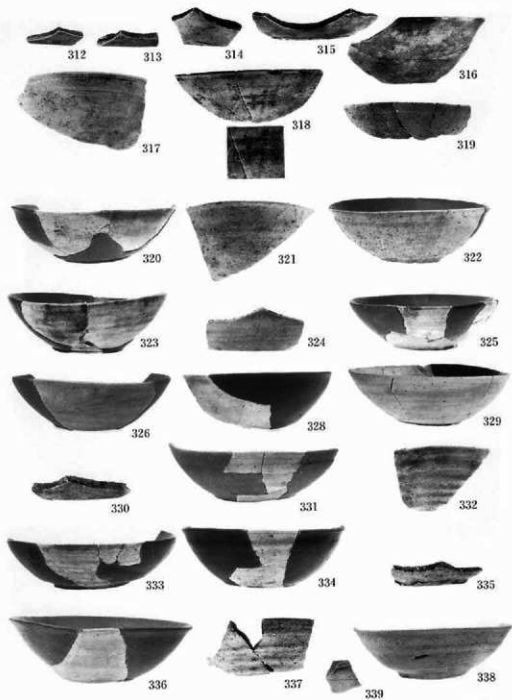


F 16住居跡(I) (299~312)



写真図版70

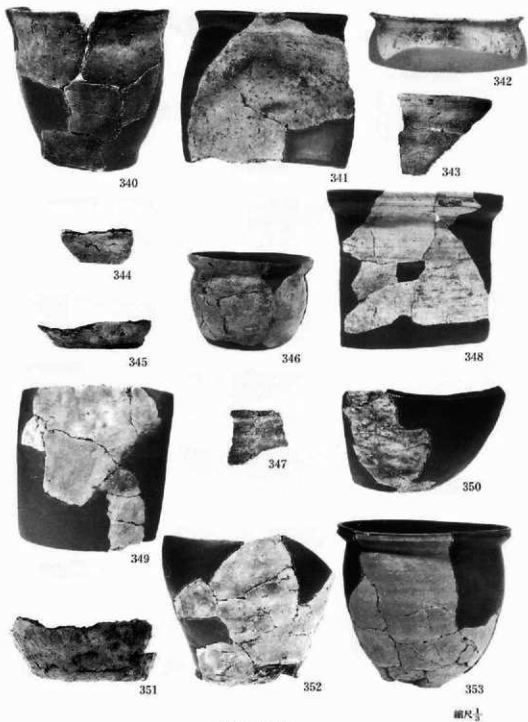
F16住居跡(2) (312~339) 32714写真省略



縮尺 $\frac{1}{2}$

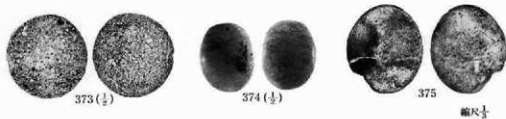
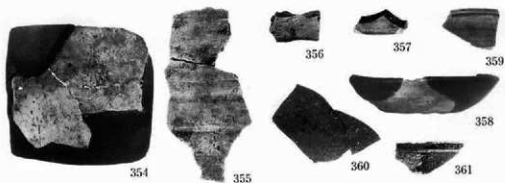
写真図版71

F16住居跡(3) (340~353)



写真図版72

F16住居跡(4) (354~375)



縮尺1/3

写真図版73

F 17住居跡 (376~384)



C 22住居跡状遺構 (385~388)



D 13住居跡 (389)



D 21住居跡 (390)



F 13住居跡 (391~394)



縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版74

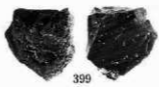
A14住居跡 (395~396)



A15住居跡 (397~398)



B08住居跡 (399)



400はカラー図版

柱穴跡出土遺物 (401~406) 601はカラー図版

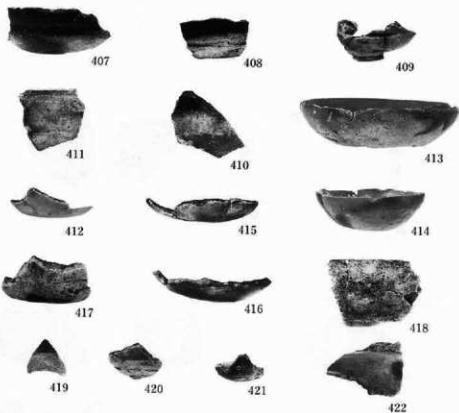


縮尺1/2

土師器

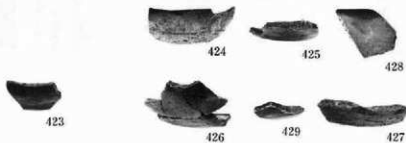
环形土器（I類・ロクロ不使用）

・内黒の环（407～422）（410～412は除く）



・黒色の环（423）

・丹塗の环（424～429）（410）



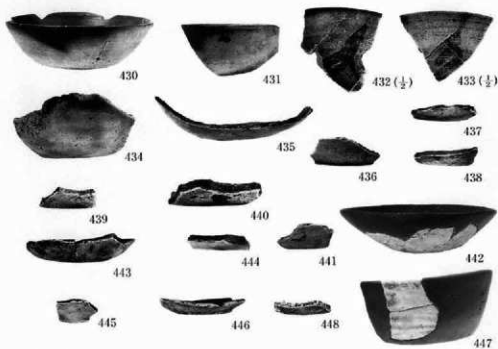
縮六分一

写真図版76

土師器

环彩土器 (II類・ロクロ使用)

内黒の坏 (412, 430~446) 411, 442, 447, 448は内面の黒色が消失している环彩土器

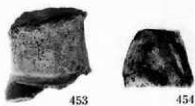


酸化焰焼成の須恵器

坏彩土器 (449~452)

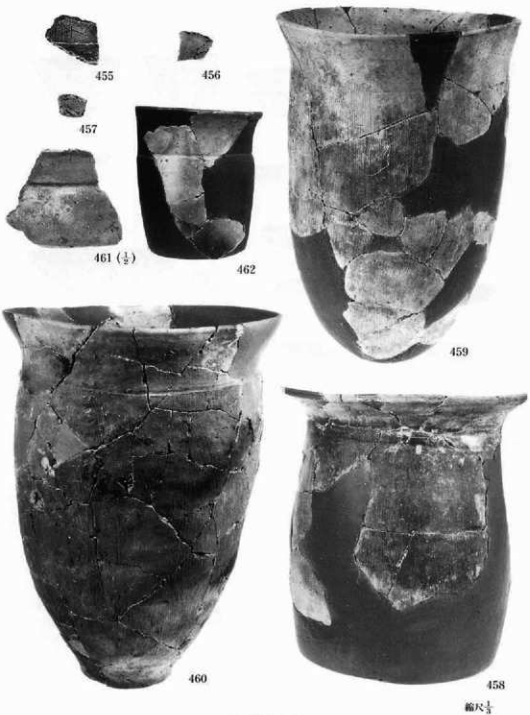


土師器
高坏彩土器 (453~454)



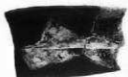
縮尺 $\frac{1}{3}$

襷彩土器(i) (I類・ロクロ不使用) (455-462)



写真図版78

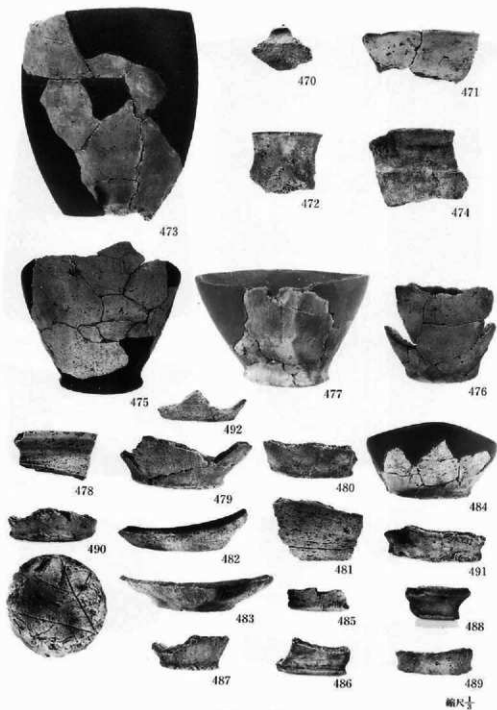
袋形土器(2) (463~469)



縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版79

菱形土器(3) (470~492)



写真図版80

縮尺 $\frac{1}{3}$

土師器 (1類)

壺形土器 (493)



493

丹塗の壺形土器 (494~501)



495



494



496



497



498



499



500



501

盆形土器 (502)



502

鉢形土器 (503)



503

片口形土器 (504~505)



504



505

須恵器・坏形土器 (506~517)



506



507



508



509



510



511



512



513



514



515



516

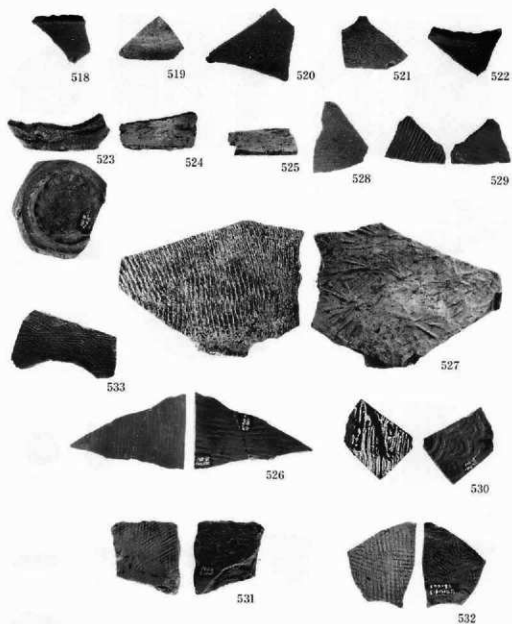


517

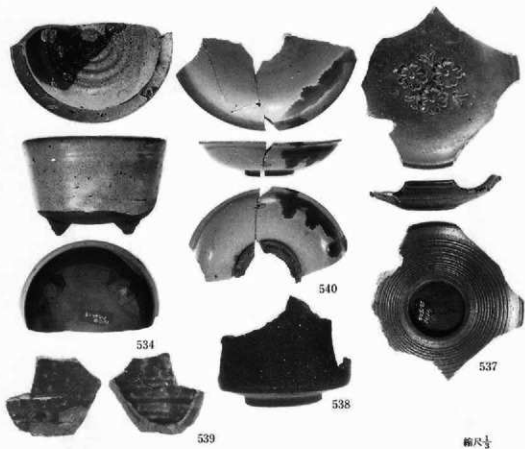
縮尺 $\frac{1}{2}$

須惠器

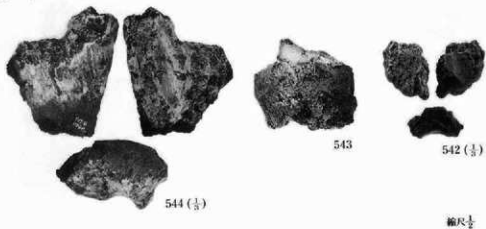
甕形・壺形土器 (518~533)



陶磁器 (534-540) 536はカラー図版



羽II (542-544)



写真図版83

鉄製品 (その他) (545~551)



545



546



547



548



549 (1/2)



550 (1/2)



551 (1/2)

古銭 (552~557)



552



553



554



555

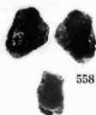


556



557

石器・剥片 (558~561)



558

559



560



561

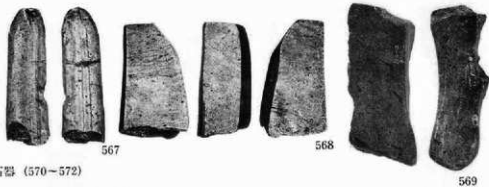
縮尺 1/2

写真図版84

石器・剥片 (562-563)



砥石 (564-569)



縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版85



602



603



604



605



606



607



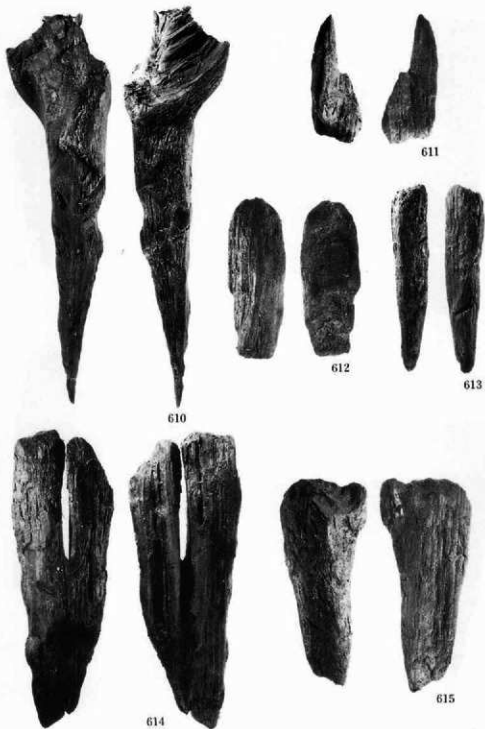
608



609

縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版86



611

610

612

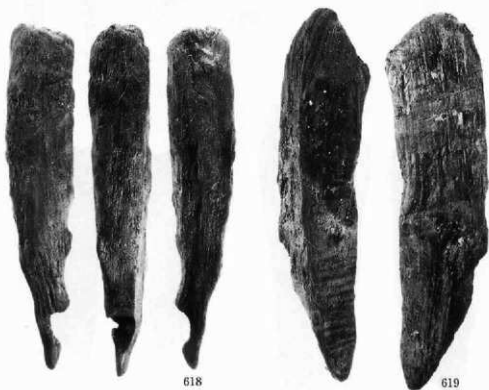
613

614

615

縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版87

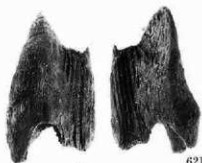


縮尺 $\frac{1}{3}$

写真図版88



620



621



622



623

縮尺 $\frac{1}{2}$

写真図版89

財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター 職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 宮 英 一

〔管 理 課〕

課 長 千 葉 久 夫
課 長 補 佐 阿 部 韶 夫
主 事 戸 草 内 幸 男
" 立 花 多加志
技 能 員 佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長	近 藤 宗 光		
主任文化財専門調査員	昆 野 靖		
文化財専門調査員	片 方 宗 明	文化財専門調査員	光 井 文 行
"	長 沼 彬	"	玉 川 英 喜
"	菊 池 利 和	"	石 川 長 喜
"	渡 辺 洋 一	"	三 浦 謙 一
"	佐々木 嘉 直	"	工 藤 利 幸
"	平 井 進	"	中 川 重 紀
"	中 村 良 一	"	高 橋 与右門
"	田 村 壮 一	"	高 橋 義 介
"	岩 淵 久	"	酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長 名 須 川 澄 男
文化財専門調査員 田 領 寿 夫
" 佐々木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集

古館Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ
関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月25日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185
TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020 岩手県盛岡市下ノ橋町2番9号
TEL (0196) 23-6391
